

一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書IX

六反田南遺跡IV

2012

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書IX

ろくたん だ みなみ
六反田南遺跡IV

2012

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道8号は新潟市を起点とし、日本海沿いに北陸地方を縦断して京都市に至る総距離561.2kmの幹線国道です。新潟県と北陸地方及び京阪神地方を結ぶと共に、新潟県の産業・経済・文化の交流発展に大きな役割を果たしてきました。しかし、現在の糸魚川市域では、交通混雑に伴う渋滞・騒音などの交通環境悪化が深刻な問題となっています。一般国道8号糸魚川東バイパス建設事業は、このような問題を解決し、幹線ネットワークの充実と強化、幹線道路としての役割や地域の生活道路としての機能回復を目的に進められています。

本書は、糸魚川東バイパスの建設に先立ち、平成21年度に調査を実施した六反田南遺跡の発掘調査報告書です。調査によって、縄文時代から江戸時代に至る多様な遺構・遺物が出土しました。特に地下数メートルに存在する縄文時代中期の土層からは土器や石器とともに多量の魚骨が出土し、海辺に営まれた村の多様な漁撈活動と豊かな食生活が明らかとなりました。

この調査報告書が糸魚川市域の歴史を明らかにするための一助になると共に、これを契機に埋蔵文化財に対する理解が広くいきわたるようになれば幸いです。

最後に、この調査に対して多大な御協力と御援助をいただいた糸魚川市教育委員会並びに大和川地区をはじめとした地元住民の方々に、また発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成24年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤克己

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県糸魚川市大字大和川字六反田地内に所在する六反田南遺跡IVの発掘調査記録である。遺跡名末尾のローマ数字は、平成21年度に実施した六反田南遺跡における第4次の発掘調査を意味する。
- 2 この調査は、一般国道8号糸魚川東バイパス建設に伴い、国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所（以下、国交省とする）から新潟県教育委員会（以下、県教委とする）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団とする）に実施を依頼した。
- 3 埋文事業団は発掘調査作業及び関連諸工事を株式会社吉田建設（以下、吉田建設とする）に委託し、埋文事業団が指導・監督して平成21年度に発掘調査を行った。
- 4 出土遺物及び記録類は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。
- 5 遺物の注記は「09ロク」とし、出土地点や層位を続けて記した。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」とは、日本平面国家座標のX軸方向を指す。
- 7 掲載遺物の番号は種別に関わりなく通し番号とし、本文及び観察表・図版の番号はすべて一致する。
- 8 引用文献は第Ⅰ章を除き、著者及び発行年（西暦）を中心に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 調査成果の一部は現地説明会（平成21年12月19日）、長者ヶ原考古館・長者ヶ原遺跡友の会共催の平成21年度糸魚川市内遺跡調査報告会・埋文事業団発行の『埋文にいがた』第67・70号と平成21年度年報、県教委・糸魚川市教育委員会・埋文事業団主催の第17回遺跡発掘調査報告会・新潟県考古学会第23回大会資料等で記載しているが、本報告書の記述をもって正式な報告とする。
- 10 本報告書の作成に当たり、航空写真・遺構の図化・自然科学分析は以下の機関に委託した。
航空写真撮影…T空撮、遺構の図化…株式会社東北測量設計社、自然科学分析…独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（以下、奈文研とする）・パリノ・サーヴェイ株式会社（以下、パリノ・サーヴェイとする）、株式会社古環境研究所（以下、古環境研究所とする）
- 11 遺構図・遺物実測図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、吉田建設がデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿した。また遺物写真撮影はデジタルカメラ（ニコンD100・キヤノンEOSKissDigitalN）で撮影し、遺構写真同様デジタル化して編集を行った。また石器・石製品は、一部の実測とすべてのデジタルトレースを、藤田ヒューム管株式会社とNPO法人CUBISに委託した。
- 12 本報告書の執筆は、山本友紀（吉田建設 調査員）、織 実（同 調査員）、濱口泰孝（同 調査員）、高橋保雄（埋文事業団 調査課本発掘調査担当課長代理）、山崎 健（奈文研 環境考古学研究室研究員）、パリノ・サーヴェイ、古環境研究所が分担したもので、分担は以下のとおりである。編集は、平成21年度は高橋保雄、平成22年度は高橋保雄と高橋 健（埋文事業団 調査課整理担当課長代理）、平成23年度は春日実真（同 調査課整理担当課長代理）の指導のもと、山本が担当した。
- 第Ⅰ章1・2A 高橋 保雄
第Ⅰ章2B～D、第Ⅱ～Ⅳ章、第V章1・2B、第Ⅵ章1 山本 友紀
第Ⅵ章3、第Ⅷ章2B 織 実
第V章2A、第Ⅷ章2A 濱口 泰孝
第Ⅵ章1 パリノ・サーヴェイ 第Ⅵ章2 山崎 健 第Ⅵ章3 古環境研究所
13 発掘調査から本報告書作成に至るまで、下の方々及び機関から多くの御教示・御協力を賜った。ここに記して厚くお礼を申し上げる（敬称略 五十音順）。
- | | | | | | | |
|--------------------------|-------|-------|-----------------------|-------|-------|-------|
| 相羽 重徳 | 岩崎 秀治 | 岡本 郁栄 | 木島 勉 | 小池 勝典 | 小島 俊彰 | 田嶋 明人 |
| 土田 孝雄 | 寺崎 裕助 | 西田 泰民 | 藤田富士夫 | 前山 精明 | 松井 章 | 水落 雅明 |
| 宮尾 亨 | 山岸 良一 | 山崎 健 | 鄧 雅 | 劉 国祥 | | |
| 糸魚川市教育委員会 大和川自治会 長者ヶ原考古館 | | | 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 | | | |

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	2
A 試掘確認調査	2
B 本発掘調査	4
1) 調査の方法	4
2) 調査の経過	5
C 整理の経過	6
D 調査・整理体制	7
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	8
1 地理的環境	8
2 歴史的環境	9
第Ⅲ章 調査の概要	12
1 グリッドの設定	12
2 基本層序	12
第Ⅳ章 縄文時代の調査（下・中層の調査）	14
1 概要	14
2 KDI区下層の調査	14
A 遺構	14
1) 概要	14
2) 記述の方法	14
3) 各説	15
B 遺物	17
1) 概要	17
2) 縄文土器	17
3) 土製品	28
4) 石器	28
3 KB1区下層の調査	38
A 概要	38
B 遺物	38
1) 縄文土器	38
2) 石器	39
4 KB1区中層の調査	40
A 概要	40
B 遺物	40
1) 縄文土器	40
2) 石器	40

第V章 弥生時代以降の調査（上層の調査）	42
1 概 要	42
2 KBI 区上層の調査	42
A 遺 構	42
1) 概 要	42
3) 各 説	42
B 遺 物	45
1) 概 要	45
3) 土製品・石製品	48
2) 土 器	45
4) 木 製 品	48
3 KD1 区上層の調査	49
A 遺 構	49
1) 概要と記述の方法	49
2) 各 説	49
B 遺 物	53
1) 概 要	53
3) 玉作関連遺物・石器	54
2) 土 器	53
第VI章 自然科学分析	58
1 六反田南遺跡IVの自然科学分析	58
A はじめに	58
B 自然木及び木製品の年代と樹種	58
1) 試 料	58
3) 結 果	59
2) 分析方法	58
4) 考 察	61
C 古 環 境	61
1) 試 料	61
3) 結 果	62
2) 分析方法	62
4) 考 察	67
D 漆 塗 膜	68
1) 試 料	68
3) 結 果	69
2) 分析方法	69
4) 考 察	71
E 黒曜石の産地同定	71
1) 試 料	71
3) Fe と Rb による黒曜石産地判別	72
2) 分析方法	71
4) 結 果	72
2 六反田南遺跡IVから出土した動物遺存体	76
A はじめに	76
B 分析試料	76
1) 採取方法	76
2) 出土状況	76
C 同定・記載方法	77
D 分類群の記載	77
1) 魚 類	78
3) 鳥 類	81
2) 両生類・爬虫類	80
4) 哺 乳 類	81
E 骨 角 器	84
F 六反田南遺跡IVにおける生業活動	84
1) 渔 捕 活 動	84
2) 狩 猎 活 動	86

G 動物遺存体から見た六反田南遺跡IV	86
1) 周辺遺跡との比較	86
2) 六反田南遺跡におけるこれまでの議論	86
3 六反田南遺跡IV下層の廃棄域における種実同定	88
A はじめ	88
B 試 料	88
C 方 法	88
D 結 果	88
1) 分類群	88
E 考 察	92
 第VII章 まとめ	94
1 繩文時代中期前葉～中葉の調査（下層の調査）	94
A 廃棄域の様子	94
1) 土器様相と編年	94
2) 中空土偶について	102
3) 石器組成	103
B 繩文時代中期の六反田南遺跡	103
2 弥生時代以降の調査（上層の調査）	105
A 古代における六反田南遺跡	105
B 六反田南遺跡における玉作	106
 《要 約》	107
《引用・参考文献》	108
《観 察 表》	111

挿図目次

第 1 図 一般国道 8 号糸魚川東バイパスと 遺跡の位置	1	第 32 図 石核長幅分布図	37
第 2 図 試掘確認調査トレーンチ位置図	3	第 33 図 遺物が出土した主な遺構	53
第 3 図 六反田南遺跡調査区分図	3	第 34 図 遺物組成表	53
第 4 図 KBL 区下層調査範囲	5	第 35 図 石器・石製品の計測位置	55
第 5 図 平成 21 年度本発掘調査 調査工程表	6	第 36 図 勾玉・管玉の分類	55
第 6 図 六反田南遺跡周辺の地形	8	第 37 図 玉作関連遺物の割合	56
第 7 図 六反田南遺跡周辺の主な遺跡	10	第 38 図 刃片・チップの出土割合	57
第 8 図 流路 191・SD146 出土漆器	11	第 39 図 花粉化石群集の層位分布	64
第 9 図 グリッドの設定と基本層序	13	第 40 図 FT - IR スペクトル	70
第 10 図 遺構の平面形態と断面形態の分類	15	第 41 図 黒曜石原産地判別図	72
第 11 図 遺構埋土の堆積状態の分類	15	第 42 図 珪藻化石	75
第 12 図 遺物重量分布図	17	第 43 図 花粉化石	75
第 13 図 織文土器各部位・名称	18	第 44 図 微粒炭	75
第 14 図 織文土器形分類図	19	第 45 図 木材	75
第 15 図 六反田南遺跡 IV の織文土器系統分類図	21	第 46 図 漆巣膜断面	75
第 16 図 288 ~ 291 中空土偶復元予想図	28	第 47 図 動植物遺存体の出土量分布図	77
第 17 図 石器分類図	29	第 48 図 哺乳類・鳥類・両生類・爬虫類	82
第 18 図 打製石斧分類図	29	第 49 図 魚類	83
第 19 図 磨製石斧分類図	30	第 50 図 六反田南遺跡 IV 出土の骨角器	84
第 20 国 磨製石斧厚分布図	30	第 51 国 魚類の種別組成（破片数・質量）	84
第 21 国 磨製石斧未成品分類図	30	第 52 国 六反田南遺跡 IV の種実	89
第 22 国 石錐長幅分布図	30	第 53 国 廃棄域における A 1 類分布図	95
第 23 国 石錐分類図	31	第 54 国 廃棄域における A 2 類分布図	95
第 24 国 砥石分類図	31	第 55 国 廃棄域における B・C 類分布図	96
第 25 国 故磨石類分類図	31	第 56 国 廃棄域における D 3 類分布図	96
第 26 国 スクレイバー・鋸歯縁石器分類図	32	第 57 国 廃棄域における浅鉢・土製品の分布図	99
第 27 国 石核分類図	32	第 58 国 廃棄域における土器編年試案（1）	100
第 28 国 打製石斧長幅分布図	34	第 59 国 廃棄域における土器編年試案（2）	101
第 29 国 砥石 A・B 類長幅分布図	36	第 60 国 各域における用途別石器組成比率	103
第 30 国 故磨石類長幅分布図	36	第 61 国 六反田南遺跡 IV 下層の全体図	104
第 31 国 スクレイバー（A 類）・鋸歯縁石器（B 類） 長幅分布図	37		

表 目 次

第 1 表 平成 21 ~ 23 年度本発掘調査及び 整理体制	7	第 7 表 磨製石斧折損品遺存状態集計表	34
第 2 表 主要グリッドの座標	12	第 8 表 磨製石斧未成品類別出土数集計表	35
第 3 表 遺構別石器出土状況	29	第 9 表 石錐類別石材組成表	35
第 4 表 KDI 区下層 石材別石器組成表	33	第 10 表 砥石類別石材組成表	36
第 5 表 石錐類別石材組成表	34	第 11 表 故磨石類別石材組成表	36
第 6 表 打製石斧類別石材組成表	34	第 12 表 スクレイバー（A 類）・鋸歯縁石器（B 類） 類別石材組成表	37

第 13 表	石核類別石材組成表	37
第 14 表	KD1 区下層 石材別石器組成表	39
第 15 表	KD1 区中層 石材別石器組成表	41
第 16 表	各種石器類別石材組成表	41
第 17 表	放射性炭素年代測定結果	60
第 18 表	曆年較正結果	60
第 19 表	樹種同定結果	60
第 20 表	珪藻分析結果	63
第 21 表	花粉分析結果	65
第 22 表	測定条件	71
第 23 表	黒曜石元素分析結果	72
第 24 表	動物遺存体・炭化穀子・炭化材の包含率	76
第 25 表	六反田南遺跡Ⅳ出土の動物遺存体種名表	78
第 26 表	動物遺存体の同定結果	85
第 27 表	六反田南遺跡Ⅳにおける 種実同定結果（1）	90
第 28 表	六反田南遺跡Ⅳにおける 種実同定結果（2）	91
第 29 表	六反田南遺跡Ⅱ～Ⅳにおける 下層出土石器編年対応表	102
第 30 表	廃棄域と居住域の石器組成比率比較表	103

図版目次

[図面図版]

- 図版 1 調査範囲と周辺地形
 図版 2 KD1 区下層 遺構全体図
 図版 3 KD1 区下層 遺構分割図（1）
 図版 4 KD1 区下層 遺構分割図（2）
 図版 5 KD1 区下層 遺構別図
 図版 6 KB1 区下層 全体図・遺物分布図・
 基本土層
 図版 7 KB1 区中層 全体図・遺物分布図・
 遺物重直分布図
 図版 8 KB1 区上層 遺構全体図
 図版 9 KB1 区上層 遺構分割図（1）
 図版 10 KB1 区上層 遺構分割図（2）
 図版 11 KB1 区上層 遺構別図（1）
 図版 12 KB1 区上層 遺構別図（2）
 図版 13 KB1 区上層 遺構別図（3）
 図版 14 KD1 区上層 遺構全体図
 図版 15 KD1 区上層 遺構分割図
 図版 16 KD1 区上層 遺構別図（1）
 図版 17 KD1 区上層 遺構別図（2）
 図版 18 KD1 区上層 遺構別図（3）
 図版 19 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（1）
 図版 20 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（2）
 図版 21 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（3）
 図版 22 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（4）
 図版 23 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（5）
 図版 24 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（6）
 図版 25 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（7）
 図版 26 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（8）
 図版 27 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（9）
 図版 28 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（10）
 図版 29 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（11）
 図版 30 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（12）

- 図版 31 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（13）
 図版 32 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（14）
 図版 33 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（15）
 図版 34 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（16）
 図版 35 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（17）
 図版 36 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（18）
 図版 37 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（19）
 図版 38 KD1 区下層 縄文時代中期の土器（20）
 国版 39 KD1 区下層 縄文時代中期の土製品
 国版 40 KD1 区下層 縄文時代中期の石器（1）
 国版 41 KD1 区下層 縄文時代中期の石器（2）
 国版 42 KD1 区下層 縄文時代中期の石器（3）
 国版 43 KD1 区下層 縄文時代中期の石器（4）
 国版 44 KD1 区下層 縄文時代中期の石器（5）
 国版 45 KD1 区下層 縄文時代中期の石器（6）
 国版 46 KD1 区下層 縄文時代中期の石器（7）
 国版 47 KB1 区下層 縄文時代中期の土器（1）
 国版 48 KB1 区下層 縄文時代中期の土器（2）・石器
 国版 49 KB1 区中層 縄文時代中期～後期の土器・
 石器（1）
 国版 50 KB1 区中層 縄文時代中期～後期の石器（2）
 国版 51 KB1 区上層 弥生時代後期～古代の土器（1）
 国版 52 KB1 区上層 弥生時代後期～古代の土器（2）
 国版 53 KB1 区上層 弥生時代後期～古代の土器（3）
 国版 54 KB1 区上層 弥生時代後期～近世の土器・
 陶磁器
 国版 55 KB1 区上層 弥生時代後期～古代の土製品・
 石器・木製品
 国版 56 KD1 区上層 古墳時代前期～古代の土器・
 土製品
 国版 57 KD1 区上層 古墳時代前期の石製品（1）
 国版 58 KD1 区上層 古墳時代前期の石製品（2）
 ・木製品・古代の木製品

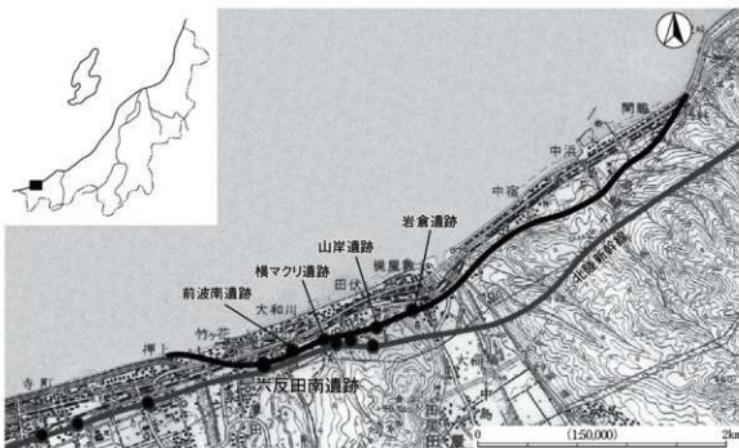
[写真図版]		
図版 59	KDI 区下層 遺跡近景 土層堆積状況 遺物出土状況	図版 82 KDI 区下層 縄文時代中期の土器（5）
図版 60	KDI 区下層 廃棄域遺物出土状況	図版 83 KDI 区下層 縄文時代中期の土器（6）
図版 61	遺跡近景・KBI 区完掘状況・流路 399 KDI 区上層完掘状況	図版 84 KDI 区下層 縄文時代中期の土器（7）
図版 62	縄文土器集合写真	図版 85 KDI 区下層 縄文時代中期の土器（8）
図版 63	KDI 区下層（1） 遺跡近景・完掘状況・ 基本層序・遺物出土状況・ SK9j ·	図版 86 KDI 区下層 縄文時代中期の土器（9）
図版 64	KDI 区下層（2） SK45J・SK52J・SC42J	図版 87 KDI 区下層 縄文時代中期の土器（10）
図版 65	KDI 区下層（3） SC42J・SC55J・SD40J・ SD53J・SX50J・SX54J	図版 88 KDI 区下層 縄文時代中期の土器（11）
図版 66	KDI 区下層（4） P29J・P30J・P46J・P47J・ 廃棄域遺物出土状況	図版 89 KDI 区下層 縄文時代中期の土器（12）
図版 67	KDI 区下層（5） 廃棄域遺物出土状況	図版 90 KDI 区下層 縄文時代中期の土器（13）
図版 68	KBI 区下層 完掘状況・土層堆積状況・ 遺物出土状況	図版 91 KDI 区下層 縄文時代中期の土器（14）
図版 69	KBI 区中層 完掘状況・土層堆積状況・ 遺物出土状況・下層検出状況	図版 92 KDI 区下層 縄文時代中期の土器（15）
図版 70	KBI 区上層（1） 完掘状況・遺跡近景・ 土層堆積状況・作業風景	図版 93 KDI 区下層 縄文時代中期の土器（16）
図版 71	KBI 区上層（2） 流路 399・SB1	図版 94 KDI 区下層 縄文時代中期の土器（17）
図版 72	KBI 区上層（3） SB2 ~ SB4	図版 95 KDI 区下層 縄文時代中期の土器（18）
図版 73	KBI 区上層（4） SK111・SK165・SK315・ SD319・SE171	図版 96 KDI 区下層 縄文時代中期の土製品
図版 74	KDI 区上層（1） SA508・SB577・SX583	図版 97 KDI 区下層 縄文時代中期の石器（1）
図版 75	KDI 区上層（2） SX587・SK614・SD503	図版 98 KDI 区下層 縄文時代中期の石器（2）
図版 76	KDI 区上層（3） SD515・SD586・SD589・ SD591	図版 99 KDI 区下層 縄文時代中期の石器（3）
図版 77	KDI 区上層（4） SD591・SX513・SX535・ SX546	図版 100 KDI 区下層 縄文時代中期の石器（4）
図版 78	KDI 区下層 縄文時代中期の土器（1）	図版 101 KDI 区下層 縄文時代中期の石器（5）
図版 79	KDI 区下層 縄文時代中期の土器（2）	図版 102 KBI 区下層 縄文時代中期の土器
図版 80	KDI 区下層 縄文時代中期の土器（3）	図版 103 KBI 区下層 縄文時代中期の石器 KBI 区中層 縄文時代中期～後期の土器・ 石器（1）
図版 81	KDI 区下層 縄文時代中期の土器（4）	図版 104 KBI 区中層 縄文時代中期～後期の石器（2） KBI 区上層 弥生時代後期～古代の土器（1）
		図版 105 KBI 区上層 弥生時代後期～古代の土器（2）
		図版 106 KBI 区上層 弥生時代後期～古代の土器（3）
		図版 107 KBI 区上層 弥生時代後期～近世の土器・ 陶磁器・土製品・石器
		図版 108 KBI 区上層 弥生時代後期～古代の木製品 KDI 区上層 古墳時代前期～古代の土器・ 土製品
		図版 109 KDI 区上層 古墳時代前期の石製品・石器・ 木製品・古代の木製品

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

一般国道8号は北陸自動車道とともに、新潟県域と北陸地方及び京阪神地方を結ぶ主要幹線道路である。また地元においては、山間部と海岸部を南北に結ぶ道路を東西に連結・連絡する重要な生活道路としての役割を担ってきた。しかし、近年の交通量の増大は、通勤・通学時間帯を中心に糸魚川市域で慢性的な渋滞、騒音、交通事故などを引き起こしてきた。このような交通環境の悪化は深刻な問題となり、地元から交通渋滞の解消、交通安全の確保などを含めた改善が求められていた。これに対し国交省は、糸魚川東地区の交通混雑の解消、沿道の交通環境の改善、市街地のアクセシビリティの向上を目的に一般国道8号糸魚川東バイパス（糸魚川市間島～同市押上の6.9km）の建設を計画し、昭和58～62年度の計画調査、昭和63年度の実施調査を経て、平成元年に事業化した。さらに平成4年度に用地取得、平成10年度から工事に着手した。これを受けて県教委は、バイパス計画用地内の埋蔵文化財の取り扱いについて国交省と協議を重ねた。

平成11年9月、国交省から分布調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団にバイパス計画地区の分布調査を依頼した。埋文事業団は早川左岸の梶屋敷地区(STANo.37杭地点)から海川左岸の押上地区(STANo.67杭+69m地点)を対象として、平成11年10月13日～14日に調査を実施した。調査範囲の約半分が山林・宅地・盛土であったことから、採集できた遺物はわずかであった。しかし、遺跡の存在が予想される地形的特徴を加味しながら、4地点の遺跡推定地が存在することを県教委に報告した。六反田南遺跡が存在する大和川地区では、字六反田地区で土師器8点、利刀片1点が採集され、周辺には前波遺跡、六反田遺跡、古屋敷A遺跡が存在することから、推定地2として報告した。これを受けて県教委は、埋蔵文化財の具



第1図 一般国道8号糸魚川東バイパスと遺跡の位置

(国土地理院「糸魚川」1:50,000原図 平成8年発行)

2. 調査の方法と経過

体的な規模、内容等は不明であるものの、今後、試掘確認調査を実施して取り扱いを判断する必要があると国交省に回答した。

平成 17 年 4 月、国交省から遺跡推定地の試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団に調査を委託した。調査は隣接して並行する北陸新幹線の建設工事、用地取得や工事工程などから、平成 17 ~ 19 年度の 3 か年にわたって行った。調査により、上層 23,910m²、下層 19,250m²の延べ 43,160m²もの広範囲の発掘調査が必要と判明した。六反田南遺跡と命名し、合わせて本発掘調査実施の協議も進め、平成 18 年 3 月、国交省から六反田南遺跡の本発掘調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団に調査を委託した。同年 4 月、バイパス工事の急がれる市道六反田線東端 (STA № 57 + 8 m) から東側部分について、本発掘調査に着手した。

以後、工事工程に合わせて毎年発掘調査を行っている。六反田南遺跡Ⅳは、平成 21 年 3 月に国交省から依頼を受けた県教委が埋文事業団に調査を委託した。埋文事業団は同年 4 月から市道正山線の東側 (KBI 区)、7 月から市道町山崎線の横断部分 (KDI 区) の調査を実施した。

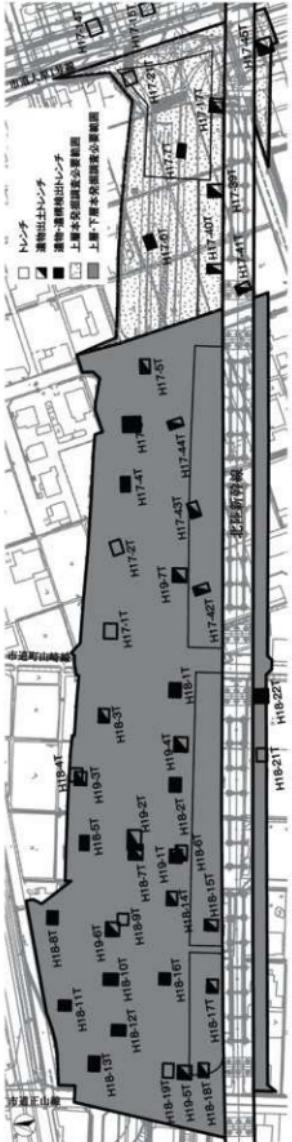
2 調査の方法と経過

A 試掘確認調査

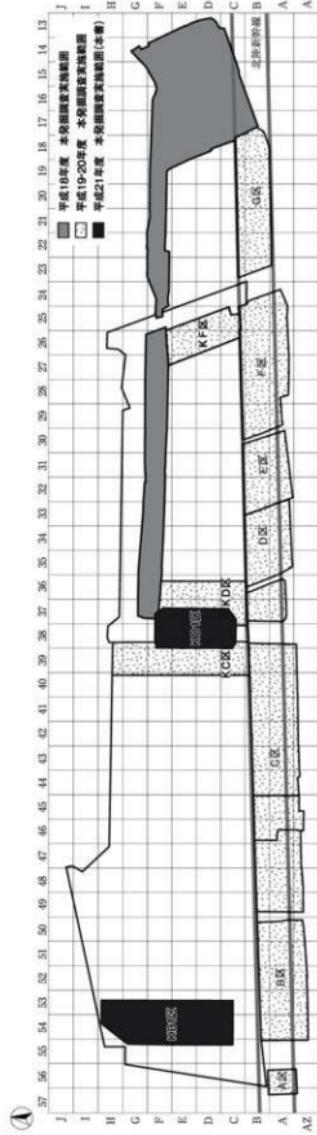
前述のように試掘確認調査は隣接する北陸新幹線の建設工事の絡み、用地取得状況や工事工程などから平成 17 ~ 19 年度の 3 か年に及んだ。平成 17 年度は試掘確認調査対象地の東側に当たる市道東山線 (STA № 51 + 13) から市道町山崎線 (STA № 58 + 43m) までを対象として、平成 17 年 9 月 15 日 ~ 11 月 10 日に行った。第 2 図のように任意に 45 か所のトレンチ (試掘坑) を設定し、バックホー及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。調査によって、古墳時代～中世に相当する遺物包含層が認められ、23 か所のトレンチから縄文土器、古墳時代の土師器、古代の土師器、須恵器、中世陶器、砥石・ヒスイを含んだ石製品などが出土した。また、4 か所のトレンチから土坑、ピット、炭化物集中か所、溝などの遺構が検出された。このような結果から、STA № 54 + 40m 付近 ~ № 55 + 30m 付近は前波遺跡、市道大原 1 号線西端 (STA № 55 + 9m) ~ 市道町山崎線 (STA № 58 + 41m) の間を新発見の六反田南遺跡として報告した。六反田南遺跡の本発掘調査の必要面積は、バイパス本線部分と側道部分を合わせて 12,840m²である。

平成 18 年度は試掘確認調査対象地の西側に当たる市道町山崎線 (STA № 58 + 43m) ~ 市道正山線 (STA № 60 + 37m) を対象に、平成 18 年 7 月 3 日 ~ 6 日に行った。第 2 図のように任意に 22 か所のトレンチを設定し、バックホー及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。調査によって古墳時代～中世に相当する遺物包含層が認められ、ほぼすべてのトレンチから古墳時代の土師器、古代の土師器、中世陶器、中世土師器、石核・石錐を含んだ石器、土製品などが出土した。また、11 か所のトレンチから土坑、ピット、溝などの遺構を検出した。さらに遺跡の西限は北陸新幹線の試掘確認調査や、現地形観察から STA № 60 + 24m 付近に遺跡と海川氾濫原の境に崖線が認められることが判明し、確定した。したがって、六反田南遺跡本発掘調査の必要面積は、バイパス本線部分と側道部分を合わせて 11,070m²を追加した。

一方、平成 19 年度に本発掘調査を実施した北陸新幹線及び国交省管轄の側道部分では、古墳時代～古代の遺構検出面の下約 1.0 ~ 1.4m で新たに縄文時代の遺構・遺物 (下層) を検出した。遺跡範囲の拡大も予想されることから、バイパス範囲内の調査可能な部分について、確認調査を実施することとなった。調査対象地は、平成 18 年度に本発掘調査を終了し、国交省に引き渡した市道大原 1 号線西端 (STA № 55 +



第2図 試掘調査トレンチ位置図（トレンチ記号・番号は調査年度No.・S=1/120,000）



第3図 六反田前溝調査区分図 (S=1/120,000)

92m) ~ 市道六反田線東端 (STA № 57 + 8m) を除く、市道六反田線東端 (STA № 57 + 8m) ~ 市道正山線の西側の崖線 (STA № 60 + 24m 付近) であり、9月 10 日 ~ 13 日に行った。調査は北陸新幹線関連発掘調査事務所、駐車場などを避け、さらに平成 18 年度に検出した上層遺構を破壊から守るため、これまでのトレンチを再掘削した。掘削か所は第 2 図のとおりである。調査によって、遺構や遺物の粗密が予想されるものの、H19 - 5T を除き 6 か所で縄文時代の遺物包含層を検出し、5 か所から縄文土器、石器が出土した。時期は中期中葉を主体として、中期後葉も含まれていた。このような結果から、下層の本発掘調査必要範囲は、市道六反田線東端 (STA № 57 + 8m) ~ 市道正山線の西側崖線 (STA № 60 + 24m 付近) の本線部分、側道部分の 19,250m² となった。

したがって、バイパス用地内の六反田南遺跡全体の本調査必要範囲は、上層 23,910m²、下層 19,250m²で延べ 43,160m² として確定した。

B 本 発 挖 調 査

1) 調 査 の 方 法

平成 21 年度の本発掘調査対象面積は、2 調査区・3 面の延べ 3,488m² である。各調査区の呼称は平成 19 年度の調査で定義した調査区割りを用い、[細井ほか 2010]、市道正山線側調査区を「KBI 区」、市道町山崎線側調査区を「KDI 区」とした(第 3 図)。冒頭の「K」は国交省関連調査区を、算用数字は調査区の細分名を示す。工区の詳細な位置関係は以下のとおりである。なおグリッド表記法は「第Ⅲ章 1」に詳しく、参照されたい。

KBI 区 : 53 ~ 55C ~ H の範囲。西辺は市道正山線に接する。

KDI 区 : 37 ~ 38C ~ F の範囲。東辺は平成 20 年度調査の KD 区に、西辺は同 KC 区に接する。市道町山崎線直下の調査のため、東側 (KD 区側) に道路を切り回した。また、道路西沿いには三面水路が設置されていたが、これも調査範囲に当たるため、西側 (KC 区側) に切り回した。

上層の調査終了後、調査区には土留めを目的とした鋼矢板の打設工と、調査区内の排水を目的とした暗渠排水を行った。暗渠は、調査区外周法尻部に設置した。さらに排出される泥水が現在使われている用水路等に直接入らないよう、ノッチタンクと沈殿池による簡易浄化槽を各調査区に設置し、排水をそこへ通過させてから現用水路等に流した。

盛土、表土、包含層の一部、間層(無遺物層)などは重機により掘削した。人力による調査は、開渠掘削・流路掘削・ベルト除去等にはホソを、包含層掘削には竹ベラを、遺構検出には大ジョレン・三角ホー・両刃ガマを、遺構掘削には竹ベラ・移植ゴテを主に使用した。遺物の取り上げは 2 m ごとの小グリッドを基本とし(一部 1 m 単位のグリッド)、遺構出土の遺物はこれに遺構名を付した。KBI 区中層・下層では例年の調査から遺構検出が困難なことが予想されたため、出土遺物は全点光波測量によるドット上げを行い、位置・標高を記録した。

2) 調査の経過

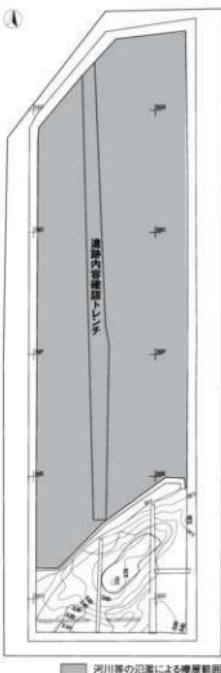
調査区内には多くの支障物件があった。KB1区には電柱が2か所、KD1区には市道町山崎線(舗装道路)・三面水路・電柱があった。KD1区の舗装道路及び三面水路は、本発掘調査までに切り回しが完了していたが、両区の電柱移設作業は遅滞し、調査開始時期への影響が懸念された。国交省及び県教委・理文事業団による協議の結果、移設作業と並行して発掘調査を進めることになった。安全を考慮し、移設作業場付近の調査は移設終了後に行うこととしたことから、調査は変則的に進めた(第5図)。作業員全員が連日作業できるようになったのは、両区の調査が同時進行し始めた9月下旬以降となる。

KB1区

調査は市道正山線沿いのKB1区上層から着手した。まず、調査区中央付近及び北端の2か所に電柱を残したまま安全な距離を確保しつつ北半のみを調査、これに並行して東北電力が電柱移設作業を行い、終了次第全面調査に移行することとなった。5月18日から重機による表土掘削を開始する予定であったが、当日は強風のため重機作業は危険と判断、翌19日から掘削を開始した。表土は約50cm、調査区の四方には調査面からさらに50cm掘り下げた幅30cm程度の排水溝を掘削した。25日から人力による包含層掘削を開始し、間もなく近世の水田を検出、6月2日にデジタルカメラで水田面のメモ写真撮影や略測図作成を行い、早急に田面下の遺構検出に着手した。5日に電柱移設作業が終了し、8日から全面調査に移行した。残りの表土掘削を10日までに終え、11日からは人力による包含層掘削を行った。遺構掘削は、北半では先行して8日から開始し、残りの範囲も包含層掘削が終り次第順次遺構掘削に着手した。8月4日にラジコンヘリによる遺跡全体の空中写真撮影、及び掘立柱建物の個別撮影を行った。その後現場内残務をし、8月8日に上層の調査を終了した。

夏季休業を挟み、8月17日から中・下層の調査に向け鋼矢板打設工及び暗渠工を開始し、9月11日午前中に終了した。同日午後から重機による問層掘削に着手し、中層の調査を開始した。16日からは人力による包含層掘削を行った。平成20年度の調査から遺構検出は見込めないと判断し、出土遺物は全点光波測量によるドット上げとした。10月5日に高所作業車で遺跡全体を撮影、中層の調査を終了した。

中層着手前に行った暗渠工では、調査区のはとんどの部分でVI層以下に礫が堆積する状況が確認された。このため下層の面的広がりを把握することが急務となり、10月6日、調査区を嶮断する遺跡内容確認トレーンチを重機で掘削した(図版68)。幅約1m、深さ約15~2mまで掘り下げた結果、調査区南端の一画を残し、ほかはすべて礫が堆積する状況が確認された。これにより、Ⅶ層がかろうじて残る南端の約120mのみを対象に調査することとした(第4図)、7日に重機による問層掘削を開始した。8日から人力による包含層掘削をし、遺物は中層と同様に全点ドット上げとし



第4図 KB1区下層調査範囲

2. 調査の方法と経過

た。30日にローリングタワー上から遺跡全体の撮影を行い、下層の調査を終了した。

KD1 区

KB1 区上層の調査が終盤に差し掛かった7月半ば、KD1 区の電柱移設作業が終了したことを受け、7月 23 日から重機による表土掘削に着手した。しかし、調査区南半は北陸新幹線建設に伴う工事の関係上、鉄道運輸機構から国交省へ用地を使用したい旨の申請があり、調査は急速北半（C・D グリッド）と南半（E・F グリッド）の 2 回に分けて行うこととなった。まずは北半の調査を行った。28 日から人力による包含層掘削、8 月 11 日から遺構掘削を開始し、8 月 28 日に高所作業車で北半全体の写真撮影を行った。その後、南半の調査許可が下りたが、KB1 区との工事の兼ね合いもあり、鋼矢板打設工を先行して行うこととなった。打設工は 9 月 8 日～23 日までの約 2 週間を要したが、その間は室内整理業務をした。南半は 9 月 24 日から重機による表土掘削を開始し、26 日から人力による包含層掘削、10 月 5 日から遺構掘削を行い、19 日に高所作業車により南半全体の写真撮影をした。その後、21 日まで現場内残務をし、上層の調査をすべて終了した。

翌 22 日から下層の調査に向けた暗渠工を開始した。工事中、調査区北辺では縄文土器が多量に出土したため、排土から人力で遺物を探す作業をした。29 日から重機による層掘削を開始、11 月 4 日から人力による包含層掘削に着手したが、南半は遺物・遺構ともほとんど確認されず、20 日には調査を一旦終了した。対照的に北半は多量の遺物が出土し、かつ動植物遺存体抽出用に土壤サンプルを採取しながらの作業であったため調査は難航、本格的に遺構掘削が始まったのは 12 月 10 日前後となった。調査の終盤は降雪のため、調査区内にテントを張りながらの作業となった。16 日に悪天候の合間に隠って、ラジコンヘリによる遺跡全体の空中写真撮影をした。その後、22 日まで現場内残務をし、すべての調査を終了した。

12 月 19 日には、地元説明会を開催した。平成 19・20 年度調査出土遺物も併せて展示、パワーポイントによる遺跡の概要説明も行った。この日、糸魚川市域には大雪警報が出されたが、悪天候にも関わらず、市内外から 27 人の来場者がいた。

調査区	内容	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
KB1 区	調査			上層		中層	下層		
	基礎工事	支障物件撤去			矢板工・暗渠工				
KD1 区	調査				上層北半	上層南半		下層	
	基礎工事		支障物件撤去		矢板工	暗渠工			

第 5 図 平成 21 年度本発掘調査 調査工程表

C 整理の経過

整理作業には、足掛け 3 年を要した。平成 21 年度は、すべての出土遺物の洗浄、注記、土壤洗浄を調査現場で行った。発掘作業が終了してからは吉田建設巣谷整理室で作業を行ったが、基本的には上層と中層の整理を主とし、遺構図面の整理、遺物の選別・接合・復元・実測、原稿執筆等を行った。また、土壤サンプルから動植物遺存体を抽出する作業も行った。

平成 22 年度は、同巣谷整理室にて下層の出土遺物の選別・接合・復元・実測をし、併せて全層の遺物写真撮影、各種仮図版作成、原稿執筆等を行った。

平成 23 年度は、同巣谷整理室にて残りの原稿執筆、各種仮図版作成を経て報告書編集作業を行った。並行して遺物の収納作業、各種台帳作成等も行った。なお平成 22・23 年度におけるデジタル関連作業は吉田

建設三条整理室で行った。

D 調査・整理体制

平成 19 年度までの試掘確認調査体制は、新潟県埋蔵文化財調査報告書第 202・211 集に記載がある。ここでは六反田南遺跡Ⅳに係る平成 21 年度以降の調査・整理体制を記載する。

平成 21 年度 本発掘調査及び整理作業

調査期間	平成 21 年 5 月 18 日～12 月 22 日
整理期間	平成 21 年 12 月 23 日～平成 22 年 3 月 31 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
範 括	木村 正昭（事務局長）
管 理	高橋 保雄（總務課長）
庶 務	松原 健二（總務課班長）
調査範括	藤巻 正信（調査課長）
指 導	高橋 保雄（調査課本発掘調査担当課長代理）
調査組織	株式会社 吉田建設
現場代理人	反町 勝人
調査担当	山本 友紀
調査員	郷 実
作業員	藤口 孝李
作業員	北見 純子、佐々木 美紀、和田 常美、中村 美智子、長沼 直美

平成 22 年度 整理作業

整理期間	平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
範 括	木村 正昭（事務局長）
管 理	今井 直（總務課長）
庶 務	伊藤 忍（總務課班長）
調査範括	藤巻 正信（調査課長）
指 導	高橋 保雄（調査課本発掘調査担当課長代理）
高橋 保雄（調査課整理担当課長代理）	
整理組織	株式会社 吉田建設
整理担当	山本 友紀
作業員	矢部 千栄子、櫻井 美由貴、藤谷 容子、熊倉 真生子、水野 かおり

平成 23 年度 整理作業

整理期間	平成 23 年 4 月 1 日～6 月 30 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
範 括	木村 正昭（事務局長）
管 理	今井 直（總務課長）
庶 務	伊藤 忍（總務課班長）
調査範括	北村 亮（調査課長）
指 導	春日 真実（調査課整理担当課長代理）
整理組織	株式会社 吉田建設
整理担当	山本 友紀
作業員	矢部 千栄子、櫻井 美由貴、鈴木 ゆかり、熊倉 真生子、水野 かおり

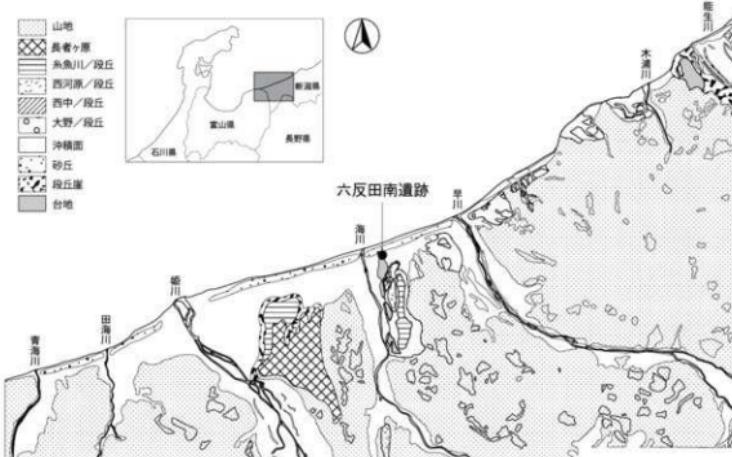
第 1 表 平成 21～23 年度本発掘調査及び整理体制

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

糸魚川市は新潟県の最西端に位置する。北は日本海に面し、西は富山県、南は長野県と接する。主として能生川と姫川間の西頸城山地、及び狭長な海岸平野などからなり、海岸線はおおむね北東-南西方向に走る。この海岸線に並行した砂丘が旧青海町青海～糸魚川市中浜、旧能生町浜木浦、同能生などで見られるが、姫川、海川、早川、能生川で分断され、断続的である。これらの河川は急流河川として知られている。姫川は長野県白馬村の親海湿原に、そのほかは高峻な西頸城山地に源を発し、北流して日本海に注ぐ。これらは、背後山地の隆起運動・火山活動等と深く関わり、河口付近にまで大量の巨礫を含む砂礫を供給しており、押上地区のヒサイ海岸に代表されるような砂利浜を形成している。また河口付近の河岸段丘の発達を促しており、特に糸魚川市街地南部には数段に及ぶ段丘地形を形成している（長者が原段丘～糸魚川段丘・第6図）。本遺跡の西側約200mを流れる海川は、焼山（2,400m）・金山（2,245m）及び雨飾山（1,963m）に発し、海谷山地を深く浸食して海谷溪谷（比高約500m）を形成しつつ流れる。河口付近では小さく蛇行して三角州（沖積低地）を形成し、日本海に注ぐ。本遺跡はこの海川右岸の沖積低地（現地表面の標高約6.5m）、背後に西川原段丘が迫る幅狭な平坦地に立地する。

本遺跡からは、南西部に黒姫山（1,222m）、南東部に焼山（2,400m）・鉢ヶ岳（1,316m）などを望むことができる。黒姫山は飛騨山脈の北端に位置する青海石灰岩等で構成された山で、市域にはこれを原料とする大規模な化学工場がある。黒姫山を含む飛騨山脈が激しく日本海に落ち込む位置には、約2.5kmにわたり海崖崖壁が形成される。これが古来から交通の難所とされてきた「親不知・子不知」で、おおむね青海駅から市振駅



第6図 六反田南遺跡周辺の地形 ($s=1/120,000$) [鈴木 1982]・[糸魚川市史編さん委員会 1986] を参考に作成

間に形成された海食地形である。

最後に、本地域における特色を説く上で忘れてはならないのが、「糸魚川—静岡構造線」である。フォッサマグナの西縁に当たる当該構造線は、「新潟県の糸魚川付近から姫川にそって南下し、長野県の大町・松本・諏訪をへて、山梨県西部から静岡市付近まで、本州弧の中央部を横断する大断層」[植村 1988]で、連続 250km を測る。この構造線を境として地質学的に東北日本と西南日本に分けられることから、糸魚川地域は自然環境や文化の分岐点、または混在地域として非常に特徴的な地域といえる。構造線以西にはメランジューという複雑な地層が広がる飛騨外縁帯があり [山下 1995]、その北東部を占めるのが青海・蓮華帯である。ここにはひすい輝石岩・青海石・奴奈川石など希少な岩石が含まれる。特にヒスイは小瀧川や青海川で産出し、糸魚川の特産品として縄文時代から現代まで親しまれている。このように変化に富んだ環境を持つ本地域は、日本列島の形成を示す貴重な地質や地形として、洞爺湖有珠山（北海道）・鳥原半島（長崎県）とともに、2009 年 8 月に世界ジオパークに認定された。

2 歴史的環境

近年、一般国道 8 号糸魚川東バイパス及び北陸新幹線建設に係る発掘調査等によって、平野部（特に沖積低地）においても遺跡が濃く分布することが明らかとなってきた（第 7 図）。ことに、沖積低地に立地する本遺跡（20）の平成 19 年度の調査では、現地表面下約 3m（標高約 4m）地点で縄文時代の集落の発見を見た。これにより、從来縄文時代の遺跡は段丘上にのみ存在すると考えられてきた説が覆り、低地部にも縄文遺跡が存在する可能性が大いにあることを示した。さらに、六反田遺跡（19）の存在は、「段丘が沖積面と接するか所で途切れるのではなく、沖積面下に潜り込んでいる可能性を示唆している」[寺崎・水落 2009] と指摘されるように、砂丘下にも遺跡が埋没している可能性があり、注目される。

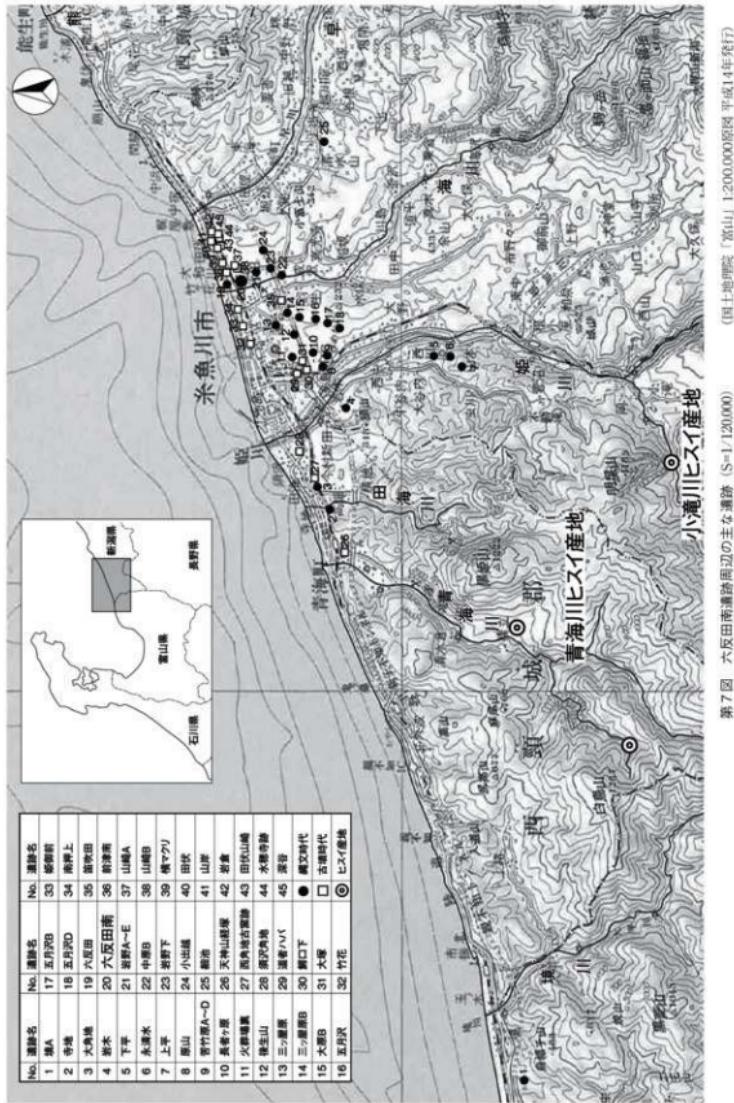
第 7 図に縄文時代～中世における六反田南遺跡周辺の主な遺跡を示した。六反田南遺跡Ⅱ・Ⅲ [細井ほか 2010・2011] でその詳細な遺跡分布状況を記述しているため、本稿では各期について総体的に述べるに留める。

縄文時代中期

前述のように希少な鉱物を産出する本地域では、縄文時代はヒスイ製玉類及び蛇紋岩製磨石斧製作に特化していた。これらの製作は中期に最盛期を迎えるが、この様相は、親不知・子不知を越えた富山県北東部でも認めることができる。姫川右岸の最高位段丘上（長者ヶ原面・標高 90m 前後）に位置する長者ヶ原遺跡（10）は、早期末から後期中葉頃まで連続と続く大規模集落である。中期中葉～後葉ごろに最盛期を迎え、ヒスイ製玉類等の生産・流通の拠点となっていた。長者ヶ原遺跡からはこれらの製作に関連する資料が数万点に及び出土している。同時期に存在した寺地遺跡（2）、朝日町境 A 遺跡（1）も拠点的集落と考えられるが、「調査した範囲から推定できる住居跡は 250 棟～300 棟に達する」[木島・寺崎・山岸 2007] と推測される長者ヶ原遺跡の規模は抜きんでて大きい。長者ヶ原遺跡が位置する長者ヶ原面には、五月沢遺跡（16～18）をはじめ小規模遺跡が群在する（11～18）。これらはキャンプサイトのような短期的なものと考えられるが、長者ヶ原遺跡を取り巻く遺跡群として重要である。

弥生時代後期～古墳時代

現在までに糸魚川市域で確認されている弥生時代の遺跡は 6 遺跡程度と少ないが、そのほとんどは弥生時代後期～古墳時代前期にかかる遺跡である。本遺跡からも弥生時代後期の遺物が流路からまとまって出土しているが、遺構は検出されていない。しかし、平成 20 年度に調査された南押上遺跡（34）や姫御前



遺跡(33)からもわずかではあるがまとまった弥生土器片が出土しており【小池ほか2011】、沖積低地の弥生時代の様相を考える上で興味深い。古墳時代の遺跡は玉作関連遺跡が多い。特に笛吹田遺跡(35)、姫御前遺跡(33)、南押上遺跡(34)、六反田南遺跡、横マクリ遺跡(39)は半径1.3km圏内の沖積低地に群在し、かつ前期を中心とする玉作遺跡であることは、相互に関連性のある遺跡群としてとらえる必要があろう。

古代

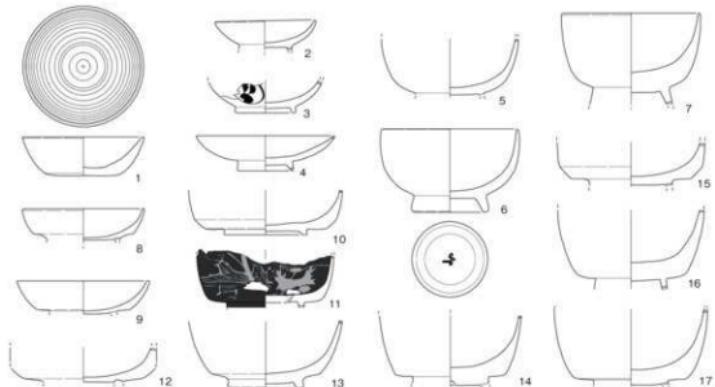
平成18~20年度に発掘調査された山崎A遺跡(37)は、六反田南遺跡の南東、海川右岸の西川原段丘上(標高25m前後)に位置する。縄文時代から近世まで断続的に続く複合遺跡で、主体となるのは8~11世紀、13・14世紀である。中でも、平安時代の堅穴建物41棟と掘立柱建物38棟の検出は注目される。集落中央には床面積が100m²を越える大型の掘立柱建物が存在し、これらに近接する土坑からは廃棄された大量の土師器等が出土した。「海川下流域における有力者の居宅を中心とした集落であった」【糸魚川市教育委員会2010】とされ、官衙的側面が指摘されている。

近世

本遺跡では近世の遺物が比較的多く出土した。特にKBI区IV層検出の流路191及びSD146からは、近世陶磁器類、漆器、下駄・桶等の木製品が出土した。近世については報告外となるが、漆器については当地域に深く関わる資料といえるもので、民俗資料としての観点から若干触れておく。

姫川上流左岸、「蓮華」などとも呼ばれる飛騨山脈北端の白馬岳(2932m)・小蓮華山(2769m)の北麓に、本地屋集落がある。糸魚川市大字大所字入ノ平に所在し、標高630mの高地にあるこの集落は、寛政4年(1792年)から槇の本地製作を行う職業集団「本地屋」が移住してきた集落である。大正・昭和初期にかけて本地・漆器製造業として隆盛期を迎えたが、戦後、昭和10年代に技術伝承が不十分なまま衰退した【小椋2007】。糸魚川地域の近現代における漆器製作の背景には、このように本地屋集落の存在がある。

流路191及びSD146からは21点の漆器が出土しており、【四柳1997】の図版(19世紀)頃に比定できそうである。これらと本地屋集落との関連性は不明であるが、糸魚川本地屋成立期の資料として、ここに紹介する(第8図)。



第8図 流路191・SD146出土漆器 (S=1/4)

第Ⅲ章 調査の概要

1 グリッドの設定

六反田南遺跡のグリッドは、平成18年度の本調査〔春日ほか2008〕で用いられたものを毎年度踏襲している。これは、本遺跡と前川を挟んで隣接する前波南遺跡〔春日ほか2008〕と共に通るように設定されており、一般国道8号糸魚川東バイパスのセンター杭No.56を基準としている。さらに、調査区全域を網羅できるよう10m単位の方眼を設定している。その結果、グリッドの基準線方位は真北から7°16'30"E偏している。

グリッドの呼称は、東西方向は算用数字を用いて調査区東端から西に向かって「1・2・3…」、南北基準線はアルファベットを用い南から北に向かって「A・B・C…」、基準線の交点を「1A・2B・3C…」とし、南東隅の交点の名称を用いた。10m単位のグリッドは更に2m単位の25分割し、南東隅が1、南西隅が5、北東隅が21、北西隅が25となるように番号を付し、「53C21」のように連名で呼称した。主なグリッド交点の旧測地系の座標は、第2表のとおりである。なお、KDI区下層廃棄域(37・38E・F)に関しては、2m単位のグリッドを更に1m単位に4分割し南東隅が1、南西隅が2、北東隅が3、北西隅が4となるようにして、「38F21-1」のように末尾に枝番として表記した。

節点	X (m)	Y (m)
38E	116432.813	-53853.328
38F	116452.733	-53855.860
54D	116412.553	-54012.040
54E	116422.472	-54013.306
54G	116442.311	-54015.839

第2表 主要グリッドの座標

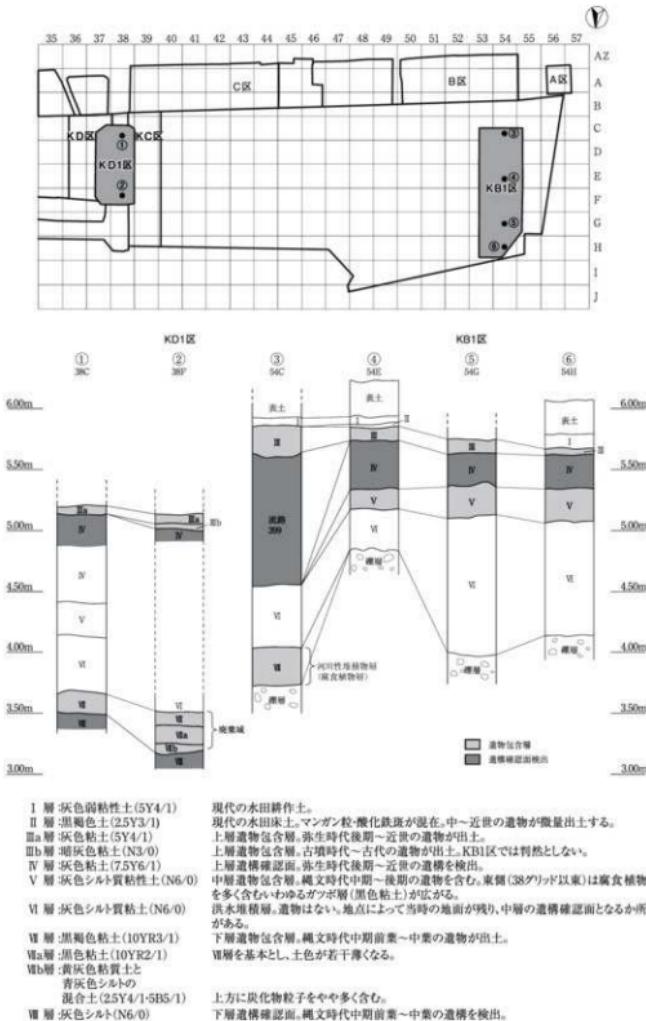
2 基本層序

平成19年度発掘調査でV層以下に縄文層の存在が明らかになってからは、Ⅲ・Ⅳ層を上層、V・VI層を中層、Ⅶ・Ⅷ層を下層と定義している。遺物包含層はⅢ層(弥生時代後期～近世)、V層(縄文時代中期～後期)、Ⅷ層(縄文時代中期前葉～中葉)の3層である。Ⅲ層は2層に分層でき、古墳時代前期主体の遺物を含む暗灰色粘土層をⅢb層、その直上に堆積する古代以降の遺物を含む灰色粘土層をⅢa層とした。V層は38グリッド列以西でのみ確認できる偏在的な層で、今回はKBI区がこれに該当し、調査している。遺構はⅣ層(弥生時代後期～近世)・VI層(縄文時代中期～後期)の一部及びⅧ層(縄文時代中期前葉～中葉)で検出できる。なお、平成22年度の調査ではVI層で縄文時代中期中葉の遺構を検出した。VI層は平成21年度(本書)までの調査で洪水堆積層と考えてきた層であるが、この発見により、地点によっては中層段階にも遺構が存在することが明らかとなった。

第9図に平成21年度の調査区における柱状図を示した。Ⅲb層はKDI区にのみ存在し、KBI区には認められない。KBI区では近世の水田が検出されたことから、Ⅲ層は耕作土で、ここに含まれる遺物は原位置を留めていない可能性がある。遺物を含むV層はKBI区にのみ存在し、ほぼ水平に堆積する。45グリッド以東ではV層は「V層相当層」となり、腐食植物(いわゆるガツボ)が多量に含まれる層となる。VI層は50～120cmと厚く堆積する。Ⅶ・Ⅷ層はKDI区には遺存するが、KBI区は後世の河川により大半が失われている。わずかに南端付近が遺存するが、Ⅷ層相当層が河川性堆積層の可能性が指摘できることから、該期の河川の一画であると考える(第Ⅳ章3Aで詳述)。なお、KDI区下層検出の廃棄域(第Ⅳ章2A

1で定義)の層序、及び土質はほかのⅤ層と異なるため、図版5に別途掲載する。

各層位の認識は調査区によって若干異なるが、平成18～20年度調査のものとおおむね一致している。なお、色調は『新版標準土色帖』[農林水産省農林水産技術会議事務局 1993]を用いた。



第9図 グリッドの設定と基本層序

第IV章 縄文時代の調査（下・中層の調査）

1 概 要

縄文時代の調査では、Ⅷ層から縄文時代中期前葉～中葉の遺物が、Ⅸ層から該期の遺構と遺物が、V層から中期前葉～後期初頭の遺物が出土した。本遺跡ではⅧ・Ⅸ層を下層、V層を中層として調査を進めている。中層は遺跡の西側（おおむね 45 グリッド列以西）でのみ確認できる偏在的な層で、今回はKBI区がこの範囲に該当する。中層は平成21年度までの調査では遺構ではなく、幅広い時代の摩耗の著しい土器片が少量出土する程度のため、洪水堆積層と考えていた。しかし、平成22年度の調査（六反田南遺跡V）では、VI層で縄文時代中期中葉末（古府式並行期）の竪穴住居が検出され、中層段階にも集落が存在することが確認された。本遺跡は広大な範囲に及ぶため、同層位でも地点によって様相が異なることは想像に難くない。平成21年度の調査（本書）の縄文時代の調査でも、KD1区とKBI区の土器様相に違いが認められており、同層位でも地点によって時期が異なる様子が見て取れた。

以上のこととをかんがみ、記述に際しては各調査区・層位ごとに分けて記述することとする。

2 KD1区下層の調査

A 遺 構

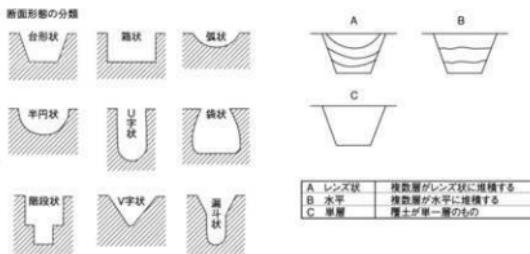
1) 概 要

調査区北端部(37・38E・F)標高3.4mを頂点とし、南東方向に向かって徐々に傾斜する斜面部の約80mの範囲から、浅箱(550mm×390mm×144mm)にして約170箱分の縄文土器・土製品・石器・石製品・動植物遺存体が出土した。この範囲は「廃棄域」（いわゆるゴミ捨て場）であると認識する。

遺構は土坑3基、炭化物集中遺構2基、溝2条、性格不明遺構3基、ピット55基である。これらのはほとんどは、廃棄域のFグリッドに集約される。遺物と堆積土（Ⅸ層）を取り除いたⅧ層で検出したことから、遺構は遺物の廃棄が始まる前段階の所産であることが分かる。埋土は炭化物を多量含み、Ⅸ層よりも粘性が強い黒褐色粘土が主体である。廃棄域以外で検出した遺構もⅨ層検出の遺構であるが、廃棄域のものほど炭化物は多くなく、Ⅸ層よりも若干粘性の強い粘土が埋土となり、地山と埋土が判然としない。

2) 記述の方法

遺構種別には略号を用い、土坑（直径50cm以上）はSK、炭化物集中遺構はSC、ピット（直径50cm未満）はP、性格不明遺構はSXとした。遺構番号は現地で付した番号をそのまま用い、1～66までの通し番号を付した。また、前年度までの調査と同様、末尾に縄文時代の頭文字「J」を付し、これらを組み合わせて「SC42J」などのように表記した。平面形態と断面形態の表記については和泉A遺跡〔加藤1999a〕に、遺構埋土の堆積状態の表記については青田遺跡〔荒川2004〕に準拠した（第10・11図）。

第10図 造構の平面形態と断面形態の分類
〔加藤1999a〕を一部改変)第11図 造構埋土の堆積状態の分類
〔荒川2004〕を一部改変)

3) 各 説 土 坑

SK9J (図版3～5・63)

38D23に位置する。平面形は円形、直径0.74m、深さ29cmを測る。断面形は半円状、埋土は3層に分層できレンズ状堆積をなす。遺物は出土していない。

SK45J (図版4・5・64)

38F11・12に位置し、北端を暗渠工により失う。平面形は不整形、長軸1.65m×短軸1.25m以上、深さ18cmを測る。断面形は台形状、埋土は炭化物を多量に含む黒褐色粘土の単層で、動物遺存体が比較的多く出土した。

SK52J (図版4・5・64)

37F9・14に位置する。平面形は橢円形、長軸1.57m×短軸1.18m、深さ17cmを測る。断面形は台形状、埋土は2層に分層されレンズ状堆積をなす。遺物は土器(1・2)、石器、動植物遺存体が出土した。

炭化物集中遺構

多量の炭化物が不整形に広がる範囲を炭化物集中遺構とした。今回検出した2基からは焼土や被熱による地山の硬化などが観察されないことから、地形の起伏に炭化物が流れ込んで溜まった自然の産物の可能性が高い。

SC42J (図版4・5・64・65)

38F7・8・12～14に位置し、北側は調査区外に及ぶ。検出できた範囲の平面形は不整形、長軸2.63m×短軸2.40m以上、深さ15cmを測る。断面形は浅い台形状をなすが、立ち上がりは極めて不明瞭である。埋土は5層に分層され、水平堆積をなす。平面形が不整形で広範に及ぶと予想されることや深さが極浅いこと、埋土が水平堆積をなすことなどをかんがみると、地形の起伏(自然な浅い落ち込み)に砂や炭化物が溜まった可能性が高い。4層以下からは土器、石錐、磨製石斧、磨製石斧未成品、石鋸、砥石、貝殻状剥片が出土した。石鋸が17点まとめて出土した点などは一括廃棄の可能性を示唆し、興味深い。

SC55J (図版4・5・65)

38E22・23、38F 2・3に位置する。平面形は不整形、長軸 0.96m × 短軸 0.55m、深さ 12cmを測る。底面が凸凹なことや埋土が水平堆積をなすことなどから、SC42J 同様自然の起伏に炭化物等が溜まった可能性が高い。遺物は敲石が1点出土している。

溝

SD40J (図版4・5・65)

38F 1・2に位置する。全長 1.60m、幅 0.47m、深さ 15cmを測る。断面形は U 字状、埋土は炭化物を多く含んだ黒褐色粘土の単層である。遺物は出土していない。

SD53J (図版4・5・65)

37F 9・10・14・15に位置する。北側は調査区外に延伸すると考えられるが、南側は SK52J に切られる。検出できた範囲の全長は 1.85m 以上、幅 1.00m、深さ 23cm である。断面形は弧状、埋土は単層で、炭化物をやや多く含んだ暗灰色粘土と灰色粘土との混合土である。遺物は出土していない。

性格不明 遺構

平面形が不整形で、土坑・炭化物集中遺構以外の落ち込みを性格不明遺構とした。SX41J は土層の搅乱が観察できたことから、風倒木痕と考える。

SX50J (図版4・5・65)

38F12に位置する。土器（5）底部が、Ⅷ層上面から正位の状態で出土した。埋設土器の類と判断し土層断面を観察したが、明確な掘り込みは確認できなかった。

SX54J (図版4・5・65)

38 F 6・7・11・12に位置する。長軸 1.38m × 短軸 0.96m、深さ 7cmを測る。断面形は弧状、埋土は単層で暗灰色粘土と灰色粘土の混合土である。遺物は貝殻状剥片が出土している。

ビット (図版3～5・66)

ビットは 55 基出土したが、住居や構になるような配列は見られなかった。ほとんどが平面形は円形か楕円形、直径 20cm 程度で深さは約 15cm 前後の単層ビットである。P29J・P30J では、石器が直立または斜位で、先端が埋土から 4～5 cm 突出した状態で検出した。埋土はいずれも粘性の強い灰色粘土質シルトの単層である。埋納の可能性が考えられる。

廃棄域 (図版4・5・59・60・63・66・67)

E グリッド以北、特に F グリッドを中心とする約 80m²の範囲を廃棄域とした。標高 3.4m を頂点とし、南東方向に向かって徐々に標高を下げる斜面部から、多量の遺物が出土した。堆積土は有機質に富み炭化物を多量に含む黒色粘土で、これまで目にしていた黒褐色粘土～シルトのⅧ層とは様相を異にする。E グリッド北半付近から粘性及び炭化物含有量が増し、徐々に黒色粘土へ変化する。これに伴い層も厚くなり、平均 15cm 程度のⅧ層が廃棄域では倍の 30cm 前後堆積する。層の中程には黄褐色細砂の薄層があり、これよりも上をⅦ 層、下をⅦ a 層、砂質が増すⅧ層直上をⅧ b 層と 3 層に分層した。遺物はⅧ～Ⅷ a 層からの出土が大半で、Ⅷ b 層からはごくわずかである。分層はしたがⅧ～Ⅷ b 層出土土器は相互に接合関係にあるものがあり、各層位における時期差にまでは言及し得ない。これらを除去すると、標高約 3.1m

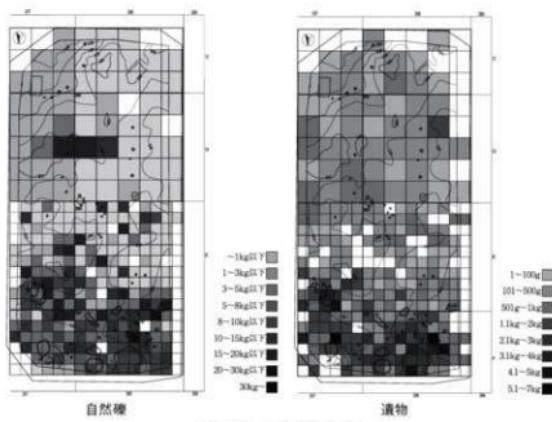
の安定した平坦面で、土坑・炭化物集中遺構・溝などの遺構が検出できた。

遺物は浅箱にして約170箱で、縄文土器・土製品・石器・石製品・動植物遺存体が出土した。

B 遺 物

1) 概 要

遺物の総重量は950kg、自然礫の総重量は1,626kgで、ほとんどが廃棄域から出土している（第12図）。縄文土器・土製品・石器・石製品・動植物遺存体が出土しており、出土土器から中期前葉～中葉の所産といえる。ここでいう自然礫とは、石器以外のものを指す。動植物遺存体、特に動物遺存体については1～5mm程度の魚類を主とした微細な骨片が多量に出土した（第VI章2で詳述）。

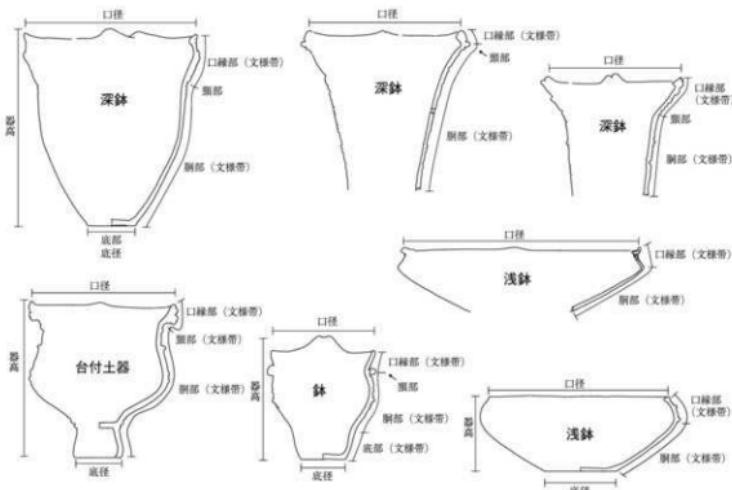


第12図 遺物重量分布図

2) 縄 文 土 器

中期前葉～中葉にかけての土器が出土した。縄文土器の総重量は669kg、浅箱にして約120箱で、9割以上が廃棄域からの出土である。個体がその場で潰れた状態で出土したものなどが多くたため、復元率は非常に高い（図版66・67）。一方、廃棄域以外で出土した土器は小片であり、復元できるものはなかった。主体は新崎式及び上山田・天神山式といった北陸系の土器で、約3～4割を占める。ほかは大木8a式土器並行の東北系土器、新道式や勝坂式土器並行の中北部高地系土器が、合わせて1割弱出土している。系統は不明であるが、昨年度までの調査に引き続き、頸部に縄文原体の側面压痕を持つ土器が定量出土し、3割強を占める。残り2割は系統不明な土器や縄文のみの破片である。

各説に移るが、まず土器分類案を提示した後、遺構出土土器・包含層出土土器の順で記載する。図版35～38の被片資料（148～280）については特に記載は行わず観察表にゆだねることとし、特徴的なものについてのみ記載する。なお、各部位の名称は北野遺跡上層〔高橋保雄1990〕・清水上遺跡〔高橋保雄1990〕などを参考に作成した第13図に定義する。



第13図 繩文土器各部位・名称

分類

六反田南遺跡Ⅱ・Ⅲの分類の多くは破片資料を対象としていたが、今回は復元率が高く、土器全体が把握できる資料に多く恵まれたため、再検討も兼ねた分類案を提示したい。六反田南遺跡Ⅱ第Ⅳ章2A2)【山本2010】の分類を土台とし、これを修正・加味する形で分類を進める。系統、型式、器種、器形、文様などから分類を試みる。

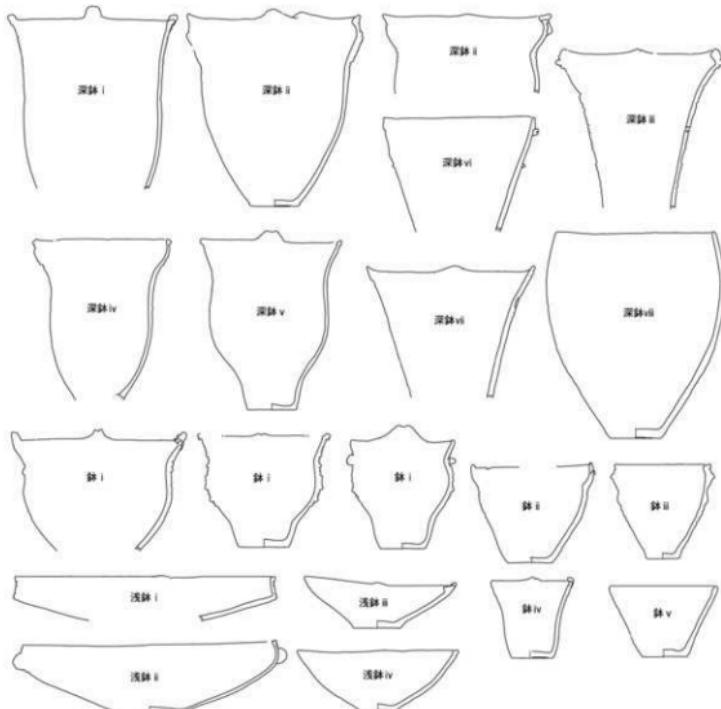
系統・型式は北陸系・東北系・中部高地系・系統不明の4系統を設定し、そのうち型式比定ができるものについては型式名を明示した。器種は深鉢・鉢・浅鉢・台付土器・有孔鋤付土器があり、口径:高さの比により、1:2程度のものを深鉢、1:1程度のものを鉢、2:1程度のものを浅鉢とした。器形は深鉢8種、鉢5種、浅鉢4種の合計17種に分類した(第14図)。なお、出土数の少ない台付土器、有孔鋤付土器については特に分類しない。

a 器形分類(第14図)

深鉢・鉢・浅鉢において、各器形の土器が2個体以上認められるものを分類の対象とした。分類対象外の器形については、以下の分類に似るものがあれば「深鉢 i ~」のように「~」を付して表記した。

- 深鉢 i やや下彫れ気味の胴部から緩やかに外反して立ち上がり、そのまま口縁部にいたるもの。
- ii 上位の膨らんだ胴部がそのまま頸部に至り、外反した後短く内屈または内湾する口縁部を持つもの。
- iii 外反しながら立ち上がる胴部に、短く内屈する口縁部がつくもの。
- iv いわゆるキャリパー形口縁を呈するもの。

- v 脇部から口縁部にかけて、緩やかなS字ラインを描くもの。脇部は丸みを持って張り出し、口縁部は外湾気味に開く。
- vi いわゆるバケツ形を呈するもの。底部から口縁部まで直線的に開く。
- vii 底部から直線的に開くが、口縁部は緩やかに外反するもの。
- viii 脇上位が丸みを帯びたまま口縁部に至るもの。
- 鉢**
- i 底部でくびれる球形の脇部に、頸部で外反又是緩く外反する口縁部がつくもの。
 - ii 内湾気味に立ち上がる脇部に、頸部で屈曲して内湾気味に立ち上がる口縁部がつくもの。
 - iii 底部から口縁部に向かって内湾しながら立ち上がるもの。
 - iv 底部から口縁部に向かって緩やかに開くもの。
 - v 底部から口縁部に向かってほぼ直線的に開くもの。



第14図 縄文土器器形分類図（縮尺不同）

- 浅鉢**
- i 底部から直線的に開く胴部に、急角度で屈曲して内傾する口縁部がつくもの。
 - ii 底部からほぼ直線的に開く胴部に、内湾しながら立ち上がる口縁部がつくもの。口縁部がきつく内湾するものと緩やかに内湾するものがある。
 - iii 底部から口縁部に向かってほぼ直線的に立ち上がるもの。
 - iv 平橢形のもの。

b 系統分類(第15回)

A 類 北陸系土器

北陸系土器群は、前葉の新崎式系と中葉の上山田・天神山式系に大別できる。深鉢・浅鉢・鉢・台付土器が出土しているが、浅鉢はA 1類・A 2類のどちらに属するものか判別しがたいため、A 3類として独立させた。また本類には鉢が定量存在し、特にA 2類では主体を成す器種となる。他類に比べA 類の鉢は、文様構成において深鉢と顕著に異なるため、A 類においてはまず深鉢・鉢の別で大分類することとした。さらに深鉢は、文様帶区分において特徴的な部分があるため、文様帶にも着目した。

1類 新崎式に比定できるもの、またはその系統をひくもの。「石川・富山県を中心とするが、福井県嶺北、新潟県の中越までも主たる分布圏としている」[加藤ほか2008]とされる。半截竹管による隆線・爪形文・蓮華文・楔形刻目文・格子目文等が施文される。器種は深鉢・鉢がある。

a 類 深鉢形を呈するもの。文様帶区画により更に2分する。

a 1類 横位区画により口縁部文様帶と胴部文様帶を分ける一群。

a 1-1類 いわゆる刻印蓮華文を施文する一群。「蓮弁を半截竹管の内側の丸みで表現するもの」[加藤ほか2008]。

a 1-2類 刻印蓮華文の中で長弁の一組。いわゆる長花弁蓮華文。半截竹管の押し当てにより蓮弁端を表出した後、縦横に沈線を引き格子目状になるものと継沈線のみを引くものがある。

a 1-3類 口縁部に幅広の無文帯を持つ一群。

a 2類 横位区画により文様帶を分けない一群。

b 類 鉢形を呈するもの。無文帯の有無により更に2分する。

b 1類 幅広の無文帯を持つ一群。

b 2類 無文帯を持たない一群。

2類 上山田・天神山式に比定できるもの、またはその系統をひくもの。当型式の分布は、「石川・富山の2県と新潟西部」を中心に、県内では「上越市周辺までが本様式の中心地に含まれる」[小島1988]。文様は「器面を斜行する渦巻きを持つ基本隆帶を主文様」[小島2008]とし、隆帶上には連続した爪形文を施文する。深鉢・鉢・台付土器がある。

a 類 深鉢形を呈するもの。文様帶区画により更に2分する。

a 1類 横位区画により口縁部文様帶と胴部文様帶を分ける一群。

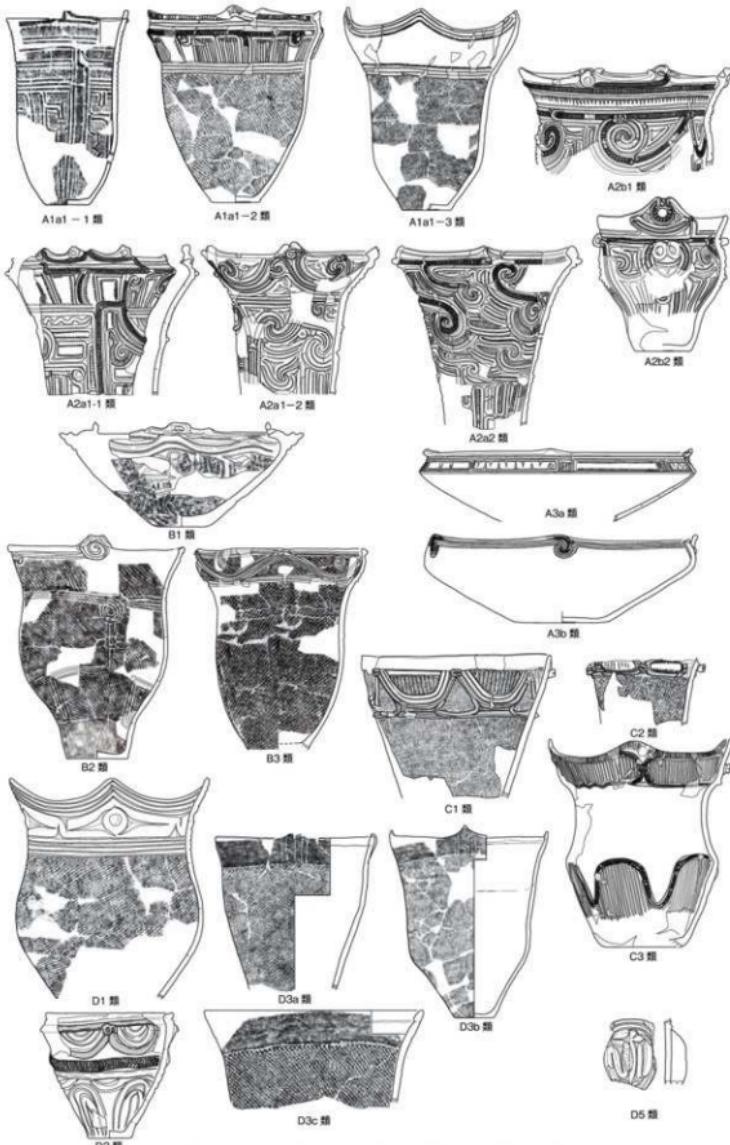
a 1-1類 隆帶上に爪形文・綾杉文等が施文される一群。

a 1-2類 隆帶上に爪形文が施文されない一群。

a 2類 横位区画により文様帶を分けない一群。

b 類 鉢形を呈するもの。施文要素により更に2分する。

b 1類 蓮華文が施文される一群。



第15図 六反田南遺跡IVの縄文土器系統分類図（縮尺不同）

b 2 類 蓮華文が施文されないもの。

3 類 北陸系の浅鉢を一括した。器形に顯著な特徴が見出せるため、以下のように分類する。

a 類 器形が浅鉢 i の一群。

b 類 器形が浅鉢 ii の一群。

B 類 東北系土器

大木 8 a 式土器に比定できるもの、またはその系統をひくもの。大木土器様式は東北中部から南部を中心とする分布する土器群である。深鉢・鉢が出土しているが、鉢は僅少であるため分類は共通とする。

1 類 繩文原体の圧痕が認められる一群。

2 類 沈線のみで文様を描く一群。

3 類 黏土紐とそれに沿う沈線で文様を描く一群。

C 類 中部高地系土器

勝坂式土器の影響が強いもの。主に諏訪・松本盆地南部・伊那谷に分布する新道式・井戸尻式土器並行期のものに類する。深鉢・鉢が出土しているが、A 類のように器種間で文様構成の差異が認められなかつたため、分類は共通とする。

1 類 上に開く連続半円弧文と、その下をつなぐ重三角区画文が認められる一群。いわゆる重三角区画文土器。

2 類 楕円区画文が認められる一群。

3 類 いわゆる梯形文土器。

D 類 系統不明な土器

それぞれ深鉢・鉢・浅鉢・台付土器が出土しているが、分類は 4 器種共通とする。

1 類 刃部文様帶が縄文となる一群。

2 類 隆帯・隆線・沈線など、縄文以外の施文法で施文する一群。

3 類 縄文原体の側面圧痕を施文する一群。基本的に頸部に 1 条巡らせ口縁部と胴部を区画し、胴部は縄文となる。口縁部文様帶の施文により細分する。

a 類 突起下部に縦位に数条施文する一群。

b 類 突起下部に上開きの半円弧文を施文する一群。

c 類 無文の一群。

4 類 縄文以外ほとんど施文しない一群、または無文の一群。いわゆる粗製土器。

a 類 単節斜縄文を施文する一群。

b 類 無節斜縄文を施文する一群。

c 類 無文の一群。

5 類 有孔鈎付土器。

各 説

a 遺構出土土器 (図版19-1~5・図版78)

SK52J (1・2) 1は深鉢でD1類、2は鉢IIのD3類で、どちらも系統不明の土器である。

SK42J (3・4) 3・4はA1a類である。3は口縁部片で、爪形文・入り組み文・格子目文などが見受けられる。

SX50J (5) 5はA類底部片である。掘形は確認できなかったが、蓮層から正位の状態で出土した。

b 包含層（廃棄域）出土土器

A類 北陸系土器 (図版19-26-6~59・図版35・36-148~198・図版38-262~273・図版78~85・図版93・95)

A1a1類…新崎式系の深鉢のうち、横位区画により口縁部文様帯と胴部文様帯を分ける一群

A1a1-1類(6~8-148~152) 刻印蓮華文を施す一群で、6~8の器形は深鉢Iに集約される。7・8は横位区画を無視した「h」状隆線文が垂下するか所があるが、ここではa類として扱う。6は4波状口縁で幅広の口唇部を持つ。文様は2単位で正面性があり、図示した面(半円状突起)かその裏面(入字状突起)が正面となる。通常、2条の蓮華文間は無文となるが、6は繩文が施されることに多少の違和感ありとの指摘がある(註1)。破片が散在しており、38E16-2・21-4、37E20-4・25-1~4から出土した。7は「h」状隆線文により、胴部を縱位4区画する。8は蓮弁表出後、蓮弁間にできた余白の三角部分を抉り取っている。

A1a1-2類(9~18-153~158) 長花弁蓮華文を施す一群で、器形は深鉢IIに集約される。いずれも2~3条の隆線で口縁部と胴部を横位区画し、胴部は繩文とする。基本的に口縁部文様帯は隆帯(隆帶文)で縱位4区画、さらにその間を隆線で再区画し、空白部に長花弁蓮華文を充填する。9・10は蓮弁端以下が格子目文となる。格子の施文法が9は縱沈線から施文するのに対し、10は横沈線から施文する。11・13は隆帯上に爪形文や綾杉文を施す。18はほかとは異なり口縁部と胴部間を隆線で区画しておらず、明確な区画を持たない。

A1a1-3類(22・23) 口縁部文様帯を幅広の無文帯とする一群で、A1a1-2類同様胴部は繩文となる。22・23は口縁部無文帯の縁辺に連続した楔形刻目文を施す。

A1b1類…新崎式系の鉢のうち無文帯を持つ一群 (19~21)

器形は鉢Iに集約される。無文帯の縁辺を楔形刻目文や棒状刻みで縁取るもの(19・20)と施さないもの(21)とがあり、系統はA1a1-3と同系統である。

A1b2類…新崎式系の鉢のうち無文帯を持たない一群 (25・27)

器形は鉢IIに集約される。25には横位に巡る刻印蓮華文が認められる。27は口唇部に1か所突起を付しておらず、正面性がある。頭部下には弓状の隆線文を4単位付す。

註1) 金沢工芸美術大学小島俊彰教授、新潟県立歴史博物館寺崎裕助学芸課長の御教授による。

A 2a 1類…上山田・天神山式系の深鉢のうち、横位区画により口縁部文様帯と胴部文様帯を分ける一群

A 2a 1-1類 (42・47～50) 隆帶上に爪形文や綾杉文を施す一群で、器形は深鉢Ⅲとviiとがある。42は胴部文様帯を2条の隆線で横位区画するが、これを無視した隆帶が2条斜行して文様帯をまたぐ。両者の隆帶は渦を巻かない。無文部の縁辺には楔形刻目文を施す。器面はやや空白部が多い印象を受ける。49は口縁部文様帯に楕円区画文を持ち、区画文内は連続した交互三角形陰刻文や「ト」字状の三叉文を充填する。楕円区画文間に下端がトンボ眼鏡状突起となる捻れ状隆帶を4単位付す。胴部文様帯は隆帶や隆線でくまなく加飾する。隆帶による抽象文のようなものも4単位認められる。捻れ状隆帶はC 1類70・72にも認められる。この捻れ状隆帶は道尻手遺跡第II群第II F類〔佐藤ほか2005〕に類例が求められ、中部高地の影響と考えられる。

A 2a 1-2類 (52～54) 隆帶上に施文しない一群である。52の器形は深鉢Ⅲ^aで、頸部できつく外反する点が独特である。口縁部文様帯の施文は4単位であるが胴部文様帯は2単位で、横位区画を境に異なる様相を見せる。

A 2a 2類…上山田・天神山式系の深鉢のうち、横位区画により文様帯を分けない一群 (43～46・58・59)

器形は、43～45が深鉢Ⅲ、46が深鉢vi、58・59が深鉢vとほかの類に比べバラエティーがある。43は垂下する隆帶と流れるような渦巻文が特徴的である。44は斜行する「S」字状文や器形から、上山田・天神山式土器の典型と考えた。所々隆帶間に楔形刻目文が認められる。45は隆帶上に綾杉文を施す。46は施文に規則性が見られない(図版83～46a～d)。58・59は大型の深鉢で、いずれも胴下部は繩文となる。58は隆帶上に爪形を施す頻度が低い。59は正面性があり、口縁部の1か所のみ逆「U」字状の突起が2単位連続する。

A 2b 1類…上山田・天神山式系の鉢のうち、蓮華文が残る一群 (28～30)

器形は鉢iに集約される。蓮華文は、半截竹管の端部の押し当てによる蓮弁端のみの施文である。いずれも4単位の波状口縁を呈し、裏面は玉抱き三叉文となる。28は、口縁部は横位無文帯、胴部は隆帶・隆線文に沿わずかまたは空白部を埋めるように蓮華文、楔形刻目文が施文される。当該期に基本となる渦巻き状隆帶文ではなく、斜行した後垂下する隆帶が4単位認められる。29・30は、口縁部の横位無文帯上端に蓮華文を巡らす。両者、法量やつくりが似るが、30は隆帶上に爪形文を施さない。

A 2b 2類…上山田・天神山式系の鉢のうち、蓮華文が残らない一群 (31・32・35～41)

廢棄域の主体を成す類型といえる。器形はほぼ鉢iに集約されるが口縁部の形状が4波状口縁のもの(31・32・35)、3波状口縁のもの(41)、1単位の山形口縁を呈するもの(37)、平口縁のもの(39)があり、バラエティーに富む。基本的に波状を呈するものはいずれも裏面が玉抱き三叉文となるが、32の口縁端部は折り返され玉抱き三叉文は見られない。頸部に一对の橋状把手を、把手を付さない部分にはトンボ眼鏡状突起を付す。A 2類の鉢は胴部文様帯に文様が展開する中、32は大波状口縁を呈し、口縁部文様帯に加飾して胴部は繩文を施しており、ほかの個体に比べると異質である。口縁部文様帯には、各2単位の橋状把手とトンボ眼鏡状突起を交互に付す。31は逆位の状態で出土した(図版67)。35も32同様、頸部に橋状把手を2単位付す。把手の下端はトンボ眼鏡状突起となる。36は口縁部文様帯に「人」字状隆帶文を1単位付し、正面性がある。37は環状突起を想起させるような山形口縁で、正面性がある。39～41は隆帶上に爪形文を施さない。

A 2類…その他 (33・34・55～57)

33は樽形を呈し、内外面赤彩する。胴部施文はA 1類的であるが、A 2類に主体となる鉢ⅰに器形が似ること、橋状把手を付すこと、A 1類に認められた蓮華文が認められないことなどを考慮すると、A 2類並行の所産であると考える。34は唯一、全体が把握できる台付土器である。口縁部文様帶の施文は4単位であるが、胴部文様帶上半は10単位である。綾杉文、爪形文、蓮華文、楔形刻目文、玉抱三叉文、三叉文、隆帶による連続半円弧文、トンボ眼鏡状突起、円形貼付文、環状貼付文など様々な技法を駆使し器面をくまなく加飾する。一方、同下半は縄文のみ、台部も無文とするなど、簡素である。A 2類で文様帶に縄文を施す例はほかに32のみである。

A 3類…浅鉢形を呈する一群 (139～147・262～280)

北陸系の浅鉢を一括した。器形が浅鉢ⅰのA 3a類と浅鉢ⅱのA 3b類に分類したが、いずれも法量は直径50cm前後と大型である。両類とも口唇部を肥厚させ、玉抱三叉文を施文するものが目立つ(140・144・145・262～266)。A 3a類には、胴部に縄文を施すもの(139・141)があるが、A 3b類は胴部無文である。また、A 3a類は加飾度が高いが、A 3b類は渦巻文(143・145)や貼付文(146)程度で簡素である。本類の浅鉢は漆を塗布するものが大半である。143は黒漆塗布後、赤漆を塗布したと考えられる。272と274の漆塗膜を採取し分析を行ったところ、272は1層塗り、274は2層塗りであることが判明し、本遺跡には少なくとも2パターンの塗布法があることが分かった(第VI章3で詳述)。145は逆位の状態ではほぼ完形のまま出土した(図版66)。145直下の掘り込みの有無や堆積土を観察したが、埋設土器または墓といった様相は看取できなかった。

B 類 東北系の土器 (図版26～27・60～66・図版36～199～210・図版85・86・図版94)**B 1類…縄文原体の圧痕が認められる一群 (60・61・204・205)**

器形全体が把握できるものは浅鉢(60)・深鉢(61)が出土している。60は浅鉢ⅱで、口唇部が肥厚し内側は内湾する器形である。61は深鉢ⅲで、口縁部と胴部を1条の粘土紐で区画し、胴部は縄文となる。器壁は約5mmと非常に薄い。

B 2類…沈線のみで施文する一群 (62)

62は深鉢ⅴで、口縁部には1単位の突起を付しており、正面性がある。胴部文様帶は4単位であるが、正面性を持つにも関わらず突起と渦巻文が呼応しないため、ずれています印象を受ける。底部は無文である。

B 3類…粘土紐とそれに沿う沈線で施文する一群 (63・65・66・206～210)

63・66の器形は深鉢ⅲ、65はバケツ状の胴部のみが残存する。63・66は器形・法量・胎土・施文とも酷似するが、66は口縁上部に竹管状工具の押し当てによる連続した環状文が施される。

C 類 中部高地系の土器 (図版27・28・67～74・図版36～211～225・図版86・87・94)**C 1類…いわゆる重三角区画文を用いる一群 (68～71・213・216・217)**

深鉢(67・68・71)、鉢(69・70)がある。いずれも区画は胴部上位までで、以下は縄文となる。区画単位は7単位のもの(67～69)と4単位のもの(70)とがある。68～71は、連続する上開きの半円弧文下に重三角区画文を配する。67も同様であるが、半円弧というよりは逆三角形状を呈する。67は区画文内を

蓮華状文・爪形文・繩文原体の圧痕で充填する。これらすべての文様を組み合わせたり、単体で施したたりとパターンが多様で、規則性はうかがえない。隆帶の剥離か所にも施文が認められることから、施文後、隆帶を貼付していることが分かる。68 の半円弧文内は長花卉蓮華文を充填する。69 は鉢 i で、A 2 類土器に主体的な器形である。区画文内は空白のままである。70 は鉢胴部、71 は深鉢 vi である。いずれも区画文内に斜行沈線を充填するが、71 はいわゆるミガキ状、72 は半截竹管による押引である。71 は重三角形区画文の底角に、捻れ状の耳状貼付文を付す。

C 2 類…楕円区画文を用いる一群 (72・73・222)

72 は深鉢胴部片、73 は深鉢 viii で、いずれも楕円区画同士の接点に捻れ状隆帶や貼付文を付す。72 の楕円区画内縁辺は、連続した三角押文が縁取る。73 は施文の仕方が粗雑な印象を受ける。

C 3 類…いわゆる櫛形文を用いる一群 (74・224・225)

74 の器形は下半が算盤玉状になる胴部に、頭部でくびれ外傾する口縁部がつく。口縁端部は短い縱位沈線で刻む。口縁部文様帶は隆帶による楕円形区画文が 4 単位認められ、区画文内を縱位沈線で充填する。区画文同士の接点は短い隆帶を折り曲げたようなモチーフを付すが、これは 68・70～72 で認められる貼付文に似る。胴部文様帶は連続した櫛形文を 5 単位付す。74 は厚手・硬質で、色調も橙色を呈するなど、ほかと一線を画している。

C 類…その他 (211～215・218～221・223)

胎土に石英が目立ち、器面にはザラつきがあり、色調は赤褐色～黒褐色を呈する。223 には捻れ状隆帶が認められる。

D 類 系統不明な土器 (図版 28～33・75～138 図版 37～38・226～261・図版 87～92・図版 94～95)

D 1 類…胴部文様帶が繩文となる一群 (75～86)

A～C 類のどの類型にも存在する施文形態である。深鉢 (75～79・81・82・85・86)、鉢 (80・83・84) がある。75 は、口縁部に 4 単位の貼付文と粗い押引き文が認められる。79 は深鉢 viii である。C 1 類 67・68 と器形・法量共に似る。口縁部文様帶は連続した交互三角形陰刻文を施文するが、大ぶりで粗雑である。76・77 の器形は深鉢 v、口縁部は 4 波状口縁を呈する。口縁部文様帶には波長部に呼応させた玉抱三叉文を施す。76 には、C 1 類のような上に開く半円弧文とそれをつなぐ重三角区画文が認められる。83 は口縁部文様帶に「ハ」の字状の隆帶を貼付する。胴部と底部を 2 条の隆線で横位区画し、底部は無文帶とする。84 は小型の鉢 v で、正面に「ハ」の字状の突起を付す。

D 2 類…隆帶・隆線・沈線のみで加飾する一群 (87～89)

鉢 iii (87・89) と鉢 v (88) とがある。87 は半截竹管による隆線や刻み・押圧で施文する。89 は胴部中位に綾杉文を施文した断面三角形を呈する隆帶を巡らせ、上下に横位区画する。文様帶上段には、接点にトンボ眼鏡状突起を付した上開きの半円弧文が連続する。

D 3 類…頭部に繩文原体の側面圧痕が巡る一群 (90～107・137・237～244)

深鉢 (90～94・96～101・104・105)、鉢 (95・102・103・106)、浅鉢 (137) がある。器形は深鉢が i・iii・vi・

vii、鉢が i・iv とこれらから派生するようなもの、浅鉢が iv と多様である。本類には A 1 類や A 2 類に主体的な深鉢 i や鉢 i がやや多く見られることが特徴的である。D 3 a 類 (90～92)・D 3 b 類 (93～97) としたものには平口縁がないこと、更にこれらは図示した限りでも 11 点中 9 点が 1 単位の山形口縁となり、正面性があること、波状口縁の波長部は二股に分かれ、かつ左右の高さを違えるものがほとんどであること、口縁部文様帶は無文であることなど、簡素なつくりの中にも規則性が見られる。D 3 c 類は波状口縁のもの (98・99) と平口縁のもの (100～105・137) とがある。99 は正面に貼付文と三叉文の透かしを施し、その裏を玉抱三叉文とする。色調は浅黄橙色を呈し、被熟痕がなく、丁寧なつくりをしていることは、ほかの D 2 類と一線を画す。137 は浅鉢 iv である。本類の浅鉢はほとんど見受けられず、希少である。

a～c 類のいずれにも該当しないものが 106・107 である。106 は口縁上部を折返し、横位無文帶とするが、これを無視するように口唇部から数条の繩文原体の圧痕が垂下する。頭部に圧痕が巡らない所もほかとは趣が異なる。107 は口縁部文様帶にまでも繩文を施す点がほかとは違う。

D 4 類…いわゆる粗製土器の一群 (108～134・245～259)

深鉢・鉢・浅鉢・台付土器がある。器形は深鉢が iii・vi～viii、鉢が i～ii・v、浅鉢が ii～v と多様である。繩文はほとんどが単節斜繩文の D 4 a 類 (108～119) で、無節斜繩文の D 4 b 類 (120～123) はさほど多くはない。D 4 c 類 (124～134・138) は、ユビナデ痕 (124・131) や指頭圧痕 (133) が認められるものがある。131 は、輪積痕及び縱方向のユビナデ痕が顕著に残る。132 は口唇部を幅広にしていること、底部も広く平滑に仕上げていること等から、天地逆の器台の可能性もある。

D 5 類…いわゆる有孔鍔付土器の一群 (281～283)

281 の色調は赤褐色を呈し、胎土に大粒の石英を多量に含む。器面に断面二等辺三角形を呈する太い隆帯が垂下する。282・283 は同一個体で、外面に漆を塗布する。亀甲状の貼付文には黒漆、そのほか器面には赤漆が認められる。ミガキが施され、胎土も精良で丁寧なつくりである。

3) 土 製 品 (図版 39 - 284 ~ 295・図版 96・第 16 図)

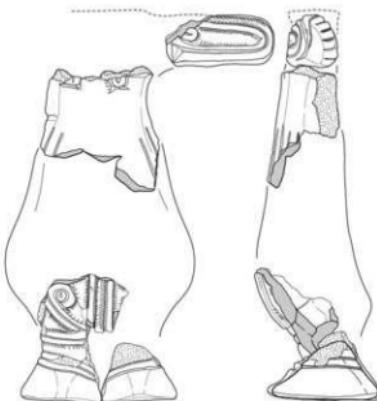
ミニチュア土器 4 点、土偶破片 7 点、耳飾り 1 点が出土した。

ミニチュア土器は 284 ~ 287 で、287 に沈線による施文が認められるほかは無文である。

土偶は 288 ~ 294 で、288 ~ 291 は同一個体の中空土偶と推測する。288 は腕部、289 ~ 290 は脚部、291 は頭部に当たり、頭部はない。288 の腕部は右腕で、水平方向に延びる直線的なつくりである。289 は右脚、290 は左脚で両者側面の溝離部で接合する (図版 96 - 289 + 290 参照)。291 は一对の乳房の表現と、体側に沿った 4 条の沈線が認められる。腰部が張るバイオリン形を呈すると推察する。腹面は平坦だが背面が膨らむため、断面はかまぼこ状を呈する。

これらを組み合わせ、上越市道灌遺跡の「第 27 国 信越国境付近出土の中空土偶」 [小田 2004] を参考に、復元予想図を作成した (第 16 図)。頭部～脚部まで 20cm 強の比較的大型のものと推測する。脚部同士を接合するとやや内股となるが、自立する。292 は頭部～胸部にかけての土偶片で、腕部はバンザイ状を呈する。293 は土偶の頭部と推測するが、顔面表現はない。292 とは接合せず、別個体である。294 はいわゆる河童形土偶の頭部で、頭頂部は皿状を呈する。縁辺に斜位の貫通孔を 4 孔穿つ。

295 は耳栓型の耳飾りで一端を欠損するが、左右対称な鼓形と推測する。



第 16 図 288 ~ 291 中空土偶復元予想図 (S=1/3)

4) 石 器

総数は 1,694 点、総重量は 281.73kg、出土土器から縄文時代中期前葉～中葉に比定できる。土器同様、9 割以上が廃棄域出土である (第 12 図)。石鎌、石匙、石錐、不定形石器、打製石斧とその未成品、磨製石斧とその未成品、石鍤、スクレイパー・歯齒縁石器、敲磨石類、砥石、石皿類、石核、貝殻状剥片、その他の剥片のほか、垂玉、円盤状石製品、石棒未成品等の石製品が出土した。

本遺跡における縄文時代遺物包含層 (V 層・VI 層) には、包含層中に自然礫が多量に混じる傾向がある。径 1cm 前後のものから人頭大もしくはそれ以上のものまでさまざま見受けられ、総重量は 1,626kg に及ぶ。これは、山間部で発生した土石流や海川などの周辺河川の氾濫に起因すると考えられる。自然礫は礫石器類 (石鍤・敲磨石類等) との判別が難しく、加工痕や使用痕があっても現地では見落とす危険性があった。そこで、包含層中から出土した礫は可能な限り小グリッド単位で取り上げ、洗浄して加工痕・使用痕の有無を確認し、抽出した。自然礫と判断したものは、重量測定後、廃棄した。現地で明らかに石器と判断できたものは、ほかの遺物と同様に取上げている。この作業は、KBI 区下層・中層でも同様に行い、石器の抽出に努めた。

記述の方法

法量的計測法、部位名称、器種の定義・分類、石材の分類等は六反田南遺跡II「第IV章C」に準拠した〔水落2010〕。ただし、分類については今回の調査成果を踏まえ、加味・修正を行っている。また六反田南遺跡IIでは出土しなかった器種の定義・分類等は、北野遺跡II〔高橋ほか2005〕を参考に行った。各説では遺構単位での記述は行わず器種ごとに記述するが、遺構別の出土状況は第3表に示す。個々の遺物の詳細は観察表に委ね、類別の傾向について記述する。

a 器種の定義と分類

分類に当たっては、器形や長幅比、石材等の形態や質を対象にしたものの大分類（アルファベット大文字表記）、加工痕や使用痕等細部の状態を対象としたものを細分類（算用数字表記）、さらに必要に応じて細々分類（アルファベット小文字表記）した。文中に「貝殻状剥片」と「その他の剥片」と記載しているが、詳しくは「剥片類」の項で定義する。

これらの定義・分類はKBI区下層及び中層にも共通とする。

石器の形態による分類

石 鐮 (第17図)

尖頭部・側縁部・基部が作出され、左右がほぼ対称なものを石鎌とした。基部に抉りがあり、中茎の無い凹基無茎石鎌のみ出土している。側縁形態により2分類する。

A類 側縁形態が直線的なもの。

B類 側縁形態が湾曲するもの。

石 鍤

抉りのあるつまみと刃部を有する石器を石鍤とした。303・304の2点のみの出土のため分類はしない。

石 錐

剥片の一部または全面に調整を加え、錐部を作出した石器を石錐とした。305のみの出土であるため分類はしない。

打 製 石 斧 (第18図)

貝殻状剥片や扁平礫を素材とし、斧形に整形した打製石器を打製石斧とした。器形は撮形（A類）と短冊形（B類）がある。さらに刃部の形態により細分した。

A類 基部に対して刃部が幅広で撮形になるもの。

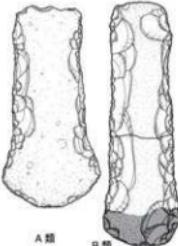
B類 基部と刃部がほぼ同幅で短冊形になるもの。

器種 遺構	打製	磨製	石錐	砥石	敲磨	スクレイパー	貝殻状 剥片
	石斧	石斧		B類	石錐		
SK45	1						3 1
SK52J	1		1				3 1
SC42J		2	1	15			2 2
SC55J					1		
P29J							1 1
P30J							1 1

第3表 遺構別石器出土状況



第17図 石鎌分類図
(S=2/3)



第18図 打製石斧分類図
(S=1/4)

- 1類 刃部に大きな剥離痕や連続した剥離痕を持つもの。
- 2類 刃部に小さな剥離痕を持つもの。
- 3類 刃部に微細な剥離痕を持つもの。

磨製石斧 (第 19・20 図)

調整剥離や敲打により形成され、刃部を研磨によって作出了した斧形の磨製石器を磨製石斧とした。大半が折損品で長幅比は算出できないため、六反田南遺跡 II 同様幅厚比を算出した (第 20 図)。完形品の法量や六反田南遺跡 II を参考に、幅厚比から小型・大型・特大に 3 分類した。なお細分類は折損品が主なため行わない。

A 類 幅 4 cm × 厚さ 2 cm 以下に収まる小型のもの、または小型と予想されるもの。

B 類 A 類を除く幅 6 cm × 厚さ 3 cm 以下に収まるもの、または大型と予想されるもの。

C 類 A・B 類以外の特大のもの。

磨製石斧未成品 (第 21 図)

本遺跡出土の磨製石斧は、ほぼ蛇紋岩質 (まれに安山岩) であることは、これまでの調査などからも明らかである。したがって、蛇紋岩を用いて磨製石斧の形状をなすものは、すべて磨製石斧未成品とした。未成品も折損品が大半なため、上述した製品の幅厚比をもって大分類とする。細分類は製作の進行状況により 5 分類する。

1 類 原石・転石、またはその状態で採取された礫に大きな剥離を加えたもの。

2 類 踵面や素材の正面に大小の剥離を加えて大まかな形状をとらえたもの。

3 類 細かい剥離や敲打を繰り返し、剥離面や側縁の棱をつぶしたもの。

4 類 研磨を施したもの。

5 類 摩擦を施したもの。

石錘 (第 22・23 図)

扁平錐の両端もしくは縁辺に剥離・敲打・磨りにより、抉りや溝がつけられたものを石錘とした。大分類は長幅比により 2 分類、細分類は加工の仕方により 2 細分、さらに必要に応じて細々分した。

A 類 長さ × 幅が 10 cm × 6 cm 以下に収まる小型のもの。

B 類 A 類以外の大型のもの。

1 類 剥離作業 (打ち欠き) や敲打によって抉りを作出したもの。

いわゆる疊石錘 [渡辺 1984]。さらに抉りの数により細々分した。

a 類 抜りの数が 2 個のもの。

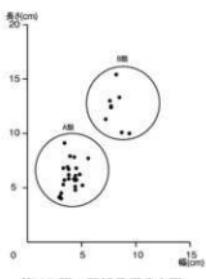


第 19 図 磨製石斧分類図
(S=1/4)

第 20 図 磨製石斧幅厚分布図



第 21 図 磨製石斧未成品分類図
(S=1/6)



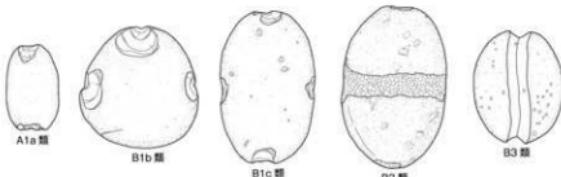
第 22 図 石錘長幅分布図

b類 扱りの数が3個のもの。KBI区中層447のみの出土。

c類 扱りの数が4個のもの。

2類 敲打によって浅い溝を作出したもの。

3類 磨りによって溝が作出されたもの。いわゆる有溝石錘[渡辺1984]。KBI区中層448のみの出土。



第23図 石錘分類図 (S=1/4)

砥 石 (第24図)

剥片や比較的平坦な礫を素材とし、正裏面や側面(側縁)に研磨痕を持つ石器を砥石とした。主に粗粒砂岩の礫を素材とするものと、砂岩の貝殻状剥片を素材とするものに集約される。後者は縁辺にのみ研磨痕を持ち、断面形がU字状やV字状を呈するいわゆる石鋸である。六反田南遺跡IIの砥石B2類に比類する。大分類は使用素材により2分類、さらにA類は研磨痕の状態により2細分する。

A類 細またはその他の剥片を素材とするもの。

1類 面状に研磨痕が認められるもの。

2類 面状かつ溝状に研磨痕が認められるもの。

B類 貝殻状剥片を素材とするもの。いわゆる石鋸。

砥面の断面形はU字状やV字状を呈する。

敲 磨 石 類 (第25図)

円礫または扁平礫に、磨痕・敲打痕・凹痕の残る石器を敲磨石類として、従来、敲石・磨石・凹石と呼称されたものを一括して扱った。石質により2分し、さらにB類は使用痕の組み合わせにより4細分する。

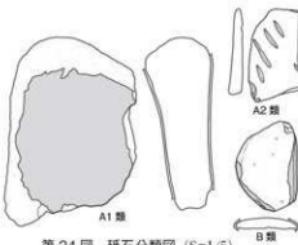
A類 硬質な球状礫に多面体状に敲打痕や磨痕が認められるもの。いわゆる多面体敲石。

B類 球状礫または扁平円礫に敲打痕や磨痕が認められるもの。

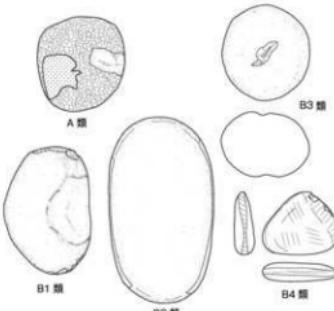
1類 敲打痕のみ認められるもの。

2類 磨痕のみ認められるもの。

3類 凹痕のみ認められるもの。



第24図 砥石分類図 (S=1/5)



第25図 敲磨石類分類図 (S=1/4)

4類 敲打痕と磨痕の両方認められるもの。

石皿類

扁平な大型の円・楕円形の正面または正・裏面に、使用や調整の結果と推定される敲打痕や磨痕が認められるもの。從来石皿と呼称されるものも一括して扱った。出土数が少ないので、分類はしない。

スクレイパー・鋸歯縁石器（第26図）

貝殻状剥片【小池1986】を素材とし、刃部と考えられる部分に加工痕や使用痕を有する石器を一括した。貝殻状剥片を素材とするため器形はほぼ限定されるが、刃部の加工痕や使用痕が多様で、機能が判然としない。しかし詳細に観察すると、刃部形態が從来「スクレイパー」・「掻・削器」・「鋸歯縁石器」などと呼称されたものに比類できそうである。【六反田南遺跡II】では本器種を包括的に「スクレイパー」として扱っているが、本稿ではA類をいわゆるスクレイパー、B類をいわゆる鋸歯縁石器として分類する。さらに刃部の加工痕・使用痕によりそれぞれ細分する。

A類 連續的または連續状の剥離痕が認められる滑らかな刃部を持つもの。いわゆるスクレイパー。

1類 刃部に調整剥離が認められるもの。剥離痕は5mm～3cm程度と大きい。

2類 刃部に微細な剥離痕が認められるもの。加工痕か使用痕かは判然としない。

B類 鋸歯状の刃部を持つもの。いわゆる鋸歯縁石器。

1類 調整剥離による鋸歯状の刃部を持つもの。剥離痕は2～3cm程度と大きい。

2類 微細な鋸歯状の刃部を持つもの。剥離痕は極めて垂直的で、加工痕か使用痕かは判然としない。

石核（第27図）

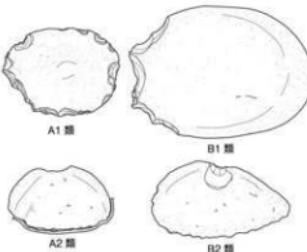
剥片を作り出すための素材、剥片剥離作業が行われた後の残核を石核とした。採取する剥片の目的別に2分類する。

A類：貝殻状剥片を剥取したもの。

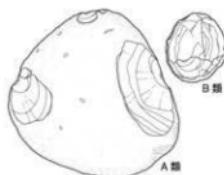
B類：その他の剥片を剥取したもの。

剥片類

剥片類は貝殻状剥片とその他の剥片とに区別した。正面が縦面、裏面が単一の剥離面で二枚貝の貝殻状を呈する剥片を「貝殻状剥片」とした。貝殻状剥片は「素材剥片」という性格を有する。これとは別に貝殻状剥片以外の剥片を「その他の剥片」とした。これらの呼称の仕方は【六反田南遺跡II】に準拠した。特に分類は行わない。



第26図 スクレイパー・鋸歯縁石器分類図
(S=1/4)



第27図 石核分類図 (S=1:6)

石材の分類

石材の同定については、肉眼及びルーペで観察した。同定した石材は、砂岩・安山岩・流紋岩・閃綠岩・蛇紋岩・頁岩・花崗岩・凝灰岩・ヒスイ・黒曜石・鉄石英・チャートの11種類である。砂岩は更に4細分した。

黒色細粒砂岩：暗灰色を呈し、粒子が極めて緻密で硬質なもの。剥離痕が明瞭で、端部は非常に銳利である。

白色細粒砂岩：灰白色を呈し、粒子は緻密であるが、黒色細粒砂岩ほど硬質ではないもの。

砂岩：主に灰色を呈し、上記2種に比すると粒子は粗いもの。剥離痕はさほど明瞭ではない。粒子が細かいものと粗いものとがある。

粗粒砂岩：上記3種に比すると最も粒子が粗く、時に小礫を含むことがあるもの。色調も黄色系を呈するなど特徴的である。

石器・石材組成

総点数は2,105点で、土器同様、大半の石器が37・38Fグリッドの廃棄域から出土している。過半数を占めるのは貝殻状剥片(964点)やその他の剥片(394点)の剥片類である。これら2種の剥片と石核を除外した石器における器種の比率は、貝殻状剥片に加工痕・使用痕を持つものが316点(44.63%)と群を抜き、以下、砥石135点(19.07%)、磨製石斧未成品98点(13.84%)と続く。磨製石斧未成品とその他の剥片の9割以上が蛇紋岩であること、砥石をはじめ、敲磨石類42点(5.93%)など磨製石斧製作関連工具類が計177点(19.77%)と2割近く出土していることは、蛇紋岩製磨製石斧製作が積極的に行われていたことを物語る。一方、磨製石斧の完成品は24点(3.39%)と少なく、このほとんどが折損品であることは、六反田南遺跡Ⅱと同様の傾向である。

石材 器種	黒色 細粒 砂岩	白色 細粒 砂岩	砂 岩	粗 粒 砂 岩	安 山 岩	流 紋 岩	閃 綠 岩	蛇 紋 岩	頁 岩	珪 質 頁 岩	花 崗 岩	凝 灰 岩	ヒ ス イ	黒 曜 石	鐵 石 英	チャ ー ト	器 種 別 々 点 数	器 種 別 々 比 率
石鏃										3				8	2	13	1.84	
石匙									1					1		2	0.28	
石錐														1		1	0.14	
打製石斧	6	8	9	3		1				1						28	3.95	
打製石斧未成品	3	5	4							1						13	1.84	
磨製石斧					2		22									24	3.39	
磨製石斧未成品								98								98	13.84	
石錐			12	19	1	1										33	4.66	
スクレイバー 斬歯縫石器	54	15	132		74	37			4							316	44.63	
砥石				63	72											135	19.07	
敲磨石類	1	5	14			18				1	2	1				42	5.93	
石皿類		2	1													3	0.42	
石材別総数	64	15	227	72	124	41	1	139	5	3	2	2	1	9	1	2	708	100.00
石核	3	2	11	15				2	1				2	3		39	-	
貝殻状剥片	152	57	427		166	161										964	-	

第4表 KD1区下層 石材別石器組成表

各 説

石 鎌 (図版 40 - 296 ~ 302・図版 97・第 5 表)

出土した 13 点は、両面に調整剥離が施され、基部に抉りがある凹基無茎石鎌である。A 類は 296 ~ 298・301、B 類は 299・300・302 で、すべてに細かな調整剥離を加えている。素材は黒曜石の剥片が主で、296・298・300 を産地同定したところ、長野県星ヶ塔産の黒曜石である可能性が高いことが判明した(第Ⅳ章 4 で詳述)。

石 匙 (図版 40 - 303・304・図版 97)

303 はガラス質の黒色安山岩の剥片を素材とする。側縁を両面調整し、特につまみ部は入念に整形する。刃部の長さが幅とはほぼ同じであり、北野遺跡

II の石匙 B 類に比類する。刃部は底縁につく。304 は鉄石英の剥片を素材とする。これも底縁が刃部となるが、303 のように直線的ではなく緩い弧状に整形される。

石 錐 (図版 40 - 305・図版 97)

305 は両極打撃で得た黒曜石の剥片を素材とする。錐部とつまみ部の境は不明瞭である。錐部の先端は摩耗し、銳利さは失われている。

打 製 石 斧 (図版 40・41 - 306 ~ 317・図版 97・第 6 表・第 28 図)

68 点出土したが、そのうち

40 点は折損品である。折損品は、基部と刃部の判別が困難なため、分類対象外とした。316 の節理によって得られた剥片、317 の扁平礫以外は、欠損品も含めすべて貝殻状剥片を素材とする。石材は、黒色細粒砂岩・砂岩・安山岩・流紋岩の 4 種がある。長さは 11 ~ 19cm、幅は 6 ~ 8 cm にはばく収まり、これに照らせば 315 ~ 317 は定形外といえる。A・B 類とも両面調整

により整形するが、A 類の基部調整には敲打も加える傾向にある(306 ~ 310)。調整によって刃部を作出した 1 類は少なく、2 類・3 類の素材を生かした刃部を持つものが多い。307 は A 類としたが、基部から刃部にかけてやや直線的で、A・B 類中間的な感がある。

磨 製 石 斧 (図版 41 - 318 ~ 324・図版 97・98・第 7 表)

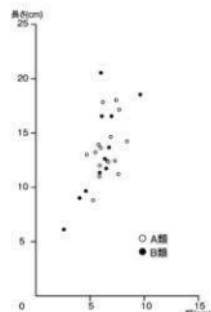
蛇紋岩を素材としたものが 22 点、安山岩を素材としたものが 2 点の合計 24 点出土した。完形品は B 類の 323 が 1 点と、318・319 を含む A 類の 5 点の計 6 点で、そのほか 18 点はすべて折損品である。折損品は基部が 12 点、刃部が 4 点、そのほかが 3 点で基部の遺存度が高い。基部には弧を描くもの(319・

石材 分類	黒 曜 石			珪 質 頁 岩	チ ヤ ト	類 型 別 合 計
	A 類	B 類	折損品			
A 類	5	1	6			
B 類	1	2				3
折損品	2	1	1	4		
石材別合計	8	3	2	13		

第 5 表 石鎌類別石材組成表

石材 分類	類 型 別 總 數					
	黑色 砂 岩	安 山 岩	流 紋 岩	蛇 紋 岩	花 崗 岩	
A1 類	1	1	1	1		4
A2 類	1	3	2			6
A3 類	3	2			1	6
B1 類	2	1	1			4
B2 類		1	1			2
B3 類	3	1	1		1	6
石材別總數	6	8	9	3	1	28

第 6 表 打製石斧類別石材組成表



第 28 図 打製石斧長軸分布図

部位	基部		刃部		總数
	弧状	直線状	偏円刃	偏直刃	
A 類	1				1
B 類	6	7	3	1	17
合計	14		4		18

第 7 表 磨製石斧折損品遺存状態集計表

321) と直線的なもの (318・322) が、刃部には円刃 (319・324)・偏円刃 (320・323) が認められる。

A 類は 318・319 がある。本類は 6 点中 5 点が完形品である。A 類は基部:刃部が 1:1.85 ~ 1:2 となる。B 類は 320 ~ 324 である。側縁が器体軸に対してほぼ平行なこと、基部と刃部がほぼ同幅であることなどから、B 類は短冊形を呈する傾向にある。完形品である 323 は、基部がほぼ直線的で刃部が偏直刃を呈する。

なお、製作時に擦切具として用いられる砥石 B 類のいわゆる石鋸や、後述する磨製石斧未成品 5 類の「擦切を施したもの」が出土しているが、側縁や正裏面に擦切痕の残るような製品は出土しなかった。

磨製石斧未成品 (図版 41・42 - 325 ~ 336・図版 98・第 8 表)

98 点出土しており、すべて蛇紋岩を素材とする。最も多いのは研磨段階の 4 類で 42 点出土したが、ほとんどが折損品である。

小型の A 類は 327・329・330 である。327 は A 1 類で、小型の扁平縫の両側縁を粗く整形する。329・330 は A 4 類で、329 は敲打をほとんど用いず両面調整を多用して側縁を整形する。330 は、4 類段階で作出しない刃部がすでに作出されている。

大型の B 類は 325・326・328・333・334 で、4 類のほか整形段階の 3 類も比較的多く出土した。325 は B 1 類で、扁平円縫を素材とする。粗い両面調整で器体幅を減じる。328・333 は B 3 類で、どちらも扁平縫を素材とし、両側縁を器体軸に平行に整形する。334 は B 4 類で、やや厚手の縫を素材とし、両面調整の後敲打によって両側縁を器体軸に平行に整形する。

特大型の C 類は 331・332・335・336 で、完成品と未完成品の 2 類には認められない類型である。331・332 は C 3 類である。331 は扁平縫を素材とし、両面調整後、側縁を敲打によって整形する。332 は安山岩の楕円縫を素材とし、裏面下部に剥離が認められる以外はすべて敲打により整形する。335・336 は C 5 類で、楕円縫を素材とする。336 は正裏面に 2 条ずつ擦切溝が認められるが、対応しない。擦切溝にはテラス状の段がつく。

石 錘 (図版 42・43 - 337 ~ 346・図版 98 ~ 99・第 9 表)

33 点出土した。石材は安山岩が過半数を占め、ほかに砂岩、流紋岩、閃緑岩が用いられる。長幅比を算出すると、小型の A 類と大型の B 類に顕著に分かれた。A 類が 25 点で、B 類の 3 倍以上出土している。

A 類は 337・338・341・344・345 である。A 1a 類は 337・338 を含む 17 点出土しており、石錘全体の約 7 割を占める。ほとんどのものが扁平な楕円縫を使用するが、339 のように扁平円縫を素材とするものも少数認められた。344・345 は A 4 類である。縫の側縁に広く両面調整を加え、縫掛け部を作出する。さらに 345 は、上下端に抉りを作出する。

B 類は 339 ~ 340・343・346 である。346 は安山岩の楕円縫を素材とする。敲打により短軸に 1 条、裏面のみ長軸にも 1 条、それぞれ浅い溝を作出している。裏面は十字状の溝となる。

分類	1 類	2 類	3 類	4 類	5 類	総数
A 類	2	3	3	10	0	18
B 類	2	8	20	28	0	58
C 類	5	0	3	4	10	22
細分類別総数	9	11	26	42	10	98

* 石材はすべて蛇紋岩

第 8 表 磨製石斧未成品類別出土数集計表

分類	石材	砂岩	安山岩	閃緑岩	流紋岩	類型別
						総数
A1a 類	7	9	1			17
A1b 類						0
A1c 類	2	4				6
A2 類						0
A3 類	1				1	2
A4 類						0
B1a 類	2	1				3
B1b 類						0
B1c 類			2			2
B2 類			3			3
B3 類						0
B4 類						0
石材別総数	12	19	1	1	33	

第 9 表 石錘類別石材組成表

砥 石 (図版 43・44 - 347 ~ 357・図版 99・100・第 10 表・第 29 図)

135 点出土した。石器全体の 2 割近くを占める出土量である。

A 類 (347 ~ 350) は 71 点出土した。すべて粒子の粗い粗粒砂岩を素材とする。長さ × 幅が 9 cm × 8 cm 程度に収まるものが主である (第 29 図)。観察すると破断面を持つものが大半で、このうち 25% (18 点) に被熱痕が認められた (350 ほか)。被熱痕については和泉 A 遺跡 [加藤 1999b] に、「被熱に伴う剥落・分割により新たに形成された粗い面を再利用」したのではないかという指摘がある。A 1 類は 347 ~ 350 を含む 69 点あるが、A 2 類は本調査区では出土していない。

B 類 (351 ~ 357) はいわゆる石鋸で、64 点出土した。351 が粗粒砂岩の貝殻状剥片を素材とする。ちなみにこの砂岩は、ほかの砂岩に比べザラつきがあり、粒度がやや粗い砂岩で、意図的に選択されている可能性が高い。356・357 のように砥面にテラス状の段を持つものがある。これは磨製石斧を擦切る際、砥面と素材が接触したときに生じるものとされる [阿部 1987]。事実、磨製石斧未成品 5 類には擦切による溝を持つものが出土している。

敲 磨 石 類 (図版 44 - 358 ~ 368・図版 100・第 11 表・第 30 図)

42 点出土している。

A 類 (358 ~ 361) はいわゆる多面体敲石で、磨製石斧製作に関連することが指摘されている [阿部 1987]。石材は 360 のヒスイ以外すべて蛇紋岩で、いずれも硬質な素材である。敲打痕に加え磨痕が認められるもの (358・359)

と敲打痕のみ認められるものの (360・361) がある。358 は

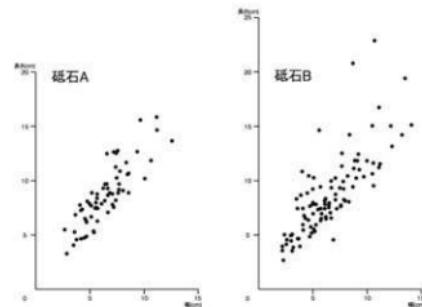
ほぼ全面に敲打痕を持ち、一部磨痕と縦面が残る。359 も縁辺がくまなく敲打される。正裏面には磨痕が認められる。

B 類 (362 ~ 368) の石材は多様で、6 種類ある (第 11 表)。362・363 は B 1 類で、362 は両側縁に敲打痕が認められる。365 は B 2 類で、両側縁に磨痕が認められる。366 ~ 368 は B 3 類で、正裏面のほか中央に敲打による凹みを持つ。367・368 の石材は凝灰岩で、比較的軟質な素材を使用している。364 は B 4 類である。右側縁は敲打により剥離が生じる。そのほかは磨りによる削痕が認められる。

分類	石材 砂岩	粗 粒 砂 岩	類 型 別 總 数
A1 類	70 (18)	70	
A2 類	1	1	
B 類	63	1	64
石材別總数	63	72	135

* () 内は被熱痕が認められるもの

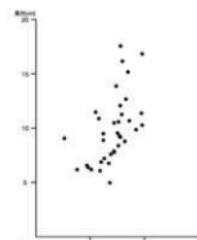
第 10 表 砥石類別石材組成表



第 29 図 砥石 A・B 類長幅分布図

分類	黒色 細 粒 砂 岩	砂 岩	安 山 岩	蛇 紋 岩	花 崗 岩	凝 灰 岩	ヒ ス イ	類 型 別 總 数
A 類							8	1 9
B1 類	1	3	4	4				12
B2 類			1	5				6
B3 類	2	2			2			6
B4 類			7	1	1			9
石材別總数	1	5	14	18	1	2	1	42

第 11 表 敲磨石類別石材組成表



第 30 図 敲磨石類長幅分布図

石皿類（図版 45 - 369 ~ 371・図版 100・第 4 表）

石皿は、ほかの石器に比べて出土量が少なく、3 点出土したにすぎない。369・370 は、砂岩の円または楕円窪を石皿に利用している。

スクレイパー・鋸歯縁石器（図版 45・46 - 372 ~ 380・図版 100・101・第 12 表・第 31 図）

316 点出土し、器種石器の中では 4 割以上を占む。使用石材も 6 種と多様である。基本的には横長剥片を素材とするが、A 類では縦長剥片もやや使用するようである（第 31 図）。

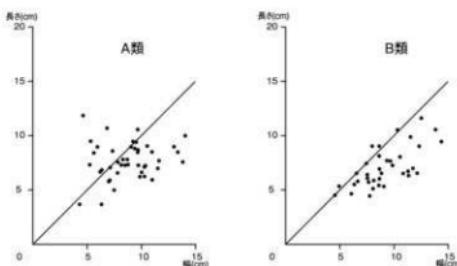
A 類（372 ~ 377）はいわゆるスクレイパーで、「六反田南遺跡 II」「スクレイパー」に比類する（水落 2010）。372 ~ 377 は A 1 類で、調整剥離により

刃部を作出していることが明らかな類である。372 は表裏を逆えて片方ずつ刃部を作出する。374 は刃部がほぼ一周する。いわゆるラウンドスクレイパーである。376 は微細な剥離痕を持つ A 2 類で、加工痕か使用痕か判然としない類である。当類型が石器中最も多く出土し、全体の 32.9% を占める。

B 類（378 ~ 380）はいわゆる鋸歯縁石器である。378 は B 2 類で、連続した細かい鋸歯状の刃部を持つ。379・380 は B 1 類である。379 は左側縁に上下対称的な鋸歯状の刃部を持つ。両手で上下を把握すると非常に持ちやすい形態である。380 は右側縁に鋸歯状の刃部を持つ。裏面下端に抉りを入れたような剥離痕があり柄状のものを作出している。

石材 分類	黒 色 細 粒 砂 岩	白 色 細 粒 砂 岩	砂 岩	安 山 岩	流 紋 岩	頁 岩	類 型 別 總 数
A1 類	7	35	4	5			51
A2 類	40	14	84	59	32	4	233
B1 類		1		2			3
B2 類	7		13	9			29
石材別總数	54	15	132	74	37	4	316

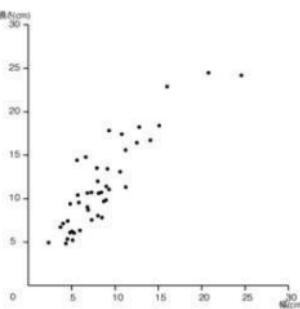
第 12 表 スクレイパー（A 類）・鋸歯縁石器（B 類）類別石材組成表



第 31 図 スクレイパー（A 類）・鋸歯縁石器（B 類）長幅分布図

石材 分類	黒 色 細 粒 砂 岩	白 色 細 粒 砂 岩	安 山 岩	蛇 紋 岩	頁 岩	鐵 石 英 石	ヒ ス イ	類 型 別 合 計
A 類	3	2	9	14				28
B 類			2	1	2	1	3	2 11
石材別合計	3	2	11	15	2	1	3	2 39

第 13 表 石核類別石材組成表



第 32 図 石核長幅分布図

石 横 (国版 46 - 381 ~ 383・国版 101・第 13 表・第 32 図)

A 類 (381・382) は 28 点出土した。石材は砂岩系と安山岩が出土している。長幅 15cm × 13cm 以内に収まるものが主で、長幅 20cm 以上の大型のものも若干存在する (381)。381 は長幅約 24cm の大型の砂岩を母岩とし、正・裏面に貝殻状剥片を剥取した痕跡がある。大小剥取されていることから、母岩と剥取される剥片の大きさは必ずしも比例しないことが分かる。左側縁の剥離は斜め上から打撃を与えており、縱長の剥片が剥ぎ取られている。ほかは母岩に対して長軸方向に打痕が認められ、いずれも横長の剥片が剥ぎ取られている。

剥片類

貝殻状剥片は 964 点出土した。貝殻状剥片は素材剥片という性格が大きく、本遺跡では打製石斧、砥石 B 類 (いわゆる石劍)、スクレイパーや鋸歯縁石器に利用される。

その他の剥片は、現地で目に付く大きさのものについてはすべて採取した。また廃棄域に関しては 5mm 以下の微細な剥片も土壤洗浄によって採取した。石材は主に蛇紋岩であり、蛇紋岩製の磨製石斧の製作が盛んであった裏付けとなった。

3 KB1 区下層の調査

A 概 要

第 I 章 2 でも触れたように、本調査区は後世の河川による氾濫で北側の大部分が失われ、遺存しているのは南側の約 120m の範囲のみである。

調査開始当初は、標高約 4m 付近に堆積する黒褐色シルト質粘土層をⅤ層遺物包含層と認識していた。ほかの調査区のⅤ層に比べ砂質が強いことや腐食植物を含むことに違和感はあったものの、該層から縄文時代中期中葉の遺物が出土し、VI 層も他地区と同様のものであったため、疑いないものと理解した。しかし調査の進行とともに自然木や腐食植物が散見されるようになったほか、Ⅴ層としたものを除去すると、一面に裸が広がる状況となった。表出した縁を観察すると、直径 10 ~ 30cm 大ではほぼ一定方向を向いて (北東方向を頭にして) いることが見て取れた。これは水の流下方向を示す「伏臥構造」に由来すると考えられることから、河床と推測できる。ともすれば河原を利用した川辺の生活が想像できるが、遺物がまばらなことや他地区的Ⅴ層と土質が異なること、縁層が広がる状況等をかんがみれば、Ⅴ層は河川性堆積物の一環で、本調査区は流路内に当たる可能性が浮上した。そこで、採取した土層サンプルを分析 (第 VI 章 2) すると、本区で VI ~ Ⅴ層とした層から海水性種の破片のはか、少ないながらも好流水性種や流水不定性種、流水指標種で中~下流性河川指標種群に含まれる珪藻化石が検出された。これは VI ~ Ⅴ層が河川性堆積に由来する層である可能性を示唆している。したがって、KB1 区下層は、河川の一画と判断する。

B 遺 物

遺物は全点番号を付して光波測量によるドット上げをしたが、特筆すべき出土傾向は見られなかった。調査範囲が狭小なことを考慮しても、全体的に遺物量は少ない。

1) 縄 文 土 器 (国版 47・48 - 391 ~ 409・国版 102)

中期中葉の土器が出土した。出土した土器の 9 割以上が A 2 類 (上山田・天神山式) だが、KDI 区の同類よりも新相を呈しており、同層位でも土器様相が異なる。大半が細かい破片であるが、復元できたもの

も数点ある。

復元できた資料は391～393の深鉢、394～397の台付土器である。391・394・395の施文は2単位で、器形は俯瞰して見ると梢円を呈するいわゆる舟形土器である。さらに391・394の口縁部には小さく丸みのある山形突起を連続させたモチーフを付す。これは393にも共通する。KDI区下層A2類ほど隆帯と爪形文は多用されず、391・393は隆線間の幅広の空白部に短い沈線ないしは刻みを入れる。これは、隆帯の代替ととらえることができよう〔加藤2008〕。

400～403は上山田・天神山式土器、408は北陸系浅鉢片である。398の色調は橙色を呈しており、ほかの土器と若干異なる。そのほか、系統不明な土器が出土している。

2) 石 器 (図版48～410～418・図版103・第14表)

総点数は94点である。分布状況は土器の状況と変わらない。8割以上が貝殻状剥片素材のスクレイバー・鋸歯縁石器である(第14表)。このほかは各器種数点ずつの出土である。また各器種の特徴はKDI区下層と大差ないため個々に記述はせず、観察表にゆだねることとする。

石材 器種	黒 色 細 粒 砂 岩	白 色 粗 粒 砂 岩	粗 粒 砂 岩	安 山 岩	流 紋 岩	閃 綠 岩	蛇 紋 岩	真 岩	珪 質 真 岩	花 崗 岩	凝 灰 岩	ヒ ス イ	黒 曜 石	鉄 石 英	チ ヤ ー ト	器 種 別 點 数	器 種 別 比 率
打製石斧未成品					1											1	1.06
磨製石斧								3								3	3.19
磨製石斧未成品								3								3	3.19
スクレイバー	13	25	39	1											78	82.98	
鋸歯縁石器																	
砥石		1	5												6	6.38	
敲撃石型											3					3	3.19
石材別総数	13	0	26	5	40	1	0	6	0	0	0	0	3	0	0	94	100.00
石核	1			1			1									3	-
貝殻状剥片	1		5		7										13	-	

第14表 KB1区下層 石材別石器組成表

4 KB1 区中層の調査

A 概 要

例年の調査から遺構の検出が見込めないと判断したため、遺物は光波測量による全点ドット上げとし、出土位置や標高を1点ずつ記録した。図版7の垂直分布図を見ると、遺物は30cm近く堆積するV層中から上下幅をもって出土していることが分かる。また平面分布図を見ると、54Fグリッド付近、標高4.8m前後の浅い谷状地形に遺物が集中していることが分かり、低い部分に流れ込み、溜まったものと推測できる。さらに土器様相を見ると、縄文時代中期前葉～後期前葉の遺物が幅広く出土し、それらは摩耗の著しい破片である。以上のことをかんがみると、本域のV層は洪水堆積層と考えるのが妥当である。VI層で遺構が検出できなかったのも、これを裏付ける理由となろう。ちなみにV層上の科学分析結果は、珪藻及び花粉化石の遺存度が悪く、海水性種の珪藻化石が1個体産出したのみで良好な結果を得られていない。

もう一か所、54Hグリッド付近、標高5.0m前後の比較的高いか所にも遺物の集中がある。合わせて垂直分布図を見ると、遺物が50cm前後の上下幅をもって出土していることが分かる。出土土器は摩耗の著しい小片ではかと変わりなく、復元率も低いが、地形が若干高いことや垂直分布図等から見て、遺構が存在した可能性がある。

B 遺 物

1) 縄 文 土 器 (図版49-419~437・図版103)

中期～後期の幅広い時期の遺物が出土した。摩耗の著しい小片で、系統不明な土器が大半を占めるため分類は行わない。

419～423は北陸系土器と考えられるが、型式比定に足るものはない。422は空白部を細沈線で充填する。426・427は同一個体の口縁部で、口縁端部に縦縄文を施す。428の隆背上には棒状工具の押圧が、429の隆線上にも細かい押圧が認められる。431は数個の列点文が認められ、432は縦位の細沈線が認められる。434・435は同一個体である。口縁部外面が肥厚し、口縁部は緩く外反する。口縁部には渦巻き状沈線、弧線文、同心円文を施す。境A遺跡〔富山県教育委員会 1991〕後期前葉第1群13類の気屋式土器に類するか。

2) 石 器 (図版49・50-438~459・図版103・104・第15・16表)

総数は80点である。やはり貝殻状剥片に加工痕や使用痕を有する石器が目立ち、4割以上を占める。KB1区下層同様詳細は観察表にゆだねる。傾向としては、磨製石斧未成品と製作関連石器は出土したが、完成品は皆無である。砥石B類のいわゆる石鋸は両区下層で一定量出土したが、中層ではほとんど出土していない。これは、掠切技法による磨製石斧製作が後退したことによると思われる。一方、下層では認められなかつた石錐B1b類の抉りの数が3個のもの、B3類のいわゆる有溝石錐などが出土している。

石材 器種	黒色 細粒 砂岩	白色 細粒 砂岩	粗粒 砂岩	安山岩	流紋岩	閃綠岩	蛇紋岩	頁岩	珪質頁岩	花崗岩	凝灰岩	ヒスイ	黒曜石	鉄石	美石	チヤト	器種別 点数		器種 比率 %
																	打製石斧	打製石斧未成品	
打製石斧	2									1							3	3.75	
打製石斧未成品					6	1											7	8.75	
磨製石斧未成品					2		3										5	6.25	
石錐		1		5													6	7.50	
スクレイバー	5	11		11	6												33	41.25	
鉈形石器		3	6														9	11.25	
研磨石器	1	2		10								2					15	18.75	
磨擦石類				2													2	2.50	
石皿	8	0	17	6	36	7	1	3	0	0	0	0	2	0	0	0	80	100.00	
石核	3	2	11		15			2	1			2	3				39	-	
貝殻状剝片	2		3		1												6	-	

第15表 KB1区中層 石材別石器組成表

打製石斧				石錐				貝殼状剝片				
石材 分類	黒色 細粒 砂岩	白色 細粒 砂岩	類型別 点数	石材 分類	砂岩	安山岩	類型別 点数	石材 分類	黒色 細粒 砂岩	安山岩	流紋岩	類型別 点数
A類	1		1	A1a類			3	A1類				0
B類	1	1	2	B1a類			2	B1類				32
石材別總数	2	1	3	B1b類	1	1	1	B2類				0
				石材別總数	1	5	6	B3類				1
								B4類				33
								石材別總数	5	11	11	6

砥石				磨擦石類				
石材 分類	砂岩	粗粒 砂岩	類型別 点数	石材 分類	黒色 細粒 砂岩	安山岩	ヒスイ	類型別 点数
A1類		2	2	A類			2	2
A2類		1	1	B1類			3	3
B類	3	2	5	B2類	1	1	5	7
石材別總数	3	5	8	B3類		1		1
				B4類			2	2
				石材別總数	1	2	10	15

第16表 各種石器類別石材組成表

第V章 弥生時代以降の調査（上層の調査）

1 概 要

上層の調査では、Ⅲ層から弥生時代以降の遺物を、Ⅳ層から弥生時代後期以降の遺構を検出した。KB1区とKDI区とでは様相が異なり、主としてKB1区で古墳時代～古代の掘立柱建物、KDI区で古墳時代前期の玉作関連遺構・遺物を検出した。同層位でも地点によって様相が異なることは、下・中層の調査と同じである。以上のことから、本章も地区ごとに記述を進める。

2 KB1区上層の調査

A 遺 構

1) 概 要

KB1区では、流路3条、掘立柱建物4棟、土坑5基、井戸1基、溝5条、ピット349基を検出した。調査区南側(C・Dグリッド列)には流路が、北側(E～Hグリッド列)には掘立柱建物が分布する。これらの遺構に伴う土器は少なく、かつ小片で摩耗した土器が大半であるため、時期比定が困難なものが多い。流路は、流路399が弥生時代後期～古代に、流路191及びこれに合流するSD146は近世に属する。後者は古代～近世の遺物を幅広く含み遺物量も多いが、主体は18世紀前後である。したがって、本報告では詳述を避け、遺物のみ紹介という形で掲載する。ピットはEグリッド列以北で多数検出され、特に54Fに位置するSB1付近に密集していた。これらのピットは、現地及び平面図上で建物の可能性を検討したが、4棟の復元を見たほかは建物として認定し得る柱穴列はなかった。

2) 記述の方法

遺構名は種別ごとに略称を用い、掘立柱建物 = SB、柵 = SA、土坑(直径50cm以上) = SK、溝 = SD、ピット(直径50cm未溝) = Pとしたが、流路は略称を用いずそのまま「流路」とした。これらの略称・名称と通し番号を組み合わせて正式な遺構名とした。ただし、掘立柱建物にはこれとは別に1～4の番号を付している。遺構の平面態及び断面形態は第IV章2A2)に準拠する。

各説は種別ごとに主要な遺構についてのみ記述し、そのほかのものは遺構観察表にゆだねる。ピットは多数あるため、紙幅を考慮し観察表は掲載せず、各説で大略的な傾向を述べることとする。

3) 各 説

流 路

流路399(図版8・9・13・61・71)

54・55C・Dに位置する。平成20年度の調査で検出したSD604に続くものと推察する。調査できたのは北岸部のみで、断面形は立ち上がりが緩い階段状を呈し、最深1.66mを測る。遺構東側の湾曲部では、

2列の杭列（図版55～595～597を含む計6本）を検出した。杭は下端を4面に面取りし尖らせたもので、短い杭が外側（図版13～杭442・443）、長い杭が内側（図版13～杭438～441）に打ち込まれている。上端も尖頭状であるが、加工によるものかは判然としない。11層に打ち込まれており、地山（V層）までは打ち込まれていないことから、杭は流路399の埋没途中に打ち込まれた可能性がある。

6層から弥生時代後期の壺・壺・高杯が、2・4層から古墳時代前期～古代の土師器壺・壺・鉢・高杯・杯・内面黒色土器、須恵器杯蓋・杯身・提瓶・横瓶・長頸瓶などが出土した（図版51～53・460～513）。

掘立柱建物

ピットが密集することや遺物が希薄であったことなどが起因し、掘立柱建物の復元作業は現地調査でも平面図上の検討でも、困難を極めた。最終的に掘立柱建物が4棟復元できたが、柱穴の組み合わせ次第では2間×1間または1間×1間などの簡単な小屋のようなものも復元できそうである。建物の時期については時期比定の困難な遺物が大半であるため、推測の域を出ないものがある。

SB 1（図版8・9・11・71）

調査区東端、53・54E・Fに位置する。一部調査区外へ延伸するが、桁行4間（8.28m）×梁行2間（5.80m）かそれ以上の側柱建物である。仮に4間×2間としても面積48.02m²で、大型の建物といえる。長軸方位はN-52°-Wを指す。柱間寸法は桁行が2m前後、梁行が2.59～3.12mである。柱穴の平面は梢円形が主で、いずれも長軸・短軸ともに43cm以上の規模を呈し、中には深さが60cmを超えるものもある（P223）。

遺物は古代と推測される土師器片・須恵器片が出土しているが、小片のため断定できない。しかし、建物の規模を考慮すると、古代の所産として差し支えないと考える。

SB 2（図版8・10・12・72）

調査区北端、53・54Hに位置する。建物の大部分は調査区外にあり、全体を把握できない。やや南側に張り出すP272を棟持柱と仮定すると、梁行4間（5.90m）となり、長軸方位はほぼ真北を指す。柱穴の平面形は梢円形、長軸は30～40cmに収まるが、深さは13～43cmとまばらである。

遺物は図示し難い小片ばかりであるが、P272・P276から古墳時代の土師器片・須恵器片が出土し、P276では内面黒色処理した土師器片が見受けられることから、古墳時代後期の所産であると推察する。

SB 3（図版8・9・12・72）

SB 1の西側、54Eに位置する。桁行1間（3.40m）×梁行1間（2.38m）の側柱式建物で、床面積は8.09m²である。長軸方位はN-21°-Wを指し、SB4と9°のずれはあるがほぼ同じである。柱間寸法は桁行が3.40mで、ほかの建物に比べると長い。P106は棟持柱と考えられ、北西方向にやや張り出す。柱穴の平面は円形が主で、直径20cm前後、深さも約16cmとそろう。

遺物はP106から土師器片が出土したが、図示し難い小片で、時期は明らかでない。

SB 4（図版8・9・12・72）

SB 1の北東、53・54Fに位置し、建物の大部分は調査区外にあり全体を把握できない。SB 1と重複するが、P54がSB 1のP153を切るために、本遺構はSB 1以降の所産であるといえる。長軸方位はN-30°-Wを指す。柱間寸法は、桁行方向と推測される部分で153～239m、梁行方向と推測される部分で2.88mである。柱穴は円形で直径30cm以上のものが主である。深さは、P15・P54・P99・P84が35cm前後でそろう。

遺物はP15・P54から土師器片・須恵器片が出土しているが、図示し難い小片で、時期は明らかでない。

土 坑

検出した5基のうち4基は、深さ10~15cm前後と浅い。

SK111 (図版8・10・13・73)

54F9・14に位置する。平面は隅丸長方形、規模は長軸0.95m×短軸0.51mを測り、深さは14cmと浅い。長軸方向はN-12°-Wを指す。断面形は弧状を呈し、埋土は黄灰色粘土が主の単層である。

遺物は、土師器片・須恵器片と珠洲焼鉢（図版54-574）が出土しているが、574は混入の可能性がある。

SK165 (図版8・10・13・73)

53F24・25、53G4・5グリッドに位置する。平面は不整形、規模は長軸1.88m×短軸1.60mを測り、深さは9cmと浅い。長軸方向はN-35°-Wを指す。埋土には直径5mmの大炭化物粒をやや多く含む。

遺物は古代の土師器（図版53-514）、須恵器瓶把手などが出土した。

溝 (図版8・13・73)

今回検出した溝は、調査区外に延伸するものやトレーンなどで失われ、全体を把握できないものばかりである。深さは10cmに満たないものが大半であるが、SD237とSD319は軸方位がほぼ同じで等高線にも平行することや、深さがごく浅いものであることなどを考慮すると、後世（近世）の水田に伴う溝の残欠である可能性が考えられる。

井 戸

SE171 (図版8・10・13・73)

53G20グリッドに位置する。平面は不整円形、規模は長軸0.92m×短軸0.84m、深さは1.13mを測る。断面形は台形状、埋土は13層に分層できる。最下層（13層）と3層は炭化物層で、井戸を埋める際の意図的な行為によるものと思われる。

遺物は、11層から須恵器無台杯（図版53-516）が、4層から須恵器杯身（図版53-515）が出土している。515が混入の可能性が高く、516を本造構の時期と考えると古代の所産となり、SBIと同時期の可能性がある。

ビ ッ ト

349基のビットを検出したが、その大半はEグリッド列以北に集約される。おおむね古墳時代～古代にかけての土師器・須恵器片が出土したが、小片でかつ摩耗しているものが多く、時期比定に足るものは少ない。平面は円形と楕円形のものが主流で、方形や長方形を呈するものも少数ある。埋土は3種類に大別でき、最も多かったのは灰色粘土にIV層ブロックをやや多く含むものである。ほかは灰色粘土にIV層ブロックを多量含むものや暗灰黄色粘土である。暗灰黄色粘土を埋土とするものは、調査区北端のHグリッド付近（SB2近辺）で多く見られた。長軸10~30cmで、深さ20cm前後（底面標高約5.45m前後）のものが最も多い。一方、SBI構成ビット（P265・153・124・125・168・301・229・207・223・224）は長軸40cm以上、深さ40cm前後（底面標高5.30前後）とほかのビットよりも一回り大きい点が異なる。SBIの柱穴と同規模のビットがP126・174などを含め数基点在するが、単体で存在するのみで建物の復元には至らなかった。

B 遺 物

1) 概 要

KB1 区上層からは、弥生時代後期～近世までの遺物が出土した。幅広い時代の遺物を含む様子は、六反田南遺跡 II 上層【細井ほか2010】と同じである。主体的に出土したのは古墳時代・古代の遺物である。土器のほか、石製品、木製品、漆器、錢、鉄滓などが出土しているが、石製品と木製品の一部以外は近世以降の所産である。

2) 土 器

出土状況と分布状況

土器は 83kg、浅箱（タテ 54cm × ヨコ 34cm × 深さ 10cm）にして 26 箱出土した。大半が小片で須恵器等の硬質なものを除いては摩耗が著しい。主に土師器・須恵器が出土し、中世陶磁器類は出土するもののその数は少ない。これは第 1 次調査からの出土傾向に矛盾しない。

土器の大半は、流路 191・399・SD146 から出土した。流路 191 と SD146 は古墳時代後期～近世の遺物を多量含む。流路 191 の河床から陶磁器等の近世遺物が出土したことから、両者は近世に属する流路及び溝であるといえる。流路 399 は、六反田南遺跡 II SD604【細井ほか2010】の延長部分である。狹小な範囲にも関わらず弥生時代後期～古代までの土器がまとまって出土し、層位的な出土傾向も認められた。今回の調査では、SD604 で出土したような石製模造品や勾玉未成品の類は出土しなかった。

記述の方法

遺構（流路・土坑・ピット）、包含層の順に、時期・種別ごとに記述する。流路 191 及びこれに合流する SD146 は近世に属するので報告外であるが、遺物量が多いことから実測図を提示する。また、先にも述べたように、中世遺物が非常に希薄なため、遺構・包含層出土の別によらず、中世～近世の遺物として最後にまとめて記載した。

特に分類などは行わず記述を進めるが、「六反田南遺跡・前波南遺跡」第 III 章 3 A～C【春日ほか2008】、「六反田南遺跡 II」第 V 章 A【細井ほか2010】、新潟シンポリブ年【滝沢2005】、「新潟県の考古学」【春日1999】などの分類に準拠した。

各 説

a 遺構出土土器（図版 51～54・図版 104～107）

流路 399（図版 51～53・図版 104～106）

弥生時代後期～古代の遺物が出土した。6 層から弥生時代後期の遺物が、2・4 層から古墳時代前期～後期の土師器、8～9 世紀半ば頃の須恵器等が出土している。以下、時期別に記載する。

弥生時代後期の土器

甕（460～466）有段口縁の甕が多く出土した。口縁部に擬四線を施すもの（460）、列点状刺突文を施すもの（462）、無文のもの（461・463～465）があり、さらに 460・461・466 は体部上半に列点状刺突文を施す。460 以外、有段部の稜はやや不明瞭であるが、463 は近江系の受口状口縁甕の可能性がある。460～464 は胎土に砂を多く含む。

壺(467～475) 広口壺(467～471・473～475)と直口壺(472)があり、広口壺には有段口縁を呈するもの(467・468・473～475)、單口縁のもの(469)、口縁端部を垂下させるもの(471)がある。468の頸部には、ヘラ状工具によるキサミを施した突帶が巡る。471は口縁部に凹線を3条巡らせ円形貼付文を付す。頸部には突帶を巡らす。472の色調は橙色を呈し、器壁が5mm程度と薄く、ほかの土器と様相が異なる。473の頸部からやや上には、穿孔が認められる。474・475は口縁部に擬凹線が認められる。

高杯(476) 新潟シンボ編年2期〔滝沢2005〕に比定される。杯部は有段で口縁部が外反し、端部は面取りされ、垂下する。口縁部がやや直立気味に外反することから、2期でも古段階に属するか。

古墳時代前・中期の土器

破片資料のため、前期・中期の別さえ判然としないものが大半であるが、481～484は川村編年9～12期〔川村1993〕の所産であると考える。

壺(477～479) 口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部が面取りされた壺の口縁部片(477)と、底部片(478・479)である。478はいわゆるドーナツ底状である。

壺(480・481) いわゆる小型壺である。480は内湾して立ち上がる口縁部に、下膨れ気味の体部が付く。硬質で、丁寧なミガキが施される。

鉢(482) 口縁部を強くヨコナデし端部を短く外反させる器形で、底部付近がヘラケズリのほかはミガキを施す。胎土には黒雲母が目立つ。

高杯(483～488) 483・484は、法量が同等の高杯杯部である。口縁部は外傾し、口縁部と杯底部の境に稜を持つ。胎土に橙色粘土粒を含むことが特徴的な土器である。485～488は高杯脚部である。487・488は胎土やつくりが483・484に非常に近いことをかんがみると、中期の所産か。

古墳時代後期の土器

土師器・杯(489～494) 「比較的長い口縁部が外へ開くもの」とされる六反田南遺跡Ⅱ杯身C類〔細井ほか2010〕に比定できる。黒色処理されているもの(490～494)とされていないもの(489)があり、「直線的に開く口縁部と体部との境に明瞭な稜を持つ」同C1類(492～494)と、境が不明瞭な同C3類(489～491)がある。いずれも口縁端部以外は、丁寧なミガキを施す。

土師器・高杯(495・496) 脚部及び杯底部のみが出土している。496は田伏山崎遺跡古墳時代後期の土器分類高杯脚部B類〔佐藤ほか2009〕に類する。

須恵器・杯蓋(497～499) いずれも破片で頂部付近を欠損するが、口径はおおむね15cm～18cm弱で大型、口縁端部が短く屈曲する。

須恵器・杯身(500～506) 有台杯(500～505)と無台杯(506)がある。口径は14cm前後、器高が3～4cmとやや浅い。有台杯の底部切り離し方法は505が回転糸切り、それ以外はヘラ切りで、高台は前者が外端接地、後者が内端接地となる。底部切り離し技法の違いによって高台の接地に差異が生じる傾向は、滝寺古窯跡群〔小田ほか2006〕にも見られる。須恵器杯蓋・杯身は、法量などから、「新潟県の考古学」Ⅲ期〔春日1999〕に比定できる。

須恵器・平瓶(507) 下半はロクロケズリ、上半はロクロナデを施す。上部がやや内湾する様子から、平瓶であると推測する。

須恵器・提瓶(508) 流路399及びSK165から、同一個体と思われる提瓶の把手(1対)が1点ずつ出土した。図示したものは流路399出土のもので、体部には同心円状のカキメが、上部には口縁部との接合痕(剥離痕)が認められる。

須恵器・横瓶（509・510）タタキ成形の横瓶が2点出土している。509のタタキは擬格子、内面の当て具痕は同心円、510のタタキは平行、内面の当て具痕は同心円で、両者タタキ後カキメを施す。509の破断面は紫色を呈する。510の外面には所々自然釉が認められる。

須恵器・長頸瓶（511・512）511・512は同一個体と思われ、口縁端部付近を欠損する。中位に沈線が巡る頭部は「ハ」の字状に開き、肩部は強く屈曲する算盤玉形（肩張り）の器形を呈する。肩部－頸部間に2条の細い沈線が、肩部直上には凹線が巡る。体部成形は絞りジワなどが確認できることや算盤玉形の器形から、「須恵器の風船技法」[北野2001]によるものと推測する。

須恵器・壺（513）口径23.2cm、器高46.7cmで底部丸底、ほぼ完形の須恵器大壺である。体部はタタキ成形後、外面にカキメを施す。基本的にタタキは平行、内面の当て具痕は同心円であるが、底部付近になると外面のタタキは擬格子、当て具の同心円も一回り大きなものとなる。口縁端部は隅丸に面取りされ、垂下する。口縁部は全体的に分厚く、ぱってりとした印象を受ける。

SK165（図版53～514・図版106）

古墳時代後期の土師器壺・壺・高杯・鉢、古代の須恵器提瓶（把手）が出土しているが、小破片資料であり、図化できたのは鉢の514のみである。

SE171（図版53～515・516・図版106）

古墳時代～古代の土師器壺、古墳時代後期と古代の須恵器杯身が出土しているが、土師器は図化し得る資料がなかった。515は六反田南遺跡II杯身A類の「口縁部は垂直気味に立ち上がり、口縁端部に浅い沈線状の内傾する段を持つもの」に類する〔細井ほか2010〕。口径11cm、体部中位には凹線が認められる。TK47型式に比定できる。516は無台杯で、底径7.4cm程度と推察される。

ピット（図版53～517～525・図版106）

出土したものは小片で摩耗したものばかりだが、時期が分かりそうなものは可能な限り図化した。517の壺、518の高杯は弥生時代後期、519の有孔鉢は古墳時代前期、521の杯身は古墳時代後期、520・522の壺は古墳時代、523の杯蓋、524・525の壺もしくは壺は古代の所産である。517はいわゆる付加状口縁の壺で、口縁部に擬凹線文を施す。518は高杯の裾部で、端部を折返し平坦面に擬凹線文を施す。523の口径は14cmで大型、口縁端部は「く」の字状に屈曲する。524・525の口縁部は外反し、端部は面取り、側面部は強いナデによる凹線により、2条の降起線が生じている。524は波状文を施す。

流路 191・SD146（図版53～526～546・図版54～547～554・図版106・107）

古墳時代後期～近世の遺物を幅広く含む流路で、主体は18世紀前後である。古墳後期と古代の須恵器、のほか土師器も出土しているが、小片であるうえ摩耗が激しく、図化し得るものはなかった。また陶磁器類や漆器、木製品なども出土しているが、ほとんどが近世の所産である。ここでは古墳～古代の遺物に限定して記載する（漆器は第Ⅱ章2で触れている）。なお、あくまでも近世に属する流路・及び溝であることを考慮し、大略的に述べることとする。

526～528古墳時代後期に属する須恵器杯身で、527（杯身）はTK47型式、526はTK43型式、528はMT10型式並行期にそれぞれ比定できよう。529～537は須恵器杯蓋である。口径は15cm前後が主で、中には18.6cm（531）、17.6cm（533）を測る大型のものもある。538～543は有台杯で、口径は14cm前後、底径は9cm前後である。541は深身の有台杯か。

b 包含層（図版 54 - 555 ~ 573・図版 107）

弥生時代から近世の遺物が幅広く出土した。いずれの資料も小片で摩耗が著しく、図化し得るものはごくわずかであった。558 は弥生時代後期の高杯裾部で、518 に類する。555 ~ 557・559・560 は古墳時代の所産で、560 は流路 399 出土の 483・484 に付くような高杯脚部であろう。

561 ~ 573 は須恵器である。561・562 は TK15 ~ TK10 型式に比定できる杯蓋（561）と杯身（562）である。563 ~ 566 は古代の杯蓋で、いずれも頂部付近を欠損する。563 ~ 565 の口径は 15cm 前後と大型で、口縁端部を短く垂下させる。一方 566 の口径は 12cm と小型化傾向にある。567 ~ 569 は有台杯で、いずれも底部ヘラ切り、高台は 567・568 が内端接地する。底径は 567・568 は 8cm 強、569 は 7cm とやや小型化傾向にあり、高台が細い。法量から、563 ~ 565 は流路 399 出土 500 ~ 506 同様六反田南遺跡 II 古代 III 期に、小型化傾向にある 566 ~ 569 は後出の同古代 IV 期に比定できそうである。

c 中世以降の遺物（図版 54 - 574 ~ 582・図版 107）

574・575 は珠洲焼鉢で、珠洲 I ~ II 期に比定される。两者とも遺構出土であるが、珠洲焼以外にも古墳時代～古代の土器片が出土しており、混入の可能性が高い。576 は珠洲焼壺である。577 ~ 579 は越前焼の壺（577）、壺（578）、擂鉢（579）である。580 は越中瀬戸匣鉢、581 は青磁碗、582 は白磁碗である。

3) 土製品・石製品（図版 55 - 583 ~ 594・図版 107）

土製品は土製紡錘車（583）が 1 点、石製品は滑石製勾玉模造品（584）とその未成品（585）、バステル形石製品（586）、緑色凝灰岩製管玉未成品（587）、滑石製紡錘車未成品（588）、石鍤（589）、敲磨石類（590 ~ 593）、内磨き砥石（594）が出土したが、すべて包含層出土であり詳細な時期比定はできない。そこで六反田南遺跡 II に照らせば、585 は石製模造品未成品 A 類の板状素材のもの、588 は紡錘車 2 類の初期整形段階のもの、589 はいわゆる有頭棒状鍤である。滑石製の紡錘車及び石製模造品は、六反田南遺跡 II では流路 1・SD605 等から多く出土しているので、ある程度製作工程が追える資料となっている。これらは古墳時代後期に属する。

4) 木製品（図版 55 - 595 ~ 597・図版 108）

弥生時代～中世の所産と考えられる木製品は、流路 399 東岸に打ち込まれていた杭 6 点のみ（うち 595 ~ 597 の 3 点を図化）である。595 ~ 597 はいずれもミカン割状の材で、スギを使用している。上下端が尖っており、特に下端（打ちこまれていた部分）は断面四角形になるように鉈状の工具でしっかりと 4 面を加工している。上端は加工痕は確認できなかったが、すべての杭が同様の形態を呈することから、意図的に尖らせたかまたは尖った材を使用していると考えられる。595（杭 439）を放射性炭素年代測定にかけたところ、 $1,670 \text{ 年} \pm 30 \text{ yr BP}$ で歴年較正年代は 4 世紀中頃～5 世紀前半頃という結果が出た。したがって杭列は 2・4 層から出土した古墳時代前期～後期の遺物におむね伴うものということができ、前述の遺構の項の記述に矛盾しない。

3 KD1 区上層の調査

A 遺構

1) 概要と記述の方法

検出した遺構は掘立柱建物2棟、土坑6基、溝5条、ピット107基、性格不明遺構4基である。出土遺物から古墳時代～古代の所産であることが知れるが、遺存状態の良好な遺物を伴う遺構は少なく、細別時期を特定できないものが多い。埋土はⅢb層（褐灰色粘質土）・Ⅳ層（明褐色粘土）・Ⅴ層（明褐色シルト）を基本とする3種類に大別できる。

記述の方法等はすべてKBI区上層に準拠するが、掘立柱建物も通し番号に含まれる点が異なる。

2) 各説

掘立柱建物

SB577（図版14～16・図版74）

37E・F、38Eに位置し、P545～567～531～578～539～506で構成される。南東側は調査区外に延伸するが、平成20年度調査のKD区37EP16が本遺構に伴うものと見られる。長軸方位はN-47°～Wを指す。桁行3間（柱間約180cm）もしくはそれ以上、梁間2間（柱間約240cm）である。梁行中央のP539がやや外側に位置し、棟持柱と考えられる。柱が遺存するものではなく、埋土の状態から廃絶時に抜き取られたものと考える。

遺物はP531・545から土師器壺・壺・高杯などの小片が出土したが、時期比定に足るものはない。遺構の諸特徴から見て、古代の所産であろう。

柵

SA508（図版14～16・図版74）

37・38Fに位置し、P505～502～501～518で構成される。240cmという柱間寸法から掘立柱建物の可能性もある。長軸方位はN-36°～Wを指す。ピットの平面規模はほぼ同一で直径50cm前後を測り、底面標高はP518が4.68mとやや低いほかは4.44～4.50mとはほぼ一定する。P501・502には柱が遺存していた（図版58～667・668）。両柱とも、断面形は半円状～多角形を呈し、端材もしくは粗いつくりの製材を用いている。P505・518については柱痕ではなく、抜き取ったものと見られる。

遺物はP501・502から土師器壺の小片が数点出土したが、時期比定に足るものはない。しかし、遺構の諸特徴から、平成20年度にKD区で検出されたSB3と同じ8～9世紀代の所産であると推測する。

土坑

SK514（図版14・15）

37E20に位置し、平面は楕円形、規模は長軸64cm、短軸40cm以上、深さ10cmを測る。断面形は台形状を呈し、壁面は平滑である。埋土はⅣ層を基本とするシルト質粘土の単層である。

遺物は土師器壺の小片が4点出土したのみであり、時期は特定できなかった。

SK563 (図版 14・15・18)

37 D 25に位置し、平面は隅丸方形、規模は長軸41cm、短軸38cm、深さ17cmを測る。断面形は箱状を呈し、壁面は平滑である。埋土はⅢ b 層を基本とする粘土で、Ⅳ層ブロックの含有量から2層に分層される。

遺物は蛇紋岩製勾玉未成品（図版 57～634）、緑色凝灰岩製管玉未成品とその剥片、土師器壺・高杯か器台の小片などが出土した。玉作関連遺物の出土量が多いのが特徴的である。古墳時代前期の所産である。

SK614 (図版 14・15・17・75)

37 D 10・15に位置し、東側は暗渠工により失われている。平面は梢円形、規模は南北50cm、東西52cm以上、深さ12cmを測り、長軸方位はN-80°-Eを指す。断面形は半円状を呈し、壁面は平滑である。

遺構内からは、大型の自然礫を落として故意に破壊したような状態で、古墳時代前期の土師器壺が1点出土した（図版 56～598）。周囲からは口縁部の破片も出土している。壺は遺構底面から3cmほど浮き、かつ東側に傾いた状態で出土した。遺構埋土はよくしまっており、つき固めている可能性がある。ある程度土坑に土を入れた後、壺を据え、更に周囲を土でつき固めたのち、自然礫を落とす行為を行ったと推測される。

溝

5条検出した。このうち SD591 からは多量の玉作関連遺物が出土していることから、玉作に伴う遺構と考えられる。

SD503 (図版 14・15・18・75)

38 F 6・7に位置し、平面は「L」字状、断面形は弧状を呈する。規模は南北70cm、東西40cm、深さは5～10cmと浅い。埋土はⅢ b 層を基本とするシルト質粘土の単層である。遺物は出土しておらず、時期は特定できなかった。

SD515 (図版 14・15・18・76)

38 F 1に位置する。全長175cmを測り、平面は北西に向かって湾曲する。断面形は弧状を呈し、深さは5～15cmを測る。埋土はSD503 同様、Ⅲ b 層を基本とするシルト質粘土の単層である。遺物は土師器壺片が5点出土したのみであり、時期は特定できなかった。

SD586 (図版 14・15・18・76)

37・38 D に位置し、南西側は調査区外に延伸する。北側で検出された SD589 とともに、断続して掘られた区画溝の一部であろうと考える。長軸方位はN-44°-W、規模は全長4.3m以上、幅110～185cmを測る。断面形は弧状を基本とし、深さは15～35cmで比較的浅い。埋土はⅢ b 層を基本とする粘土またはシルト質粘土で、2層に分層される。

遺物は土師器壺・器台（図版 56～599～601）、蛇紋岩製勾玉未成品（図版 57～629）、緑色凝灰岩製管玉未成品（図版 57～642）、蛇紋岩・滑石・緑色凝灰岩の剥片、横刃形石器（図版 68～659）、石核等が出土した。土器の大半は破片であるが、緑色凝灰岩の破片とともに出土量は多い。古墳時代前期の所産である。

SD589 (図版 14・15・18・76)

37・38 C、38 D に位置する。SD586・SX583などとともに区画溝を構成する遺構であろうが、規模が大きくやや不整形である。長軸方位はN-30°-W、規模は全長7.60m以上、幅30～90cmを測る。断面形は弧状を基本する。深さは東側に延びる部分との交差部では55cmと半円状に深くなるが、これ以外の部分は10cm前後と非常に浅い。交差部分の底面には直径10cm前後の凹みが数多く見られる。

埋土はⅢ b 層を基本とするシルト質粘土で、5 層に分層される。このうち 3 層には多量の炭化物を含み、特に遺構の北端では顕著である。炭化物は採取して水洗したが、種子や食物残滓などは検出されず、草木由来のものと判明した。

遺物は土師器甕・壺・高杯（図版 56～602～605）、緑色凝灰岩製管玉未成品及び剥片、砥石等が出土した。SD586 同様、土器片と剥片の出土量が多い。37C20 付近では甕 1 個体（604）が破碎した状態で出土しているが、遺存状態が悪く、復元できなかった。古墳時代前期の所産である。

S591（図版 14・15・18・76・77）

38 C グリッドに位置する。調査区南端から北（N-6°-E）に向かい、38 C 22 で西に向きを変え調査区外に延伸する。規模は南北 5.60m 以上、東西 1.30m 以上、幅 0.50 ～ 1.00m を測る。断面形は弧状を呈し、壁面は比較的平滑である。埋土はⅢ b 層を基本とするシルト質粘土の単層である。向きを西に変える部分には、杭が 5 本（杭 637～640・642、図版 58～669～671）、溝を横断するように設けられている。杭は直径約 5cm で、溝底から 40 ～ 60cm ほどの深さまで打ち込まれている。Ⅲ 層掘削段階で確認されたものもあるが、上端の様子は不明である。

遺物は土師器甕・壺・鉢（図版 56～607～613）高杯か器台の破片、ヒスイ製勾玉未成品（図版 57～630）、蛇紋岩・滑石製甕玉未成品（図版 57～636・637）、緑色凝灰岩製管玉未成品とその剥片（図版 57・58～641・643・646・647・651～656）、砥石（図版 58～662）、台石（図版 58～666）等が出土した。出土量は KD1 区で検出された遺構中最多く、とりわけ緑色凝灰岩の剥片を主体とする玉作関連遺物が多いのが特徴である。特に、玉作関連遺物は 38 C 17 にある土坑状の掘り込みに集中しており、この部分から台石（666）も出土している。このような状況から、古墳時代前期の玉作に伴う遺構であると考える。

ビット（図版 14・17）

107 基のビットを検出した。直径 20cm 前後、深さ 20cm 以下と小径で浅いものが大半を占める。これらは SX513 の南東側にやまとまりが見られるものの、具体的な配列は認められない。埋土はⅢ b 層を基本とする単層のものが大半を占め、IV・V 層を基本とするものはわずかである。遺物を作うものは全体の約 3 割であり、その多くは土師器の小片である。遺物を作うビットの大半は古墳時代前期の所産であり、古代のビットは SB577・SA508 以外には P585・588・594 の 3 基と少ない。

性格不明 遺構

土坑や溝のような機能を有すると考えられるが、平面や断面形が不整形で、種別を判じ得ないものを SX とした。5 基検出し、このうち SX538 と SX546 は平成 20 年度調査の KD 区検出遺構の一部であるが、本稿では遺構形態から SX として扱った。また、SX583 についても SD586 の延長である可能性が高いが、全体像が把握できないことから SX として扱った。

SX513（図版 14～17・77）

38 E 16・17・21・22 に位置する。平面は東西方向にやや長い不整形円形を呈し、少なくとも 2 基のビットを作う。また、1・2 層中からは玉作関連の遺物や土器片が多く出土した。

規模は、長軸 2.96m、短軸 2.40m、深さ最大 30cm を測り、壁は緩やかに立ち上がる。長軸方位は N-70°-E を指す。埋土は 5 層に分層される。3 層は V 層を基本にブロック状のⅢ b・IV 層が多量に含まれるもので、遺構底面に約 10cm の厚さを持って堆積する。水平堆積で遺物をほとんど含まないことから、

豊穴建物の貼床状のものと考える。P575・576は本遺構に伴うピットである。このほかに底面検出時にP568・569を検出したが、本遺構との関係は不明である。

遺物は前述のように1・2層中から出土しており、3層以下には含まれない。土師器壺・壺・高杯（図版56～618～621）、緑色凝灰岩製管玉未成品（図版57・58～638・640・645・657）、軟質蛇紋岩製勾玉の未成品（図版57～628）、緑色凝灰岩・軟質蛇紋岩・滑石・鉄石英などの剥片、内磨砥石（図版58～663）・砥石などである。玉作関連遺物の出土量はSD591に次いで多いが、本遺構ではやや大型の剥片が目立つのが特徴的である。これは土師器についても同様で、ほかの遺構と比べ大破片の占める割合が高い。検出段階から玉作関連遺物が多く見受けられたため、本遺構では小片を除く土師器、すべての玉作関連遺物と石器の出土位置を計測して取り上げた。遺物の分布を見ると、これらは北側から廃棄されたことがうかがえる。垂直分布図（特にA-A'）を見ても明らかである。出土遺物から古墳時代前期の所産である。

SX546（図版14・15・77）

37 E 15・20、38 E 11・16に位置する。SX535を切り、SB577を構成するP567に切られる。本遺構は平成20年度調査で検出したKD区のSD576cの延長であり、不整形な土坑状のものが断続する区画溝の可能性が考えられる。規模は長軸220m、短軸170m以上、深さ15cmを測り、長軸方位はN-9°-Eを指す。断面形は弧状を基本とするが、壁面は平滑ではない。埋土はⅢb層を基本とするシルトの単層である。

遺物は土師器壺・壺・高杯等の破片（図版56～614～617）、管玉未成品と剥片が出土した。管玉未成品は風化が進み図示できなかった。土器の出土量は壺の破片を中心にやや多い。古墳時代前期の所産である。

SX583（図版14・15・74）

38 D 11・12・16・17に位置し、西側は調査区外に延伸する。SD586の延長と考えられるもので、規模は長軸131m、短軸130m以上、深さは最深部で27cmを測る。長軸方位はN-57°-Eを指す。断面形は半円状を基本とするが、壁面は平滑ではない。埋土はⅢb層を基本とする粘土で3層に分層される。

遺物は土師器壺、蛇紋岩製勾玉未成品（図版57～631）、緑色凝灰岩の剥片などが少量出土した。古墳時代前期の所産である。

SX587（図版14・15・75）

37 D 5に位置し、SK609を切る。平面から推測すると西側部分は別の遺構である可能性があるが、埋土の観察では重複は認められなかった。規模は長軸120m以上、短軸0.72m、深さ23cmを測り、長軸方位はN-54°-Eを指す。断面形は弧状を呈し、壁面は平滑である。埋土はブロック状のⅣ層を多量に含むシルトである。

遺物は緑色凝灰岩の剥片・砥石、土師器壺・壺などの小片がわずかに出土した。古墳時代前期の所産である。

B 遺 物

1) 概 要

KD1 区上層では浅箱 9 箱分の遺物が出土し、そのうち出土点数の 66% が遺構から出土した。遺物の大半を古墳時代前期の土師器（79%）と玉作関連遺物（未成品・剥片・原石 合わせて 18%）や石器類（内磨砥石・砥石・横刃形石器・敲磨石・台石 合わせて 1%）が占め、古代以降の遺物は 1% に満たない。このほかには、包含層から中世の陶器類や鉄滓が少量出土している。遺物の出土量が多かった遺構は SX513、SD589・591 で、これに SD586、SX546・587、SK563 などが続く。

2) 土 器

概要と記述の方法

出土した土師器・須恵器の総量は浅箱 6 箱分（5,235 点・約 21kg）である。SK614 では据え置かれた状態の壺が出土しているが、そのほかはすべて廃棄遺物と考える（第33図）。前述したように、土器の大半は古墳時代前期の土師器である。器種別の出土割合を破片数でみると、壺 90%、壺 6%、供獻土器類 3%、器種不明の小片 1% となり（第34図）、これは近隣の古墳時代前期玉作跡である横マクリ跡〔渡邊ほか 2008〕とほぼ同じ割合といえる。出土した土器の大半は小片であり、図示できたものは少ない。

出土した古墳時代前期の土師器については、器種に関わりなく 2~3mm 大の砂粒や微砂を含むシルト質のきめ細い胎土のものが主体であるが、これとは別に白色の微粒子を含むものも一定量見られる。壺や供獻土器類は、器面のミガキが（棒状工具の先端をこすりつけたようなもの）ほとんど認められない。風化によつていわゆる化粧土が剥離した可能性は否定できないが、赤色塗料が残存する個体でもハケやヘラナデ痕は認められるので、ミガキはあまり施されてないものと推察する。以下、掲載したものについて遺構出土遺物、包含層出土遺物の順に記載する。なお、土器の分類や名称については、新潟新シンポ〔滝沢 2005〕に準拠した。

各 説

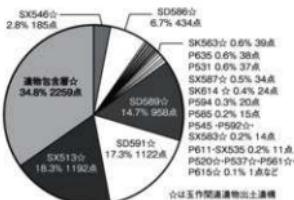
a 遺構出土土器（図版 56~108）

SK614（図版 56~598・図版 108）

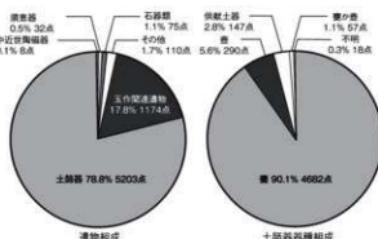
598 は壺である。口頭部は故意に落としたような大型窓によって破碎したと思われ、復元できなかった。

SD586（図版 56~599~605・図版 108）

599~601 は SD586、602~605 は SD589 出土である。壺は口縁端部を面取りしたものが目立つ。604



第33図 遺物が出土した主な遺構



第34図 遺物組成表

は胴部内面のハケメが口縁部との接合部で途切れており、調整が終了した胴部と口縁部を接合していることがうかがえる。605は器壁が厚くはってりとした印象の高杯脚部である。接合部は粘土塊を充填するが、よくナデ消されている。

SX591 (図版 56 - 606 ~ 613・図版 108)

玉作関連遺物同様、土師器も 38C17 グリッド部分が最も出土量が多い。606 は口縁端部を面取りした器台である。被熱によるものか受部内面の化粧土は剥落している。612 は畿内系二重口縁壺で、口縁部上段は欠失している。胎土は白色微粒子をやや多く含む、本道跡ではあまり見られないものである。613 は、被熱により器面が荒れた鉢である。

SX546 (図版 56 - 614 ~ 617・図版 108)

614 は口縁部が直立気味に立ち上がるるもので、ほかの壺と比べ粉質の強い胎土である。

SX513 (図版 56 - 618 ~ 621・図版 108)

壺は 618 が單口縁であるほかは、口縁部外面を 5mm 前後の輻で面取りする。621 は高杯の脚部で、柱状部分はヘラを回転させ余分な土を抉り取るような方法で形成する。

SX583・P588 (図版 56 - 623・624・図版 108)

623・624 は出土量の少ない古代の遺物である。623 は SX583、624 は P588 から出土した須恵器杯蓋である。623 は内面に「かえり」がある形態から 7 世紀末、624 は口径から 9 世紀代のものであろう。

P 592 (図版 56 - 622・図版 108)

口縁端部を面取るのに加え、内面の強いナデにより口唇部は上方につまみあげたような形態を呈する。なお、図示できなかったが、本道構からは広口壺の小片も出土している。

b 包 含 層 (図版 56 - 625 ~ 627)

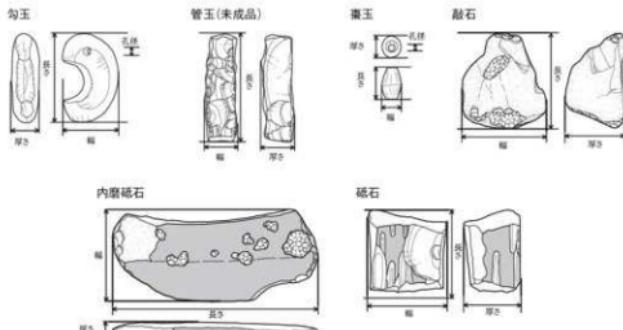
625 は土師器壺で、外底面もハケ調整する。626 はロクロ土師器である。627 は管状土錘である。本道跡は海岸部に位置するが、上層出土の漁撈関連遺物は珍しい。

3) 玉作関連遺物・石器

概要と記述の方法 (第 36・37 図)

出土した玉作関連遺物は、勾玉 (8 点)・棗玉 (2 点)・管玉 (23 点) などの未成品、剥片 (264 点)、チップ (887 点)、原石 (6 点)、内磨砥石 (29 点)・砥石 (3 点)、台石 (1 点) などで、完成品は出土していない。石器は砥石のほかに敲磨石 (1 点)、横刃形石器 (3 点) が出土している。

玉作に用いられた石材にはヒスイ・メノウ・蛇紋岩・滑石・緑色凝灰岩・鉄石英 (未完成なし) などがあり、出土量の多さから緑色凝灰岩を用いた管玉の製作が主であったと見られる。微細な剥片やチップが多く、出土量の濃密な部分には、目視による取り上げに加えて埋土の土壤水洗も行い、抽出した。以下、器種ごとに詳述するが、遺物の名称、形態・石材・作業進度などの分類・計測方法などについては「南押上遺跡」[水落 2011] に準拠する。



第35図 石器・石製品の計測位置（〔水落2011〕から一部改変）



勾玉

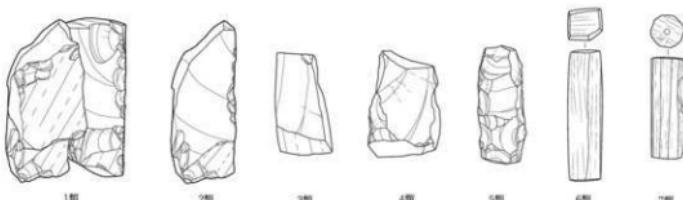
作業進度分類

- 1類：原石（石核・石片段）
- 2類：表皮上に要剥離部のみ持つもの（剥離段階）
- 3類：大きな剥離により勾玉の形を呈するもの（形制段階）
- 4類：小さな剥離により勾玉素材全体が現れるかたち（側面整列段階）
- 5類：研磨により半月状に仕上げたものの（研磨段階）
- 6類：a類：研磨により腹部が形成されたもの（内磨段階）
b類：穿孔されたものの（穿孔段階）
- 7類：a類：穿孔されたものの（穿孔段階）
b類：研磨により腹部が形成されたものの（内磨段階）

形態分類（5類以上が対象）

- A類：長51.8cm未満、幅1.5cm未満
B類：長51.8cm以上13.5cm未満、
幅1.2cm以上2.0cm未満

C類：長13.5cm以上、幅2.0cm以上



管玉

作業進度分類

- 1類：大きな片状ないし、亜角状のもの（原石・石核段階）
- 2類：大きな柱状ないし、亜角状のもの（荒削段階）
- 3類：いわゆる四角柱状（形制段階）
- 4類：大きな柱状として主の骨を呈するもの（侧面剥離段階）
- 5類：研磨により骨を削りて穿孔する（穿孔段階）
- 6類：研磨により多角柱状を呈する（研磨段階）
- 7類：穿孔されたものの（穿孔段階）

形態分類（5類以上が対象）

- A類：長52.0cm未満、幅0.8cm未満
B類：長52.0cm以上32.0cm未満、
幅0.8cm以上1.3cm未満

C類：長33.2cm以上、幅1.3cm以上

第36図 勾玉・管玉の分類（〔水落2011〕から一部改変）

各 説

勾玉未成品（図版 57 - 628 ~ 635・図版 109）

C 字状を呈し研磨や剥離作業の途上のもので、8 点が出土した。出土位置は SD586・591、SX513・583、SK563 で各 1 点、遺物包含層で 3 点である。石材はヒスイ 2 点、蛇紋岩 A 類 4 点、滑石 A 類 2 点で、蛇紋岩 A 類が多い。形態は B 類が 5 点あり、作業初～中段階（1～4 類）のものも含め全長 2 ~ 3 cm 大のものが目立つ。628・629 はいずれも形割段階（3 類）で、蛇紋岩 A 類が用いられる。630 はヒスイ製で、細かな剥離を行い半月状に整えつつある段階（4 類）である。632・633 はいずれも滑石 A 類を用いた半月状のもの（5 類）である。631 も 5 類段階であるが、端部の作出までには至っていない。石材は蛇紋岩 A 類である。634・635 は腹部形成段階（6a 類）である。634 は作業中に背部と両端部が折損したものと思われる。二次的なものであろうが、下端には被然痕がわずかに認められる。石材は 634 が蛇紋岩 A 類、635 がヒスイである。

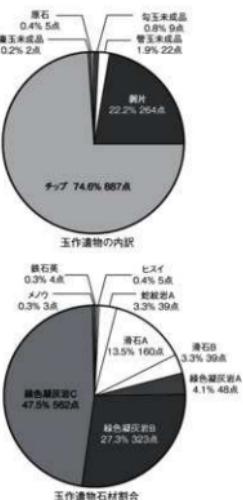
棗玉未成品（図版 57 - 636・637・図版 109）

棗玉の形状を呈し研磨が進行していないもので、SD591 の 2 点のみの出土である。石材は蛇紋岩 A 類、滑石 B 類各 1 点である。636 は蛇紋岩 A 類が用いられていることと、勾玉未成品と比べて厚みがあることから棗玉未成品と判断した。方柱状に形割された段階のものである。637 は滑石 B 類が用いられ、全面に細かな剥離が施される。いずれも研磨段階以前の未成品であり、南押上遺跡で不明であった同工程以前の状態が分かる良好な資料である。

管玉未成品（図版 57・58 - 638 ~ 658・図版 109）

緑色凝灰岩を用い、かつ管状を呈するもので、研磨や剥離作業の途上のものが 23 点出土した。最も多く出土したのは SD591 の 7 点で、次いで遺物包含層の 7 点、SX513 の 4 点、P561、SX546、SK563、SD586・589 の各 1 点となっている。石材はすべて緑色凝灰岩で、軟弱な石質によるものか、表面が摩滅したものや穿孔の前後に折れてしまったものが多い。内訳は A 類 3 点、B 類 15 点、C 類 5 点と B 類が卓越する。形態的には全長 1 cm 以下のものから 5 cm 近いものまで様々である。

なお、1 cm 未満のものには長さと幅がほぼ等しい小玉状のものが 3 点見られる。638 は若干の剥離が認められる原石に近い段階（1 類）である。石材は B 類を用いる。639 は C 類が用いられており、表面は風化している。荒削段階（2 類）である。640 ~ 644 は形割段階（3 類）である。石材は 640・642・643 が B 類、残りは A 類が用いられる。644 は部分的に研磨される。通常、研磨は微調整後（5 類）に行われており、この段階での研磨は珍しい。645 ~ 648・650・651 は側面剥離段階（4 類）で、石材は 648・650 が C 類で、残りは B 類である。645・646 はまだ幅が広く、この後側面にさらなる剥離を加えて整形するものと考えられる。649 は細かな剥離が施されており（5 類）、石材は B 類が用いられる。651 は 649 と比べて細かな剥離が認められず、4 類段階に位置付けられる。石材は B 類が用いられる。652 は穿



第 37 図 玉作関連遺物の割合

孔前段階（6類）である。658はやや大型の未成品で、石材はC類を用いている。652・653は石材B類を用いた小玉状の形態を持つ未成品で、652は穿孔位置を示す当たり痕が上端に確認できる。653～656は穿孔段階（7類）で、すべてB類が用いられる。654は穿孔中か仕上げ段階に両端が折損してしまったものであろう。孔が中心から大きく外れている。653・656は両面穿孔で、後者は穿孔中か仕上げ段階で縦に裂けてしまったものであろう。655は穿孔中に破損したもので、652・653と同じく小玉状の形態を持つ。655は片面穿孔で、同様の破損状態を呈する。

横刃形石器（図版58～659・図版109）

SD586から1点（659）出土した。石材は砂岩A類である。縄文時代の貝殻状剥片と石材の選択・製作技法とともに区別がつかないが、遺構の時期から判断して当該期の遺物と認定した。

砥石（図版58～660～664・図版109）

内磨砥石4点、砥石29点が出土した。石材は内磨砥石にはすべて砂岩A類が用いられる。砥石29点のうち27点が砂岩B類であるが、これにはSD591で出土した大型砥石（662）の破片が多数含まれており、実際は3個体分程度と見られる。このほかには、SX587及び包含層から緑色凝灰岩B類を用いたものが1点ずつ出土している。662はSD591杭列付近で出土した。裏面と縁辺は剥落している。上面と側面に砥面が確認できるが、原形は不明である。660・661はいずれも緑色凝灰岩B類を用いた砥石の破片である。それぞれ残存する面はすべて砥面に利用されており、筋状の擦痕も認められる。663はSX513で出土した内磨砥石である。663は表裏面・縁辺のすべてに砥面が形成されており（A4類）、表裏面には筋状の擦痕も認められる。664は遺物包含層から出土した。上面と縁辺は使用による摩滅や剥離によって遺存状態は悪い。

敲磨石（図版58～665）

SD586とP635から1点ずつ出土した。P635で出土したものは礫盤石に転用されており、時期は不明である。665はSD586から出土したもので、石材は砂岩A類である。上下端部を主に敲打に使用しているほか、縁辺にも敲打痕が認められる。

台石（図版58～666・図版109）

砂岩A類の台石が1点（666）、SD591の土坑状落ち込み部分（38C17）から出土した。平坦面に敲打痕や磨痕が認められることから、玉作に用いられたものと考えられる。

剥片・チップ・石核（第38図）

剥片は264点／1,082.8g、チップは887点／174.4gが出土した。出土位置は未成品と同じ傾向を示し、出土点数で包含層が36.9%と最も多く、次いでSD591の30.2%、SX513の19.4%と続く。石材は、荒削状態のものでは滑石A類で30.8%と最も多く、次いで緑色凝灰岩B・C類と続く。チップは緑色凝灰岩B・C類が全体の8割を占め、滑石よりも微細剥離を盛んに行っていることがうかがえる。石核はSD586から1点だけ出土した。



第38図 剥片・チップの出土割合

第VI章 自然科学分析

1 六反田南遺跡IVの自然科学分析

パリノサーヴェイ株式会社

A はじめに

新潟県糸魚川市大和川に所在する六反田南遺跡は、海川河口域の右岸の沖積地に立地する。[鈴木1983]によれば、本遺跡周辺の沖積地は海川低地に分類されており、海川河口域には三角州が発達し、海岸沿いには砂丘の形成が認められる。

六反田南遺跡IVの発掘調査では、上・中・下層の3面の遺物包含層及び遺構検出面が確認されている。上層は、弥生時代後期～近世に相当し、古墳時代前期の溝や古代の掘立柱建物、流路等が検出されている。中層は、縄文時代中期～縄文時代後期の遺物包含層である。下層は、縄文時代中期前葉～中葉の遺物包含層及び遺構検出面に相当し、過去の調査では竪穴住居や土坑、ピットが検出されている。また、今回の調査では多量の土器及び炭化物や動物遺存体等が伴う廃棄場と見られる区域も確認されている。

本報告では、上記した各時期の遺物包含層や遺構検出面が確認された堆積層の堆積環境及び古植生、縄文時代中期の遺構検出面から出土した自然木や上層から検出された流路に伴う杭材の年代、自然木及び杭材や柱材（柱根）の樹種、赤色顔料が塗布された縄文土器における漆の利用、石器石材として利用された黒曜石の産地推定を目的として、自然科学分析調査を実施する。

B 自然木及び木製品の年代と樹種

1) 試 料

試料は、KB1区上層（IV層）検出流路399から出土した杭2点（国版55-595（杭439）・596（杭440））と、KD1区上層検出SD591から出土した杭1点（国版58-669（杭639））、同SA508に伴う柱材2点（国版58-668（P501）・667（P502））、さらに、KD1区下層（V層）縄文時代中期の遺構検出面から出土した自然木2点（37D10-38C21）の7点である。

これらの試料のうち、杭材1点（杭439）と、Ⅴ層から出土した自然木2点を対象に放射性炭素年代測定を行う。また、上記した試料7点を対象に樹種同定を行う。

2) 分析方法

放射性炭素年代測定法

自然木及び杭の形状や遺存状況を確認し、観察範囲内における外側年輪部から木片を採取し、試料に供する。目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等にから物理的に除去する。その後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO₂

を精製する。真空ラインにてバイコール管で精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを精製する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合資料を内径 1 mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3 MB 小型タンデム加速器ベースとした C - AMS 専用装置（NECPelletron 9SDH - 2）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に C/C の測定も行うため、この値を用いて σ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差値 (One Sigma 68%) に相当する年代である。暦年校正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年校正とは、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C 濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴C の半減期 5,730 年 ± 40 年) を校正することである。暦年校正結果は、測定誤差 σ 、2 σ (σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、2 σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲) 双方の値を示す。表中の相対比とは、 σ 、2 σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

樹種同定

杭及び自然木の形状・木取りを観察した後、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・粧目（放射断面）・板目（接縫断面）の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（泡水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

木材組織の名称と特徴は、[島地・伊東 1982, Wheelerほか 1998, Richterほか 2006] を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、[林 1991, 伊東 1995・1996・1997・1998・1999] を参考にする。

3) 結 果

放射性炭素年代測定法

杭及び自然木の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、流路 399 の杭 439 が 1,670 ± 30yrBP、38C21 自然木が 4,490 ± 30yrBP、37D21 の自然木が 4,040 ± 30yrBP を示す（第 17 表）。これらの補正年代に基づく暦年校正結果（ σ ）は、流路 399 の杭 439 が calAD347 - calAD414、38C21 の自然木が calBC3,331 - calBC3,099、37D21 の自然木が calBC2,618 - calBC2,491 である（第 18 表）。

樹種同定

結果を第 19 表に示す。柱材及び杭材は、針葉樹 1 分類群（スギ）と広葉樹 1 分類群（クリ）に同定された。また、自然木は、広葉樹 2 分類群（エノキ属・トネリコ属）に同定された。以下に、各分類群の特徴等を記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2 - 4 個。放射組織は單列、1 - 10 細胞高。

試料					補正年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 (yrBP)	測定機関 Code No.
地区	Gr	層位・地点	遺物Noほか	性状				
KB1		流路399	杭439	木片	1,670± 30	-22.79±0.58	1,630± 30	IAAA-92707
KD1	37D10	VIII層	自然木	木片	4,490± 30	-25.27±0.67	4,490± 30	IAAA-92708
KD1	38C21	VIII層	自然木	木片	4,040± 30	-29.13±0.76	4,110± 30	IAAA-92709

第17表 放射性炭素年代測定結果

試料名	補正年代 (標準校正用) (yrBP)	曆年較正年代 (cal)							相対比	測定機関 Code No.		
		σ	cal AD	347	-	cal AD	371	cal BP	1,603	-	1,579	0.339
KB1区 SD399 杭439	1,669± 27	σ	cal AD	377	-	cal AD	414	cal BP	1,573	-	1,536	0.661
		2σ	cal AD	260	-	cal AD	284	cal BP	1,690	-	1,666	0.668
		2σ	cal AD	322	-	cal AD	429	cal BP	1,628	-	1,521	0.832
	4,485± 31	σ	cal BC	3,331	-	cal BC	3,262	cal BP	5,281	-	5,212	0.442
		σ	cal BC	3,252	-	cal BC	3,214	cal BP	5,200	-	5,164	0.227
		σ	cal BC	3,184	-	cal BC	3,157	cal BP	5,134	-	5,107	0.167
KD1区 37D10 VIII層 自然木	4,485± 31	2σ	cal BC	3,126	-	cal BC	3,099	cal BP	5,076	-	5,049	0.164
		2σ	cal BC	3,344	-	cal BC	3,089	cal BP	5,294	-	5,039	0.972
		2σ	cal BC	3,051	-	cal BC	3,031	cal BP	5,001	-	4,981	0.028
	4,040± 30	σ	cal BC	2,618	-	cal BC	2,609	cal BP	4,568	-	4,559	0.076
		σ	cal BC	2,598	-	cal BC	2,594	cal BP	4,588	-	4,544	0.023
		σ	cal BC	2,583	-	cal BC	2,557	cal BP	4,533	-	4,507	0.293
KD1区 38C21 VIII層 自然木	4,040± 30	σ	cal BC	2,555	-	cal BC	2,550	cal BP	4,505	-	4,500	0.030
		σ	cal BC	2,537	-	cal BC	2,491	cal BP	4,487	-	4,441	0.578
		2σ	cal BC	2,832	-	cal BC	2,820	cal BP	4,788	-	4,770	0.024
	4,040± 30	2σ	cal BC	2,667	-	cal BC	2,654	cal BP	4,697	-	4,604	0.005
		2σ	cal BC	2,632	-	cal BC	2,474	cal BP	4,582	-	4,424	0.971

第18表 曆年較正結果

地区	Gr	遺構	層位	遺物番号	器種	木取り	樹種
KB1	54C23	流路399	上層	杭440	杭	ミカン削状	スギ
KB1	54C23	流路399	上層	杭439	杭	ミカン削状	スギ
KD1	38F11	P502	上層		柱根	分割角材	スギ
KD1	38F6	P501	上層		柱根	分割角材	スギ
KD1	38C22	SD591	上層	杭639	杭	芯持丸木	クリ
KD1	38C21		下層(VII層)		自然木		トネリコ属
KD1	37D10		下層(VII層)		自然木		エノキ属

第19表 樹種同定結果

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1 - 15細胞高。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圓部は1 - 3列、孔圓外で急激に管径を減じた後、塊状に複合し接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1 - 6細胞幅、1 - 50細胞高で鞘細胞が認められる。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔圓部は1 - 3列、孔圓外で急激に管径を減じた後、厚壁の道管が単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1 - 3細胞幅、1 - 30細胞高。

4) 考 察

堆積層及び遺構の年代

縄文時代中期の遺構検出面（Ⅶ層）から出土した自然木は、37D10 の自然木が calBC3.331 – calBC3.099、37D21 の自然木が calBC2.618 – calBC2.491 であった。自然木 2 点の暦年較正年代は、[小林 2008] を参考とすると、縄文時代中期前葉から縄文時代中期末頃に相当する。Ⅶ層は、発掘調査所見によれば、縄文時代中期前葉～中葉とされており、37D21 自然木はやや新しい年代を示すがおむね整合する結果といえる。

一方、流路 399 に伴う杭材（杭 439）は 4 世紀中頃～5 世紀前半頃に相当する暦年較正年代を示した。流路 399 からは弥生時代後期～平安時代の土器の出土が確認しており、今回の結果は出土遺物から推定される遺構の年代範囲に収まる。

木 材

流路 399 の杭材 2 点は、いずれもミカン割状を呈する資料であり、樹種はスギであった。一方、SD591 の杭は、径約 2 ~ 3cm の芯持丸木であり、樹種はクリであった。SD591 の杭材について年代は不明であるが、樹種と木取りの違いが看取される。また、柵に伴う分割角材の柱材（P501・502）はスギであった。

確認された分類群の木材の材質に着目すると、スギは木理が直通で割裂性が高く、加工は容易である。クリは、重硬で強度・耐朽性が高い。クリは、本遺跡のこれまでの調査でも、分割材あるいは半歳木状を呈する杭に利用が確認されている〔パリノ・サーヴェイ株式会社 2008a〕。一方、スギは、杭には確認されていないが、本遺跡や隣接する前波南遺跡等で様々な木製品に確認されている〔パリノ・サーヴェイ株式会社 2008a・b、野村 2008〕。なお、横マクリ遺跡や姫御前遺跡では、花粉分析結果〔鈴木 2008、株式会社古環境研究所 2008〕から周囲の沖積地から丘陵裾にかけてスギが生育していたことが推定されている。スギ材の入手が比較的容易と推定されることやその材質的特徴などから、杭を含む様々な木製品に利用されたことが想定される。

C 古 環 境

1) 試 料

試料は、KB1 区 53D 4 グリッドの VI 層、KB1 区 54C グリッドの V ~ Ⅶ 層の各層から採取した土壌と、KD1 区 37F10 - 4 グリッドの VI ~ Ⅶ 層から採取した土壌の試料 10 点である。なお、KD1 区 37F10 - 4 グリッドの Ⅶ 層は、廃棄されたと見られる多量の土器や炭化物を含む遺物包含層に相当し、堆積物の色調や炭化物の混入の程度から Ⅷ・Ⅸ a・Ⅸ b 層に区分されている。

各試料の観察では、KB1 区 53D 4 の 4 層は極細粒砂混じりのにぶい黄褐色粘土質シルト、54C グリッドの V 層は灰黄褐色のシルト質極細粒砂、VI 層は灰黄褐色粘土混じりシルト、Ⅶ 層は細礫混じり黒褐色シルト質粘土、Ⅷ 層は灰黄褐色シルトである。また、KD1 区 37F10 - 4 の VI 層は灰～暗青灰色シルト質砂、Ⅸ 層は炭化物混じりの黒灰色シルト、Ⅸ a は炭化物混じりの暗灰色砂混じりシルト、Ⅸ b 層は径約 5mm の円～亜円状塊が混じる暗灰色シルト、Ⅹ 層は灰～暗青灰色シルトである。

これらの土壌試料 9 点を対象に、珪藻分析及び花粉分析を行う。

2) 分析方法

珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、[原口ほか1998]、[Krammer 1992]、[Krammer & Lange - Bertalot 1986・1988・1991a・1991b]、[渡辺a・2005]、[小林ほか2006]などを参照し、分類基準は、[Round,Crawford & Mann 1990]に従う。壊れた珪藻殻の計数基準は、[柳沢 2000]に従う。

同定結果は、中心類 (Centric diatoms; 广義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae) と羽状類 (Pennate diatoms) に分け、羽状類は無縫溝羽状珪藻類 (Araphid pennate diatoms; 广義のオビケイソウ綱 Fragilariphycaceae) と有縫溝羽状珪藻類 (Raphid pennate diatoms; 广義のクサリケイソウ綱 Bacillariophycaceae) に分ける。また、有縫溝類は、單縫溝類、双縫溝類、管縫溝類、翼管縫溝類、短縫溝類に細分する。

各種類の生態性については、[Vos & de Wolf 1993] を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は [Lowe 1974] に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示す。

花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス（無水酢酸9:濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3) 結 果

珪藻分析

結果を第20表に示す。珪藻化石の産出状況は、KB1区53D4・54C、KD1区37F10-4のいずれの試料も不良である。産出頻度は極めて少なく、KB1区53D4・54CではIV層とVII層の25個体、KD1区37F10-4ではⅤa層とⅥ層の14個体が最も多い。以下に、地点ごとの産状を述べる。

a KB1区53D4・54C

産出頻度は1～25個であり、産出分類群数は24属26分類群である。54C VII・VIII・VI層は、海水生種の破片のほか、流水指標種の中へ下流性河川指標種群に含まれる *Melosira varians*, *Meridion constrictum*, *Reimeria sinuata*, *Rhoicosphenia abbreviata*, 好流水性の *Cocconeis euglypta*, *Cocconeis lineata*、流水

分類群	生態性			環境指標種	KB1区				KD1区			
	地分	pH	流水		53D4 N	V	54C W	V	3P10-4 Wd	Wd	Wb	W
Bacillariophyta(珪藻植物門)												
Centric Diatoms(中心型珪藻)												
Dineroogramma minor (Greg)Ralis	Euh	Ogh-ind	al-il	b-bi	D1	-	-	-	1	-	-	-
Aulacoseira granulata (Ehr.)Simonsen					M.U.	-	-	-	1	1	1	1
Coscinodiscus spp.	Euh					-	1	1	-	-	1	1
Melosira varians Agardh	Ogh-ind	al-il	r-ph	K.U.		-	-	1	-	-	-	-
Orthosira roseana (Tabb.)O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA		-	1	-	-	2	1	1
Paralia sulcata (Ehr.)Cleve	Euh			B		-	-	1	-	2	1	1
Thalassiosira spp.	Euh					-	1	1	1	1	3	2
Raphid Pennate Diatoms(無板藻羽状珪藻類)												
Meridioria constrictum Ralis	Ogh-ind	al-il	r-bi	K.T		-	-	-	3	-	-	-
Staurosira venter var. binodos H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph	U		-	-	1	-	-	-	-
Ulnaria ulna (Nitzsch) Compere	Ogh-ind	al-il	ind	U		-	2	2	3	-	-	-
Ulnaria sp.	Ogh-unk	unk				-	-	-	-	-	-	1
Thalassiosira nitzschioidea (Grun.)Grunow	Euh			A,B		-	1	1	2	1	1	2
Raphid Pennate Diatoms(有板藻羽状珪藻類)												
Monoraphid Pennate Diatoms(单细胞羽状珪藻類)	Euh-Meh	al-il	r-ph	C1		-	-	-	-	-	-	-
Cocconeis scutellata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T		-	-	1	2	-	-	-
Cocconeis euglypta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T		-	-	1	-	-	-	1
Cocconeis lineata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U		-	-	1	-	-	-	-
Cocconeis placenta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind			-	1	1	2	-	-	-
Biraphid Pennate Diatoms(双板藻羽状珪藻類)												
Amphora copulata (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U		-	-	-	1	-	-	-
Cymbella cf. turpida Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	T		-	-	1	-	1	-	-
Ogh-ind	al-il	r-ph	K.T		-	-	-	-	-	-	-	1
Gomphonema olivaceum (Börnemann)Brebisson	Ogh-ind	al-il	ind			-	1	-	-	-	-	-
Gomphonema subclavatum (Grun.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U		-	-	1	-	-	-	-
Gomphonema sp.	Ogh-unk	unk				-	1	1	-	-	-	-
Reiniera sibirica (W.Greg.) et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	K.T		-	2	1	-	-	-	-
Rhoicosphenia abbreviata (Agardh)H.Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K.T		-	3	-	-	-	-	-
Diploctenia ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T		-	1	-	-	-	-	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk				-	-	2	-	-	-	-
Staurosira distinguis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI		-	-	1	-	-	-	-
Staurosira spp.	Ogh-unk	unk				-	-	1	-	-	-	-
Luticula mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RAS		-	-	-	-	5	3	-
Caktoës leptosoma Kramer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB		-	-	-	-	-	-	1
Planularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RAU		-	-	-	-	-	-	1
Planularia subcapitata var. paucistrigata (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	U		-	-	-	-	-	-	1
Planularia spp.	Ogh-unk	unk				-	-	2	-	1	-	-
Sellaphora seminulum (Grun.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RBS	25	-	1	-	-	-	-	-
苔狀藻類												
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RAU		-	1	-	-	1	2	1
Nitzschia linearis (W.Bmith)W.Bmith	Ogh-ind	al-bl	r-bi	U		-	1	-	-	-	-	-
Epithemia sorex Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T		-	1	-	-	-	-	-
Epithemia turgida (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T		-	-	1	-	-	-	-
Rhopodiella gibberula (Ehr.)Müller	Ogh-Meh	al-il	ind	U		-	-	2	2	-	-	-
假觀葉藻												
Eunotia biseriatoides H.Kobayasi,K.Ando & T.Nagumo	Ogh-ind	ind	ind	T		-	-	1	1	-	-	-
Eunotia formosa Ehrenberg	Ogh-hil	ac-il	l-bl	T		-	-	2	-	-	-	-
Eunotia minor (Kuetz.)Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O.T.		-	-	1	-	-	-	-
Eunotia praeputia var. bidens (Ehren.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB.O.T.		-	-	-	-	-	-	1
海水生種					0	1	2	2	2	5	3	4
海水~汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0
淡水~汽水生種					0	0	2	2	0	0	0	0
淡水生種					25	0	12	17	21	9	4	10
硅藻化石種數					25	1	14	21	25	5	7	14

適応性

HL : 塚分濃度	pH : 水素イオン濃度	C.R. : 流水
Euh : 海水生種	al-bi : 真アルカリ性種	l-bi : 真止木性種
Ogh-Meh : 淡水~汽水生種	al-il : 好アルカリ性種	l-ph : 好止木性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種	ind : pH不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	ac-il : 好酸性種	r-ph : 好流水性種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種	ac-bl : 真酸性種	r-bi : 真流水性種
Ogh-unk : 貧塩不明種	unk : pH不明種	unk : 流水不明種

[環境指標種群]

A:外洋指標,B:内湾指標(小杉,1988),C:中一下流性河川指標,D:沼澤地付着生種(安藤,1990),E:
好汚濁性種,U:広域適応性種,T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe,1995),R:陸生珪藻(RA:A群,RB:B
群,RC:未区分群,伊藤・堀内,1991)

第20表 珪藻分析結果

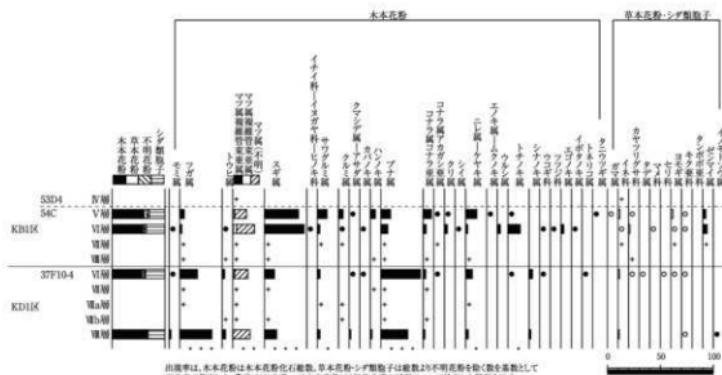
不定性種の *Ulnaria ulna* 等が散見される。54C V層は、海水生種の *Coscinodiscus* 属の破片が1個体産出する。53D IV層は、水域のほか、湿った陸域にも生育する陸生珪藻B群の *Sellaphora seminulum* が25個体産出する。

b KD1区 37F10-4

産出頻度は5～14個であり、産出分類群数は16属15分類群である。層位による産出種の違いはとくに認められない。VI～VII層からは、*Coscinodiscus* spp.、*Paralia sulcata*、*Thalassionema nitzschiooides*などの海水生種、*Hantzschia amphioxys*などの陸生珪藻が1～3個体産出する。また、VII層及びVIIa層からは *Aulacoseira granulata* などの淡水生種が1個体、VIIa層及びVIIb層からは *Luticola mutica* などの陸生珪藻が3～5個体産出する。

花粉分析

結果を第39図、第21表に示す。図表中で複数の種類を「-」で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。また、本木花粉总数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を「+」で表示する。以下に、地点ごとの産状を述べる。



第39図 花粉化石群集の層位分布

分類群	KB1区 53D4 N V W						KD1区 54C W W					
	M	V	W	M	V	W	Ma	b	W	M	V	W
木本花粉												
モミ属	-	-	2	-	1	-	-	-	-	2		
ツガ属	-	9	4	2	6	21	1	1	1	37		
トウヒ属	-	-	2	-	2	3	-	-	-	1	4	
マツ属複数管束亚属	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
マツ属複数管束亚属	-	3	7	-	-	2	-	-	-	-	-	
マツ属(不明)	1	23	36	3	5	16	1	1	1	20		
スギ属	-	67	80	13	4	12	2	-	1	14		
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
サワグルミ属	-	19	5	1	-	3	-	1	-	3		
クルミ属	-	9	2	1	-	-	2	2	2	-		
クマシデ属-アサダ属	-	2	-	-	-	1	-	-	-	2		
カバノキ属	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	
ハンノキ属	-	10	-	-	2	-	1	-	-	-	2	
ブナ属	-	19	14	2	7	47	1	2	1	31		
コナラ属コナラ属	-	16	6	-	2	3	1	-	1	2		
コナラ属アカガシ属	-	2	-	1	-	1	-	-	-	-	-	
クリ属	-	2	6	-	-	-	-	-	-	-	-	
シイ属	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	
ニレ属-ケヤキ属	-	22	4	-	1	8	-	1	-	3		
エノキ属-ムクノキ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウルシ属	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-	
トチノキ属	-	2	25	-	-	1	-	-	-	-	-	
シナノキ属	-	-	-	-	-	4	-	-	-	2		
ウコギ科	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	
ツツジ科	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	
エゴノキ属	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-	
イボタノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
トネリコ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
タニウツギ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本花粉												
ガマ属	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ科	3	6	1	1	-	3	-	-	-	2		
カヤフリダサ科	-	2	5	-	1	2	-	-	-	-	-	
タデ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
マメ科	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	
セリ科	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
ヨモギ属	-	6	2	1	-	1	-	-	-	-	-	
キク亜科	-	3	1	-	-	2	-	-	-	1		
タンボボ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
小明花粉	-	14	14	-	-	7	-	-	-	2		
シダ類胞子	-	10	15	1	-	-	-	-	-	-	-	
ゼンマイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
イノモトソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
他のシダ類胞子	7	94	115	18	26	82	26	10	18	61		
合計	1	208	214	23	29	126	7	8	7	122		
木本花粉	3	20	11	2	1	10	0	0	0	3		
草本花粉	0	14	14	0	0	7	0	0	0	2		
不明花粉	7	104	130	19	26	82	26	10	18	61		
シダ類胞子	11	332	355	44	56	218	33	18	25	186		

第21表 花粉分析結果

a KB1区 53D4・54C

花粉化石の保存状態は全体的に悪く、花粉外膜が破損、あるいは溶解の影響を受けているものが多い。また、産出状況も不良な試料が多い。

53D 4 VI層は、花粉化石がほとんど検出されず、木本花粉ではマツ属が、草本花粉ではイネ科がそれぞれ1～3個体検出されるのみである。

54C V・VI層は、花粉化石が豊富に産出し、ほかの試料と比較すると保存状態もやや良好である。花粉群集組成はおおむね類似し、木本花粉ではマツ属、スギ属が多く認められ、ツガ属、サワ

グルミ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属等を伴う。試料ごとに見ると、V層ではサワグルミ属、ニレ属-ケヤキ属の割合が高く、VI層ではトチノキ属の割合が高い。

54C VII・VIII層は、花粉化石の産出状況が悪く、特にVIII層はほかの試料からも保存状態が悪い。検出された種類は木本花粉が多く、ツガ属、マツ属、ブナ属等が認められる。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が、それぞれ1個体ずつ産出するのみである。

なお、54C V-VII層では、極端に保存状態の悪いツガ属やトウヒ属、マツ属、第三紀消滅種のベカン属、フウ属が検出され、特にVIII層に多く認められた。これらの再堆積と見られる分類群は、結果表及び図からは除外している。

b KD1 区 37F10 - 4

本地点の試料は、KB1 区試料と比較して保存状態が悪く、解析に有効な個体数が得られたのはVII層及びVIII層のみである。VII層及びVI層は、いずれも花粉化石群集が類似し、木本花粉が優占する。木本花粉ではツガ属、マツ属、スギ属、ブナ属が多く産出し、トウヒ属、サワグルミ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、シナノキ属等を伴う。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、セリ科、ヨモギ属、キク亜科1～3個体検出されるのみである。

これらの試料からは、保存状態が極端に悪いツガ属、トウヒ属、マツ属、ブナ属や、消滅種のベカン属、フウ属が多量に検出された。これらは、KB1 区試料と同様に結果表及び図中からは除外している。

一方、VII b 層、VII・VIII a 層の3試料は、検出された花粉化石は18～33個と少ない。木本花粉ではツガ属、マツ属、スギ属、クルミ属、ブナ属等が、草本花粉ではタンボボア科が認められるのみである。

なお、本地点のVII層試料の残渣流中には多量の微粒炭が認められた。そこで、微粒炭が多く確認されたVII下層と、比較試料としてVI層及びVIII層、さらに、KB1 区 54C のVIII層について、含量の確認と微粒炭の観察を行った。微粒炭含量は、KD1 区 37F10 - 4 VI層が約 1,900 個 / cc、VIII a 層が約 136,000 個 / cc、VIII層が約 3,900 個 / cc、54C のVIII層が約 9,300 個 / cc であった。微粒炭の産状は、いわゆる黒ボク土に多く含まれる黒色が強くシャープな削れ口を示すもの〔山野井 1996〕は少なく、全体的に褐色がかっているものが多い。また、イネ科に由来する可能性が指摘される波状の構造を示すもの〔小椋 1999・2000・2001〕は認められなかつたが、木材組織が残存する微粒炭が認められた。以下に、組織が残存する微粒炭の特徴を記す。

・スギ近似種（第44図-4）

仮道管と放射組織が交差した部分（分野）が検出された。分野壁孔はスギ型で、孔口の長軸方向はほぼ水平となる。分野壁孔は、1 分野に2個である。

以上の特徴と、スギ型壁孔を有する分類群の解剖学的特徴、本地域の現植生やこれまで確認されている分類群の記録などからスギの可能性が高いと考えられることから、スギ近似種としている。

・カヤ近似種（第44図-3）

年輪付近の仮道管が検出された。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。針葉樹のうち仮道管にらせん肥厚が認められる分類群は、トガサワラ、バラモミ節、イチイ、カヤ、イスガヤの5分類群のみである。この中で、トガサワラやバラモミ節は分布から除外される。残る3分類群の中では、カヤの組織に似ることからカヤ近似種としている。本地域では、基本種であるカヤは分布しておらず、変種であるチャボガヤが林床などに分布している。

・針葉樹

仮道管や放射組織の破片が検出された。仮道管の壁孔には直径約 $15 \mu\text{m}$ の円形の壁孔が軸方向に並んでいる様子が見られる（図版3-1）。放射組織は単列で、少なくとも5細胞高が確認できる（図版3-2）。これらの特徴は、多くの針葉樹で共通する特徴であるため、種類の特定には至らない。

・広葉樹？（第44図-5）

道管と見られる組織と木繊維の破片が検出された。道管と見られる組織は、保存が悪いが、階段状の壁孔と考えられる組織が認められる。道管と見られる組織があることから針葉樹ではなく広葉樹と推定されるが、保存が悪いことから本報告では広葉樹？としている。

4) 考 察

堆積環境

堆積環境の検討を目的として行った珪藻分析では、KB1区 53D 4 IV層及び54C VII層の25個体が最も多く、このほかの試料はこれよりも産出が少なかった。僅かに産出した分類群を見ると、KB1区試料では、VII-VI層は流水指標種を含む流水生種が多い。V層は、海水生種の *Coscinodiscus* が1個体検出されたのみである。IV層は、陸生珪藻B群の *Sellaphora seminulum* のみが検出された。本種は、河川にも湖沼にも生育する汎世界種とされ、電解質の多い栄養塩に富んだ水域に多く、強腐水域まで耐えることができるとされている〔Krammer and Lange - B. 1986、小林ほか2006〕。一方、KD1区試料では、海水生種、淡水生種、陸生珪藻が混在し、KB1区試料と比べ層位ごとの産出状況は不明瞭である。なお、各層から産出した海水生種の中には保存が悪い個体が認められたことや、上記したように第三紀消滅種のペカン属、フウ属の花粉化石が検出された事などを考慮すると、今回産出した珪藻化石についても後背地質に由来する化石が含まれている可能性がある。いずれも、解析に有意な数量に満たないことから、珪藻の生態的特徴に基づく堆積環境の検討は困難である。

古植生

KB1区及びKD1区の堆積層を対象とした花粉分析の結果、KB1区 54C V-VI層及びKD1区 37FI0-4のVI-VII層で解析に有意な花粉化石群集が得られた。花粉の産出状況は、地点間では全体的にKD1区 37FI0-4で産状が悪く、層位別では各地点ともにVII層の産状が不良であった。

縄文時代中期中葉とされるVII-VIII層では、KD1区 37FI0-4 VII層において解析に有意な個体数が得られた。木本花粉では針葉樹のツガ属、マツ属、スギ属、落葉広葉樹のブナ属等が多く検出されたことから、周間にこれらが生育していた可能性がある。検出された分類群は、酸化に対する抵抗性が高い針葉樹や、ある程度分解の影響を受けても同定可能な種類である。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている〔中村1967、徳永・山内1971、三宅・中越1998など〕。そのため、堆積物中における花粉化石の多くは、好気的な環境で分解・消失し、酸化に強い花粉が残った可能性がある。

本遺跡のVII層及びVIII層から出土した自然木の調査では、今回確認された落葉広葉樹のクリやエノキ属のはか、針葉樹のスギ、落葉広葉樹のヤマグワ、トチノキ〔パリノ・サーヴェイ株式会社 2009a-bMS〕等も確認されている。したがって、本遺跡周辺の河川沿いの河畔や低地には、これらの分類群からなる林地が分布したことが示唆される。

また、廃棄域とされるKD1区 37FI0-4 VII層では、残渣中に微粒炭が多く含まれるという特徴が確認

された。微粒炭含量は、KDI 区 37F10 - 4 VII 層が約 136,000 個/cc であり、これに対し同 VI・VII 層が約 1,900 ~ 3,900 個/cc、KBI 区 54C VII 層が約 9,300 個/cc であった。また、過去に調査を行った D 区 34B 5 VII 層が約 49,700 個/cc [パリノ・サーヴェイ株式会社 2009aMS] であり、廃棄域に相当する VII 層 (VII 下層) は極めて含量が高いという傾向が示唆される。また、組織観察では、その多くは由来の検討は困難であったが、針葉樹 (スギ近似種、カヤ近似種を含む) 及び広葉樹に由来すると見られる微粒炭が確認された。今回の微粒炭の産状とともに、VII 層における炭化材の樹種の検討や樹種構成との比較によって、より詳細な植物 (木材) 利用が明らかになると期待される。

縄文時代中期後葉以降とされる VI・V 層は、木本花粉が優占する花粉群集が確認された。木本花粉群集は、マツ属、スギ属が多く、ツガ属、サワグルミ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属等を伴うという組成を示した。地点間の比較では、KDI 区 37F10 - 4 VI 層は KBI 区 54C VI 層に比べ、スギ属の割合が低く、ツガ属及びブナ属の割合が高い。ただし、各地点の層位別の比較では、54C VI 層と V 層、37F10 - 4 VII 層と VI 層は、花粉群集及び木本花粉における優占する種類が類似しており、各地点の堆積環境や保存状態の違いを反映している可能性がある。

検出された分類群のうち、KBI 区 54C VI 層で優占したスギ属は、水分・養分の供給が十分で、水はけの良い土地に生育し、扇状地扇端部の湧水部などに林分を形成することが知られている。これまでの植生史研究では、約 4,000 ~ 2,000 年前にかけて急激に増加する傾向が認められている [高原ほか 1998]。このことから、本遺跡周辺の低地部などにはスギ林が分布したと考えられる。KDI 区 37F10 - 4 VI 層で多産したブナ属は、後背の丘陵や山地部の森林要素を反映すると考えられ、コナラ亜属とともに落葉広葉樹林を形成していたと推定される。付近の林地や林縁部にはウルシ属、ウコギ科、ツツジ科、エゴノキ属等が、河川沿いや周囲の低湿地などにはサワグルミ属、クルミ属、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属等の河畔林・湿地林要素が分布していたと考えられる。また、マツ属は、二次林あるいは海岸林として、周囲に生育したと考えられる。一方、草本類は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科等が検出された。これらは、開けた明るく開けた場所を好むことから、調査地周辺や林縁等の草地に由来すると推定され、ガマ属は周囲の水湿地に生育したと見られる。

古墳時代～近世に相当する III 層は、花粉化石がほとんど検出されず、木本類ではマツ属が、草本類ではイネ科が検出されるのみであった。当該期には、これらの生育がうかがわれるが、詳細な古植生の検討は困難である。

D 漆塗膜

1) 試料

試料は、KDI 区 VII 層から出土した縄文土器浅鉢片 2 点 (図版 38 - 272・274) である。いずれも、土器内面に赤色顔料が確認され、色調は 272 が比較的明るく鮮やかである。

今回の分析調査では、漆の利用の有無及び赤色顔料を含む断面観察が目的とされたことから、肉眼観察に基づき状態が良好と見られる塗膜片の採取を試みた。その結果、272 については、土器内面の器壁から剥がれかけた塗膜を採取することができた。274 については、塗膜のみの採取は困難であったため、土器内面の剥落しかけた赤色顔料を伴う器壁を採取している。

2) 分析方法

赤外線分光分析

a 原理

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に吸収されて、その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成している分子における結合の場合は、電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性質を有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域において波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合、さまざまな結合を有する分子では、様々な波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数（波長の逆数 cm⁻¹で示す）、縦軸に吸光度（ABS）を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起るかを調べ、その赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に標準化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することにより、未知物質を同定することも可能である[山田 1986]。

b 赤外線吸収スペクトルの測定

微量採取した付着物をダイヤモンドエクスプレスにより加圧成型した後、顕微FT-IR装置（サーモエレクトロン㈱製 Nicolet Avatar 370/Nicolet Centaurus）を利用して、測定を実施した。赤外線吸収スペクトルの測定は、作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、アバーチャでマスキングした後、透過法で測定した。得られたスペクトルはベースライン補正などのデータ処理を施した後、吸光度（ABS）で表示している。測定条件及び各種補正処理の詳細は、FT-IRスペクトルと共に第40図に示す。

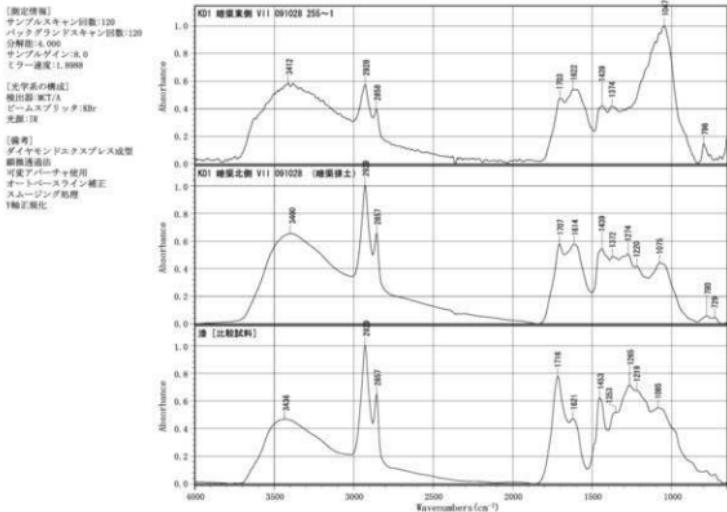
剥片作成・観察

繩文土器から採取した塗膜片及び赤色顔料の塗布が確認される破片を合成樹脂に包埋し、樹脂を固化させる。塗膜の断面が出るようにダイヤモンドカッターで切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドグラスに接着後、反対側も切断と研磨を行い、プレバラートとする。プレバラートは、落射蛍光顕微鏡や反射顕微鏡を用いて、塗膜構造や混和物について観察する。

3) 結果

赤外線分光分析

FT-IRスペクトルを第40図に示す。図中には比較試料として供した漆の実測スペクトルを併記した。



a 繩文土器片 図版 38-274

赤外線吸収特性は、 $3,400\text{cm}^{-1}$ 付近の幅広い吸収帯のほか、 $2,930\text{cm}^{-1}$ 、 $2,860\text{cm}^{-1}$ 、 $1,700\text{cm}^{-1}$ 、 $1,620\text{cm}^{-1}$ 、 $1,440\text{cm}^{-1}$ 、 $1,050\text{cm}^{-1}$ 付近の強い吸収帯や $1,370\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯によって特徴付けられる。なお、 $3,400\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はO-H基の伸縮振動、 $2,930\text{cm}^{-1}$ 、 $2,860\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はメチル基及びメチレン基のC-H伸縮振動、 $1,700\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はC=O伸縮振動、 $1,620\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はC=C伸縮振動、 $1,440\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はC-H対称変角振動、 $1,370\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はC-O伸縮振動あるいはO-H変角振動と予想される。また、 $1,050\text{cm}^{-1}$ 付近に見られる強い吸収帯はSi-O伸縮振動によるものと見られる。

b 繩文土器片 図版 38-272

赤外線吸収特性は、 $3,400\text{cm}^{-1}$ 付近の幅広い吸収帯のほか、 $2,930\text{cm}^{-1}$ 、 $2,860\text{cm}^{-1}$ 、 $1,710\text{cm}^{-1}$ 、 $1,610\text{cm}^{-1}$ 、 $1,440\text{cm}^{-1}$ 、 $1,270\text{cm}^{-1}$ 、 $1,080\text{cm}^{-1}$ 付近の強い吸収帯や $1,370\text{cm}^{-1}$ 、 $1,220\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯によって特徴付けられる。なお、 $3,400\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はO-H基の伸縮振動、 $2,930\text{cm}^{-1}$ 、 $2,860\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はメチル基及びメチレン基のC-H伸縮振動、 $1,710\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はC=O伸縮振動、 $1,610\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はC=C伸縮振動、 $1,440\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はC-H対称変角振動、 $1,370\text{cm}^{-1}$ 、 $1,270\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はC-O伸縮振動あるいはO-H変角振動と予想される。

剥片作成・観察

a 繩文土器片 図版 38 - 274

塗膜は、土器胎土の表面に1層のみ確認される。厚さは約 $10\text{--}30\ \mu\text{m}$ を測り、全体的に薄く、不均一である。塗膜中には、赤色粒子が高い密度で含まれるほか、塗布時に胎土から剥離したと思われる鉱物片が散見される。赤色粒子は、鉱物の特徴からベンガラと推定される。

b 繩文土器片 図版 38 - 272

採取した塗膜片には塗層が2層確認される。下位の塗層は、透過光・落射蛍光で黄褐色を呈し、厚さは約 $30\text{--}50\ \mu\text{m}$ を測る。上位の塗層は、透過光・落射蛍光で赤色を呈し、厚さ約 $30\text{--}60\ \mu\text{m}$ を測る。赤色層は、落射蛍光では赤色粒子と黄褐色の物質が混在している。赤色微粒子は、鉱物の特徴から赤鉄鉱と推定される。

4) 考 察

赤色顔料が確認される縄文土器から採取した塗膜片は、比較試料の漆において見られる $3400, 2930, 2860, 1720, 1620, 1450\text{cm}^{-1}$ 付近の脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯が認められるなど、漆と類似したスペクトルパターンを示した。274については、珪酸塙鉱物による吸収を回避することが難しく、 1050cm^{-1} 付近に $\text{Si}-\text{O}$ 伸縮振動による吸収が認められたが、これは塗膜が薄く鉱物粒が相当量含まれた状態で分析したためと考えられる。いずれの試料も、スペクトルパターンから漆を含むことが推定される。

漆は天然の状態では透明であり、クロメの工程によって鉛色になることはあるが、赤色を呈するためには赤色顔料を混和する必要がある。薄片観察結果では、272で黄褐色と赤色の2層が確認された。黄褐色層は、混和物の無い透明漆、赤色層は赤鉄鉱を原料とするベンガラを混和した赤漆と考えられる。このことから、器面に透明漆を少なくとも1層以上塗布した後に、赤漆を塗布したことが推定される。一方274は、赤色の層が1層のみ認められ、ベンガラを混和した漆を胎土の上に直接塗布したことが推定される。今回の分析結果から、本遺跡では、少なくとも2タイプの漆塗りの方法が存在したと考えられる。

E 黒曜石の産地同定

1) 試 料

試料は、KD1区下層出土の図版40-296石器（試料No.1）、図版40-300（試料No.2）、図版40-302（試料No.3）の黒曜石3点である。これらの試料の調査は、遺物保存の観点から、非破壊分析法により半定量的に化学組成を求める。

2) 分析方法

セイコーアンスツルメンツ製エネルギー分散型蛍光X線分析装置(SEA2120L)を用い、第22表に示す条件で測定を行う。得られた蛍光X線スペクトルはファンデメンタルパラメーター法(FP法)による定量演算を実施し、化学組成を算出する。なお、定量演算の際には組成既知の黒曜石を標準試料として登録し、正確度の向上を図っている。

測定装置		SEA2120L
管球ケーブル元素	Rh	
対象元素	Na~Ca	Sc~U
励起电压(kV)	15	50
管電流(μA)	自動設定	自動設定
測定期間(秒)	300	300
コリメータ	φ10mm	
フィルター	なし	
雰囲気	真空	

第22表 測定条件

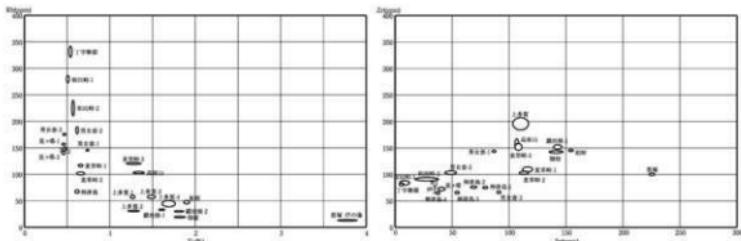
3) Fe と Rb による黒曜石産地判別

黒曜石は、流紋岩～デイサイトに相当するガラス岩である。流紋岩～デイサイトの成因は多様であるが、その反面発物質としてのマグマの生成過程及び分化過程で化学組成の挙動が異なることが期待される。【大沢(±1991)】の黒曜石の化学組成を岩系別に見ると、Rb (ルビジウム)、La (ランタン)、Ce (セリウム)、Eu (ユウロピウム)、Th (トリウム)、Sc (スカジウム) の変動が著しく、地域的な特性を示す微量元素として注目される。

そこで黒曜石の岩系に基づいた化学成分の変化を背景に、産地判定の指標元素としてコンパティブル元素である Fe とインコンパティブル元素である Rb を選択し、産地ごとの 2 成分の領域を図示した黒曜石の産地判別図（第 41 図）を作製する。本判別図は、当社保有の原産地黒曜石 110 試料のほか、これまでに当社で調査を行った遺跡出土黒曜石（産地未確定も含む）など計 500 試料以上の黒曜石を基に、破壊調査により得られた化学組成を用いて作製した。作製した判別図は縦軸に Rb (ppm)、横軸に Fe (%) をとると指標関数的な分布を示し、産地間の分離が良好であることから、分析精度が十分に高ければ産地の識別は可能であると考えられる【五十嵐(±2001)】。なお、この図は Fe (%) と Rb (ppm) の値を採用しているため、酸化物の分析結果を換算して用いている。

4) 結 果

推定産地を記した黒曜石の化学組成を第 23 表、Fe - Rb 判別図及び補完法である Sr - Zr 判別図を第 41 図に示す。分析対象とした黒曜石 3 点は、Fe - Rb 判別図及び Sr - Zr 判別図中で星ヶ塔の領域近傍に位置することから、長野県星ヶ塔産の黒曜石である可能性が高いと判断される。



第 41 図 黒曜石原産地判別図（関東地方）[左図：Fe-Rb 法、右図：Sr-Zr 法]

測定試料	試料名	SiO ₂ (%)	TiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na ₂ O (%)	K ₂ O (%)
No.										
1	図版40-296	78.00	0.09	13.41	0.67	0.06	0.26	0.35	3.34	3.78
2	図版40-300	77.50	0.07	12.97	0.68	0.06	0.37	0.36	3.12	4.80
3	図版40-302	77.93	0.08	13.38	0.65	0.06	0.23	0.30	3.62	3.68

測定試料	Rb (%)	Sr (%)	Zr (%)	Ba (%)	Fe ⁺ (%)	Rb [*] (ppm)	推定 原産地
No.							
1	0.0149	0.0031	0.0072	0.0332	0.47	149	星ヶ塔
2	0.0147	0.0035	0.0076	0.0285	0.48	147	星ヶ塔
3	0.0147	0.0033	0.0084	0.0296	0.46	147	星ヶ塔

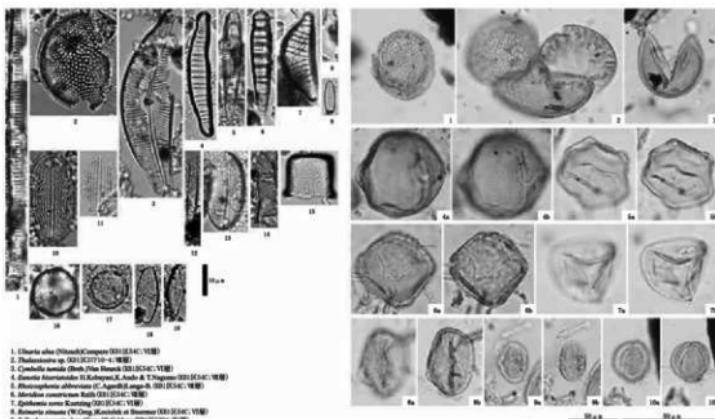
*参考値

第 23 表 黒曜石元素分析結果

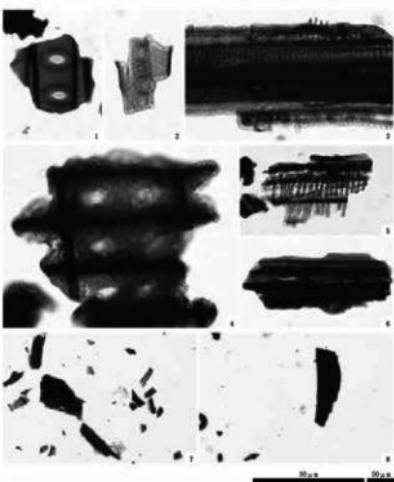
引用文献

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 73 - 88
- Asai, K. & Watanabe, T 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom.*, 10 35 - 47
- 原口和夫・三友清史・小林 弘 1998 「埼玉の藻類 珪藻類」『埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会 527 - 600.
- 林 昭三 1991 「日本産木材」『顯微鏡写真集』京都大学木質科学研究所。
- Hustedt, F. 1937 - 1939 Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen - Flora von Java, Bali und Sumatra. Archiv für Hydrobiologie, Supplement, 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:638-790, 16:1-155, 16:274-394
- 五十嵐俊雄ほか 2001 「Fe - Rb 法による黒曜石の产地推定」[PALYNO No.4] パリノ・サーヴェイ株式会社 16 - 25
- 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 81 - 181.
- 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 66 - 176.
- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 83 - 201.
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 30 - 166.
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載V」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 47 - 216.
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6 23 - 45.
- 株式会社古環境研究所 2008 「自然科學分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 姫御前遺跡I』
- 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 46 - 60
- 金原正子 2008 「花粉分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 姫御前遺跡I』新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 46 - 49
- 小林謙一 2008 「縄文土器の年代（東日本）」『総覧 縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会 896 - 903
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27 1 - 20
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田晋吾 2006 「小林弘珪藻図鑑」第1巻 (株) 内田老舗団 531p.
- Krammer, K. 1992 PINNULARIA.eine Monographie der europäischen Taxa. LIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26 J.CRAMER.353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1986 Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserfloravonit von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag. 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988 Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag.536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991a Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag.230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991b Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae, Kritsche. Ergänzungen zu Na V cula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag.248p.
- Lowe, R.L. 1974 Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4 - 74 - 005. Nat. Environ. Res. Develop. U.S. Environmental Protect. Agency, Cincinnati.
- 三宅 尚・中越信和 1998 「森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6 15 - 30
- 中村 純 1967 「花粉分析」古今書院 232
- 小椋純一 1999 「微粒炭の形態と母材植生との関係（1）」『京都精華大学紀要』17 53 - 69

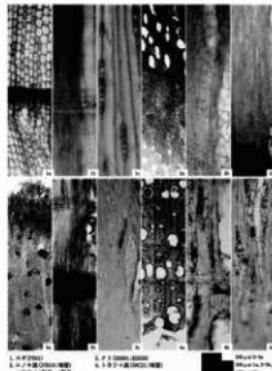
- 小椋純一 2000 「微粒炭の形態と母材植生との関係（2）」『京都精華大学紀要』19 45 - 64
- 小椋純一 2001 「微粒炭の形態と母材植生との関係（3）」『京都精華大学紀要』20 32 - 50
- 大沢貴澄ほか 1991 「黒曜石の化学組成、遺跡出土黒曜石器の原産地推定の基礎として」
『平成2年度科学研究費助成金（一般研究B）研究成果報告書』69
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2008a 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 六反田南遺跡・前波南遺跡』新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
53 - 56
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2008b 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 六反田南遺跡・前波南遺跡』新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
36 - 38
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2009a 「MS. 大和川遺跡自然文化分析報告」9 p
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2009b 「MS. 六反田南遺跡自然科学分析報告」9 p
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006 鈎葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト、伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修）、海青社、Op.
- [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990 *The diatoms. Biology & morphology of the genera*. Cambridge University Press, Cambridge, 747p.
- 島地謙・伊東隆夫 1982 「国説木材組織」地球社 176
- 鈴木郁夫 1983 「地形分類図」「新潟上越地域土地区分基本調査」糸魚川、新潟県農地部農村総合整備課 9 - 22
- 鈴木茂 2008 「プラント・オバール分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第188集 横マクリ遺跡』新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 50 - 52
- 高原光・安田喜憲・三好教夫 1998 「スギ林の変遷」『国説 日本列島植物史』朝倉書店 207 - 223
- 徳永重元・山内輝子 1971 花粉・胞子」「化石の研究法」共立出版株式会社 50 - 73
- Vos, P.C. & H. de Wolf 1993 Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands: methodological aspects. *Hydrobiologia* 269/270:285 - 296
- 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻彰洋・伯耆晶子 2005 「淡水珪藻生態図鑑」内田老舗 666.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト、伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩（日本語版監修）、海青社、122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].
- Witkowski, A. & Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D. 2000 *Iconographia Diatomologica 7. Diatom flora of Marine coast I* A.R.G. Gantner Verlag K.G. 881p.
- 山田富貴子 1986 「赤外線吸収スペクトル法」「機器分析でのびき第1集」化学同人 1 - 18
- 柳沢幸夫 2000 「計数・同定」「化石の研究法－採集から最新の解析法まで－」化石研究会・共立出版株式会社 49 - 50
- 山野井徹 1996 「黒土の成因に関する地質学的検討」『地質学雑誌』102 526 - 544



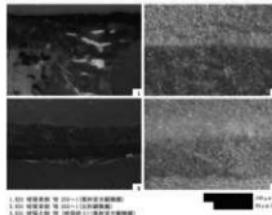
第42図 花粉化石



第43図 硅藻化石



第44図 微細化石



第45図 木材



第46図 塗装膜断面

2 六反田南遺跡IVから出土した動物遺存体

山崎 健（奈良文化財研究所）

A はじめに

新潟県六反田南遺跡IVでは、新潟県埋蔵文化財調査事業団が実施した平成21年度の発掘調査において、縄文時代中期前半の焼骨片が多量に確認された。出土した動物遺存体は、火を受けて無機化したために残りやすくなつたものと考えられ、貝塚の分布密度が低く出土事例の少ない日本海側における生業活動を検討する上で貴重な資料といえる。本稿では、これらの動物遺存体の分析結果を報告し、六反田南遺跡IVにおける動物資源利用を検討する。

B 分析試料

1) 採取方法

発掘調査の段階で、KDI区の北側に広がる廃棄域の遺物包含層(Ⅶ層)や遺構において、白色の微細な骨片や黒色の炭化した種実が含まれていることが確認された。これらの動植物遺存体を回収するため、廃棄域(Fグリッド)の約70m²について1m×1mのグリッドごとに土壌を採取して、フルイによる選別作業を実施した。この土壌選別作業は、新潟県埋蔵文化財調査事業団と奈良文化財研究所の環境考古学研究室で行なわれた。新潟県埋蔵文化財調査事業団では5mm目と1mm目のフルイによる水洗選別作業が実施され、環境考古学研究室では1mm目までのフルイによる水洗選別法と0.25mm目のフローテーション法を実施し、微細遺物を回収した。

2) 出土状況

土壤選別により合計73,658点(415.17g)の動物遺存体を抽出した。分析資料の帰属時期は、縄文時代中期前葉～中葉(新崎式～上山田・天神山式期)である。

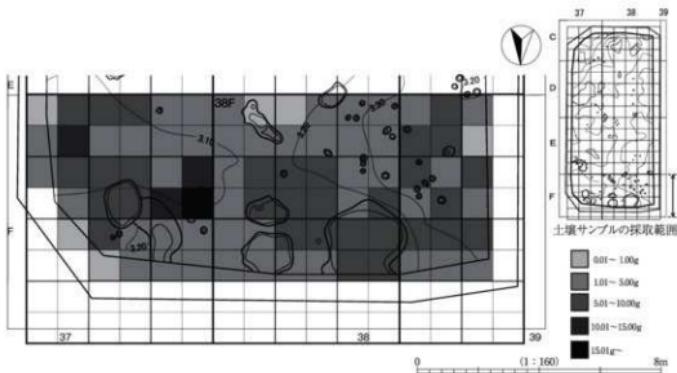
動物遺存体は調査区北側に広がる廃棄域から広く出土しており、とくに37F10-2～4において分布の集中が認められた(第47図)。この動物遺存体が集中する37F10-2と37F10-4に関しては、土壤と土壤選別で抽出された資料の質量を測り、動物遺存体、炭化種子、炭化材の包含率を求めた(第24表)。

遺構出土の動物遺存体を見ると、土坑ではSK45Jから2,472点(11.47g)、SK52Jから445点(1.67g)、炭化物集中遺構ではSC42Jから65点(0.15g)、SC55Jから11点(0.04g)、ピットではP51から1点(0.17g)が出土した。遺構から検出された動物遺存体の内容は、遺物包含層(Ⅶ層)と大きな違いは認められなかった。

なお、廃棄域や遺構では焼土面や灰層が検出されていないため、出土した動植物遺存体はこの場で火を受けた訳ではなく、他の場所から流れ込んだか、投棄されたものと考えられる。

グリッド	層位	乾燥重量 (g)	動物遺存体 (g)	炭化種子 (g)	炭化材 (g)
37F10-2	Ⅶ層上	40378.80	8.30	0.46	256.12
	Ⅶ層中	12670.88	2.14	0.40	31.06
	Ⅶ層(合計)	53049.68	10.44	0.86	287.18
37F10-4	Ⅷ層上	28676.77	5.47	0.17	89.82
	Ⅷ層中	13654.12	1.37	0.94	41.71
	Ⅷ層下	44303.46	1.55	0.75	84.62
Ⅷ層(合計)		86634.35	8.39	1.86	216.15

第24表 動物遺存体・炭化種子・炭化材の包含率



第47図 動植物遺存体の出土量分布図

C 同定・記載方法

分析資料は微細な骨片であったため、同定に有効な部位を残存した資料だけでなく、1mm以上の資料をすべて分析対象とした。同定は現生骨格標本との比較により行ない、比較標本には環境考古学研究室が所蔵する標本（NAC標本）を用いた。ただし、板鰓類の同定に関しては、現生標本の他に、[糸魚川ほか1985]や[樋泉1999・2003]の記載を参考とした。また、サメ類の歯の同定に関しては堀江琢氏（東海大学海洋学部）に御指導及び御助言をいただいた。

同定や計数は肉眼及び実体顕微鏡下で行った。同定を行った資料は番号を登録し、同定破片数と質量を記録した。出土した動物遺存体は焼けて細かな破片となっており、最小個体数で評価することができないため、破片数とともに質量で算定した。質量は電子天秤を用いて、小数点第2位まで計測したものである。また計測が可能な資料に関しては、デジタル・ノギスを用いて0.01mmの単位まで計測を行った。ただし、今回の分析資料はすべて焼けた骨片であり、計測値は火を受けて収縮した後の値となる。そのため、本稿における計測値は大まかに個体サイズを検討するための参考値として扱うこととする。

魚類の学名・配列は『日本産魚類検索 全種の同定（第2版）』[中坊編2000]、哺乳類の学名・配列は『日本の哺乳類（改訂第2版）』[阿部監修2008]に基本的に従った。

D 分類群の記載

魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類を同定した。出土した動物遺存体の種名表を第25表に示す。ほとんどの資料が細片であるため、種同定は全体的に困難で同定可能な資料はわずかであった。

出土した動物遺存体は、熱を受けた骨に認められる亀裂や収縮が認められ、白色や黒色に変色していた。割れた骨片のうち、骨の外表面だけでなく、破断面や内表面（骨髓腔側）も同様に変色していることから、割れる前に火を受けただけではなく、割れた後にも火を受けたと考えられる。

脊椎動物門			
軟骨魚綱		サバ属	<i>Scomber</i> sp.
板鰓亞綱	<i>Elasmobranchii</i> sp.	マグロ族	<i>Thunnini</i> sp.
ネズミザメ目?	<i>Lamniformes</i> sp.?	ヒラメ科	<i>Paralichthyidae</i> sp.
オオワニザメ科?	<i>Odontaspidae</i> sp.	カレイ科	<i>Pleuronectidae</i> sp.
ホホジロザメ?	<i>Carcharodon carcharias</i> ?	カワハギ科	<i>Monacanthidae</i> sp.
アオザメ属?	<i>Iurus</i> sp.?	フグ科	<i>Tetraodontidae</i> sp.
メジロザメ科?	<i>Carcharhinidae</i> sp.?	魚類種不明	ord., fam., gen. et sp. indet.
カグラザメ科?	<i>Hexanchidae</i> sp.?	両生綱	
エイ目?	<i>Rajiformes</i> sp.?	カエル目	<i>Aura</i> spp.
硬骨魚綱		爬虫綱	
ニシン科	<i>Clupeidae</i> sp.	ヘビ亜目	<i>Serpentes</i> sp.
マイワシ	<i>Sardinops melanostictus</i>	鳥綱	
コノシロ	<i>Konosirus punctatus</i>	キジ科	<i>Phasianidae</i> sp.
カクチタイワシ	<i>Engraulis japonica</i>	鳥類種不明	ord., fam., gen. et sp. indet.
コイ科	<i>Cyprinidae</i> sp.	哺乳動物綱	
アユ	<i>Plecoglossus altivelis altivelis</i>	ツキノワグマ	<i>Ursus stibetanus</i>
サケ科	<i>Salmonidae</i> sp.	イタチ	<i>Mustela itatsi</i>
トゲウオ科	<i>Gasterosteidae</i> sp.	イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
コチ科	<i>Platycephalidae</i> sp.	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>
スズキ属	<i>Lateslabeus</i> sp.	カモツカ	<i>Capricornis crispus</i>
アソ科	<i>Carangidae</i> sp.	ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i>
ブリ属	<i>Seriola</i> sp.	ネズミ科	<i>Muridae</i> sp.
タイ科	<i>Sparidae</i> sp.	哺乳類種不明	ord., fam., gen. et sp. indet.

第25表 六反田南遺跡IV出土の動物遺存体種名表

1) 魚類

出土した魚類は30,911点(119.94g)で、このうち骨格部位が特定された資料は5,531点(33.9g)であった。同定された分類群は27分類群である。

板鰓亞綱 *Elasmobranchii* spp.

板鰓亞綱(以下、「板鰓類」とする)はエイ類やサメ類を含む分類群で、サメ類の歯と板鰓類の椎骨を同定した。サメ類の歯は歯冠部しか残存しておらず、歯の全体的な形態や咬頭数が不明であった。そのため、歯冠の形態や切縁の形状(鋸歯の有無)を基準として、サメ類A~Eに分類した。

サメ類A 歯の鋸歯縁が強く発達している。メジロザメ科やホホジロザメの近心側に位置する歯が想定される。

サメ類B 歯の鋸歯縁が弱く発達している。メジロザメ科やホホジロザメの遠心側に位置する歯や幼魚の歯であると想定される。

サメ類C 切縁に鋸歯がなく、歯冠が細長く尖る円錐形を呈する。アオザメ属やオオワニザメ科の歯であると想定される。

サメ類D 傾斜した咬頭が連続する。カグラザメ科の歯であると想定される。

サメ類E 切縁に鋸歯がなく、歯冠が幅広い三角形を呈する。大型の資料はネズミザメ目の主咬頭の可能性があり、小型の資料はネズミザメ目の副咬頭が想定される。

また板鰓類の椎骨は、石灰化の分布パターンや弓溝(神経繩や血管繩が離脱した孔)の形態などを基準として板鰓類a~fに分類した。板鰓類aはエイ目、板鰓類b~fはサメ類が想定される。

板鰓類a 椎体の弓溝が浅く、浅い窪みとなっている。

板鰓類b 椎体の弓溝が深く明瞭な孔を成す。

- 板鰓類c 椎体の弓溝が深く明瞭な孔を成し、弓溝内に石灰隔壁が存在する。
- 板鰓類d 椎体の石灰化が不規則で、弓溝は明瞭な孔を成さない。
- 板鰓類e 他の板鰓類椎骨と異なり、椎体側面の形状は、中央がくびれた鼓形を呈する。
- 板鰓類f 細かく破損しており、弓溝などの形態観察ができない資料を板鰓類fとした。板鰓類bや板鰓類cが多く含まれると考えられ、大型の椎体片が目立つ。

ニシン科 Clupeidae sp.

腹椎 18点 (0.06g)、尾椎 55点 (0.21g) の計73点 (0.27g) を同定した。現在の新潟県近海では、コノシロ、ニシン、ウルメイワシ、サッパ、マイワシといったニシン科魚類が生息する [本間 1992]。第1椎骨と第2椎骨については、下記のようにさらに低次の分類群に同定できた。

マイワシ *Sardinops melanostictus*

第1椎骨が1点 (0.01g未満)、第2椎骨が3点 (0.01g未満) の計4点 (0.01g) を同定した。大きな群れを形成する回遊魚で、初夏にかけて北方に移動し水温の低下に伴って南下する [中坊編 2000]。

コノシロ *Konosirus punctatus*

第1椎骨が2点 (0.01g)、第2椎骨が1点 (0.01g未満) の計3点 (0.01g) を同定した。内湾性で、産卵期には汽水域に回遊する [中坊編 2000]。

カタクチイワシ *Engraulis japonica*

38F6 - 2から尾椎1点 (0.01g未満) を同定した。主に沿岸域の表層付近に大きな群れで生息し、新潟県内の磯にも多く分布する [中坊編 2000、本間 1992]。

コイ科 Cyprinidae sp.

腹椎 8点 (0.03g)、尾椎 5点 (0.03g) の計13点 (0.06g) を同定した。現在の新潟県内では、体長20cm以下の種としてヤリタナゴ、モツゴ、アブラハヤ、カマツカ、体長20cmを超える種としてキンブナ、ギンブナ、コイ、ウグイ、ニゴイが生息している。主に河川や池沼といった淡水域に生息する種である (本間監修 1983)。

アユ *Plecoglossus altivelis altivelis*

腹椎 2点 (0.01g未満)、尾椎 5点 (0.01g) の計12点 (0.01g) を同定した。河川の上流や中流域に生息する [中坊編 2000]。

サケ科 Salmonidae sp.

椎骨片 2,855点 (11.23g)、歯 113点 (0.71g)、頸骨 3点 (0.02g) の計 2,971点 (11.96g) を同定した。現在の新潟県では、サケのほかに、河川の上流～中流に生息するイワナ (アメマス)、中流に生息するヤマメ (サクラマス) といったサケ科魚類が分布する [本間監修 1983]。

トゲウオ科 Gasterosteidae sp.

腹鱗棘 5点 (0.02g)、背鱗棘 1点 (0.01g未満)、腹鱗棘あるいは背鱗棘 1点 (0.01g未満)、腹椎 1点 (0.01g) の計8点 (0.04g) を同定した。現在の新潟県ではイトヨとトミヨが生息する [本間監修 1983]。

コチ科 Platicephalidae sp.

主上顎骨 1点 (0.01g)、第1椎骨 1点 (0.04g)、腹椎 1点 (0.04g)、尾椎 1点 (0.02g) の計4点 (0.11g) を同定した。新潟県近海では、イネゴチ、アネサゴチ、オニゴチ、マゴチ、メゴチが分布する [本間 1992]。主に砂底や砂泥底に生息する種である。

スズキ属 *Lateolabrax* sp.

2. 六反田南遺跡Ⅳから出土した動物遺存体

腹椎 1 点 (0.23g)、尾椎 2 点 (0.06g) の計 3 点 (0.29g) を同定した。新潟県近海ではスズキが生息する〔本間 1992〕。

アジ科 Carangidae sp.

アジ科に特徴的な後鱗 11 点 (0.06g) を同定した。

ブリ属 Seriola sp.

歯骨 3 点 (0.04g)、方骨 1 点 (0.01g 未満)、腹椎 4 点 (0.15g)、尾椎 1 点 (0.04g) の計 9 点 (0.23g) を同定した。現在の新潟県近海ではブリ、ヒラマサ、カンパチが生息する〔本間 1992〕。主に沿岸の中・下層に生息する種である。

タイ科 Sparidae sp.

歯 1,182 点 (4.93g)、前上顎骨あるいは歯骨 5 点 (0.12g)、腹椎 1 点 (0.03g)、尾椎 1 点 (0.14g) の合計 1,189 点 (5.22g) を同定した。新潟県の沿岸や沖合ではクロダイ、キダイ、チダイ、マダイ、ヘダイが生息する〔本間 1992〕。

サバ属 Scomber sp.

歯骨 1 点 (0.02g)、方骨 1 点 (0.01g 未満)、角骨 1 点 (0.01g 未満)、腹椎 14 点 (0.29g)、尾椎 11 点 (0.32g) の合計 28 点 (0.63g) を同定した。新潟県近海ではマサバとゴマサバが生息する〔本間 1992〕。沿岸性の表層回遊魚群である。

マグロ族 Thunnini sp.

マグロ族はカツオ属やマグロ属を含む分類群である。尾椎 12 点 (0.13g) や下尾骨 1 点 (0.01g 未満) の合計 13 点 (0.13g) である。被熱した状態での椎体横径は 1.85 ~ 3.45mm で幼魚であると考えられる。

ヒラメ科 Paralichthyidae sp.

37F9 - 2 から腹椎 1 点 (0.01g) を同定した。新潟県近海ではヒラメ、ガンゾウビラメ、ヘラガンゾウビラメ、タマガンゾウビラメ、ユメアラレメガイ、アラレメガイが生息する〔本間 1992〕。主に砂底や砂泥底に生息する種である。

カレイ科 Pleuronectidae sp.

前上顎骨 1 点 (0.01g)、尾椎 1 点 (0.02g)、椎骨 1 点 (0.02g) の合計 3 点 (0.05g) を同定した。

カワハギ科 Monacanthidae sp.

38F9 - 4 と 38F15 - 1 から背鰭第 1 輪が 1 点ずつの合計 2 点 (0.01g 未満) を同定した。

フグ科 Tetraodontidae sp.

38F7 - 1 から腹椎 1 点 (0.07g) を同定した。

2) 両生類・爬虫類

カエル目 Aura spp.

計 44 点 (2.38g) が出土し、上腕骨、橈尺骨、寛骨、脛腓骨、椎骨、尾骨を同定した。大きさが明らかに異なる骨が出土しているため、複数種が含まれている可能性が高い。

ヘビ亜目 Serpentes sp.

38F7 - 4 から、椎骨 1 点 (0.01g 未満) が出土した。

3) 鳥類

出土した鳥類は 146 点 (372g) であるが、分類群を特定できたのはキジ科のみであった。

キジ科 Phasianidae sp.

38F9 - 4 から脛足根骨の距突起(蹴爪)が 1 点 (0.09g)、38F1 - 4 から手根骨が 1 点 (0.03g) の合計 2 点 (0.12g) を同定した。

4) 哺乳類

出土した魚類は 4,023 点 (13206g) で、このうち骨格部位が特定された資料は 257 点 (16.01g) であった。同定された分類群は 7 分類群である。

ツキノワグマ *Ursus thibetanus*

指骨 3 点 (2.11g) を同定した。

イタチ *Mustela itatsi*

38F6 - 1 から下顎骨 1 点 (0.08g) が出土した。

イノシシ *Sus scrofa*

38F12 - 3 から臼歯の破片 2 点 (0.12g) が出土した。

ニホンジカ *Cervus nippon*

角破片 1 点 (0.39g)、中手骨あるいは中足骨の遠位端 2 点 (2.27g)、末節骨 2 点 (0.87g) の計 5 点 (3.53g) が出土した。

カモシカ *Capricornis crispus*

38F1 - 1 から寛骨臼 1 点 (1.15g)、38F4 - 4 から第 2・3 手根骨 1 点 (0.83g) の計 2 点 (1.98g) が出土した。

ムササビ *Petaurista leucogenys*

計 6 点 (0.70g) が出土し、肩甲骨、上腕骨、尺骨、大腿骨、距骨を同定した。

ネズミ科 Muridae sp.

頭蓋骨片 1 点 (0.03g)、橈骨 1 点 (0.03g)、踵骨 2 点 (0.07g) の計 4 点 (0.13g) が出土した。

哺乳類種不明

骨格部位は特定できるが、種同定に有効な部分を欠いた破片であった資料は 234 点 (7.36g) であった。以下の基準により、種不明とした資料を骨の大きさによって分類した。

「大型」(ツキノワグマ～ニホンジカ・カモシカ程度の大きさ)

「中型」(キツネ・タヌキ～ムササビ・イタチ程度の大きさ)

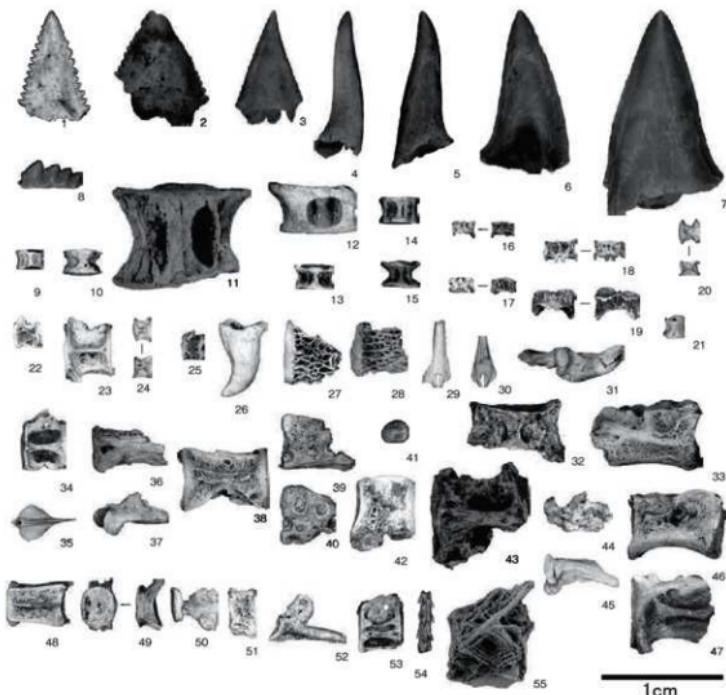
「小型」(ネズミ科程度の大きさ)

哺乳類種不明と記載した資料のうち、「大型」に分類される資料は破片数で 3.42% と非常にわずかであった。



- 1: ツキノワグマ指骨 (No.891), 2: ツキノワグマ指骨 (No.423), 3: イタチ下顎骨 (No.1732), 4: イノシシ歯破片 (No.2834),
 5: ニホンジカ中手骨 / 中足骨 (No.1618), 6: ニホンジカ中手骨 / 中足骨 (No.636), 7: ニホンジカ末節骨 (No.2509), 8: カモシカ寛骨 (No.1191), 10: ムササビ肩甲骨 (No.1643), 11: ムササビ上腕骨 (No.2230), 12: ムササビ大脛骨 (No.1126), 13: ムササビ距骨 (No.2836), 14: ネズミ科踵骨 (No.2379), 15: 中型哺乳類・末節骨 (No.432), 16: キジ科足根中足骨 (No.2452),
 17: キジ科手根骨 (No.1283), 18: 鳥類種不明・鎖骨 (No.1252), 19: 鳥類種不明・足根中足骨 (No.609), 20: 鳥類種不明・末節骨 (No.2478), 21: カエル目上腕骨 (No.2050), 22: カエル目上腕骨 (No.2143), 23: カエル目橈尺骨 (No.2991), 24: カエル目寛骨 (No.2617), 25: カエル目椎骨 (No.2776), 26: カエル目尾骨 (No.2853), 27: ヘビ亜目椎骨 (No.3850)

第48図 哺乳類・鳥類・両生類・爬虫類

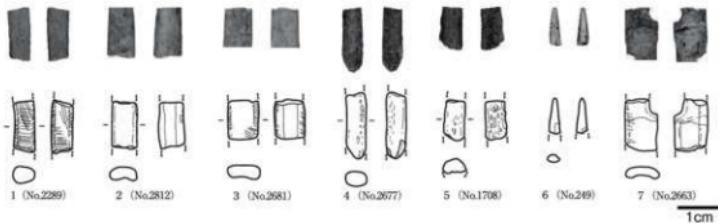


- 1:サメ類a歯 (No.1675), 2:サメ類b歯 (No.3044), 3:サメ類b歯 (No.3213), 4:サメ類c歯 (No.1282), 5:サメ類c歯 (No.1082), 6:サメ類d歯 (No.2426), 7:サメ類d歯 (No.1049), 8:サメ類e歯 (No.3577), 9:板鰓類a椎骨 (No.3142), 10:板鰓類a椎骨 (No.1730), 11:板鰓類b椎骨 (No.2451), 12:板鰓類c椎骨 (No.3128), 13:板鰓類c椎骨 (No.1706), 14:板鰓類d椎骨 (No.3733), 15:板鰓類e椎骨 (No.791), 16:マイワシ第1椎骨 (No.1563), 17:マイワシ第2椎骨 (No.3842), 18:コノシロ第1椎骨 (No.1929), 19:コノシロ第2椎骨 (No.748), 20:ニシン科腹椎 (No.3720), 21:カタクチイワシ尾椎 (No.3706), 22:コイ科腹椎 (No.3688), 23:コイ科尾椎 (No.3627), 24:アユ腹椎 (No.3635), 25:アユ尾椎 (No.3723), 26:サケ科歯 (No.919), 27:サケ科椎骨 (No.1250), 28:サケ科椎骨 (No.2211), 29:トゲウオ科腹鰭棘 (No.3437), 30:トゲウオ科背鰭棘 (No.3788), 31:コチ科主上顎骨 (No.2225), 32:コチ科第1椎骨 (No.443), 33:コチ科腹椎 (No.3669), 34:ズメツ属尾椎 (No.2032), 35:アジ科棲鱗 (No.3328), 36:ブリ属骨 (No.1555), 37:ブリ属方骨 (No.16), 38:ブリ属尾椎 (No.3674), 39:タイ科前上顎骨 / 齧骨 (No.2861), 40:タイ科前上顎骨 / 齧骨 (No.1394), 41:タイ科歯 (No.1503), 42:タイ科腹椎 (No.3666), 43:タイ科尾椎 (No.1476), 44:サバ属角骨 (No.2014), 45:サバ属方骨 (No.3361), 46:サバ属腹椎 (No.3628), 47:サバ属尾椎 (No.3629), 48:マグロ族尾椎 (No.3705), 49:マグロ族尾椎 (No.1554), 50:マグロ旗下尾骨 (No.2226), 51:ヒラメ科腹椎 (No.3727), 52:カレイ科前上顎骨 (No.3246), 53:カレイ科尾椎 (No.2569), 54:カハハギ科背骨第1棘 (No.2437), 55:フグ科腹椎 (No.3672)

第49回 魚類

E 骨 角 器

線状痕など人為的な加工痕を有する資料を「骨角器」とみなした。骨角器の可能性がある資料として、刺突具あるいは棒状製品の破片と考えられる骨片や鹿角片（第50図1～5）が12点（2.22g）出土した。ほかに、先端が尖った形状の骨片（第50図6）が1点（0.03g）、整形して段のついた骨片（第50図7）が1点（0.40g）出土している。微細な破片のために断定はできないものの、素材は鹿角や中手骨あるいは中足骨の可能性がある。



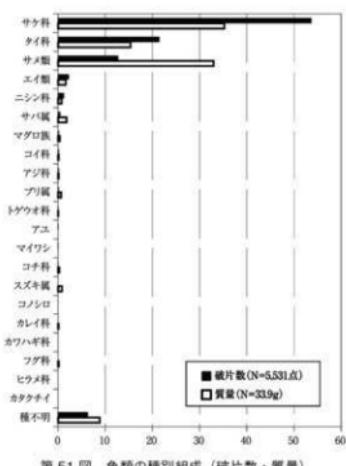
第50図 六反田南遺跡IV出土の骨角器

F 六反田南遺跡IVにおける生業活動

1) 漁 捈 活 動

質量による組成と破片数による組成ではほぼ同様な傾向が認められ、サケ科（質量で35.3%、破片数で53.7%）、サメ類（質量で33.0%、破片数で12.8%）、タイ科（質量で15.4%、破片数で21.5%）が多く出土していることが特徴である（第51図・第26表）。ただし、サメ類とタイ科については、エナメル質や象牙質で構成される歯が非常に多くを占めており、残りやすい部位が多く出土したものと評価する必要があろう。

六反田南遺跡IVから出土した魚類の生息環境は「淡水域」と「海水域」に大きく分けられる。主に河川などの淡水域に生息する種としてはサケ科、コイ科、アユが出土しており、サケ科の出土量が卓越している。このことから、サケ科魚類を集中的に獲得していたと考えられる。サケ科と同定された分類群は、新潟県内ではサケ、イワナ（アメマス）、ヤマメ（サクラマス）が該当する〔本間監修1983〕。他の魚種と比較してサケ科が優占して検出されることか



第51図 魚類の種別組成（破片数・質量）

分類群	部位(左右)	質量(g)	破片数	分類群	部位(左右)	質量(g)	破片数	
板鰓類a	椎骨	0.57	129	カエル目	上腕骨 遠位端(左)	0.01	3	
板鰓類b	椎骨	0.78	35	カエル目	桡尺骨 近位端(右)	0.12	1	
板鰓類c	椎骨	1.70	43	カエル目	桡尺骨 (左)	0.09	1	
板鰓類d	椎骨	0.08	21	カエル目	寛骨 櫛骨(左)	0.38	4	
板鰓類e	椎骨	0.32	44	カエル目	脛腓骨	0.55	5	
板鰓類f	椎骨	3.46	62	カエル目	椎骨 椎弓	0.6	6	
サメ類a	歯	0.26	18	カエル目	椎骨 椎体	0.17	4	
サメ類b	歯	2.29	206	カエル目	尾骨	0.09	3	
サメ類c	歯	0.73	80	カエル目	部分不明	0.3	16	
サメ類d	歯	1.45	179	ヘビモドキ目	椎骨	0.01未満	1	
サメ類e	歯	0.02	5	キジ科	手蹠骨	0.03	1	
ニシゴイ科	腹椎	0.06	18	キジ科	頭足根骨 腕爪	0.09	1	
	尾椎	0.21	55	鳥類種不明	鎖骨	0.06	1	
マイワシ	第1椎骨	0.01未満	1	鳥類種不明	尺骨 遠位端	0.06	1	
	第2椎骨	0.01未満	3	鳥類種不明	尺骨根骨 遠位端(左)	0.03	1	
コノシロ	第1椎骨	0.01	2	鳥類種不明	尺骨中足骨 遠位端(右)	0.02	2	
	第2椎骨	0.01未満	1	鳥類種不明	尺板中足骨	0.08	1	
カタクチイワシ	尾椎	0.01未満	1	鳥類種不明	距骨	0.23	29	
コイ科	腹椎	0.03	8	鳥類種不明	大脛骨	0.09	5	
	尾椎	0.03	5	イタチ	下顎骨(右)	0.08	1	
アユ	腹椎	0.01未満	2	イノシシ	齒被片	0.12	2	
	尾椎	0.01	2	カモシカ	寛骨 實骨臼(右)	1.15	1	
	頭骨	0.02	3	カモシカ	第2-3手根骨	0.83	1	
サケ科	歯	0.71	113	ツキノワグマ	指骨	2.11	3	
	椎骨片	11.23	2855	二ホンシカ	角	0.39	1	
	腹椎	0.01	1	二ホンシカ	中手/中足骨 遠位端	2.27	2	
トゲウオ科	腹棘鱗(左)	0.01	2	二ホンシカ	末節骨	0.87	2	
	腹棘鱗(右)	0.01	3		頭蓋骨破片	0.03	1	
	背棘鱗	0.01未満	1		木ズクサ	被骨 近位端(左)	0.03	1
	腹棘鱗/背棘鱗	0.01未満	1		木ズクサ	被骨(左)	0.03	1
	主上顎骨(左)	0.01	1		木ズクサ	蹠骨(右)	0.04	1
コチ科	第1椎骨	0.04	1	ムササビ	肩甲骨 開閉窓(左)	0.11	1	
	腹椎	0.04	1	ムササビ	上腕骨 遠位端(左)	0.08	1	
	尾椎	0.02	1	ムササビ	尺骨 近位端(左)	0.007	1	
スズキ属	腹椎	0.23	1	ムササビ	大脛骨 近位端(右)	0.25	1	
	尾椎	0.06	2	ムササビ	距骨(右)	0.25	2	
アジ科	後椎	0.06	11					
	歯骨(左)	0.03	2					
	歯骨(右)	0.01	1					
ブリ属	方骨	0.01未満	1					
	腹椎	0.15	4					
	尾椎	0.04	1					
	前上顎骨/歯骨	0.12	5					
タイ科	歯骨	4.93	1182					
	腹椎	0.03	1					
	尾椎	0.14	1					
	歯骨(左)	0.02	1					
サバ属	舌頭骨(左)	0.01未満	1					
	方骨(左)	0.01未満	1					
	腹椎	0.29	14					
	尾椎	0.32	11					
マグロ族	尾椎	0.13	12					
	下尾骨	0.01未満	1					
ヒラメ科	腹椎	0.01	1					
	前上顎骨(右)	0.01	1					
カレイ科	尾椎	0.02	1					
	椎骨	0.02	1					
カワハギ科	背棘第1棘	0.01未満	2					
フグ科	腹椎	0.07	1					
	前上顎骨/歯骨(左)	0.02	2					
	前上顎骨/歯骨(右)	0.01	2					
	前上顎骨/歯骨	1.22	121					
	歯骨	0.14	38					
	角骨(左)	0.01	1					
魚類種不明	方骨(左)	0.02	3					
	第1腹椎	0.11	7					
	椎骨	3.94	486					
	尾部椎状骨	0.08	15					
	尾部椎状骨	0.03	5					
	下尾骨板	0.16	11					
	軟条	0.07	30					

第26表 動物遺存体の同定結果

2. 六反田南遺跡IVから出土した動物遺存体

ら、資源量・漁獲量の多いサケが主体であると推測される。サケは、産卵のために毎年決まった時期に河川を群れで遡上するため、時間的にも空間的にも獲得が予測できる資源である。

海水域に生息する種をみると、サメ類、マイワシ、カタクチイワシ、サバ属、マグロ族（幼魚）などの表層に分布する種、ヒラメ科、カレイ科、エイ類など底層に生息する種、コノシロ、スズキ属、コチ科など汽水域を好む魚種など、多様な漁撈活動を行っていたことが明らかとなった。

2) 狩猟活動

哺乳類はニホンジカ、イノシシ、ツキノワグマ、カモシカ、ムササビ、イタチ、ネズミ科が同定されたが、出土量が全体的に少なく狩猟活動が低調であったと考えられる（第26表）。とくに他の遺跡では主体となるニホンジカ、イノシシ、ツキノワグマ、カモシカといった大型哺乳類がほとんど見られないのが大きな特徴である。種不明の資料においても、大型哺乳類の骨片は非常に少なかった。

哺乳類以外ではキジ科、カエル類、ヘビ類が同定されたが、他の動物遺存体と同様に被熱した状態で出土しているため、キジ科だけでなくカエル類やヘビ類も食料資源として利用されたものと考えられる。

G 動物遺存体から見た六反田南遺跡IV

1) 周辺遺跡との比較

六反田南遺跡IVの周辺には、長者ヶ原遺跡、寺地遺跡、境A遺跡といったヒスイ製玉類や蛇紋岩製磨石斧の生産が行なわれている拠点的集落が立地する。そのうち、同時期に近い動物遺存体が出土した事例としては、縄文時代中期～晚期の焼けた骨が多量に検出された境A遺跡がある。境A遺跡から出土した魚類を見ると、淡水魚ではサケ科、海水魚ではサメ類が非常に多く出土し、タイ科もこれに次いで多く出土した。哺乳類は、ニホンカモシカやツキノワグマが多く出土し、ニホンジカ、イノシシ、ニホンザル、イルカ類がこれに次いでいた〔金子 1992〕。

境A遺跡は多くの資料が縄文時代中期～晚期の包含層から出土しているために縄文時代中期に限定した議論ができるものの、サメ類が優占するという出土魚類の傾向は六反田南遺跡IVと共通したものである。一方で、哺乳類の出土量が非常に少ない点が六反田南遺跡IVの特徴といえる。

2) 六反田南遺跡におけるこれまでの議論

縄文時代中期における拠点的集落の多くが段丘や丘陵上に立地するのに対し、海岸部の沖積低地に所在する六反田南遺跡は拠点的集落と性格の異なる遺跡といわれている。平成19・20年度の調査において堅穴住居群が検出されているが、長者ヶ原遺跡や寺地遺跡などの周辺の拠点的集落と比較すると、六反田南遺跡は遺構の重複が認められず、遺物量も少ないと短期間の集落であった可能性が指摘された。また、土器では在地の影響がほとんど認められない東北系土器が出土することから別集団の存在も想定されている。石器では石鏃が全く出土していないことが特筆できる〔新潟県教育委員会編 2010、寺崎 2011〕。

異系統土器の存在は、日本海沿岸における人や物の動きを示唆するものであり、それを担う人々の生業活動として海水面漁撈の実態は重要である〔今村 2006a・b〕。六反田南遺跡では、河川におけるサケ科魚類の集中的な獲得とともに、海水域における多様な漁撈活動が行なわれたことが明らかとなった。そして、哺乳類（とくに大型哺乳類）の出土量が非常に少ないという特徴も、平成19・20年度の調査において石鏃が全く出土していない点と関連性が示唆される。

ただし、平成19・20年度に調査された「居住城」と平成21年度に調査された「廃棄城」では土器の様相に違いがあるため、同じ集落や集團として見なすことができない可能性があり、他の共伴する遺物から得られる所見とともに総合的に判断する必要がある。

今後、周辺遺跡において資料が蓄積されて、拠点的集落、小規模集落、短期的集落と解釈される遺跡の比較が進めば、より蓋然性の高い解釈が可能となることが期待できる。ただし、日本海側における動物道存体は、六反田南遺跡、寺地遺跡、境A遺跡のように焼けた骨片である可能性が高い。とくに今回の分析資料は、残存長が1cmに満たない微細な骨片ばかりであり、発掘調査現場や整理作業の段階で適切な土壤選別が実施されたことが非常に重要であったと評価することができる。今回の報告が、動物道存体の出土事例の少ない新潟県における今後の発掘調査につながれば幸いである。

謝辞

本報告を行うに当たり、下記の方々からご教示やご協力を賜りました。記して、感謝の意を表します。小野林太郎、藤田美美、堀江琢、松井章、丸山真史（敬称略、50音順）

引用文献

- 阿部永監修 2008 「日本の哺乳類（改訂第2版）」東海大学出版会
- 糸魚川淳二・西本博行・柄澤宏明・奥村好次 1985 「瑞浪層群の化石3.サメ・エイ類（板鰓類）」瑞浪市化石博物館専報5
- 今村啓二 2006a 「縄文時代前期末における北陸集団の北上と土器系統の動き（上）」「考古学雑誌」90-3, 1-43頁
- 今村啓二 2006b 「縄文時代前期末における北陸集団の北上と土器系統の動き（下）」「考古学雑誌」90-4, 36-53頁
- 金子浩昌 1992 「境A遺跡における脊椎動物道存体」「北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編7－境A遺跡総括編」165-222頁
- 中坊徹次編 2000 「日本産魚類検索 全種の同定（第2版）」東海大学出版会
- 寺崎裕助 2011 「縄文時代における移動・移住の一事象－新潟県糸魚川市六反田南遺跡と秋田県男鹿市大烟台遺跡の事例から－」『新潟県立歴史博物館研究紀要』12, 89-108頁
- 舩泉岳二 1999 「池子遺跡群No.1-A 地点における魚類道存体と弥生時代の漁撈活動」「池子遺跡群X 第4分冊」311-339頁
- 舩泉岳二 2003 「魚類道存体」「羽根尾貝塚」302-323頁
- 新潟県教育委員会編 2010 「六反田南遺跡II」新潟県埋蔵文化財調査報告書第211集
- 本間義治 1992 「新潟県海の魚類図鑑」新潟日報事業社
- 本間義治監修・新潟日報事業社編 1983 「新潟県陸水動物図鑑」新潟日報事業社

3 六反田南遺跡IV下層の廃棄域における種実同定

株式会社 古環境研究所

A はじめに

植物の種子や果実は比較的強革なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

B 試 料

試料は、遺構名37Fグリッドと38Fグリッドから篩(1mm, 3mm, 5mm)ごとに洗い出された試料である。詳細は第27表に示す。

C 方 法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴及び現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

D 結 果

1) 分類群

樹木17、樹木・草本を含むもの1、草本9、計27分類群が同定される。学名、和名及び粒数を第27表に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、写真に示したものサイズを記載する。

a 樹 木

イヌガヤ? *Cephalotaxus harringtonia* K.Koch? 種子(破片) イヌガヤ科

狭楕円体や長楕円体を呈する。側面では、基部は鈍隆条、先端の方は鋭い後に変わる。ここでは破片の為?とする。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don 種子 スギ科

茶褐色で長楕円形を呈し、狭い側翼がある。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 横(完形・破片) クルミ科 長さ×幅×厚さ 30.59mm×27.05mm×23.59mm、30.47mm×26.98mm×25.94mm

茶褐色で円形~楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。

クリ *Castanea crenata* S. et Z. 種子(完形・破片) ブナ科

種子は黒褐色で広楕円形を呈し、下端に広いつき部がある。断面は楕円~半円形である。

コナラ属 *Quercus* 子葉(破片) ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、破片のため属レベルの同定までである。

ブナ科 *Fagaceae* 子葉(破片)

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。著しく炭化し分解が進んでいるため、

科レベルの同定までである。

サンショウ *Zanthoxylum piperitum* DC. 種子 ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面に短いへそがある。表面には網目模様がある。

カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* S. et Z. 種子 ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面に長く深いへそがある。表面には大きい網目模様がある。

サンショウ属 *Zanthoxylum* 種子 ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面にへそがある。表面には網目模様がある。サンショウ、カラスザンショウの破片であり、同定面が欠落しているためサンショウ属とする。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. et Arg. 種子 (完形・破片) トウダイグサ科

黒色で球形を呈し、「Y」字状のへそがある。表面にはいは状の突起が密に分布する。

カエデ属 *Acer* 果実 カエデ科

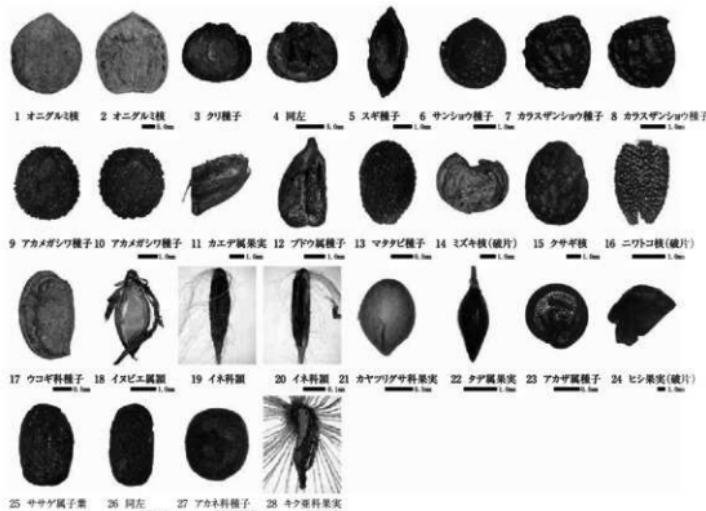
茶褐色で楕円形を呈す。翼は残存していない。果皮には弱い縦線が走る。断面は扁平である。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 種子 (破片) トチノキ科

楕円形を呈し、黒色と茶褐色の部分とに分かれ、黒色の部分に光沢がある。

ブドウ属 *Vitis* 種子 (完形・破片) ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。



第52図 六反田南遺跡IVの種実

マタタビ *Actinidia polygama* Planch. ex Maxim. 種子 マタタビ科

暗褐色ないしやや紫色を帯びる茶褐色で、楕円形を呈す。断面は両凸レンズ形、表面には穴が規則的に分布する。

ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. 核（破片）ミズキ科

黒褐色で横長の楕円形を呈す。表面には縱方向に深い筋が走る。

クサギ *Clerodendrum trichotomum* Thunb. 核（完形・破片）クマツヅラ科

暗褐色で倒卵形を呈す。断面は三日月形。腹部の一端には発芽口があり、背面の表面には大きな網目状の模様がある。

ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex graedn 核（破片）スイカズラ科

黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には横方向の隆起がある。

b 樹木・草本を含むもの

ウコギ科 Araliaceae 種子

淡褐色ないし茶褐色で、半月状を呈する。断面は扁平、向軸側はほぼ直線状になり、肺軸側には浅い溝が2～3本走る。表面はざらつく。

遺構名	部位	分類群		部位	個数
		学名	和名		
37F 廻	a	Juglans ailanthifolia Carr	オニグルミ	核（破片）	576
		Castanea crenata S. et Z.	クリ	種子	1
		Zanthoxylum ailanthoides S. et Z.	カラスザンショウ	種子（破片）	17
		Zanthoxylum	サンショウ属	種子	159
		Mallotus japonicus Muell. et Arg.	アカメガシワ	種子（破片）	178
		Actinidia polygama	マタタビ	種子（破片）	25
		Swida controversa	ミズキ	核（破片）	2
		Clerodendrum trichotomum	クサギ	核（破片）	1
		Sambucus sieboldiana	ニワトコ	核（破片）	2
		Araliaceae	ウコギ科	種子	11
		Echinocloa Beauv.	イヌビエ属	種子	4
		Gramineae	イネ科	種子	3
		Chenopodium	アカザ属	種子	15
		Vigna	サルゲ属	種子（半形）	1
	b	Unknown plants	他の植物遺体		159
		Charcoal	炭化物		8
		Juglans ailanthifolia Carr	オニグルミ	核（破片）	949
		Castanea crenata S. et Z.	クリ	種子（破片）	8
		Zanthoxylum piperitum DC.	サンショウ	種子	2
		Zanthoxylum ailanthoides S. et Z.	カラスザンショウ	種子	460
		Zanthoxylum	サンショウ属	種子（破片）	487
		Mallotus japonicus Muell. et Arg.	アカメガシワ	種子	2
		Sambucus sieboldiana	ニワトコ	種子	1
		Araliaceae	ウコギ科	種子（破片）	1
		Echinocloa Beauv.	イヌビエ属	種子	1
		Gramineae	イネ科	種子	15
		Vigna	サルゲ属	種子	2
		Rubiaceae	アカネ科	種子	1
		Asteroidae	カキア科	果実	1
		Unknown plants	他の植物遺体		94
		Charcoal	炭化物		57

第27表 六反田南遺跡IVにおける種実同定結果(1)

遺構名	層位	分類群		部位	個数
		学名	和名		
38F	VII	Cryptomeria japonica D. Don	スギ	種子	1
		Juglans ailanthifolia Carr	オニグルミ	核(破片)	4077
		Castanea crenata S. et Z.	クリ	種子	7
		Fagaceae	ブナ科	子葉(破片)	625
		Zanthoxylum piperitum DC.	サンショウ	種子	3
		Zanthoxylum ailanthoides S. et Z.	カラスザンショウ	種子	1
		Zanthoxylum	サンショウ属	種子(破片)	311
		Acer	カエデ属	(破片)	551
		Vitis	ブドウ属	果実	64
		Mallotus japonicus Muell. et Arg.	アカメガシワ	種子(破片)	3
		Actinidia polygama Planch. ex Maxim	マタタビ	種子(破片)	3
		Clerodendrum trichotomum Thunb.	クサギ	核	1
		Sambucus sieboldiana Blume ex Graedn	ニワトコ	(破片)	33
		Araliaceae	ウコギ科	種子(破片)	40
		Echinochloa Beauv.	ウコギ科	核	5
		Gramineae	イヌビエ属	(破片)	5
		Cyperaceae	イネ科	種子	3
		Vigna	カラヤクサ科	果実	6
		Rubiaceae	アカネ科	種子	1
		Polygonum	タデ属	果実	12
		Unknown seeds	不明種実	(破片)	1
		Unknown plants	他の植物遺体		2543
		Charcoal	炭化物		25
		Juglans ailanthifolia Carr	オニグルミ	核	2
		Castanea crenata S. et Z.	クリ	(破片)	591
		Quercus	コナラ属	種子(破片)	55
a	VII	Fagaceae	ブナ科	子葉(破片)	2
		Zanthoxylum piperitum DC.	サンショウ	子葉(破片)	1
		Zanthoxylum ailanthoides S. et Z.	カラスザンショウ	種子	4
		Zanthoxylum	サンショウ属	種子(破片)	1429
		Mallotus japonicus Muell. et Arg.	アカメガシワ	(破片)	125
		Aesculus turbinata Blume	トチノキ	種子	30
		Clerodendrum trichotomum Thunb.	クサギ	種子(破片)	1
		Gramineae	イネ科	種子(破片)	13
		Trapa japonica Flerov.	ヒシ	種子(破片)	1
		Rubiaceae	アカネ科	核	1
37P9	覆土	Unknown plants	他の植物遺体		444
		Charcoal	炭化物		6
		Cephalotaxus harringtonia K. Koch?	イヌガヤ?	種子(破片)	1
		Juglans ailanthifolia Carr	オニグルミ	核(破片)	9
SK52J	覆土	Zanthoxylum ailanthoides S. et Z.	カラスザンショウ	種子(破片)	8
		Juglans ailanthifolia Carr	オニグルミ	核(破片)	2
38F11	覆土	Zanthoxylum ailanthoides S. et Z.	カラスザンショウ	種子	2
		Mallotus japonicus Muell. et Arg.	アカメガシワ	(破片)	9
SK45J	覆土	Juglans ailanthifolia Carr	オニグルミ	種子(破片)	2
		Mallotus japonicus Muell. et Arg.	アカメガシワ	核(破片)	3
38F13	覆土	Juglans ailanthifolia Carr	オニグルミ	種子(破片)	3
		Mallotus japonicus Muell. et Arg.	アカメガシワ	種子(破片)	3
SC42J	覆土				

第28表 六反田南遺跡IVにおける種実同定結果（2）

b 草 本

イヌビエ属 *Echinochloa* 種（未炭化）イネ科

茶褐色で楕円形を呈す。表面には微細な縱方向の模様がある。

イネ科 *Gramineae* 種（未炭化）

穂は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

灰褐色～茶褐色で紡錘形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

カヤツリグサ科 *Cyperaceae* 果実

茶褐色でやや狭い倒卵形を呈す。断面は両凸レンズ形である。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

黒褐色で頂端の尖る広卵形を呈す。断面は三角形、表面には光沢がある。

アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科

黒色で光沢があり円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

ササゲ属 *Vigna* 種子（完形・半形）マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縱に細長い。

ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状の研究では識別は困難である。

ヒシ *Trapa japonica* Flerov 果実（破片）ヒシ科

黒褐色を呈し、ヒシ特有の角（上位角）の破片が得られた。

アカネ科 *Rubiaceae* 種子

偏球形を呈し、背面は広楕円状円形である。中央に円形の穴がある。

キク亜科 *Asteroideae* 果実 キク科

茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縱方向に8本程度の筋が走る。

不明種実 Unknown seeds

種実ではあるが、著しく炭化し分解が進んでいるため表面模様、また同定面が観察できないため不明種実とする。

不明植物遺体 Unknown plants

植物ではあるが、種実ではないもの。

不明炭化物 Unknown charred material

著しく炭化し分解が進んでいるため表面模様、また同定面が観察できないため種実か不明のため不明炭化物とする。

E 考 察

六反田南遺跡IVにおける種実同定の結果、樹木ではイスガヤ？、スギ、オニグルミ、クリ、コナラ属、ブナ科、サンショウ、カラスザンショウ、サンショウウ属、アカメガシワ、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、マタタビ、ミズキ、クサギ、ニワトコ、樹木・草本を含むものではウコギ科、草本ではイヌビエ属、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、アカザ属、ササゲ属、ヒシ、アカネ科、キク亜科が同定された。

37F グリッドと 38F グリッドともオニグルミとカラスザンショウが多く、アカメガシワ、クサギが続き。

同じ傾向を示す。カラスザンショウ、アカメガシワ、クサギは林縁ないし二次林種であり、人為干渉により多くなった樹木と見なされる。オニグルミは食用になり、核は破片がほとんどであり、種子を取り出すために割られ捨てられたとみなされる。食用になるものとしては、クリ、コナラ属、サンショウ、ブドウ属、マタタビ、ニワトコ、ササゲ属、ヒシがある。サンショウやニワトコはカラスザンショウと同じく、林縁ないし二次林種であり、人為干渉により多くなった樹木の可能性がある。

以上から、六反田南遺跡Ⅳの周辺は人為活動ないし人為干渉の著しく、カラスザンショウが多く、アカメガシワ、クサギなどの林縁ないし二次林種の樹木が生育し、オニグルミを中心に、クリ、コナラ属、ブドウ属、マタタビ、ニワトコ、ササゲ属、ヒシなどが食べられていた。オニグルミは破片であるためと分解しにくく多くなった可能性もある。

参考文献

- 笠原安夫 1985 「日本雑草図説」 善賢堂 494p.
- 南木睦彦 1991 「栽培植物」「古墳時代の研究第4巻 生産と流通Ⅰ」 雄山閣出版株式会社 p.165 - 174.
- 南木睦彦 1992 「低湿地遺跡の種実」『月刊考古学ジャーナル No.355』 ニューサイエンス社 p.18 - 22.
- 南木睦彦 1993 「葉・果実・種子」「日本第四紀学会編 第四紀試料分析法」東京大学出版会 p.276 - 283.
- 渡辺 誠 1975 「绳文時代の植物食」 雄山閣 187p.

第VII章 まとめ

1 繩文時代中期前葉～中葉の調査（下層の調査）

KDI 区では、遺物が多量に出土した廃棄域を検出した。中でも動植物遺存体の出土は、当地域における生業活動の様相を伝えてくれる好資料となった。KBI 区では当時の流路の一角と考えられる範囲を検出し、KDI 区よりも若干新相を呈する土器が出土した。本稿では多量の遺物が出土した廃棄域を中心に、下層の調査における成果をまとめ、今後の展望を示したい。

A 廃棄域の様子

1) 土器様相と編年

KDI 区北端部の廃棄域（F グリッド及び E グリッド北半の約 80m² の範囲）から、多量の土器・土製品・石器・石製品・動植物遺存体が出土した。南東に向かい徐々に標高を下げる緩傾斜面部からの出土で、総重量 950 kg（浅箱約 170 箱）、縄文土器にあっては 669kg（浅箱約 120 箱）に達した。このうち個体の 2/3 以上を復元できた、もしくは復元可能なものは 150 点近くに及ぶ。この復元率の高さは図版 66・67 からも知れるように、個体がその場でつぶれた状態（横倒しなど）で出土し、廃棄当初の現位置を留めるものが多いことや、同一個体の破片がまとまって出土するなど、廃棄の在り方に起因する。主体は A 類の北陸系で、中期前葉～中葉の新崎式（A 1 類）と上山田・天神山式（A 2 類）である。本域の上山田・天神山式はこれまでの六反田南遺跡の調査で出土したものよりも古相を呈すると考えられる。

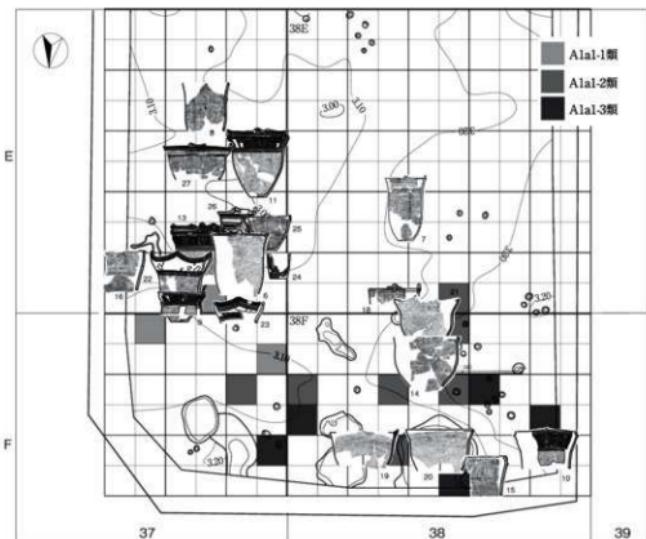
以下、主体となる A 類土器を中心に、廃棄域における土器様相と編年を検討する。

各類における土器の分布状況について（第 53 ～ 57 図）

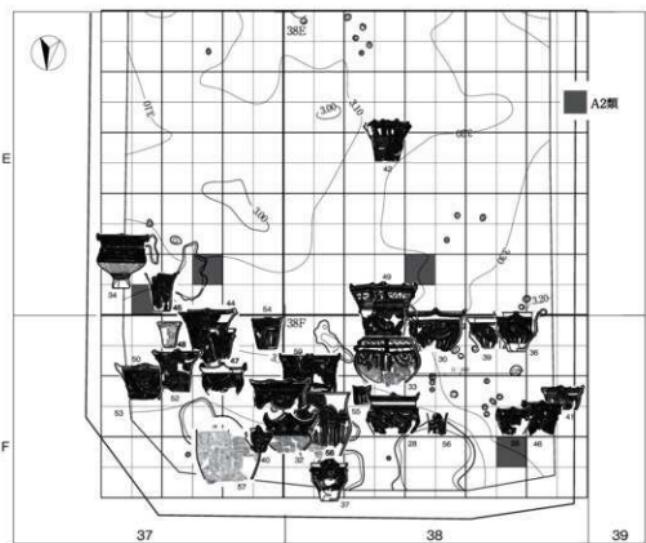
はじめに、各類における土器の分布状況について見る。

特徴的なのは A 1 類の分布である（第 53 図）。ほとんどの土器が 37・38F グリッドに分布するのに対し、A 1 類は 37・38F グリッド以南の E グリッドにも分布する。これは廃棄の変遷を表していると考えられ、本域で最古相を呈する A 1 類期は広く廃棄の場を持っていたが、次段階の A 2 類期には F グリッド以北に廃棄の場を移したと推測できる。

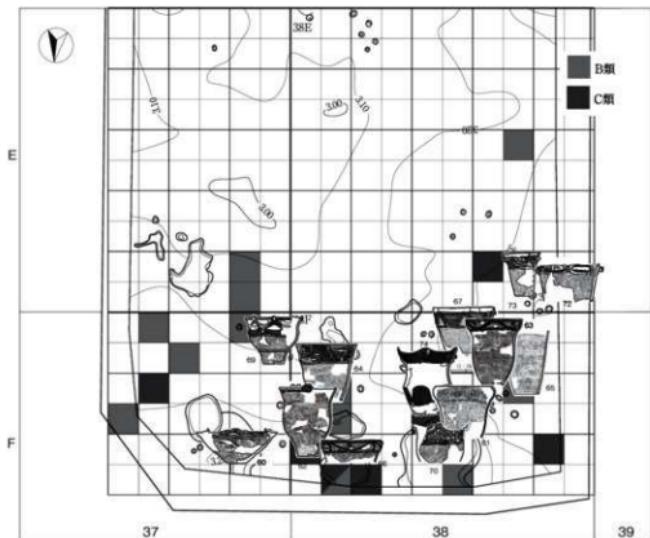
このほか、同類型で器形やつくりが似る土器が、比較的近い位置から出土する傾向にあるのも一つの特徴といえる。特に A 1 類では A 1a 1 - 3 類の 22・23（第 53 図）、A 2 類では A 2a 1 - 1 類の 47・48 や A 2b 2 類の 36・39（第 54 図）、A 3 類では 139・140・142・146 や 141・145（第 57 図）、B 類では 63・65 や 62・64（第 55 図）、C 類では C1 類の 68・69 や C 2 類の 72・73（第 55 図）などが、隣接または同じグリッドから出土している。また D 3 類は 37F グリッドに多く出土する傾向にある（第 56 図）。



第53図 廃棄域におけるA 1類分布図 (S=1/140)



第54図 廃棄域におけるA 2類分布図 (S=1/140)



第55図 廃棄域におけるB・C類分布図 (S=1/140)



第56図 廃棄域におけるD3類分布図 (S=1/140)

A類 北陸系の深鉢・鉢について

次に、主体的に出土したA類土器について見る。

a A1類とA2類の定義

A1類（新崎式）とA2類（上山田・天神山式）との大きな違いは、「器面を斜行する渦巻きをもつ基隆帯を主文様とし、（中略）豪華な深鉢形土器群【小島2008】」とするように、A1類では認められなかった降帯による渦巻文が、A2類には認められることがある。さらに文様構成に注目すると、深鉢はA1類が横位区画により文様帯を分ける土器（A1a1類）で占められるが、A2類では文様帯を分けない土器（A2a2類）も認められるようになってくる。ほかに、A1類ではほとんどなかった鉢ⅰが、A2類では主体を成すようになることも一つの画期といえる（A2b類）。

b A1類について

新崎式土器群である。器種・器形は深鉢ⅰ・ⅱが主体で鉢はごくわずかである。深鉢の文様構成は、横位区画により文様帯を分けるA1a1類のみで、区画がないA1b類は基本的に認められない。

A1a1-1類（6~8・148~152）の器形は深鉢ⅰに集約され、文様は口縁部文様帯が横位に、胴部文様帯が縦位に展開する。「連鎖状竹管手法による刻印蓮華文や竈書き手法による格子目文が認められる」とする新崎式第Ⅱ段階【寺崎2009】に比定できる。A1a1-2類（9~18・153~158）の器形は深鉢ⅱに集約され、文様は口縁部文様帯が横位に展開するが、胴部文様帯は撚文地文となる。「長花弁蓮華文が見られるようになる」とする新崎式第Ⅲ段階【寺崎2009】に比定できる。A1a1-3類及びA1b類（19~23・167~171）には、器形がA2類に主体的な鉢ⅰも認められるが（19~21）、A2類に比して大型である。無文帶縁辺に楔形刻目文を施す土器については、型式学的に一時期が設定される場合があるが、まとめた資料に乏しいため確立はされていないという【布尾2007】。楔形刻目文自体は、新崎式第Ⅱ段階から出現する。

c A2類について

上山田・天神山式土器群である。器種・器形は鉢ⅰが主体を成し、そのほか深鉢ⅲ・ⅷ・ⅸ、台付土器で構成される。深鉢の文様構成は、A1類ではなかった文様帯を分けず縦位に展開するA2a2類が認められるようになる。大枠で見れば「斜行する渦巻き状文や横位に連結する渦巻き状文を主たるモチーフ」とする上山田式2・3期【布尾2007】に比定できそうであるが、A2a1-1類及びA2b1類には注意したい。

A2a類は深鉢形を呈する土器群で、器形は深鉢ⅲを主とする。A2a1-1類（42・47・49・50）の降帯は、50を除くと渦を巻かない。また42・47・49は、楔形刻目文や三角形陰刻文などA1類に多用される施文要素を見て取れる。A2a1-2類は「道尻手遺跡」の「第Ⅱ群第3B2類」【佐藤ほか2005】、「五丁歩遺跡」の「降IIb系列」【高橋保ほか1992】に類するものと考えられる。五丁歩遺跡の「口縁部文様帯は斜め方向に走る渦巻き文を基本としており（中略）越後的な模様割り付けである」という指摘に照らせば、本類は越後の影響を考慮すべき土器ととらえられ、いわゆる「越後系」の土器【寺崎2004】と理解できる。しかし、胴部文様帯下半部の施文はいわゆるコスモス状文で上山田・天神山式土器など、該期の北陸系に多く見られる施文であることから、越後と北陸の文化が密接に関わった土器といえそうだ。文様帯を

分けない A 2a 2 類 (43~46, 58, 59) は上山田・天神山式の典型といえるもので、上山田式 2・3 期 [布尾 2007] に比定できる。

A 2b 類は鉢形を呈する土器群で、器形は鉢 i に集約される。A 2b 1 類 (28~30) は、他の A 2b 類に比して大型である。注目すべきは 28 で、斜位に流れ途中向きを変え垂下する隆帯や、蓮華文・綾杉文・楔形刻目文が施され、A 2a 1-1 類と様相が似る。「新しい施文要素が認められる」とする上山田式 1 期 [布尾 2007] に近いといえるが、該期のものは「器形は前時期のものが踏襲される」としており、A 2 類で確立すると考える鉢 i が主体となる本類には適さない。したがって、上山田式 1 期よりは後出だが、斜行渦巻文の確立する 2・3 期までは下らないと推測でき、文様構成が似る A 2a 1-1 類もこれに並行するものと考えられる。A 2b 2 類は蓮華文が認められない一群で、A 2 類の主体を成す類型である。これは A 2b 1 類より後出の上山田式 2・3 期と考えたい。

d A 1 類から A 2 類への変遷

以上 A 1・2 類を概観し、器形・文様等から編年觀を示した。まとめると、器種・器形に関しては、A 1 類期では深鉢 i, ii が主体だが A 2 類期になると鉢 i が主体となる。A 2 類期の深鉢は A 1 類の深鉢 ii の流れを組むような深鉢苗が成立する。横位区画による文様帶の有無については、A 1 類期は横位区画により上下二分されるが、A 2 類期には区画を持たないものも出現する (A 2a 2 類)。A 2a 1-1 類及び A 2b 1 類は前段階の A 1 類の施文要素が垣間見られ、過渡的な土器と推測される。

B ~ D 類 異系統土器について

北陸系のはか、東北系 (B 類)・中部高地系 (C 類)・そのほか系統不明な土器 (D 類) も出土している。これは六反田南遺跡 II でも同様である。中でも出土率が高かったのは D 3 類の「頭部に側面圧痕を持つ土器」で、A 2 類に次ぐ出土率の高さであった。廃棄域全域に分布し、A 1 類の分布傾向を示す。本類は前葉～中葉 (大木 7b ~ 8b 式並行) の土器に供伴し、新潟県全域や富山・石川方面にもその分布が知られている。しかし、型式設定や編年体系には組み込まれておらず、いわゆる粗製土器の類として扱われることが多い。各説でも記したように、簡素なつくりの中にもいくつかの規則性が見られ、特徴的な土器である。また、器形に A 類土器に主体的な深鉢 i や鉢 i などが見受けられることも特徴といえ、この土器を考える一助になるか。六反田南遺跡 II 第Ⅲ群 a 類に当たり、本遺跡内のどの地点からも普遍的に出土する。

縄文原体の側面圧痕を持つ土器は、B 1 類 60・61 でも見られる。60 は [齋田 2000] の「1 類 口縁部が 4ヶ所で肥厚して突起を形成する」大木 7b 式の浅鉢、[佐藤 2001] の「東北系 1 類」に比類する。60・61 の分布や、61 と 63・66 の器形が深鉢 iv で法量や胎土などが共通することをかんがみると、大木 8a 式並行といえそうだ。[齋田 2000] でも大木 8a 式との供伴事例を挙げ、「少なくとも大木 8a 式期までは継続する」ことを指摘している。この浅鉢は中越地方までは積極的に分布するが上越地方にはほとんど見られず、現時点では本遺跡の 60 が最西端の出土例となる。本類の系統には在地化して越後の変容を遂げるものが多い中 ([齋田 2000] の「2 類」、[佐藤 2001] の「東北系 II 類」)、60 は東北系そのものといった感がある。

C 1 類は「新道式の影響を受けて成立したとみなされている口縁部に半円・三角形の区画がなされるもの」[布尾 2007] として知られ、主に富山・石川県に分布する。周辺では宇奈月町浦山寺藏遺跡 [富山県埋蔵文化財センター 2011]、富山市鏡坂 I 遺跡 [婦中町教育委員会 2000] で出土している。新道式は一般的に大木 7b 式並行だが、廃棄域での分布は上山田・天神山式系である A 2 類、大木 8a 式系である B 類と同様の傾向を示し、該期に並行するものと考えたい。

浅鉢について

廃棄域からは、北陸系の浅鉢も多く出土した（A3類）。北陸系の浅鉢は直径50cm前後と大型なもののが主で、黒漆や赤漆を塗布したもののが大半である。第57図に、浅鉢の分布を土製品の分布と併せ示した。

37F8・9グリッドには139・140・142・146が密集している。この範囲からは中空土偶の左脚部（290）と胴部（291）が、また隣接する37F4・10グリッドから同腕部（288）と右脚（289）が出土しており、祭祀の可能性がある。

北陸系のほかにも系統不明なものが出土している。135～138は、A3類に比すと小ぶりで口径30cm前後である。135はほかの浅鉢から分布が外れる。内面に段を持ち、漏斗状を呈する器形で少々趣が異なる。Fグリッド以北に分布することを考慮すると、A1類段階の可能性がある。

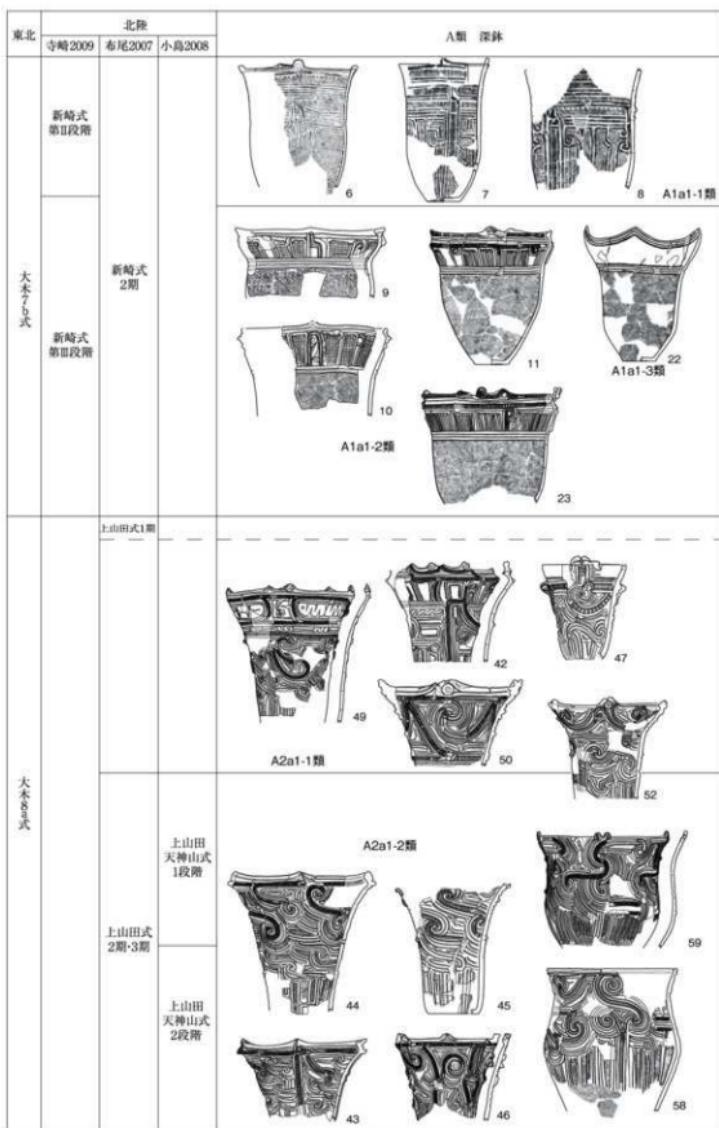


第57図 廃棄域における浅鉢・土製品の分布図 (S=1/140)

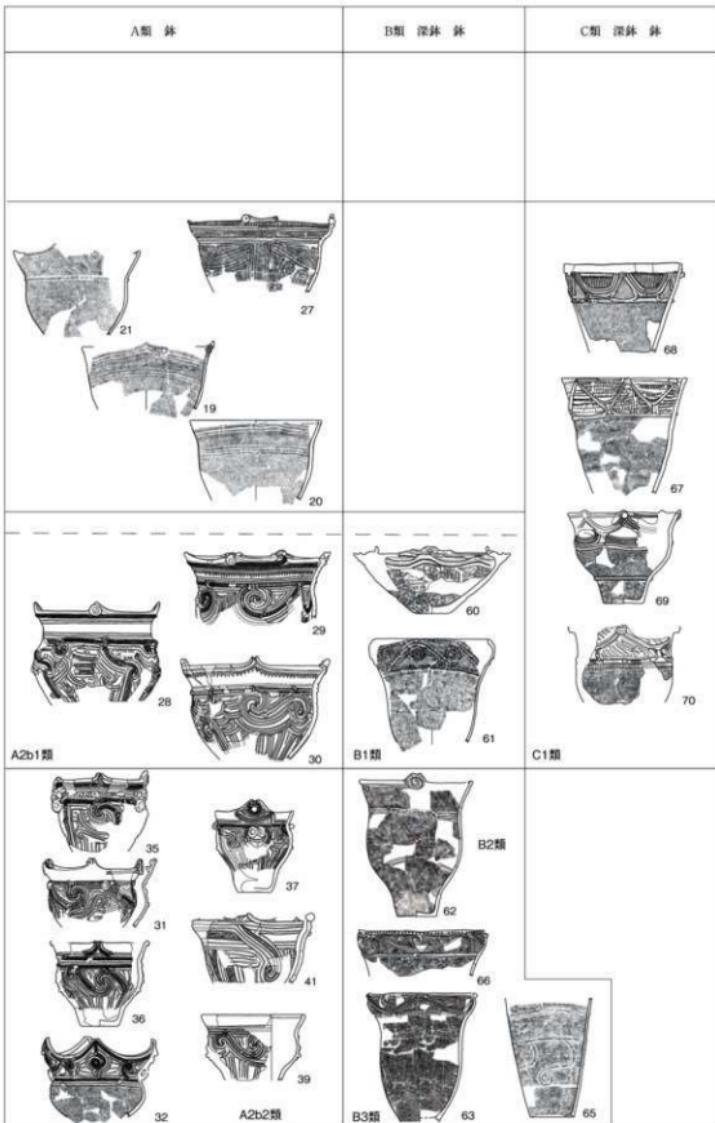
廃棄域の土器様相～編年試案～

以上、器形や施文要素、平面分布等から、各類における廃棄域の土器様相を検討した。主体となったA類を軸に、第58・59図に本域における土器編年試案を作成した。また、KB1区下層及び六反田南遺跡II・III下層の土器との対応関係を第29表に示した。

本遺跡が所在する糸魚川市は、富山県・長野県に接する。中部高地系（C類）も出土するが、主体は圧倒的に北陸系で、本遺跡が北陸文化圏に属することを物語る。また、今回廃棄域で出土した土器は、朝日



第58図 廃棄域における土器編年試案（1）



第59図 廣東域における土器編年試案（2）

町下山新遺跡〔金三津・朝田 2009〕、宇奈月町浦山寺藏遺跡〔富山県埋蔵文化財センター 2011〕、同愛本新遺跡〔宇奈月町教育委員会 1971〕、富山市鏡坂 I 遺跡〔婦中町教育委員会 2000〕等富山県北東部で出土する当該期の土器とつくり・施文法などが酷似しており、極めて北陸的な土器といえる。特に浦山寺藏遺跡土器捨て場出土の上山田・天神山式は、「口縁部と胴部の文様帯が隆帯などで上下二つに分けられる例」〔富山県埋蔵文化財センター 2011〕とする、本遺跡 A 2a 1 - 1・A 2b 1 類に比類するものが多く、また土器組成も似るなど注目される。この例について、県内では五丁歩遺跡 II b 系列、道尻手遺跡第 II 群第 3B 2 類が挙げられるが、両者は火炎土器文化圏にあり、「頭部に横位区画が施されると越後の土器となり」〔寺崎 2004〕とされるいわゆる越後系と理解でき、北陸のそれとは系統を異にすると思われる。A 2a 1 - 1 類や A 2b 1 類等の例は、前段階の新崎式の流れを組む文様構成であると考える。

東北	北陸			六反田南遺跡			
	寺崎2009	小島2008	布尾2007	本報告	II 「細井口2009」	III 「細井口2010」	主な供伴土器
大木7a式 新崎式 第Ⅰ段階			新崎式I期			KF区下層 土器報告No1・4・5 (流路)	
大木7b式 新崎式 第Ⅱ段階			新崎式2期	Alal-1類 Alal-3類 Alal-2類	第1群 (湿地帯)		
大木8a式		上山田式I期		A2a1-1類 A2b1B1類			新道式系 (一部井戸 尻式系)
	上山田・天神山式 1段階	上山田式	2・3期	A2a1-2類 A2b2類 B2・3類 C類			
	上山田・天神山式 2段階						
	上山田・天神山式 3段階			KB1区 下層	第II群 (居住域)		円筒上層d式

第29表 六反田南遺跡 II～IVにおける下層出土土器編年対応表

2) 中空土偶について

廃棄城で出土した土偶は4点ある。破壊行為によるものか、いずれも破片で出土した。288～291は胎土、つくり、施文等から同一個体と考えられる。半径4メートル圏内に破片が分布するが、37F 9・10グリッドでは A 3 類の浅鉢と分布が重なる(第57図)。さらに37F 9・2・4では横倒しの状態で出土した石棒未成品(390)が出土しており、これを含め祭祀がなされた、または祭祀遺物を一括廃棄した可能性がある。

288～291は体長20cm強と推測され、大型土偶の類に属する(第IV章2B 3) 第16図参照)。当地域における大型土偶の著名なものに、長者ケ原遺跡ホ・マ-43区東西トレンチ出土品及び個人寄贈品〔糸魚川市教育委員会1998〕がある。いずれも中実で、板状土偶である。前者は中期前葉の所産で体部はバイオリン形を呈し、両腕には懸垂孔を穿つ。施文は新崎式のモチーフが施されるか所がある。後者はほぼ完形で頭部が舟形を呈するパンザイ形土偶で、体長は30cmを測る。古府式期の土偶と共通性が多いとの指摘がある〔石川2004〕。本遺跡の中空土偶はいわゆる「長山タイプ」に属し、施文は半截竹管による隆線と隆線上に施された綾杉文や空白部の縁辺に施された楔形刻目などが主で、北陸的である。施文要素を土器に照らせば、A 2a 1 - 1・A 2b 1 類の施文と酷似しており、該期の土偶であると推測される。大木7b式期に大形品や中空品が出現し、有脚・立像が主で大木8a期には無脚・板状のものが出現する〔石川2004〕ことをかんがみれば、本遺

跡の中空土偶（288～291）は施文が A 2a 1-1 類的で、上山田・天神山式の中でも古段階の所産といえ、編年を考えるならば長者ヶ原遺跡トレンチ出土品と寄贈品との間に位置付けることができそうだ。

3) 石器組成

第30表・第60図に、廃棄域及び六反田南遺跡II（居住域ほか）における石器組成をまとめた。区域分けは第61図を参照されたい。表中の「用途」は六反田南遺跡IIの定義に準拠している。

どの区域でもスクレイパー・鋸歯縁石器は過半数以上を占める。貝殻状剥片（素材）の獲得が容易であること、簡易な加工または未加工で使用できることなどが、多用される理由であろう。

このほか比較的高い割合を示すのが廃棄域と居住域における磨製石斧未成品である。これは居住域で製作し、失敗品等を廃棄した背景が想定できそうであるが、廃棄域の土器は居住域のものより古相を呈すると考えられるため（第29表）、廃棄域に対応する居住域はまた別にあり、そこでも磨製石斧製作がなされていた可能性がある。

廃棄域では、これまでの六反田南遺跡の調査で皆無だった「狩猟・漁撈具」の石錐・石錐が出土している。狩猟・漁撈具は生業活動における重要な道具であり、多量に出土した動物遺存体と密接に関わる。動物遺存体は魚類がほとんどで、石錐を利用して狩るような中・大型の哺乳類が極端に少ないことは、本域における石錐の用途論や獵物の対象を想定する上で興味深い。しかし、今回検出した廃棄域はあくまでも「一画」と考えられ、ともすると哺乳類の残滓はまとめて別の場所に廃棄した可能性もある。今後の調査が期待される。

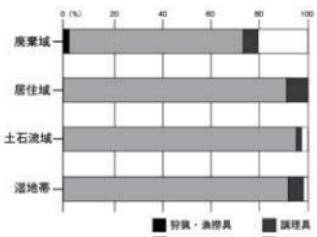
B 繩文時代中期の六反田南遺跡

調査は今後も継続するが、現時点での成果と展望を以下にまとめる。

平成19年度～20年度の調査では、C区で竪穴住居8軒、土坑7基、ピット56基等が検出され（居住域）、これまで沖積低地における縄文時代中期の遺跡の発見がなかった本県にあって、注目されるところとなつた。これらは標高4.4mを頂点に、南西～北東方向に走る微高地に存在する。微高地は西側斜面が比高差約1mの急傾斜を呈するが、東側斜面は緩傾斜を呈する。この微高地より西側の広がり、後世の流路を抉んだ東側のD～G区には湿地帯が広がる。この湿地帯は、堆積土にガツボが混じることから先の微高地の後背湿地に当たると考えられ、遺跡東端まで続く。途中、KF区には、南西～北東方向に走る流路

用途	器種	廃棄域 (%)	居住域 (%)	土石流域 (%)	湿地帯 (%)
狩猟・漁撈具	石錐	1.84 (3)			
	石匙	0.28 (2)			
	石錐	4.46 (33)			0.27 (1)
採取・加工工具	石錐	0.14 (1)	0.26 (1)		
	打製石斧	3.95 (28)	10.00 (10)	19.46 (22)	10.08 (37)
	打製石斧未成品	1.84 (13)			
調理工具	磨製石斧	3.39 (24)	2.63 (10)	2.65 (3)	3.26 (12)
	磨製石斧未成品	13.84 (98)	18.16 (69)	2.65 (3)	3.26 (12)
	スクレイパー	44.63 (316)	55.26 (210)	71.86 (81)	75.74 (278)
調理工具	鋸歯縁石器				
	敲磨石類	5.93 (42)	7.89 (30)	0.88 (1)	5.44 (20)
その他	石皿類	0.42 (3)	0.53 (2)	0.88 (1)	0.81 (3)
	砾石	19.07 (135)		1.77 (2)	1.08 (4)

第30表 廃棄域と居住域の石器組成比率比較表

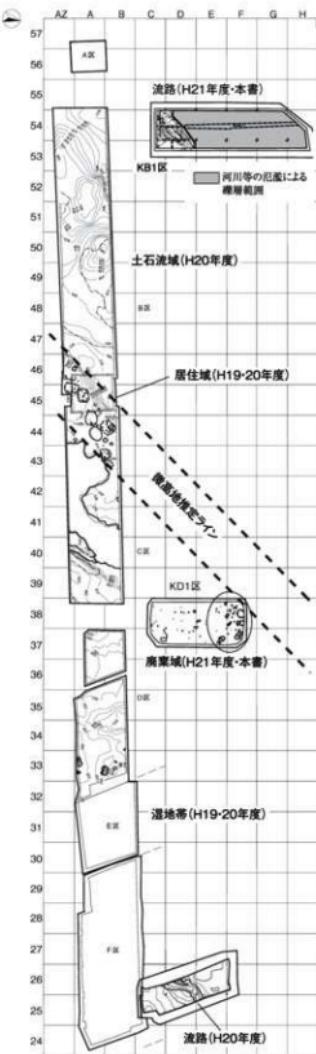


第60図 各域における用途別石器組成比率

が流れる。居住城の西側、B区には土石流が広がっている。平成21年度（本書）の調査では、KDI区で遺物が多量に出土した廃棄域を検出した。立地に注目すると、廃棄域が存在する緩傾斜面は、居住城が存在する微高地の東側傾斜面である可能性が高く、微高地は南西～北東方向に馬の背状に走ると推測できる（第61図）。したがって、廃棄域は同微高地の東側傾斜面に設けられたものと考えるが、土器様相から領域の同時性は低い。これより西に約150m、KB1区では流路の一角と考えられる範囲を検出した。大部分は後世の河川で失われていたが、Ⅶ層上面で広がる埋蔵群に伏臥構造が確認できたこと、これを覆っていた堆積土中に腐食植物が確認され、さらに好流水性種等の珪藻化化石が産出したことなどから、流路の一画であると判断する。これを裏付けるように、B区北西隅のⅧ層（地山層）は、KB1区に向かって徐々に標高を下げている。

以上全体像を概観したが、これに各区域における土器様相を加味すると（第29表）、後世の流路を境に廃棄域・湿地帯・KF区流路が存在する東側は中期前葉～中葉で、中葉でも上山田・天神山式が古相を呈する段階、居住城・土石流域・KB1区流路が存在する西側は中期中葉で、中葉でも東側の上山田・天神山式よりも新相を呈し、遺跡の時期が異なる。このことは検出した廃棄域と居住城が対応するのではなく、それぞれに対応する居住城・廃棄域はまた別に存在することを暗示しよう。

本遺跡は沖積低地という極めて低い土地に立地し（標高3m前後）、日本海にほど近い。付近には川が流れ、湿地帯が広がる中、人々は少しでも高い土地（微高地上）に居住城を求め、集落を営んでいたようである。丘陵上には国史跡の長者ヶ原遺跡をはじめ、縄文時代の遺跡が群在する。本遺跡が長者ヶ原遺跡群のように丘陵上ではなく、決して快適とはいえない低地に営まれているのはなぜか。また長者ヶ原遺跡群との関係や本遺跡の性格はどのようなものなのか。「六反田南遺跡II」「第Ⅶ章1A」でもこれに関連したことを考察したが、新たに、今回出土した動植物遺存体の存在も深く関わってきそうだ。食料豊富な漁場や森林が近くにあり食料調達に事欠かなかつた、これも選地の理由の一つといえないだろうか。



第61図 六反田南遺跡IV下層の全体図
(S=1/1600)

2 弥生時代以降の調査（上層の調査）

KBI 区では古墳時代～古代にかけての所産と目される掘立柱建物 4 棟とピット群が、KDI 区では古墳時代前期の玉作関連遺構と遺物が出土した。主体となる時期が下層同様地点によって違い、様相ががらりと変わるが、その変化点は混沌としており、はっきりしない。おむね遺跡西側（KBI 区側）が古墳～古代が、東側（KDI 区側）が古墳時代前期が主体となる。以下、KBI 区検出の大型掘立柱建物 SB 1 を中心に古代の様相を、KDI 区検出の玉作関連遺構を中心に古墳時代前期の様相を述べる。

A 古代における六反田南遺跡

KBI 区で検出した SB 1 は平面規模がほかの掘立柱建物よりも抜きん出ており、一部調査区外に延伸する部分も含めると推定面積は 50m²を上回る。これと同等の規模と推測されるものが六反田南遺跡Ⅲ KC 区の SB 3 であるが、東半部は搅乱を受け消滅しており、全容は明らかでない。

掘立柱建物の面積に関しては、「平面積が 50m²を上まわるのは、庄家跡などの中心的建物である」〔岸本 1986〕という指摘がある。また、通常、地方官衙の掘立柱建物の規模は 50m²以下が 72%、50m²以上が 22% であるに対し、地方豪族の居宅では 50m²以下が 86%、50m²以上が 14% であり、集落では 50m²以上の建物はほとんど見られないという指摘もある〔中山 2004〕。これに照らせば、SB 1 が 50m²近い面積であることは、官衙的性格を持つ建物としてとらえられ、古代における地方の集落内の居宅には見られない規模となる。本調査区内では出土していないが、平成 19・20 年度検出の流路 1 から墨書き土器、正倉院の壁材、扉口部材である棚等大型構築部材が多数出土しており、注目される。もちろんこれらが SB 1 に関するものであるかは不明であるが、SB 1 の規模とともに、六反田南遺跡の公的性格を示唆するものととらえたい。

しかし、公的性格を帯びると推測はされるものの、その性格付けは困難である。通常、地方官衙といえば国衙・郡衙・駅屋・閔・津・泊を指し、城柵・山城・神籠石などもこれに含まれるが、〔中山 2004〕によれば、これら以外に下記のような「官衙関連遺跡」の存在が想定されるという。

- a：官衙遺跡とは推定できるが、性格付けが未定の遺跡
- b：官衙か居宅・荘園・集落か、判断に迷う遺跡
- c：集落や有力層の居宅の様相を示すが、本簡、「郷長」などの官職名や「厨」などの部署名を記した墨書き土器、硯、腰帶具などが出土している遺跡

さらに官衙関連施設については、

- I 集落・居宅とは別に分離して設けられた官衙施設（郡衙別院・正倉別院・国衙都衙出先施設）
- II 民間施設に併設された官衙施設。その職務内容や在地の政治経済状況、地形条件に応じ、適宜設置、移転、廃止された補助的な性格の強い官衙施設（税穀収納施設である小院・借倉・借屋）
- III 官衙機能の一翼を担った民間施設。民間施設としての本来的な機能を維持しつつ、地方官衙の業務の一部を補佐、維持する役を副次的に果たす（里倉・郷家）

等の性格を有し、I・II 類を「末端官衙」、III 類を「官衙補完施設」としている。末端官衙には資料上に現れることの少ない多様なものがあり、集落内や居宅などでも末端行政機能の一端が担われる場合があったという。

本遺跡の背後、段丘上には「海川下流域における有力者の居宅を中心とした集落」〔糸魚川市教育委員会

会2010】とされる8～11世紀前葉主体の山崎A遺跡が存在する。竪穴建物41軒・掘立柱建物38棟等からなり、床面積100m²を超える大型の掘立柱建物が存在する。掘立柱建物に隣接する土坑には、600点を超える土師器杯、須恵器壺と墨書き土器が一括発見されており、何らかの儀式があるは要応の場であったことがうかがえる。本遺跡から直線距離で約500mと近接し、「久」と書かれた墨書き土器が六反田南遺跡からも山崎A遺跡からも出土しており、関連性が指摘される。

以上から、現時点での推測では六反田南遺跡は山崎A遺跡という官衙的性格が強い大集落を背後に控えた、いわゆる「官衙関連遺跡」としての性格を有すると考える。

B 六反田南遺跡における玉作

KD1区では古墳時代前期の土師器が主体的に出土し、検出した遺構も大半がこの時期に帰属するものと考える。今回の調査では玉作関連遺物の出土が目立ち、これらを多量に含む遺構の存在が明らかとなった点は、大きな成果といえる。玉の未成品には勾玉、糞玉、管玉などがあるが、大半は管玉の未成品である。また、剥片も管玉の石材である緑色凝灰岩が大半で、かかる玉生産が主体であったと考えられる。玉作工具としては、勾玉の腹部研磨具とされる内磨砥石(663・664)、台石(666)などがある。玉作関連遺物が出土したのはSK563・614、SD586・589・591、SX513・546・583・587、P520・537・561・585・592・615など15遺構を数え、中でもSX513・SD591は顯著である。SX513は、調査当初から覆土中に剥片・チップ類の濃密な分布が認められ、玉作遺構との認識で調査を行ったが、整理段階で遺物の出土状況を正確に把握した結果、これらの大半は覆土中にあり、玉作によって生じた廃材の棄て場という位置付け以上のものは引き出せなかつた。ただし、掘形の上に土盛りをして床面のようなものを構築していることから推測して、遺構の構築当初は玉作の場として機能していた可能性は大いにあろう。

SD586・589・591は調査当初、周溝付建物の一部ととらえていたが、剥片・チップの集計を進めたところ、SD591はSX513よりも多く玉作関連遺物が出土している事が判明した。さらにこれらの8割近くは38C17グリッドで検出された土坑状の落ち込みに集中が認められ、砥石の破片や台石を伴う事を加味すれば、ここで玉作を行っていた可能性は高いと判断する。ちなみに、管玉の作業工程に着目すると、SD591に荒削段階のものは出土しておらず、玉作遺構とした場合、形削以降の作業を行っていた可能性が高い。最後にSD591の形態であるが、溝幅が細く平面形も整っているという特徴から判断して、南押上遺跡【小池²⁰¹¹】で数多く検出した平地式建物の一部である可能性もある。

糸魚川市域では、ヒスイや滑石、蛇紋岩など石材に富む地であることから、縄文時代から玉作が盛んに行われてきた。弥生時代の遺跡が極端に少ない本地域において、該期の玉作の様相は未知といえるが、古墳時代に入ると遺跡数が格段に増加し、多くの遺跡で玉作が行われるようになる。特に笛吹田遺跡、姫御前遺跡、南押上遺跡、横マクリ遺跡は、本遺跡も含め半径1.3km圏内の沖積低地に群在し、かつ前期を中心とする玉作遺跡である。立地・時期等含め、これらを相互に関連性のある遺跡群としてとらえる必要があろう。本遺跡の玉作関連遺物は他遺跡に比すると多いとはいえないが、工程・石材等については南押上遺跡において詳細に検討しており、今後の調査で玉作関連遺物が増加すれば対比・検討が可能となり、更なる様相解明が期待される。

要 約

- 1 六反田南遺跡は新潟県糸魚川市大字大和川に所在する。遺跡は海川右岸の沖積地に立地し、現況は宅地、水田であった。遺跡の標高は3.0m～5.8mを測る。
- 2 発掘調査は一般国道8号糸魚川東バイパス建設に伴い、平成21年5月18日から12月22日にかけて実施した。調査面積は2調査区（KDI・KB1区）5面（下・中・上層）の3,488m²である。調査の結果、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物を検出した。
- 3 下層（Ⅵ・Ⅶ層）は縄文時代中期前葉～中葉、中層（V層）は縄文時代中期～後期、上層（Ⅲ・Ⅳ層）は弥生時代以降に属する。
- 4 下層の調査では、KDI区で土坑3基、炭化物集中遺構2基、溝2条、性格不明遺構3基、ピット55基、遺物廃棄域を検出した。KB1区は当該期の河川の一画を検出したが、大半は後世の河川により失われていた。
- 5 下層の遺物はKDI区で縄文土器、土製品、石器、石製品、動植物遺存体が、KB1区では土器、石器が出土した。両区の土器は北陸系の新崎式や上山田・天神山式土器を主体とするが、KB1区の方が若干新相を呈する上山田・天神山式が出土している。北陸系のほか、東北系・中部高地系の土器が出土した。石器は、廃棄域から蛇紋岩製磨製石斧とその未成品・製作関連遺物が多く出土した。本遺跡が蛇紋岩製磨製石斧製作遺跡であることを色濃く反映しているといえる。
- 6 廃棄域で出土した動植物遺存体を同定したところ、動物遺存体では魚類のサケ科・サメ類・タイ科・ブリ科、哺乳類のニホンジカ・イノシシ、鳥類のカモ科・キジ科などが、種実類ではカラスザンショウ・アカメガシワ・クサギ・オニグルミ、クリ、コナラ属、ブドウ属、マタタビ、ニワトコ、ササゲ属、ヒシがあった。貝塚が少なく生業関係の研究に乏しかった日本海側において、貴重な資料といえる。
- 7 中層はKB1区でのみ検出し、縄文時代中期～後期の土器片が出土した。洪水由来の層と推測され、遺構はなく、幅広い時期の遺物を含む。
- 8 上層の調査では、KB1区で路流3条、掘立柱建物4棟、土坑5基、井戸1基、溝5条、ピット349基を、KDI区で掘立柱建物2棟、土坑6基、溝5条、ピット107基、性格不明遺構4基を検出した。主な遺構の所属時期は、KB1区は古代、KDI区は古墳時代前期～古代である。KB1区の掘立柱建物の中には、桁行4間（8.28m）×梁行2間（5.80m）かそれ以上の大型のものがある。KDI区の土坑・溝からは玉作関連遺物が出土し、これらの遺構は玉作との関連が注目される。
- 9 上層の遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土製品、石器、石製品、木製品が出土した。KB1区は遺構の時期特定に足る遺物がほとんど出土せず、近世の川跡からの出土が大半であったが、KDI区は土坑などから古墳時代前期の土師器が出土している。

引用・参考文献

- 荒川隆史 2004 「第IV章 遺構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 青田遺跡』
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 阿部朝衛 1987 「第6章 磨製石斧生産の様相」「史跡寺地遺跡」青海町教育委員会
- 石川智紀 2004 「縄文時代中期土偶の様相」「火炎上器研究」新潟県立博物館
- 糸魚川市教育委員会 1964 「長者ヶ原遺跡」
- 糸魚川市教育委員会 1998 「国指定史跡長者ヶ原遺跡 第12次調査概報」
- 糸魚川市教育委員会 2010 「古代・中世の集落 山崎A遺跡」
- 糸魚川市史編さん委員会 1986 「糸魚川市史」資料集1 考古編 糸魚川市役所
- 今福利恵 2008 「勝坂式土器」「絶覧 縄文土器」「絶覧 縄文土器」刊行委員会
- 植村 武 1988 「第1章 縄説」「日本の地質4 中部地方!」「日本の地質「中部地方!」」編集委員会
- 宇奈月町教育委員会 1971 「愛本新遺跡調査概要」
- 小椋裕樹 2007 「I 本地屋の生活と歴史 2. 糸魚川本地屋の歴史」
『重要有形民俗文化財 糸魚川本地屋の民具 本地製作用具と製品コレクション』本地屋会
- 小田由美子 2004 「第IV章 道灌遺跡まとめ 4 中空土偶について」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第136集
道灌遺跡・向原遺跡」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田由美子 2006 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第149集 滝寺古窯跡群・大賀古窯跡群」
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第IV章 古代 第2節 土器編年と地域性」「新潟県の考古学」新潟県考古学会
- 春日真実 2009 「越後における古代掘立柱建物」「新潟県の考古学II」新潟県考古学会
- 春日真実 2008 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第202集 六反田南遺跡・前波南遺跡」
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 1999a 「第V章 遺構」「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第90集 和泉A遺跡」
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 1999b 「第IV章 下層の調査 2 遺物 C 石器」「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 和泉A
遺跡」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2008 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第184集 姫御前遺跡I」
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2011 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第207集 姫御前遺跡II・竹花遺跡I」
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤三千雄 1995 「北陸における中期前葉の土器群について」「第8回縄文セミナー 中期初頭の土器様相」
縄文セミナーの会
- 加藤三千雄 1988 「新保・新崎式土器様式」「縄文土器大観」3 中期 II 小学館
- 加藤三千雄 2008 「新保・新崎式土器」「絶覧 縄文土器」「絶覧 縄文土器」刊行委員会
- 金三津道子・朝田亜紀子 2009 「第IV章 下山新遺跡」「富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告書
第42集竹ノ内II遺跡・柳田遺跡・下山新東遺跡・下山新遺跡」
財团法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 川村浩司 1993 「北陸東部における古墳出現前後の様相」「シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の
再検討」日本考古学協会新潟県大会実行委員会
- 岸本雅敏 1986 「新町II遺跡の古代掘立柱建物群の性格」「新町II遺跡の調査」
福井市教育委員会
- 木島 勉・寺崎裕助・山岸良一 2007 「長者ヶ原遺跡 縄文時代北陸の玉作集落」(日本の遺跡24) (株)同成社

- 北野博司 2001 「須恵器の風船技法」『北陸古代土器研究－つばとかめのつくり方－』第9号
北陸古代土器研究会
- 小池勝典^{ほか} 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第220集 南押上遺跡』
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池義人 1986 「第Ⅲ章 遺跡各説 C 岩野E 遺跡 6まとめ」『中原道路・岩野A 遺跡・岩野E 遺跡』
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小島俊彰 1974 「北陸の縄文時代中期の編年」『大鏡』第5号 富山考古学会
- 小島俊彰 1988 「上山田・天神山式土器様式」『縄文土器大観』3 中期Ⅱ 小学館
- 小島俊彰 2008 「上山田・天神山式土器」『絶覧 縄文土器』『絶覧 縄文土器』刊行委員会
- 齋田美穂子 2000 「新潟県域における大木7a式系統の浅鉢－新発田市石田道路集土資料の紹介を兼ねて－」
『北越考古』第11号 北越考古研究会
- 佐藤友子^{ほか} 2009 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第205集 田伏山崎道路』
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤雅一 2001 「信濃川中流域の浅鉢形土器について－縄文時代中期の浅鉢形土器の基礎的研究－」
『新潟考古』第12号 新潟考古学会
- 佐藤雅一^{ほか} 2005 『津南町文化財調査報告書 第47輯 道尻手遺跡』津南町教育委員会
- 神保孝造 2009 「長山道路－県内、最多の土偶出土」『理文とやまと』富山県埋蔵文化財センター
- 鈴木郁夫 1982 「I 地形分類図 1 地形概説」『新潟県土地分類基本調査 糸魚川』新潟県農地部総合整備課
- 高橋 保 1989 「県内における縄文時代中期前半の関東・信州系土器」『新潟県考古学談話会会報』第4号
新潟県考古学談話会
- 高橋 保^{ほか} 1990 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第55集 清水上遺跡』
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 保^{ほか} 1992 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第57集 五丁歩遺跡・十二本遺跡』
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄^{ほか} 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第141集 北野遺跡II(上層)』
新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2005 「土器の分類と変遷」『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現(第1回)』新潟県考古学会
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 寺崎裕助 1989 「新潟県中越地方における縄文時代後半の土器について」『新潟県考古学談話会会報』第3号
新潟県考古学談話会
- 寺崎裕助 2003 「山屋敷I 遺跡(No.169)」『上越市史 資料編2 考古』上越市史編さん委員会
- 寺崎裕助 2004 「新潟県縄文時代中期の土器事情」「火炎土器の研究」新潟県立博物館
- 寺崎裕助 2009 「新潟県における新崎式土器」『新潟県の考古学Ⅰ』新潟県考古学会
- 寺崎裕助 2010 「和泉A 遺跡における縄文時代中期の土器(1)」『新潟考古』第21号 新潟考古学会
- 寺崎裕助 2011 「和泉A 遺跡における縄文時代中期の土器(2)」『新潟考古』第22号 新潟考古学会
- 寺崎裕助・秦 繁治 1990 「十二平遺跡発掘調査報告書」能生町教育委員会
- 寺崎裕助・水落雅明 2009 「糸魚川市六反田遺跡の縄文時代遺跡」『新潟考古』第20号 新潟考古学会
- 富山県教育委員会 1991 「北陸自動車道遺跡発掘調査報告書－朝日町編6－塙A 遺跡』土器編
- 富山県埋蔵文化財センター 2011 「縄文時代中期の石斧つくりのムラ 浦山寺藏遺跡」[土器編1]
- 中野幸大 2008 「大木7a式～8b式土器」『絶覧 縄文土器』『絶覧 縄文土器』刊行委員会
- 布尾和史 2007 「北陸地方 新崎式・上山田式」「火塙土器前夜－資料集－」
信濃川火塙街道連携協議会・津南町教育委員会
- 農林水産省農林水産技術会議事務局 1993 「新版 標準土色帖」
- 原田昌幸 2010 「土偶の多種多様な形態と型式・編年研究」『考古学ジャーナル』608 ニューサイエンス社

- 婦中町教育委員会 2000 「Ⅲ 鏡板遺跡 I 遺跡」「富山県婦中町外輪野I遺跡・鏡板I遺跡発掘調査報告書」
 細井佳浩(はい かずひろ) 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第211集 六反田南遺跡II』
 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 細井佳浩(はい かずひろ) 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第219集 六反田南遺跡III』
 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 前山精明 2011 「大沢谷内遺跡6区下層」「平成22年度 新潟市遺跡発掘調査速報会 最新調査成果が語る新潟市の歴史」新潟市埋蔵文化財センター
 水落雅明 2010 「第IV章 下層の調査 2 遺物 C 石器 1) 記述の方法」「新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第211集 六反田南遺跡II」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 水落雅明 2011 「第V章 遺物 2 古墳時代の遺物 D 石器・石製品」「新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第220集 南押上遺跡」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 山下 昇 1995 「3章 古期岩層 フォッサマグナ以前の岩層」「フォッサマグナ」東海大学出版会
 山中 章 2004 「古代王権の首都像」「考古学研究会50周年記念論文集 文化的多様性と比較考古学」
 考古学研究会
 山本友紀 2010 「第IV章 下層の調査 2 遺物 A 土器 2) 分類」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第211集 六反田南遺跡II」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 四柳嘉章 1997 「北陸の漆器考古学－中世とその前後－」「第10回 北陸中世土器研究会記念特集号 北陸の漆器考古学－中世とその前後」[第1分冊] 北陸中世土器研究会
 渡邊裕之(わたなべ ゆうじ) 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第188集 横マクリ遺跡』
 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 渡辺 誠 1984 『新潟県中魚沼群津南町八反田遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会

KD1区下層 遺構観察表（土坑）

遺構No	位置	方位	平面形	断面形	平面規模（m）	深さ（m）	底面標高（m）	出土遺物	備考
SK9j	38D23	N-S	円形	半円状	0.74×0.74	0.29	2.81	-	
SK45j	38F11・12	N-5°-W	不整形	台形状	1.65×1.25+	0.18	2.98	動物遺存体	
SK52j	37F9・14	N-S	椭円形	台形状	1.57×1.18	0.17	2.95	石器・ 動植物遺存体	

KD1区下層 遺構観察表（炭化物集中）

遺構No	位置	方位	平面形	断面形	平面規模（m）	深さ（m）	底面標高（m）	出土遺物	備考
SC42j	38F7・8・ 12-14	N-S	不整形	台形状	2.63×2.40+	0.15	3.03	石器	
SC55j	38E22・23 38F2・3	N-65°-S	不整形	-	1.36×0.96	0.07	3.09	石器	

KD1区下層 遺構観察表（溝）

遺構No	位置	方位	断面形	全长（m）	幅（m）	深さ（m）	底面標高（m）	出土遺物	備考
SD40j	38F1・2	N-46°-W	U字状	1.60	0.47	0.15	2.29	-	
SD53j	37F9・10・ 14・15	-	弧状	1.85+	1.00	0.23	2.93	-	

KD1区下層 遺構観察表（性格不明遺構）

遺構No	位置	方位	平面形	断面形	平面規模（m）	深さ（m）	底面標高（m）	出土遺物	備考
SX41j	37E18・19 -23・24	-	不整形	-	-	-	-	-	風洞木痕
SX50j	38F12	-	-	-	0.14×0.14	0.06	3.10	縄文土器	埋設土器？
SX54j	38F6・7・ 11・12	E-W	不整形	弧状	1.38×0.96	0.07	3.09	石器	

KB1区上層 遺構観察表（土坑）

遺構No	位置	方位	平面形	断面形	平面規模（m）	深さ（m）	底面標高（m）	出土遺物	備考
SK111	54F9・14	N-12°-W	椭丸長方形	弧状	0.95×0.51	0.14	5.48	土師器・灰窓器	
SK165	53F24・25 53G4・5	N-35°-W	不整形	弧状	1.88×1.60	0.09	5.65	土師器・灰窓器	
SK194	53G9・10	N-25°-W	円形	弧状	0.95×0.84	0.10	5.64	-	
SK315	54E23・24 54F3・4	N-28°-W	長楕円形	弧状	0.94×0.51	0.26	5.42	-	
SK320	54E24・25	N-84°-W	不整形	弧状	0.98×0.50	0.08	5.58	-	
SK327	54E23	N-23°-W	長方形	弧状	0.78×0.08+	0.15	5.53	-	

KB1区上層 遺構観察表（井戸）

遺構No	位置	方位	平面形	断面形	平面規模（m）	深さ（m）	底面標高（m）	出土遺物	備考
SE171	53G20	N-S	不整円形	台形状	0.92×0.84	1.13	4.46	須恵器	

KB1区上層 遺構観察表（溝）

遺構No	位置	方位	全长（m）	断面形	幅（m）	深さ（m）	底面標高（m）	流下方向	出土遺物
SD39j	53D20	N-77°-E	0.44+	半円形	0.13-0.16	-	-		
SD396	53D25	N-88°-E	0.5+	半円形	0.33-0.41	0.22	5.53		
SD319	54E13	N-19°-W	1.16-1.52	弧状	0.29-0.37	0.08-0.09	5.60		

KB1区上層 遺構観察表（掘立柱建物）

遺構番号	輪方位			構造		床面積	長軸		短軸		備考	
						48.024m ²	8.28m		5.80m			
	柱穴	位置	柱遺 存状況	平面形	断面形	平面規模 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	柱間寸法 (m)	出土遺物		
SB1	P365	53F3	無	楕円形	漏斗状	0.6×不明	0.50	5.30	P365-P153	2.29	-	
	P153	53F9	無	長方形	円形	0.76×0.48	0.35	5.38	P153-P124	2.04	土師器（古墳後期）	
	P124	53F10	無	楕円形	V字状	0.57×0.43	0.37	5.36	P124-P125	2.12	土師器（古墳か古代）	
	P125	54F11	無	楕円形	半円状	0.81×0.53	0.30	5.42	P125-P168	2.59	土師器（古墳か古代）	
	P168	54F7	無	円形	V字状	0.46×0.45	0.52	5.16	P168-P301	3.12	土師器・瓶底器（古墳か古代）	
	P301	54E22・23	無	楕円形	弧状	0.59×0.50	0.16	5.49	P301-P229	2.08	土師器・瓶底器（古墳か古代）	
	P229	54E22	無	楕円形	台形状	0.60×0.45	0.16	5.54	P229-P207	2.20	土師器・瓶底器（古墳か古代）	
	P207	54E16	無	円形	台形状	0.53×0.51	0.46	5.29	P207-P223	1.97	瓶底器（古代）	
	P223	53E20	無	楕円形	台形状	0.58×0.52	0.63	5.11	P223-P224	2.03	瓶底器（古代）	
	P224	53E14	無	円形	台形状	0.59×0.47	0.40	5.30	-	-	瓶底器（古代）	
SB2	輪方位			構造		床面積	長軸		短軸		備考	
	N-S					-	-		-		P272は桟持柱 古墳後期の建物？ 北側は調査区外	
	柱穴	位置	柱遺 存状況	平面形	断面形	平面規模 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	柱間寸法 (m)	出土遺物		
	P407	53H19・20	無	楕円形	箱状	0.40×0.32	0.13	5.41	P407-P278	2.42	-	
	P278	53H14・15	無	楕円形	U字状	0.34×0.32	0.15	5.40	P278-P332	1.07	-	
	P332	53H15	無	楕円形	U字状	0.29×0.25	0.29	5.25	P332-P272	1.80	-	
	P272	54H11	無	楕円形	U字状	0.42×0.36	0.19	5.36	P272-P276	2.02	土師器（古墳）	
	P276	54H12	無	楕円形	U字状	0.30×0.27	0.43	5.11	P276-P404	1.10	土師器・瓶底器（古墳）	
	P404	54H12	無	円形	半円状	0.36×0.36	0.19	5.35	P404-P278	5.90	-	
SB3	輪方位			構造		床面積	長軸		短軸		備考	
	N-21° - W			1間×1間 傾柱式		8.092m ²	3.40m (傾通り 3.80m)		2.38m		P106・P185・P187 P317は桟持柱	
	柱穴	位置	柱遺 存状況	平面形	断面形	平面規模 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	柱間寸法 (m)	出土遺物		
	P108	54F3	無	楕円形	U字状	0.24×0.16	0.16	5.50	P108-P308	3.40	-	
	P308	54E17・18	無	円形	U字状	0.23×0.23	0.21	5.47	P308-P186	2.38	-	
	P186	54E19	無	楕円形	箱状	0.44×0.33	0.16	5.54	P186-P167	3.20	土師器（古墳）	
	P167	54E24	無	楕円形	U字状	0.30×0.21	0.16	5.55	P167-P108	2.40	-	
	P106	54F4	無	円形	U字状	0.20×0.19	0.16	5.53	P106-P185	1.12	土師器（古墳か古代）	
	P185	54E24	無	円形	U字状	0.20×0.20	0.16	5.53	P185-P187	1.28	-	
	P187	54E23	無	円形	U字状	0.23×0.22	0.19	5.49	P187-P317	1.40	-	
	P317	54E18	無	円形	U字状	0.18×0.18	0.16	5.54	P317-P106	3.80	-	
SB4	輪方位			構造		床面積	長軸		短軸		備考	
	N-30° - W			1間？×3間 傾柱式		16.416m ² 以上	5.7m		2.88m		東側は調査区外	
	柱穴	位置	柱遺 存状況	平面形	断面形	平面規模 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	柱間寸法 (m)	出土遺物		
	P15	53F19	無	円形	U字状	0.30×0.19	0.37	5.34	P15-P99	2.88	土師器・瓶底器（古墳か古代）	
	P99	53F15	無	円形	U字状	0.23×0.10	0.34	5.40	P99-P84	2.39	-	
	P84	53F10	無	円形	台形状	0.42×0.42	0.34	5.41	P84-P54	1.67	-	
	P54	53F9	無	円形	U字状	0.35×0.32	0.34	5.38	P54-P85	1.53	土師器（古墳か古代）	
	P85	53F4	無	楕円形	U字状	0.16×0.12	0.19	5.55	-	-	-	

KD1区上層 遺構観察表(横)

遺構番号	輪方位		構造		床面積		長軸		短軸		備考
	柱穴	位置	柱造 存状況	平面形		断面形		平面規模 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	柱間寸法 (m)
SA508				N - 36° - W	3間	-	7.20m				出土遺物
無			隅丸方形	箱状	0.50 × 0.40	0.27	4.65	P518-P501	2.52	-	
P518	37F5	柱根	円形	U字状	0.45 × 0.40	0.44	4.44	P501-P502	2.40	土師器	
P501	38F6	柱根	円形	U字状	0.48 × 0.46	0.14	4.47	P502-P505	2.28	土師器	
P502	38F11	柱根	円形	U字状	0.20 × 0.17	0.27	4.51	P505-P518	7.20	-	
P505	38F17	無	楕円形	漏斗状	-	-	-	-	-	-	

KD1区上層 遺構観察表(掘立柱建物)

遺構番号	輪方位		構造		床面積		長軸		短軸		備考
	柱穴	位置	柱造 存状況	平面形		断面形		平面規模 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	柱間寸法 (m)
SB577				N - 43° - W	3間 × 2間	-	5.80m				4.90m
無			隅丸方形	箱状	0.48 × 0.42	0.24	4.72	P545-P567	1.90	土師器	
P545	37E10	無	円形	U字状	0.36 × 0.36	0.14	4.70	P567-P531	2.00	-	
P567	37E15	無	隅丸方形	箱状	0.50 × 0.42	0.27	4.65	P531-P578	1.70	土師器	
P531	38E16	無	円形	半円状	0.75 × 0.72	0.09	4.65	P578-P539	2.58	-	
P578	38E17 · 22	無	円形	半円状	0.38 × 0.31	0.16	4.78	P539-P506	2.40	-	
P539	38E21	無	円形	U字状	0.18 × 0.16	0.40	4.60	P506-P569	4.90	-	
P506	37F5	無	円形	半円状	0.18 × 0.16	0.40	4.60	P506-P569	4.90	-	

KD1区上層 遺構観察表(土坑)

遺構No	位置	方位	平面形	断面形	平面規模 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	出土遺物
SK514	37E20 · 25	-	楕円形	台形状	0.64 × 0.40+	0.10	4.85	土師器
SK563	37D25 · 37E5	-	隅丸方形	箱状	0.41 × 0.38	0.17	4.89	土師器 · 玉作資料
SK593	38D1 · 6	-	-	-	-	-	-	-
SK605	38C12	N - 10° - W	円形	弧状	0.89 × 0.77	0.18	4.70	-
SK609	37D5	N - 48° - E	円形	弧状	0.52 × 0.50	0.08	4.88	-
SK614	37D10 · 15	N - 80° - E	楕円形	半円状	0.50 × 0.52+	0.12	4.84	土師器 (古墳)

KD1区上層 遺構観察表(溝)

遺構No	位置	方位	全長 (m)	断面形	幅 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	出土遺物
SD503	38F6 · 7	N - 23° - W	南北0.70 東西0.40	弧状	0.20	0.05~0.10	4.84	-
SD515	38F1	N - 19° - E	1.75	弧状	0.30~0.45	0.05~0.15	4.81	土師器
SD586	37D5 · 10 38D1-6 · 7 · 11 · 12	N - 44° - W	4.30+	弧状	1.10~1.85	0.15 ~ 0.35	4.65~4.85	土師器 · 石器 · 玉作資料
SD589	37C15 · 20 · 25 38C21 · 38D1	N - 30° - W	南北2.60+ 東西1.5+	弧状	0.30~0.90	0.05~0.55	4.47~4.99	土師器 · 玉作資料
SD591	37C11 · 12 · 16 · 17 · 21 · 22	N - 6° - E	南北2.60+ 東西1.30+	弧状	0.50~1.00	0.05~0.30	4.75~4.97	土師器 · 玉作資料

KD1区上層 遺構観察表(性格不明遺構)

遺構No	位置	方位	平面形	断面形	平面規模 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	出土遺物
SX513	38E16 · 17 · 21 · 22	N - 70° - E	不整形	弧状	2.96 × 2.4	0.05~0.30	4.75 (床) 4.65 (掘形)	玉作資料
SX535	38E11	N - 62° - E	不整形	弧状	1.70 × 1.50	0.05~0.15	4.90	-
SX546	37E15 · 20 38E11 · 16	N - 9° - E	不整形	弧状	2.20 × 1.70+	0.05~0.15	4.71~4.90	土師器 (古墳)
SX583	38D11 · 12 · 16 · 17 · 21 · 22	N - 57° - E	不整形	半円状	1.31 × 1.30+	0.27	4.73~4.90	土師器 · 玉作資料
SX587	37D5	N - 54° - E	長円形	弧状	1.20 × 0.72	0.23	4.78	土師器 · 玉作資料

KD1区下層 編文器觀察表(1)

凡例

() は復元品、確定名、複存箇

法箇 平口縫、流：枝状縫、山：山形縫、斜：折れ、工縫

口縫：山形縫、流：枝状縫、山：山形縫、斜：折れ、工縫

色調 青灰色土色灰(小山・竹)94Hに±5

胎土 石英、眞、長石、チ・チャード、角・角閃石、斜・海綿骨格、青・青鉛、金雲母、金花岩

編合 No.	遺物名	出土地點	層位	分類	器形	大きさ	口径	底径	高さ	重量(g)	圖文		外觀	色調	胎土	付着物	備考	
											口径	底径	高さ					
1	SH22	3779	1・2	深鉢	D	1					RL	褐色		褐色	長・砂多	スズ・コダ 内・スズ		
2	SH22	3779	1・2	鉢	ii	D	3	W・折	23.0	8.4	15.6	1.294	LR	にぶい・黃褐色	黒色	子・砂少	内・コダ 内・スズ	
3	SC42	38713	4	深鉢	A	a					RL	褐色		少子・褐色	石・砂や少			
4	SC42	38712	4	深鉢	A	a					RL	褐色		褐色・黒色	金雲母・砂や少	外・スズ 内・コダ		
5	SH20	38712	7	甌	Ⅱa	深鉢	i	A	1a1.1	4.8	8.0		底	にぶい・褐色	にぶい・褐色	石・砂や少	スズ	
6	本文に記載	Ⅱa	深鉢	i	A	1a1.1	1.8			33.6	1.294	LR	褐色	褐色	石・砂や少	スズ・スズ		
7	38714.1	Ⅱa	深鉢	i	A	1a1.1			20.8	7.6	13.0	上片	底	にぶい・褐色	砂や少	スズ		
8	3779-25.3	Ⅱa	深鉢	i	A	1a1.1					RL	褐色		にぶい・褐色	石・黒斑・砂や少			
9	37724.3	Ⅱa	深鉢	i	A	1a1.2	4.8	?	24.5		RL	褐色		砂や少	スズ			
10	38714.2	Ⅱa	深鉢	ii	A	1a1.2	底		34.2		RL	にぶい・褐色		砂や少	スズ			
11	37715.3・4	Ⅱa	深鉢	ii	A	1a1.2	4.8		35.0	9.4	RL	褐色		にぶい・褐色	砂多			
12	3773-4.8	Ⅱ	深鉢	ii	A	1a1.2			11.5		RL	にぶい・褐色		白色粒子・砂多	コダ・スズ			
13	37724	Ⅱ	深鉢	ii	A	1a1.2	4.8		41.0		上片	LR	にぶい・褐色	褐色	角・砂多	スズ		
14	38715.3	Ⅱ	深鉢	ii	A	1a1.2					RL	灰褐色		砂多	スズ			
15	38715.4	Ⅱ	深鉢	ii	A	1a1.2					RL	にぶい・褐色		砂や少	石・角・砂や少			
16	圓盤化	Ⅱ	深鉢	ii	A	1a1.2					RL	褐色		砂や少	外・スズ			
17	38715.3・4	Ⅱa	深鉢	ii	A	1a1.2	底		34.6		RL	褐色		褐色	砂や少	スズ・スズ		
18	38722.4	Ⅱa	深鉢	i'	A	1a1.2	底		23.2		RL	にぶい・褐色		白色粒子・砂多				
19	38712.11.3.1	Ⅱa	鉢	i'	A	1b1	底・折		67.2		RL	黑色		砂多	コダ・スズ			
20	38715.1	2	鉢	ii	A	1b1	底	平	59.6		RL	褐色		にぶい・褐色				
21	38713.4	Ⅱa	深鉢	i'	A	1a1	底		46.29		RL	黑色		黒斑・砂多	コダ・スズ			
22	37724.3	Ⅱa	深鉢	ii'	A	1a1.3	4.8		34.4	10.0	41.2	3.494	RL	灰褐色	石多	スズ		
23	37725.3	Ⅱa	深鉢	A	A	1a1.3	底		14.6		RL	褐色		黒褐色	砂や少	内・スズ		
24	37725.2	Ⅱa	深鉢	A	A	1a			5.0		RL	褐色						

KD1区下層 繪文土器調査表(2)

番号 No.	通巻No. ダリット	出土地點 測位	分類 器形	分類 大きさ	口径 cm	直徑 cm	底面 形状	底面 状況	側面 形状	側面 状況	裏面 形状	裏面 状況	地土 状況	付着物	備考	
25	372504	四 四	鉢	v1 A	182	4.0	240	9.2	206	11.8	L.R.	にぶい褐色	砂やや多	土	土	
26	372503・4	四 四	深鉢	i A	1a	1.0	128		破片	にぶい褐色	黒褐色		砂やや多	内: 2.5	内: 2.5	
27	37114	四 四	鉢	v1 A	182	4.0	260		上半残	黒色	黒褐色		砂多	土	土	
28	3741・74	四 四	鉢	i A	281	4.0	280		上半残	黒褐色	黒褐色		砂やや少	土	土	
29	37102・4	四 四	鉢	i A	281	6.0	348		上半残	黒褐色	黒褐色		砂やや少	土	土	
30	38743・1・2	四 四	鉢	i A	281	4.0	351		3/4残	灰黄褐色	灰黄褐色		砂やや多	土	土	
31	37744・92	四 四	鉢	i A	282	4.0	240		上半残	にぶい褐色	黒褐色		砂やや多	内: 2.5	内: 2.5	
32	38753	四 四	鉢	i A	282	4.0	287		底部欠	にぶい褐色	黒褐色		砂多	土	土	
33	38724	四 四	鉢	i A	2	平	280		2/3残	にぶい褐色	にぶい褐色		砂やや少	土	土	
34	372531・184	四 四	合口 台付	i A	2	4.0	293	9.3	31.9	11.4	RL	にぶい褐色	砂やや少	土	土	
35	38793	四 四	鉢	i A	282	4.0	195	10.0	1/3残	褐色	黒褐色		砂やや少	土	土	
36	38741・3825244	四 四	鉢	i A	282	4.0	261	10.0	231	2.3	黒褐色		砂多	土	土	
37	38711・4	四 四	鉢	i A	282	4.0	220	9.0	25.3	2.3	黒褐色		砂やや多	内: 2.5	内: 2.5	
38	38752	四 四	鉢	i A	282	4.0	106		下半残	褐色	黒褐色		砂多	土	土	
39	38641	四 四	鉢	i A	282	平	280		破片	にぶい褐色	にぶい褐色		石・砂やや多	土	土	
40	37704・152	四 四	鉢	i A	282	液			1/3残	にぶい褐色	褐灰色		石・砂やや多	土	土	
41	38701・3	四 四	鉢	i A	282	3.0	218		1/2残	黒色	黒色		砂少	土	土	
42	38754・11・2	四 四	深鉢	i A	281	4.0	250		1/2残	周輪部	黒褐色		黒葉・砂やや少	土	土	
43	38011・12	四 四	深鉢	i A	282	4.0	265		上半残	にぶい褐色	黒褐色		長石・砂やや少	内: 2.5	内: 2.5	
44	37742	四 四	深鉢	i A	282	4.0	302		上半残	にぶい褐色	黒褐色		砂やや少	土	土	
45	37250-323-4	四 四	深鉢	i A	282	4.0	215	8.8	1/2残	にぶい褐色	にぶい褐色		角・砂多	土	土	
46	38793・94	四 四	深鉢	v1 A	281	4.0	151		3/4残	灰黄褐色	にぶい褐色		白色粒・砂少	土	土	
47	37742・4-4	四 四	深鉢	v1 A	281	1.0	134	5.2	1/1残	にぶい褐色	にぶい褐色		細葉・砂少	土	土	
48	37742・15・3	四 四	深鉢	v1 A	281-1	平	265	1.0	1/1残	海灰色	海灰色		砂少	土	土	
49	38722・3-4	四 四	深鉢	i A	281-1	4.0	365	3.0	海灰色	海灰色	海灰色		角・砂多	土	土	
50	37782	四 四	深鉢	v1 A	281-1	液	352		1/2残	灰黄褐色	灰黄褐色		砂多	土	土	
51	37783	四 四	深鉢	i A	281-2	4.0	154	10.0	8.2	11.4	にぶい褐色	にぶい褐色		角・砂やや少	内: 2.5	内: 2.5
52	37741	四 四	深鉢	v1 A	281-2	平	271		2/3残	にぶい褐色	にぶい褐色		黒葉・砂やや少	土	土	
53	37782	四 四	深鉢	i A	281-2	平			上半残	にぶい褐色	にぶい褐色		角・砂多	土	土	

KD1区下層 鶴文土器観察表(3)

順位 No.	出土地点	断面	形状	分類	寸法		重量 (cm)	通体	外觀	圖文	色調	地土	付箋物	備考
					口径	底径								
54	37752	アリット	筒形	A	21.2	10.2	12.4	下腹残	無觸	無	に赤い褐色・黒色	砂多	スス	
55	37771	Ⅱ	筒形	A	23	8.0	8.0	腹片	無觸	無	に赤い褐色・黒色	角・石・砂や少	コゲ・スス	
56	38783-4	Ⅱ	筒形	A	23	8.0	8.0	腹片	無觸	無	に赤い褐色	黒茎・砂や少		
57	37715-1~3	Ⅱ	深鉢	A	23	8.0	8.0	腹片	R.L.	黒色	に赤い褐色	砂多	スス	
58	38754-3	Ⅱ・Ⅲa	深鉢	v	23.2	平	37.8	上腹残	無觸	無	に赤い褐色	砂多	内:スス	
59	38755-2~4	Ⅱ	深鉢	v	24.2	4.8	39.5	底部欠	R.L.	褐灰色	に赤い褐色	石・長・チ・砂や少	外:スス	
60	37715-1	Ⅱ	浅鉢	vii	B	1	4.8	39.0	6.3	12.5~17.0	に赤い褐色	石・砂や少		
61	38715-2	Ⅱ	深鉢	v	B	1	平	28.4	6.3	12.5~17.0	に赤い褐色	砂多		
62	37714-1~3	Ⅱ	深鉢	v	B	2	1.8	28.5	10.0	36.7~41.7	褐色	石・長・白色粒少	スス	
63	38743	Ⅱ・Ⅲa	深鉢	v	B	3	平	27.0	9.7	底部欠	に赤い褐色	砂や少		
64	37762	Ⅱ	深鉢	v	B	3	平	9.1	1.8	1.8	に赤い褐色	砂・砂や少		
65	3874-1・51~2	Ⅱ	深鉢	v	B	3	平	14.0	3.5	1.8	に赤い褐色	砂や少	スス・黒斑	
66	38714-2	Ⅱ	深鉢	v	B	3	平	31.6	1.8	1.8	に赤い褐色	砂や少		
67	3873-3~4	Ⅱ	深鉢	v	C	1	1.8	30.7	2.8	1.8	に赤い褐色	白色粒子・砂や少		
68	3873-3~4	Ⅱ・Ⅲa	深鉢	v	C	1	平	30.9	上腹残	無	に赤い褐色	砂や少		
69	38754	Ⅱ	深鉢	i	C	1	6.8	29.3	9.8	24.1~27.0	褐色	褐色	スス	
70	38713-1	Ⅱ	深鉢	i	C	1	6.8	29.3	9.8	24.1~27.0	褐色	角・石・砂や少	スス	
71	38724-3	Ⅱ	深鉢	v	C	1	危?	12.8	1.8	1.8	に赤い褐色	砂多・長・チ	内:スス	
72	38724-4	Ⅱa	深鉢	v	C	2	平	11.9	3.5	14.5~22.0	褐色	褐色	スス	
73	38724-3	Ⅱ	深鉢	v	C	2	平	11.9	3.5	14.5~22.0	褐色	砂や少		
74	38724-132	Ⅱ・Ⅲa	深鉢	iv	C	3	4.8	29.7	11.8	34.1~40.0	褐色	に赤い褐色	スス	
75	38723-1	Ⅱ	深鉢	v	D	1	4.8	12.0	1.8	腹片	褐色	に赤い褐色	スス	
76	37715-2	Ⅱ	深鉢	v	D	1	4.8	26.6	1.8	腹片	褐色	に赤い褐色	スス	
77	3774-1	Ⅱ	深鉢	v	D	1	4.8	30.0	上腹残	褐色	に赤い褐色	スス		
78	3874-2~4	Ⅱa	深鉢	v	D	1	4.8	30.0	1.8	褐色	褐色	砂や少		
79	37729-2	Ⅱa	深鉢	v	D	1	4.8	34.2	3.4	1.8	に赤い褐色	砂や少		
80	38723	Ⅱ	深鉢	v	D	1	1.8	21.0	7.2	19.8~21.0	褐色	に赤い褐色	内:スス・コゲ	
81	3874-1	Ⅱ	深鉢	v	D	1	平・折	17.6	7.2	19.8~21.0	褐色	に赤い褐色	スス	
82	3779-3	Ⅱ	深鉢	v	D	1	平	1.8	1.8	1.8	に赤い褐色	砂多	スス	

KD1区下層 鎌文土器観察表(4)

序号 No.	出土地點 遺跡名	断面 部位	形状	大きさ	分類	口径 横径 深さ	底形	底径	高度 (cm)	周文		色調		地土		付着物	備考
										口径	底径	外圓	内圓				
83	38722-2・4	U・Wn	深	一 D 1	直	13.2	3.4	3.4	3.4	RL	RL	に赤い黄色 に赤い青色	石	内: 2.3	外: 2.3		
84	37710-3	U	深	V D 1	直	9.4	5.8	10.3	3.4	RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	砂やや多	内: 2.3		
85	38715-1	Wn	深	H' D 1	直	17.8		17.8	1.7	RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	砂やや多	外: 2.3		
86	38728-1	U・Wn	深	D 1	直	18.4	8.9	23.6	1.5	RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	砂やや多	外: 2.3		
87	37715-4	W・Wn	深	W' D 2	平	8.4				鏡片		に赤い青色 に赤い青色	黒色	砂やや少	内: 2.3		
88	38816-2	U	深	V D 2	平	12.6	7.4	10.4	3.4	RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	砂やや多	内: 2.3		
89	37720-3	Wn	深	W' D 2	平	15.8	5.6	15.5	1.7	RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	長多・砂多	内: 2.3		
90	37744-5-3	W・Wn	深	H' D 3a	直	26.8		26.8	1.7	LR	LR	に赤い青色 に赤い青色	黒色	角・砂少	内: 2.3		
91	38712-2	W・Wn	深	W' D 3a	直	18.4	9.8	19.4	2.3	RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	砂多	内: 2.3		
92	37734	W	深	W' D 3a	直	47.0				RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	砂やや少	内: 2.3		
93	37741-3	W・Wn	深	H' D 3b	4底	44.2	11.6	54.8	4.9	RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	白色粘土	砂多		
94	37723-3・4	W・Wn	深	I D 3b	直	31.8		29.5	1.7	RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	長多・砂多	内: 2.3		
95	37732-4	W	深	I D 3b	直	26.8		26.8	2.3	RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	砂多	内: 2.3		
96	37739-2	W	深	V D 3b	4底	27.0				RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	白色粘土	砂多		
97	37710-1・3	W・Wn	深	W' D 3b	直	27.4				RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	砂やや少	内: 2.3		
98	38742	Wn	深	W' D 3c	直	12.9	6.8	12.7	3.4	RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	砂やや少	内: 2.3		
99	38721-2,2	W	深	V D 3c	直	26.4				上平残		に赤い青色 に赤い青色	黒色	砂やや多	内: 2.3		
100	38713-4	W	深	V D 3c	折	26.7				RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	砂多	外: 2.3	コゲ	
101	37734	W	深	V D 3c	平・折	17.9	8.0	20.5	3.4	RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	砂やや多	内: 2.3	コゲ	
102	38719-3-4	W	深	V D 3c	平・折	20.1	8.0	16.3	1.4	RL	RL	に赤い青色・黒色 に赤い青色	黒色	砂やや多	内: 2.3	コゲ	
103	38712-3	Wn	深	H' D 3c	平・折	9.2	5.5	9.0	1.7	RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	長多・砂多	内: 2.3		
104	38721-4・2	W	深	H' D 3c	平・折	26.6		26.6	1.7	RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	石・長・白色粘子 角・砂少	内: 2.3		
105	37715-1・2	W	深	V D 3c	平・折	25.4	10.2	21.1	1.7	RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	洪積粘土・砂多	砂・コゲ		
106	38714-15-1	Wn	深	V D 3c	4底	20.2				RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	露子	砂・コゲ		
107	38714	Wn	深	V D 4a	直	25.2				RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	露子	砂・白砂子多		
108	37725-3	Wn	深	V D 4a	直					RL	RL	に赤い青色 に赤い青色	黒色	露子	砂・白砂子多		

KD1区下層 繩文土器觀察表(5)

組合 No.	出土位置	断面	器種	分類	口径		底径(cm)	底形	縄文	色調	胎土	付物	備考
					大	小							
109	縄文期 388782	圓	盆	Ⅰ D	4cm	1cm	13.6	7.6	13.9	14.12mm	RL 黑色	砂々・黄褐色	コラ・スズ
110	388744-9.1	圓	盆	Ⅲ D	4cm	1cm	22.0	8.5	14.7	14.12mm	RL 黑褐色	砂々・黄褐色	外・スズ
111	38874.3	圓	盆	IV D	4cm	1cm	13.7	—	13.6	14.12mm	RL 黑褐色	砂々・黄褐色	内・砂多
112	388715.2-4	圓	盆	IV D	4cm	1cm	11.4	7.0	10.6	14.12mm	RL 黑色	砂々・黄褐色	内・砂多
113	377151-3	圓	盆	V D	4cm	1cm	11.6	—	13.0	1/3瓶	RL 黑褐色	砂々・黄褐色	内・砂多
114	38878.3	圓	盆	V D	4cm	1cm	11.0	—	—	上平	RL 黑褐色	砂々・黄褐色	内・砂多
115	3887.4	圓	深盆	VI D	4cm	1cm	19.2	7.4	12.7	14.12mm	RL 黑褐色	砂々・黄褐色	内・砂多
116	377102	圓	盆	D	4cm	—	—	—	—	—	RL 黑褐色	砂々・黄褐色	内・スズ
117	377104	圓	台付	D	4cm	—	—	—	—	—	台面	砂々・黄褐色	内・スズ
118	37714.2	圓	深盆	D	4cm	—	—	—	—	—	底部	砂々・黄褐色	内・砂多
119	37719.2	圓	盆	D	4cm	—	—	—	—	—	底部	砂々・黄褐色	内・砂多
120	37718.2	圓	深盆	D	4cm	—	—	—	—	—	Y字肩	砂々・黄褐色	内・スズ
121	38878.17.2	圓	盆	Ⅵ D	4cm	—	—	—	—	—	底部	砂々・黄褐色	内・スズ
122	38874.3	圓	盆	I' D	4cm	—	—	—	—	—	砂々・黄褐色	砂々・黄褐色	内・砂多
123	37714.4	圓	深盆	IV D	4cm	—	—	—	—	—	底部	砂々・黄褐色	内・砂多
124	38874-3.3	圓	盆	深盆	IV D	4cm	—	—	—	—	砂々・黄褐色	砂々・黄褐色	内・砂多
125	38874	圓	盆	D	4cm	—	—	—	—	—	砂々・黄褐色	砂々・黄褐色	内・砂多
126	388710.1	圓	盆	I' D	4cm	—	—	—	—	—	砂々・黄褐色	砂々・黄褐色	内・砂多
127	38879.2	圓	深盆	IV D	4cm	—	—	—	—	—	砂々・黄褐色	砂々・黄褐色	内・砂多
128	37723.1	圓	盆	Ⅲ D	4cm	—	—	—	—	—	砂々・黄褐色	砂々・黄褐色	内・砂多
129	37716.4	圓	盆	Ⅱ D	4cm	—	—	—	—	—	砂々・黄褐色	砂々・黄褐色	内・砂多
130	388710.2	圓	盆	Ⅱ D	4cm	—	—	—	—	—	砂々・黄褐色	砂々・黄褐色	内・砂多
131	37725.4	圓	深盆	Ⅲ D	4cm	—	—	—	—	—	砂々・黄褐色	砂々・黄褐色	内・コダ
132	38879.2	圓	体?	D	4cm	—	—	—	—	—	砂々・黄褐色	砂々・黄褐色	内・スズ
133	38873.2	圓	体?	D	4cm	—	—	—	—	—	砂々・黄褐色	砂々・黄褐色	内・スズ
134	38822.2-4	圓	浅盆	IV D	4cm	—	—	—	—	—	砂々・黄褐色	砂々・黄褐色	内・スズ

KD1区下層 繡文土器觀察表(6)

組合 No.	遺物名	出土位置	断面	形状	分類	口径	口径 口径	底面 底面	通体 厚度	周文 原体	外觀		内面	地主	付註	備考
											上径	底径				
135	38611.4・3	Ⅷa	浅杯	Ⅲ	D	2	2cm	深火	31.0	にぶい、青褐色	にぶい、青褐色	にぶい、青褐色	縫合多			
136	38616.2	Ⅷ	浅杯	Ⅲ	D	1	1cm	平・斜	24.6	7.8	7.8	11.7mm	RL	にぶい、青褐色	子・砂多	
137	38624.2	Ⅷ	浅杯	Ⅳ	D	3c	平・斜	32.8	7.6	12.4	11.7mm	RL	にぶい、青褐色	縫・斜・子・砂多	黒漆	
138	3865.4	Ⅷa	浅杯	Ⅳ	D	4c	平	31.0	3.0	縫片	縫片	縫片	縫・斜・子・砂多	石・斜・子・砂多		
139	3778	Ⅷ	浅杯	Ⅰ	A	3a	平	53.0	1.0	縫片	縫片	縫片	縫合多・砂やや少	金合多・砂やや少		
140	38679.2・13.2	Ⅷ	浅杯	Ⅰ	A	3a	4cm	48.0	4.0	縫片	縫片	縫片	縫合少	縫合少	黒・赤漆	
141	38678.4	Ⅷ	浅杯	Ⅰ	A	3a	3cm	縫片	30.0	1.0	縫片	縫片	縫片	縫合少	縫合少	
142	3779	覆土	浅杯	Ⅰ	A	3a	3cm	縫片	30.0	1.0	縫片	縫片	縫片	縫合少	縫合少	
	38676															
143	38677.3															
143	38678.4															
	38679.3															
	38679.2															
	38674.1・2															
144	37710.3	Ⅷa	浅杯	Ⅱ	A	3b	1cm	49.0	14.0	14.3	完形	浅黄褐色	褐色	褐色上・粒・砂多	褐色	
145	37715.3	Ⅷ	浅杯	Ⅱ	A	3b	2cm	47.2	17.5	15.0	14.7mm	縫合多	にぶい、青褐色	縫合多・子・砂多		
146	3774.3	Ⅷ	浅杯	Ⅱ	A	3b	平	55.6	14.7	15.7	14.8mm	縫合少	縫合少	石・角・針・砂やや少		
147	3775.4・10.2	Ⅷ	浅杯	Ⅱ	A	3b	平	53.2	14.2	14.8	1.2mm	縫片	縫合少・針	縫合少・針	内・黒漆	
	3865															

KD1区下層 繩文土器観察表(7)

報告 No.	出土位置 グリッド	層位 W	断面 層相	分類 大 小	遺存 状況	縄文 原形	色調		勘定	付着物
							外面	内面		
148	37F8-2		深井小鉢	A	1 破片		灰黄褐色	黑色	砂多	コゲ
149	38D16		深井小鉢	A	1 破片		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角・砂や少	
150	37E244		深井小鉢	A	1 破片		灰黄褐色	褐色	黒雲・角・砂少	スス
151	37F5-4		深井小鉢	A	1 破片		褐色	にぶい黄褐色	砂多	スス
152	37D13		深井小鉢	A	1 破片		黒褐色	にぶい黄褐色	針・砂や少	スス
153	38F12-1・2		深井小鉢	A	1 破片		にぶい褐色	にぶい褐色	白色粒子・砂少	
154	37F		深井小鉢	A	1 破片		褐色	にぶい黄褐色	砂多	スス
155	37F15-2		深井小鉢	A	1 破片		にぶい黄褐色	黒褐色	石・角・砂や少	スス
156	38F10-3		深井小鉢	A	1 破片		灰黄褐色	褐色	針・砂や少	スス
157	37F		深井小鉢	A	1 破片		黃褐色	黃褐色	砂少	スス
158	38F3		深井小鉢	A	1 破片		褐色	灰黄褐色	砂少	スス
159	37F暗面		深井小鉢	A	1 破片		にぶい黄褐色	褐色	砂や少	
160	38E22-3		深井小鉢	A	1 破片		褐色	灰褐色	砂や少	
161	37F10-2		深井小鉢	A	1 破片		灰黄褐色	褐色	砂や少	スス
162	37F壁面		深井小鉢	A	1 破片		褐色	褐色	黒雲・砂や少	スス
163	37D25		深井小鉢	A	1 破片		にぶい黄褐色	黒褐色	石・砂や少	コゲ
164	37F暗面		深井小鉢	A	1 破片		灰黄褐色	黒褐色	砂や少	スス
165	38F11-1		深井小鉢	A	1 破片		褐色	褐色	砂多	
166	37F暗面		深井小鉢	A	1 破片		褐色	褐色	砂少	スス
167	38F14-1		深井小鉢	A	1 破片		褐色	にぶい褐色	チ・角多・砂や少	スス
168	37F15		深井小鉢	A	1 破片		褐色	褐色	砂多	スス
169	38F14-1		深井小鉢	A	1 破片		褐色	にぶい黄褐色	雲・白色粒子・砂少	スス
170	38F8-2		深井小鉢	A	1 破片		褐色	にぶい黄褐色	砂や少	スス
171	38F10-3		深井小鉢	A	1 破片		灰黄褐色	にぶい黄褐色	石・砂や少	スス
172	38F6-3		深井小鉢	A	1 破片		にぶい黄褐色	褐色	雲・砂や少	スス
173	38F13-3		深井小鉢	A	1 破片		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	針・砂や少	
174	38F9-4		深井小鉢	A	1 破片		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂や少	スス
175	38F14-1		深井小鉢	A	1 破片		黒褐色	にぶい赤褐色	針・砂や少	スス
176	38E23-1		深井小鉢	A	破片		灰黄褐色	灰黄褐色	石・黒雲・砂少	スス
177	37E24-2		深井小鉢	A	破片		にぶい黄褐色	黒褐色	砂や少	スス
178	37E23-4		深井小鉢	A	破片		にぶい褐色	にぶい褐色	砂や少	
179	暗面		深井小鉢	A	2 破片		にぶい赤褐色	黒褐色	砂少	スス
180	38F8-4		深井小鉢	A	破片		にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	石・砂や少	コゲ
181	暗面		深井小鉢	A	破片		褐色	褐色	砂や少	コゲ・スス
182	37F14-1		深井小鉢	A	破片		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	針・砂や少	
183	38F8-3		深井小鉢	A	破片		褐色	黑色	砂や少	コゲ・スス
184	37D16		深井小鉢	A	破片	LR?	にぶい褐色	黒褐色	橙色粘土粒・砂少	
185	37F10-3		深井小鉢	A	2 破片		灰黄褐色	灰黄褐色	長・砂や少	スス
186	38E4-1		深井	A	2 破片		にぶい褐色	にぶい褐色	砂少	スス
187	37E23-4		深井小鉢	A	破片		にぶい褐色	にぶい褐色	石・針・砂や少	スス
188	37F暗面		深井小鉢	A	破片	LR	灰黄褐色	灰黄褐色	砂多	スス
189	38F13-4		深井小鉢	A	破片		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂や少	
190	38F14-2		深井小鉢	A	2 破片		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂や少	
191	暗面北		深井小鉢	A	2 破片		灰黄褐色	灰黄褐色	砂少	スス
192	38F8-2		深井小鉢	A	2 破片		にぶい黄褐色	黑色	砂少	スス
193	38F10-1		深井小鉢	A	2 破片		黄褐色	黄褐色	砂少	
194	38F7-3		深井小鉢	A	2 破片		にぶい褐色	灰黄褐色	角・砂少	スス
195	38E		深井小鉢	A	27 破片		浅黄褐色	灰黄褐色	チ・砂多	
196	38F2-2		深井小鉢	A	2 破片		にぶい褐色	にぶい褐色	砂少	
197	37F14-1		深井小鉢	A	2 破片		にぶい褐色	灰褐色	黒雲・砂少	コゲ
198	38F8-4		深井小鉢	A	2 破片		褐色	黑色	砂多	スス
199	38F11-4		深井小鉢	B	3 破片	LR	灰黄褐色	褐色	針・白色粒子・砂少	スス
200	37F暗面		深井小鉢	B	破片		灰黄褐色	灰黄褐色	砂や少	
201	38F4-4		深井小鉢	B	破片	RL	にぶい褐色	にぶい褐色	砂多	
202	37E暗面		深井小鉢	B	破片	LR	灰黄褐色	灰黄褐色	砂多	スス
203	38F15-1		深井小鉢	B	破片		にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	石・金雲・黒雲・砂少	
204	37D23		深井小鉢	B	1 破片	LR	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂多	
205	38F8-3		深井小鉢	B	1 破片	RL	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂少	スス
206	38E24-1		深井小鉢	B	2 破片		にぶい褐色	にぶい褐色	長・褐色粘土・砂少	

KD1区下層 織文土器観察表 (8)

報告 No.	出土地点 グリッド	層位 層位	器種	分類		遺存 状況	縄文 形体	色調		黏土	付着物
				大	小			外面	内面		
207	38E24-1	Vla	深鉢か鉢	B	2	破片		にぶい黄褐色	にぶい褐色	長・褐色粘土・砂少	
208	38F11-4	Vla	深鉢か鉢	B	3	破片	LR	褐色	褐色	砂少	スヌ
209	38F11-1	Vla	深鉢か鉢	B	3	破片	RL	黒色	にぶい黄褐色	砂少や少	スヌ
210	37F8	Vla	深鉢か鉢	B	3	破片	RL	にぶい褐色	にぶい褐色	砂少	スヌ
211	38F13-2	Vla	深鉢か鉢	C		破片		赤褐色	灰褐色	石多・砂やや少	スヌ
212	暗渠	Vla	深鉢か鉢	C		破片		赤褐色	赤褐色	石多・砂やや少	スヌ
213	37F4-3	Vla	深鉢か鉢	C		破片		にぶい褐色	にぶい褐色	墨黒・砂少	コゲ・スヌ
214	38E14-2	Vla	深鉢か鉢	C		破片		黒褐色	黒褐色	石多・砂少	スヌ
215	37E25-3	Vla	深鉢か鉢	C		破片		褐色	褐色	石多・砂やや少	スヌ
216	37F7	Vla	深鉢か鉢	C	1	破片		褐色	黒色	角・白色粒子多・砂少	スヌ
217	暗渠北	Vla	深鉢か鉢	C	1	破片		褐色	褐色	角・砂やや少	スヌ
218	37F8-1	Vla	深鉢か鉢	C		破片		褐色	黒色	角・白色粒子多・砂少	スヌ
219	37D4	Vla	深鉢か鉢	C		破片	RL	黒褐色	黒褐色	黒墨石?・砂やや少	スヌ
220	38F13-4	Vla	深鉢か鉢	C		破片	LR	灰黄褐色	灰黄褐色	石・砂少	
221	37F3-2	Vla	深鉢か鉢	C		破片		にぶい赤褐色	黒褐色	黒墨・砂やや少	
222	38F5-3	Vla	深鉢か鉢	C	2	破片	LR	灰黄褐色	灰黄褐色	砂少や多	スヌ
223	37E25-1	Vla	深鉢か鉢	C		破片		灰褐色	灰褐色	白色粒子多量・砂少	
224	38F11-4	Vla	深鉢か鉢	C	3	破片		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂少	
225	38F5-2	Vla	深鉢か鉢	C	3	破片		褐色	褐色	石・針・砂少	
226	37F7	Vla	鉢	D	1	破片		にぶい褐色	灰褐色	砂少や多	スヌ
227	38F5-2	Vla	深鉢か鉢	D	1	破片		にぶい褐色	にぶい黄褐色	石・長・砂多	
228	38F13-3	Vla	深鉢か鉢	D	1	破片		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂少	
229	38F8-3	Vla	深鉢か鉢	D	1	破片		にぶい黄褐色	褐色	白色粒子多・砂少	
230	38F7-1	Vla	深鉢か鉢	D	1	破片		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂少	スヌ
231	37F9-3	Vla	深鉢か鉢	D	1	破片		褐色	褐色	砂少や少	
232	38F6-2	Vla	深鉢か鉢	D	1	破片		にぶい褐色	にぶい褐色	褐色粘土粒・砂少	スヌ
233	37F15-1・2	Vla	深鉢か鉢	D	1	破片		灰黄褐色	褐色	砂少	スヌ
234	38F10-1	Vla	深鉢か鉢	D	1	破片		にぶい褐色	褐色	白色粒子多・砂少	スヌ
235	38F15-3	Vla	深鉢か鉢	D	1	破片		にぶい褐色	にぶい褐色	砂少	
236	38F8-3	Vla	深鉢か鉢	D	2	破片		褐色	褐色	砂少	
237	37D4	Vla	深鉢か鉢	D	3	破片	RL	黒色	にぶい黄褐色	砂多	スヌ
238	37E18-4	Vla	深鉢か鉢	D	3b	破片	LR	にぶい褐色・黒色	褐褐色	砂少や少	スヌ
239	37F10-3	Vla	深鉢か鉢	D	3	破片	RL	褐色	褐色	砂少	
240	38F9-3・4	Vla	深鉢か鉢	D	3a	破片		灰黄褐色	褐色	黒雲・砂少	コゲ・スヌ
241	38F5-2	Vla	深鉢か鉢	D		破片	RL	にぶい褐色	にぶい褐色	砂多	スヌ
242	37F7-1	Vla	深鉢か鉢	D	3b	破片	RL	にぶい褐色	にぶい褐色	砂少や多	
243	38F13-2	Vla	深鉢か鉢	D	3b	破片	RL	にぶい褐色	にぶい褐色	砂多	
244	38E24-3	Vla	深鉢か鉢	D	3b	破片		暗灰黄色	灰褐色	砂多	スヌ
245	38F8-4	Vla	鉢	D	4	破片	RL	灰黄褐色	灰黄褐色	砂少や少	
246	37E20-3	Vla	深鉢か鉢	D		破片	RL	にぶい褐色	褐色	砂少や少	スヌ
247	38E25-1	Vla	深鉢か鉢	D	4	破片	LR	褐色	にぶい黄褐色	墨黒・砂多	
248	38F13-4	Vla	深鉢か鉢	D	4a	破片	LR	黒色	にぶい赤褐色	針多・砂やや多	スヌ
249	37F4-1	Vla	深鉢か鉢	D	4a	破片	LR	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	針多・砂やや多	スヌ
250	暗渠北	Vla	深鉢か鉢	D	4a	破片	LR	名褐灰色	にぶい黄褐色	砂少や少	
251	38F14-4	Vla	深鉢か鉢	D	4a	破片	LR	にぶい褐色	にぶい黄褐色	砂少や少	
252	38F9暗渠	Vla	深鉢か鉢	D	4a	破片	LR	にぶい褐色	灰褐色	砂少や少	スヌ
253	37F10	Vla	深鉢か鉢	D	4a	破片	RL	にぶい褐色・黒色	黒色	砂少	
254	37E10-3	Vla	深鉢か鉢	D	4a	破片	RL	褐色	褐色	砂多	コゲ
255	37D24	Vla	深鉢か鉢	D	4a	破片		灰褐色	黒褐色	角・砂やや多	
256	37F15-2	Vla	深鉢か鉢	D	4	破片		灰褐色	灰褐色	砂多	スヌ
257	38E9-3	Vla	深鉢か鉢	D	4	破片		にぶい褐色	黒褐色	砂少	コゲ
258	37E10-3	Vla	深鉢か鉢	D	4	破片		にぶい褐色	黒褐色	砂多	コゲ
259	37E25-4	Vla	深鉢か鉢	D	4c	破片		褐色	にぶい黄褐色	石多・砂やや多	スヌ
260	38F10-2	Vla	深鉢か鉢	D		破片		褐色	灰褐色	砂多	スヌ
261	38F12-3	Vla	深鉢か鉢	D		破片		灰褐色	にぶい黄褐色	角・砂多	スヌ
262	暗渠東	Vla	浅鉢	A	3	破片		にぶい褐色	にぶい黄褐色	石・砂少	
263	38F13-4	Vla	浅鉢	A	3	破片		灰黄褐色	灰黄褐色	石・角・針・砂少	赤錆
264	37F	Vla	浅鉢	A	3	破片		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	金屬・砂少	黒錆
265	37F4-4	Vla	浅鉢	A	3	破片		にぶい赤褐色	灰褐色	針多・砂少	赤錆
266	38E	Vla	浅鉢	A	3	破片		にぶい褐色	にぶい褐色	石・長・砂やや多	赤錆?

KD1区下層 繩文土器観察表(9)

報告 No.	出土位置 グリッド 層位		器種	分類		遺存 状況	縄文 原体	色調		胎土	付着物
				大	小			外面	内面		
	267	38F14-1	遺物	A	3	破片	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石・長・針・砂や少	スス	
268	38F9-1	遺物	浅鉢	A	3	破片	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石・砂や少	赤漆	
269	37F9-2	遺物	浅鉢	A	3	破片	灰黄褐色	灰黄褐色	石・砂少		
270	縄面	遺物	浅鉢	A	3	破片	不明	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	金雲・砂多	
271	37E24-1	遺物	浅鉢	A	3	破片	灰黄褐色	灰黄褐色	石多・砂多		
272	38F7-1	遺物	浅鉢	A	3	破片	灰黄褐色	灰黄褐色	砂少	赤漆	
273	縄面	遺物	浅鉢	A	3	破片	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角・石・砂少		
274	38E16-4	遺物	浅鉢	A	3	破片	にぶい黄褐色	赤褐色	石・瓦・針・砂少	黒漆 赤漆	
275	38E22-3	遺物・遺面	浅鉢	A	3	破片	灰黄褐色	黒色	石・雲・砂や少	黒漆	
276	縄面	遺物	浅鉢	A	3	破片	暗赤褐色	暗赤褐色	砂や少	黒漆	
277	38C21	遺物	浅鉢	A	3	破片	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	雲・砂少		
278	37F9-4	遺物	浅鉢	A	3	破片	黒色	黒色	砂少	黒漆	
279	37F9-4	遺物	浅鉢	A	3	破片	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	砂少		
280	縄面	遺物	浅鉢	A	3	破片	にぶい黄褐色	赤色	雲・針・砂少		
281	38F11-2	遺物	有孔陶付	D	5	破片	にぶい褐色	灰褐色	石多・砂多		
282	38F8-3	遺物	有孔陶付	D	5	破片	黒色	にぶい黄褐色	砂少	スス・赤漆	
283	38F8-4	遺物	有孔陶付	D	5	破片	黒褐色	にぶい黄褐色	砂少	スス・赤漆	

KD1区下層 土製品観察表

報告 No.	出土位置 グリッド 層位		器種	法量 (cm)		遺存 状況	文様	色調		胎土	付着物	備考
				長さ	底径			無文	にぶい黄褐色			
	284	縄面	ミニチュア土器	5.4		4.4	14F残	無文	褐灰色	石・長多・砂多		
285	38E16-3	遺物	ミニチュア土器	4.0			底部	無文	にぶい黄褐色	砂や少	スス	
286	37F9-3	遺物	ミニチュア土器	2.8			底部	無文	にぶい褐色	砂少		
287	37F4-1	遺物	ミニチュア土器	3.5			底部	比輪	褐灰色	砂少	スス	
288	37F10-4	遺物	土偶				左腕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石・長・角・砂多	中空	
289	37F4-1	遺物	土偶				右脚	にぶい黄褐色	暗灰褐色	石・長・角・砂多	中空	
290	37F9-2	遺物	土偶				左脚	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石・長・角・砂多	中空	
291	37F9	遺物	土偶				体部	にぶい黄褐色	暗灰褐色	石・長・角・砂多	中空	
292	38E24-3	遺物	土偶				体部	黒褐色	灰黄褐色	白色粒子	パンザイ型	
293	38E24-3	遺物	土偶				頭部	にぶい褐色	にぶい褐色	長石・砂少		
294	38F11	遺物	土偶				脛部	部位	部位黄褐色	長多・砂多	カッパ型	
295	縄面	遺物	耳飾り				3/4残	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石・長・砂や多	耳栓型	

KD1区下層 石器観察表(1)

報告 No.	出土位置 グリッド 層位		器種	状態	石材	分類		長さ	幅	厚さ	重さ (g)	備考		
						大	小							
	296	37F15-2	W	石刀	完形	A	黒曜石	27	1.6	0.3	1.0			
297	37F15-1	W	石刀	完形	A	チャート		25	1.4	0.4	1.0			
298	37F4-2	W	石刀	欠損	B	黒曜石	21	1.1	0.4	0.4				
299	38F13-4	W	石刀	欠損	B	硅質頁岩	3.0	1.7	0.5	1.7				
300	38F11	W	石刀	完形	B	黒曜石	25	1.4	0.3	1.0				
301	38F11-1	W	石刀	欠損	A	黒曜石	1.6	1.1	0.3	0.4				
302	37F15-1	W	石刀	完形	B	硅質頁岩	1.8	1.5	0.4	1.1				
303	38F14-2	W	石刀	完形		安山岩	5.2	3.8	1.2	19.3				
304	37F5-1	W	石刀	欠損		鈍石英	3.6	3.7	1.2	11.4				
305	37F10-4	W	石刀	完形		黒曜石	2.7	1.1	0.8	1.5				
306	38E13-1	W	打製石斧	完形	A	2 安山岩	19.8	7.3	2.7	379.0				
307	38F9-4	W	打製石斧	完形	A	1 花紋岩	17.5	6.8	3.3	355.0				
308	38F10-1	W	打製石斧	完形	A	2 級紋岩	16.8	8.1	2.5	343.2				
309	37D14	W	打製石斧	完形	A	1 白色細粒砂岩	11.8	7.9	2.4	223.7				
310	SK45J	38F11	1	打製石斧	完形	A	3 砂岩	13.2	5.5	2.2	198.1			
311	37F15-3	W	打製石斧	完形	B	2 黑色細粒砂岩	20.5	6.3	2.9	400.0				
312	38F11-4	W	打製石斧	完形	B	3 泥狀岩	16.5	6.1	1.9	227.0				
313	38F9-1	W	打製石斧	完形	B	2 砂岩	16.5	7.0	2.5	304.0				
314	38E11-1	W	打製石斧	完形	B	1 黑色細粒砂岩	11.7	6.3	2.0	200.0				

KD1区下層 石器観察表(2)

報告 No	出土位置			器種	状態	分類 大 小	石材	法量(cm)			備考
	遺構	グリッド	層位					長さ	幅	厚さ	
315	38F4-3 38F5-2	VII	打製石斧	完形	A 3	安山岩		17.5	7.7	2.6	374.0
316	37E13-4	VII	打製石斧	完形	B 3	砂岩		18.0	10.1	3.1	676.0
317	37F暗渠	VII	打製石斧	完形	B 1	黑色細粒砂岩		6.4	2.9	1.3	36.0
318	27F10-2	VII	磨製石斧	完形	A	蛇紋岩		6.1	2.5	0.7	264.4
319	37E20-3	VII	磨製石斧	完形	A	蛇紋岩		6.5	3.7	1.0	437.7
320	38F7-2	VII	磨製石斧	頭部欠	B	蛇紋岩		11.7	5.5	2.2	266.3
321	38D21	VII	磨製石斧	刃部欠	B	蛇紋岩		11.8	5.5	2.4	284.4
322	37F5-4	VII	磨製石斧	刃部欠	B	蛇紋岩		11.7	5.3	2.1	192.3
323	37F10-3	VII	磨製石斧	はげて形	B	蛇紋岩		11.1	5.9	2.3	246.4
324	37E13-2	VIIa	磨製石斧	刃部欠	B	蛇紋岩		13.5	5.8	2.3	312.9
325	37E暗渠	VII	磨製石斧未成品	完形	B 1	蛇紋岩		10.4	9.7	3.2	501.0
326	37E25-2	VIIa	磨製石斧未成品	完形	B 2	蛇紋岩		11.8	5.4	2.8	164.3
327	SC42J 38F13	I	磨製石斧未成品	完形	A 1	蛇紋岩		8.2	4.2	2.1	100.1
328	38E13-2 38E2-3	VIIa	磨製石斧未成品	完形	B 3	蛇紋岩		14.4	6.2	2.8	373.0
329	38F7-1	VII	磨製石斧未成品	完形	A 4	蛇紋岩		9.4	3.5	1.1	56.0
330	37F4-3	VIIa	磨製石斧未成品	完形	A 4	蛇紋岩		10.5	4.4	1.4	87.0
331	38F12-2	VIIa	磨製石斧未成品	完形	C 3	蛇紋岩		20.5	10.6	5.5	1450.0
332	37F9	VIIa	磨製石斧未成品	完形	C 3	安山岩		16.9	8.6	5.2	1255.0
333	38F3	VII	磨製石斧未成品	完形	B 3	蛇紋岩		13.0	7.6	2.3	337.0
334	38E5-1	VIIa	磨製石斧未成品	欠損	B 4	蛇紋岩		10.0	7.3	3.7	426.0
335	38F2-4	VII	磨製石斧未成品	欠損	C 5	蛇紋岩		8.1	9.3	3.4	362.0
336	38F13-2	VII	磨製石斧未成品	欠損	C 5	蛇紋岩		13.8	11.8	6.5	1360.0
337	SC42J 38F13-3	I	石鍬	完形	A la	安山岩		6.2	3.8	1.9	75.0
338	38F7	VII	石鍬	完形	A la	安山岩		6.2	4.8	2.1	73.2
339	37F9-4	VII	石鍬	完形	B la	砂岩		10.0	9.4	2.4	267.8
340	37E19	VIIa	石鍬	完形	B la	安山岩		7.1	3.7	1.8	72.9
341	暗渠	VII	石鍬	完形	A 1c	安山岩		5.7	3.4	2.0	55.1
342	37E18	VIIa	石鍬	完形	B lc	?		11.5	8.5	4.0	626.3
343	38E17-1	VIIa	石鍬	完形	B 2	安山岩		12.4	7.7	3.7	645.0
344	38F3	VII	石鍬	完形	A 1a'	蛇紋岩		7.8	4.3	1.8	97.6
345	38E24	VIIa	石鍬	完形	A 1a	砂岩		7.9	3.9	1.8	88.4
346	暗渠	VII	石鍬	完形	B 2	安山岩		13.3	8.5	7.1	1177.2
347	38D24	VII	砥石	欠損	A 1	粗粒砂岩		10.2	9.0	4.0	467.8
348	38F2-4	VII	砥石	欠損	A 1	粗粒砂岩		15.0	10.5	2.9	801.7
349	38F13	VII b	砥石	欠損	A 1	粗粒砂岩		7.5	7.0	1.8	104.2
350	38F7	VII	砥石	欠損	A 1	粗粒砂岩		19.4	13.8	6.8	2120.3
351	SC42J 38F13	I	砥石	欠損	B	粗粒砂岩		8.4	5.8	1.1	60.0
352	38F11-2	VII	砥石	完形	B	砂岩		9.3	6.3	1.4	89.0
353	38F13-3	VII	砥石	完形	B	砂岩		12.9	7.2	1.5	171.4
354	38F13-3	VII	砥石	完形	B	砂岩		11.0	8.3	1.7	208.2
355	SC42J 38F13	4	砥石	完形	B	砂岩		16.4	10.0	1.8	391.2
356	SC42J 38F13	4	砥石	完形	B	砂岩		10.2	9.5	1.6	147.2
357	38F9-1	VII	砥石	完形	B	砂岩		13.3	9.7	2.0	319.4
358	38F8	VII	粗磨石頭	完形	A	蛇紋岩		7.8	7.2	6.4	606.0
359	暗渠	VII	粗磨石頭	完形	A	蛇紋岩		6.4	6.0	3.9	266.9
360	38F13-3	VII	粗磨石頭	完形	A	砂岩		6.0	6.8	4.9	340.4
361	38F3-3	VII	粗磨石頭	完形	A	安山岩		11.4	9.7	7.0	1189.1
362	37E4-4	VII	粗磨石頭	完形	B 1	黑色細粒砂岩		9.1	2.6	1.4	50.0
363	38E7-1	VIIa	粗磨石頭	完形	B 1	蛇紋岩		10.5	7.2	2.1	293.4
364	38D12	VII	粗磨石頭	完形	B 4	蛇紋岩		6.2	5.1	1.6	73.2
365	38F8	VII	粗磨石頭	完形	B 2	安山岩		15.2	8.5	3.9	794.5
366	38F7	VII	粗磨石頭	完形	B 3	砂岩		7.8	7.2	5.3	405.3
367	37F9	VIIa	粗磨石頭	完形	B 3	凝灰岩		9.6	7.5	5.5	417.8
368	38E14	VII	粗磨石頭	完形	B 3	凝灰岩		10.9	5.8	4.0	288.9
369	37F9-2-4	VIIa	石盤	完形	砂岩			32.5	23.5	11.3	12750.2
370	37F15-2	VIIa	石盤	欠損	砂岩			37.8	25.4	6.4	8531.2
371	38E25	VII	石盤	完形		安山岩		26.0	25.7	5.6	6571.5
372	37F暗渠	スクリイバ-				白色細粒砂岩		15.8	11.3	3.3	5560.0
373	38F2-4	VII	スクリイバ-	完形	A 1	安山岩		14.9	10.4	2.4	4585.0
374	38F7-1	VII	スクリイバ-	完形	A 1	白色細粒砂岩		7.0	8.9	2.0	1372.0

KB1区中層 織文土器 観察表

報告 №	出土位置 グリッド	器種	口径	遺存 状況	文様	織文 原体	色調		黏土	付着 物	参考
							外面	内面			
419	53H19	V	深鉢	破片 爪彫文?	尚巣文	橙色	にぶい褐色	砂	黒色粘子多 砂		摩耗顯著
420	53H15	V	深鉢	破片	幾縞文	褐色	にぶい黃褐色	針・砂			
421	54H12	V	深鉢	破片	幾縞上爪彫文	赤色	灰褐色	砂やや少	摩耗顯著		
422	53H19	V	深鉢	破片	幾縞文	RL	にぶい黄褐色	砂	摩耗顯著		
423	54F10	V	深鉢	破片	幾縞文	灰褐色	浅黃褐色	角・針・砂	摩耗顯著		
424	54C16	V	深鉢	破片	尚巣文・沈縞文	明赤褐色	橙色	砂	摩耗顯著		
425	53F10	V	深鉢	破片		にぶい橙色	褐灰色	砂	石多 砂やや少	摩耗顯著	
426	54G10	V	深鉢	山	破片	幾縞文	?	明赤褐色	橙色	砂多 砂やや少	427と同一 428と同一
427	54G13	V	深鉢	破片		明赤褐色	明赤褐色	砂	砂やや少	摩耗顯著	
428	54C17	V	深鉢	平	破片	幾縞上押彫	LR	にぶい黄褐色	黒墨・砂		
429	54H12	V	深鉢	山	破片	円形刻突文	RL	にぶい褐色	砂やや少		
430	54H12	V	深鉢		破片		黒褐色	にぶい赤褐色	金賞多・砂	摩耗顯著	
431	54G19	V	深鉢		破片	円形刻突文	RL	灰褐色	砂少		
432	54H11	V	深鉢		破片	網目縞文	灰褐色	橙色	砂少	摩耗顯著	
433	54F17	V	深鉢		破片	幾縞文	橙色	砂やや多	摩耗顯著		
434	53G10	V	深鉢		破片	沈縞文	LR	橙色	にぶい橙色	砂	摩耗顯著 435と同一
435	53G10	V	深鉢		破片	磨削縞文	LR	橙色	にぶい橙色	砂	摩耗顯著 434と同一
436	53H10	V	深鉢	平	破片		LR	にぶい橙色	にぶい黄褐色	砂	摩耗顯著
437	54F16	V	深鉢		破片		LR	にぶい橙色	砂多	摩耗顯著	

KB1区中層 石器観察表

報告№	遺構 グリッド	出土位置	器種	状態	分類	石材	法量(cm)			参考	
							大 小	長さ	幅		
438	54H17	V	尖頭	完形		黒曜石		5.7	1.9	0.8	14.0
439	54C22	V	打撲石斧	完形	A	3 黒色細粒砂岩		12.0	5.9	2.5	255.0
440	53H19	V	打撲石斧	ほぼ完形	B	2 流紋岩		11.0	4.8	1.0	100.0
441	54D12	V	打撲石斧	完形	B	2 砂岩		17.1	6.2	1.5	325.0
442	54F18	V	打撲石斧未成品	完形	C	3 安山岩		15.6	5.3	3.0	430.0
443	54F11	V	磨削石斧未成品	欠損	B	3 砂岩		8.7	7.2	3.0	440.0
444	54H21	V	磨削石斧未成品	完形	B	4 砂岩		9.0	4.1	1.7	100.0
445	54D23	V	石錐	完形	A	1a 白色細粒砂岩		6.1	4.0	1.4	62.7
446	53F20	V	石錐	完形	A	1a 黒色細粒砂岩		4.0	3.7	1.3	29.2
447	53F10	V	石錐	完形	A	1b 砂岩		10.0	9.7	2.5	342.8
448	53F6	V	石錐	完形	A	3 砂岩		9.2	7.3	5.2	456.3
449	53F14	V	砾石	完形	A	2 粗粒砂岩		9.5	5.6	1.3	55.2
450	54F2	V	砾石	完形	B	砂岩		13.8	13.6	2.6	609.2
451	54H12	V	敲撲石類	完形	A	砂岩		4.3	4.5	3.5	119.2
452	54F12	V	敲撲石類	欠損	A	砂岩		9.6	6.3	4.2	482.8
453	54E17	V	敲撲石類	完形	B	1 砂岩		17.4	3.9	3.1	400.0
454	53H15	V	敲撲石類	完形	B	2 安山岩		10.3	8.1	5.0	585.2
455	54H7	V	敲撲石類	完形	B	2 四極岩		12.1	8.0	5.6	826.7
456	54H11	V	石核	完形	A	安山岩		8.2	7.3	2.6	237.8
457	54G5	V	石墨鉛	欠損		砂岩		16.6	14.0	5.0	1295.8
458	54G15	V	石墨鉛	完形		砂岩		20.6	17.0	3.0	1764.3
459	54G17	V	石墨鉛	完形		安山岩		43.5	23.0	8.7	11739.5

KB1区上層 土器調査表(1)

順位 No.	出土地點 遺跡名、グリッド	施設	種類	法面 口径(cm) 底径 厚さ	蓋状況	胎土	色調		測量 内面	備考
							外面	内面		
460	鹿路399 5aC19	6m	弦生土器	素 (15.2)	破片、甌上復元 石・長・チ 砂やや多い	石・長・チ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	口：褐色 底：ヨコナダ 体：ハゲ	口：褐色 底：ヨコナダ 体：ハゲ	外周灰化物
461	鹿路399 5aC19・20	6m	弦生土器	素 (15.0)	破片	長	にぶい褐色 にぶい褐色	口：ヨコナダ 底：ハテナナ 體：ヨコナダ 点足灰轉文 ナマ	ハテナナ 口：ヨコナダ 底：ハテナナ 體：ハテナナ 点足灰轉文 ナマ	外周灰化物
462	鹿路399 5aC19	6m	弦生土器	素 (15.8)	小片、穿孔留着 口縁部のみ残 5mm×6mm程度多見	石・長	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	口縁：ヨコナダ 底：ヨコナダ 體：ヨコナダ 点足灰轉文 ナマ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	外周灰化物
463	鹿路399 5aC19	6m	弦生土器	素 (15.6)	破片	長・角	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	口縁：ヨコナダ 底：ヨコナダ 體：チナマ 点足：ハテナナ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	外周灰化物
464	鹿路399 5aC19・20	6m	弦生土器	素 (15.2)	破片	小片、穿孔留着 体部破片・甌底	褐色 褐色	口縁：ヨコナダ 底：チナマ 體：チナマ 点足：ハテナナ	褐色 褐色	外周灰化物
465	鹿路399 5aC23	6m	弦生土器	素 (15.7)	破片	石・砂粘土粒 砂粘土粒	褐色 褐色	口縁：ヨコナダ 底：ヨコナダ 體：チナマ 点足：ハテナナ	褐色 褐色	外周灰化物
466	鹿路399 5aC19・20	6m	弦生土器	素 (15.0)	小片、穿孔留着 砂やや多い	石・長	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	口縁：ヨコナダ 底：ヨコナダ 體：チナマ 点足：ハテナナ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	外周灰化物
467	鹿路399 5aC19・20	6m	弦生土器	素 (15.0)	破片	上半は定形 砂粘土粒	褐色 褐色	口縁：ヨコナダ 底：ヨコナダ 體：チナマ 点足：ハテナナ	褐色 褐色	外周灰化物
468	鹿路399 5aC20	6m	弦生土器	素 (23.2)	破片	石・長	にぶい褐色 泥赤褐色	口縁：ヨコナダ 底：ヨビサエ 體：ケズリ 点足：ハテナナ	褐色 褐色	外周灰化物
469	鹿路399 5aC16	6m	弦生土器	素 (15.8)	破片、甌上復元	長	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	口縁：ヨコナダ 底：ヨコナダ 體：チナマ 点足：ハテナナ	褐色 褐色	外周灰化物
470	鹿路399 5aC16	6m	弦生土器	素 (4.9)	底部	石・長・チ	灰褐色 灰褐色	口縁：ヨコナダ 底：ヨコナダ 體：チナマ 点足：ハテナナ	褐色 褐色	外周灰化物
471	鹿路399 5aC20	6m	弦生土器	素 (17.9)	破片、穿孔留着 土器・砂粘土粒	土器・砂粘土 砂粘土	浅褐褐色 褐色	口縁：ヨコナダ 底：ヨコナダ 體：チナマ 点足：ハテナナ	褐色 褐色	外周灰化物
472	鹿路399 5aC23	6m	弦生土器	直11.8cm (13.0)	小片、穿孔留着 砂粘土粒	長	にぶい褐色 にぶい褐色	口縁：ヨコナダ 底：ヨコナダ 體：チナマ 点足：ハテナナ	褐色 褐色	外周灰化物
473	鹿路399 5aC19・20	6m	弦生土器	素 (15.0)	小片	石・長・チ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	口縁：チナマ 底：ヨコナダ 體：チナマ 点足：ハテナナ	褐色 褐色	外周灰化物
474	鹿路399 5aC19	6m	弦生土器	素 (12.4)	小片	長	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	口縁：ヨコナダ 底：ヨコナダ 體：チナマ 点足：ハテナナ	褐色 褐色	外周灰化物
475	鹿路399 5aC16	6m	弦生土器	素 (21.0)	小片	石・長・素	にぶい褐色 にぶい褐色	口縁：ヨコナダ 底：ヨコナダ 體：チナマ 点足：ハテナナ	褐色 褐色	外周灰化物

KB1区上層 土器調査表 (2)

順位 No.	出土地點 遺構名	層位	種類	口径 cm	底形	直徑 cm	高さ cm	蓋状況	施土	色調		測量 内面	備考
										外圓	内面		
476	施筋399 5dC18・20 6層	余生土器	盆形	(22.0)	小片	石・長	にぶい黄色 にぶい黄色	口：ヨコナダ 口：ヨコナダ	ミガキ ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
477	施筋399 5dC19	6層	土陶器	甕	(22.0)	小片	石・長・窪	にぶい黄色 にぶい黄色	体：ナダ 口：ヨコナダ	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ
478	施筋399 5dC19	7層	土陶器	甕	(4.2)	小片	石・長	灰黃褐色 灰黃褐色	体：ナダ	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ
479	施筋399 5dE	上層	土陶器	甕	(6.0)	小片	石・褐色粘土粒	黄灰色 にぶい黄色	体：ナダ 口：ヨコナダ	ナダ	ナダ	ナダ	ナダ
480	施筋399 5dC19・20 6層	土陶器	甕	(6.0)	小片	石・長	にぶい黄色 にぶい黄色	口：ヨコナダ 体：ナダ	ミガキ ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
481	施筋399 5dC19・20 4層	土陶器	丸底甕	10.1	(2.0) (2.7) (2.5) (2.5) (2.5) (2.5)	今今相	今今相	石・長・窪	にぶい黄色 にぶい黄色	ミガキ ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
482	施筋399 5dC14	4層	土陶器	甕	(11.0)	3.8	6.1	1.28	石・長・窪	にぶい黄色 にぶい黄色	ミガキ ミガキ	ミガキ	ミガキ
483	施筋399 5dC16	6層	土陶器	高杯	18.2	杯底3/4周	石・長	にぶい黄色 にぶい黄色	体下：ヘナナデ 口：ヨコナダ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
484	施筋399 5dC19・20 4層	土陶器	高杯	(17.8)	杯底1/3周	石・長	にぶい黄色 にぶい黄色	口：ヨコナダ 体下：ヘナナデ	ミガキ ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
485	施筋399 5dC20	1・25層	土陶器	高杯	18.0	脚部のみ1/3周	石・長	にぶい黄色 にぶい黄色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
486	施筋399 5dC18	7層	土陶器	高杯	(12.5)	小片・穿孔圓窓	石・長・窪・手	窓色	にぶい黄色 にぶい黄色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
487	施筋399 5dC16	下層	土陶器	高杯	(12.5)	脚部のみ1/3周	石・長	褐色粘土粒	窓色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
488	施筋399 5dC19	7層	土陶器	高杯	(15.0)	小片・穿孔圓窓	石・針	にぶい黄色 褐色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
489	施筋399 5dC19・20 7層	土陶器	杯	(13.8)	内面穿孔圓窓	相良	褐色	口：ヨコナダ 口：ヨコナダ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
490	施筋399 5dC16	2層	土陶器	杯	(13.6)	石・質・折	にぶい黄色 にぶい黄色	ミガキ？	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
491	施筋399 5dC25	5T-T	土陶器	杯	(13.3)	外側穿孔圓窓	白色粘土	相良	口：ヨコナダ 口：ヨコナダ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
492	施筋399 5dC19・20 4層	土陶器	杯	(13.0)	小片	石・白色粘土	黑色	口：ヨコナダ 口：ヨコナダ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
493	施筋399 5dC16	2層	土陶器	杯	(13.9)	1/4周	外・白色粘土	黑色	口：ヨコナダ 口：ヨコナダ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
494	施筋399 5dC19・20 4層	土陶器	杯	13.6	3.0	6.3	4.3周	相良	にぶい黄色 黑色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ
495	施筋399 5dC19・20 4層	高杯	白色粘土	白色粘土	白色	白色	白色	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ

KB1区上層 土器觀察表(3)

番号	出土地點	遺物No.	部位	種類	深幅 上口径・底径 mm	法縫 上口縫・底縫 mm	通合状況	胎土	色調		測定	備考
									外側	内側		
496	施設399	SSC16	盤土	土器	高杯	8.9	外径一側底1/2強	黃褐色胎子板	に赤い青紫色	に赤い青紫色	体: ハコメミガキ 縫: ハコメミガキ	縫: ハコメミガキ
497	施設399	54C25	STr	燒毛器	杯壺	15.6	小片	褐色胎子多量	灰白色	灰白色	縫: ハコメミガキ 縫: ハコメミガキ	縫: ハコメミガキ
498	施設399	54C25	STr	燒毛器	杯壺	17.7	小片	白色胎子多量	灰白色	灰白色	ロクロナダ	ロクロナダ
499	施設399	54C25	STr	燒毛器	杯壺	15.9	白色胎子多量	灰白色	灰白色	灰白色	ロクロナダ	ロクロナダ
500	施設399	54C25	49	燒毛器	杯壺	14.3	8.7	41 1/2強	灰白色	灰白色	ロクロナダ	ロクロナダ
501	施設399	54C24	29	燒毛器	有柄杯	14.0	8.2	39 1/2強度強	白色胎子多量	に赤い青紫色	縫: ロクロナダ	縫: ロクロナダ
502	施設399	54C18	49	燒毛器	有柄杯	13.6	6.9	44 小片	石	灰白色	ロクロナダ	ロクロナダ
503	施設399	55C19・20	49	燒毛器	有柄杯	8.4	底部少片	石	灰白色	灰白色	縫: ハコメミガキ 縫: ロクロナダ	ロクロナダ
504	施設399	55C21	49	燒毛器	有柄杯	8.0	底部少片	白色胎子多量	灰白色	灰白色	ロクロナダ	ロクロナダ
505	施設399	54C19・25	49	燒毛器	有柄杯	9.4	底部のみ残	白色胎子多量	灰白色	灰白色	縫: ロクロナダ 縫: ロクロナダ	ロクロナダ
506	施設399	54C19	上層	燒毛器	無柄杯	13.0	7.2	33 1/2強	石・長 白色胎子	に赤い青紫色	ロクロナダ	ロクロナダ
507	施設399	54C20・25	79	燒毛器	平張?	(13.0)	破片・底部無存	黑色胎子多量	灰白色	灰白色	縫: ロクロナダ 縫: ロクロナダ	ロクロナダ
508	SIK65	51G5	1M	燒毛器	板板		両把手のみ	石・長	灰白色	灰白色	テテ・テテリ・カキメ	ロクロナダ
509	施設399	54C17・19 54C22・25	54E	燒毛器	板板	12.1	24 1/2強度強	石 白色胎子やや多	青灰色	灰白色	口: ロクロナダ 縫: ロクロナダ	ロクロナダ
510	施設399	54C19・20	49	燒毛器	板板	6.8	破片	白色胎子	灰白色	灰白色	口: ロクロナダ 縫: カキメミタタキ	ロクロナダ
511	施設399	54C20・24 54E	29	燒毛器	板板		上部2/3強度強 底部イキなし	黑色胎子	灰白色	灰白色	ロクロナダ	ロクロナダ
512	施設399	54C18・20	29	燒毛器	長板板	10.0	底部少片	石・長・雲	灰白色	灰白色	ロクロナダ・北緯	ロクロナダ

KB1区上層 土器観察表(4)

番号	遺構名	アリゾン	部位	種類	器種	口径(㎝)	底高(㎝)	素存状況	施土	調査		備考
										外周	内面	
513	施土99	S5716	桶	灰土器	大甕	23.2	6.7	6.5程度削	灰	灰黄色	灰	ロクロナデ 体:タキ
514	S5715	1脚	土器	灰土器	杯	13.8		小・壁剥離	石・長・均	灰黄色	灰	ロクロナデ 体:タキ
515	S5717	53029	4脚	灰土器	杯・身	11.0		石・白色粒子	灰	灰黄色	灰	ロクロナデ ロクロナデ
516	S5717	51630	10脚	灰土器	瓶・身	7.0		小片	灰黄色	灰黄色	灰	ロクロナデ ロクロナデ
517	P255	53019	1脚	施土	承土器	15.0		小・壁剥離	石多量・長	灰黄色	灰	不明瞭 体:壁離
518	168	S5714	1脚	施土下器	瓶	18.0		小・壁剥離	石・長	浅灰褐色	浅灰褐色	ナゲ 体:白膜
519	P342	54712	1脚	施土	土器	20.1	3.5	石・長・均	石・長・均	褐色	褐色	不明瞭 体:ハゲ
520	P344	54610	1脚	施土	土器	17.0	7.2	底部のみ2脚	石・長・砂多量	浅灰褐色	浅灰褐色	ナゲ ロクロナデ
521	S5713	53019	1脚	施土	土器	14.0		小・壁剥離	長	浅灰褐色	浅灰褐色	その他:穿孔圓孔 その他の穿孔圓孔
522	P160	S5715	1脚	施土器	甕	21.0		小・壁剥離	石・長・砂多量	褐色	褐色	不明瞭 ロクロナデ
523	F49	S5710	1脚	灰土器	杯	14.0	1.0	石・白色粒子	石・白色粒子	黄灰色	黄灰色	ロクロナデ 底灰化
524	P314	54610	1脚	灰土器	甕	18.0		小片	黑色泥・多量	灰黄色	灰白色	ロクロナデ ロクロナデ
525	F72	54714	4脚	灰土器	甕?	17.0		白色粒子	石	黄灰色	黄灰色	ロクロナデ
526	S5716	53022	上層	灰土器	杯・身	11.0		圓窓・今なし	白色粒子	灰白色	灰白色	ロクロナデ ロクロナデ
527	S5716	54017・18	施土下器	灰土器	杯・身	11.4	2.0	5.6・石多量	白色泥・多量	灰黄色	灰褐色	LL-体:ロクロナデ 底:ロクロナデ
528	施土91	54011・12	施土下器	灰土器	杯・身	13.2	8.4	6.5(1脚)	1.0は石灰	灰	灰	ロクロナデ 体:ロクロナデ
529	施土91	54021・22	施土	灰土器	杯・身	13.0		無・付近のみ焼	白色粒子	灰	灰	ロクロナデ
530	施土91	54021・22	施土	灰土器	杯・身	13.0		無・付近のみ焼	白色粒子	黄灰色	黄白色	ロクロナデ
531	S5716	54028	下層	灰土器	杯・身	18.6		石	白色粒子	黄灰色	黄白色	ロクロナデ
532	S5716	54027	下層	灰土器	杯・身	15.8		小片	白色粒子	黄灰色	黄白色	ロクロナデ
533	S5716	54019	上層	灰土器	杯・身	17.0		石・灰	黑色泥・多量	灰白色	灰白色	ロクロナデ
534	施土99	53014	上層	灰土器	杯・身	13.9		小片	黑色泥・多量	黄灰色	黄灰色	ロクロナデ
535	施土91	54026	上層	灰土器	杯・身	14.8		1.3脚底陶	白色粒子	黄白色	黄白色	ロクロナデ
536	S5716	54027	施土	灰土器	杯・身	13.6		小片	白色粒子	灰白色	灰白色	ロクロナデ
537	S5716	53025	下層	灰土器	有合折	13.0	0.6	3.7	小片	灰多量	灰	ロクロナデ
538	施土91	54012	下層	灰土器	有合折	13.0	0.6	3.7	小片	灰多量	灰	ロクロナデ

KB1区上層 土器觀察表(5)

番号 No.	出土地點 遺跡名	断面 断片	縁幅 口径	法縫 底縫	縁相 縁形	断存状況 石	断土 石臼子多量	色調		備考
								外側 灰白色	内側 灰白色	
539	SD146 SD02	上層	縁壘型 有台形	(1.1) (0.4)	4.2 小片	白色 白色	白色 白色	灰白色	灰白色	ロクロナデ 底ナデ
540	SD146 SD025	下層	縁壘型 有台形	(1.0) (0.5)	4.1 1.6cm	白色 白色	白色 白色	灰白色	灰白色	ロクロナデ 体ナデ
541	施跡191 54D12	下層	縁壘型 有台形	(1.8)	破片	灰・白色粒子多 石・長・白色粒子多	黄灰色 石	黄灰色 灰白色	灰白色 灰白色	ロクロナデ 底ヘタキリ
542	施跡191 54D12	覆土下層	縁壘型 有台形	(1.8)	底部のみ残 質?	白色 白色	白色 白色	灰白色	灰白色	ロクロナデ 底ヘタキリ
543	施跡191 54D17	覆土下層	縁壘型 有台形	(1.0)	底部小片	白色 白色	白色 白色	灰白色	灰白色	ロクロナデ 底ナデ
544	施跡191 54D12	下層	縁壘型 無台形	(0.4)	小片	灰・白色粒子 白色 白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	灰白色 灰白色	ロクロナデ 底ヘタキリ
545	施跡191 53C25	上・中層	縁壘型 肩形	(1.8)	小片	白色 白色	白色 白色	灰灰白色 灰白色	灰灰白色 灰白色	ロクロナデ カサメ・灰灰文・円周 ロクロナデ
546	施跡191 54D12	下層	縁壘型 肩形	(1.8)	肩部小片	石・白色粒子 白色	白色 白色	灰灰白色 灰白色	灰灰白色 灰白色	ロクロナデ 底ナデ
547	施跡191 54D25	覆土	縁壘型 無台?		小片	白色 白色	白色 白色	灰灰白色 灰白色	灰灰白色 灰白色	ロクロナデ 底灰文・円周
548	SD146 54D7	下層	縁壘型 無台	(1.8)	小片	石・長	灰色	灰白色	灰白色	ロクロナデ
549	SD146 54D1	下層	縁壘型 肩形	(1.6)	小片	石	灰白色	灰白色	灰白色	ロクロナデ その地: ロクロナデ
550	SD146 SD25	覆土	縁壘型 長底裏		肩部の小片	石・長 白色 白色	白色 白色	灰灰白色 灰白色	灰灰白色 灰白色	ロクロナデ
551	施跡191 54D21	下層	縁壘型 無		小片	白色 白色 白色	白色 白色 白色	灰灰白色 灰白色 灰白色	灰灰白色 灰白色 灰白色	ロクロナデ 底ナデ
552	施跡191 54D12	下層	縁壘型 無	(1.9)	小片	白色 白色 白色	白色 白色 白色	灰灰白色 灰白色 灰白色	灰灰白色 灰白色 灰白色	ロクロナデ
553	SD146 SD024	上層	縁壘型 無	(1.7)	小片	白色 白色 白色	白色 白色 白色	灰灰白色 灰白色 灰白色	灰灰白色 灰白色 灰白色	ロクロナデ 底ナデ
554	SD146 SD04	下層	縁壘型 無	(1.9)	小片	石・長	白色 白色 白色	灰灰白色 灰白色 灰白色	灰灰白色 灰白色 灰白色	ロクロナデ 底灰文・円周
555	SD075	縁壘 土陶器	縁壘 土陶器	要	土陶片	縁壘型キナシ 石・長・手 白色 白色	白色 白色 白色	灰灰白色 灰灰白色 灰灰白色	灰灰白色 灰灰白色 灰灰白色	ハナ(大) ロヨコナデ 体ナデ
556	54C18-30	縁壘 土陶器	縁壘 土陶器	要?	60	小片 縁部キナシ 等長圓瓦	石・長・手 白色 白色	灰灰白色 灰灰白色	灰灰白色 灰灰白色	ロヨコナデ 体ナデ ミガキ レザリ
557	54C18-30	縁壘 土陶器	縁壘 土陶器	要						

KB1区上層 土器觀察表 (6)

編号 No.	出土位置 出土地点	種類 Category	形状 Shape	構造 Structure	法量 (cm) Dimensions (cm)	着付状況 Fixing condition	埴土 Clay	外因 Extrinsic factor	内因 Intrinsic factor	測量 Measurement	備考 Remarks
556	直筒	アリゾド	瓶	直筒	口径：高さ 10.0 (8.0)	小口・直筒	石・長・チ にぶい黄色	にぶい黄色	不明色	不明显	
559	54F1	直筒	弦纹器	直筒	口径：底径 10.0 (8.0)	直筒	石・長	にぶい黄色	にぶい黄色	黒瓦	
560	53F7	直筒	土器器	直筒	口径：底径 11.8 (11.8)	直筒	石・長	にぶい黄色	にぶい黄色	ナゲ	赤形少
561	53F3	直筒	土器器	直筒	口径：底径 11.6 (11.6)	小口	石・白粘子	灰	灰	ロクロナデ	
562	54D3	直筒	土器器	直筒	口径：底径 11.6 (11.6)	小口	白色粘子	灰	灰	ロクロナデ	
563	53D20	直筒	直筒	直筒	口径：底径 11.2 (11.2)	小口	白色粘子	灰	灰	ロクロナデ	
564	54D5	直筒	直筒	直筒	口径：底径 11.2 (11.2)	小口	白色粘子	灰	灰	ロクロナデ	
565	54E1	直筒	直筒	直筒	口径：底径 11.8 (11.8)	小口	白色粘子	灰	灰	ロクロナデ	
566	S3D16	下唇	直筒	直筒	口径：底径 11.4 (11.4)	小口	白色粘子	灰	灰	ロクロナデ	
567	54D6	直筒	直筒	直筒	口径：底径 10.6 (8.2)	小口	黑色粘子多量	灰	灰	ロクロナデ	
568	54D5	直筒	直筒	直筒	口径：底径 10.6 (8.4)	小口	灰	灰	灰	ロクロナデ	
569	S3D19	直筒	直筒	直筒	口径：底径 10.6 (8.0)	小口・内面剥離 直筒	白色粘子多量	灰	灰	ロクロナデ	
570	54D9	直筒	直筒	直筒	口径：底径 10.6 (8.2)	小口	白色粘子多量	灰	灰	ロクロナデ	
571	54C22	直筒	直筒	直筒	口径：底径 10.7 (10.7)	小口	白色粘子多量	灰	灰	ロクロナデ	
572	54D21	直筒	直筒	直筒	口径：底径 10.7 (10.7)	小口	白色粘子多量	灰	灰	ロクロナデ	
573	54D25	直筒	直筒	直筒	口径：底径 10.2 (9.2)	口縁・全体片 斜	白色粘子 斜	黄灰	黄灰	ロクロナデ	
574	S3K11	54F14	肩	肩彫	横棒	21.0 (17.2)	74.1 (4.8)	灰	灰	14C前半 (復原品開口)	
575	P141	54F25	肩	肩彫	肩彫	21.0 (17.2)	74.1 (4.8)	灰	灰	14C前半 (復原品開口)	
576	54F26	肩	肩彫	肩彫	肩彫	21.0 (17.2)	74.1 (4.8)	灰	灰	14C前半 (復原品開口)	
577	54C16	肩上附	肩上附	肩上附	肩上附	21.0 (17.2)	74.1 (4.8)	灰	灰	14C前半 (復原品開口)	
578	P328	54G12	肩	肩彫	肩彫	21.0 (17.2)	74.1 (4.8)	灰	灰	14C前半 (復原品開口)	
579	発掘191	54D17	直筒下唇	直筒	直筒	21.0 (17.2)	74.1 (4.8)	灰	灰	14C前半 (復原品開口)	
580	S3D16	53D15	直筒	直筒	直筒	21.0 (17.2)	74.1 (4.8)	灰	灰	14C前半 (復原品開口)	
581	S3B4	直筒	直筒	直筒	直筒	21.0 (17.2)	74.1 (4.8)	灰	灰	14C前半 (復原品開口)	
582	発掘191	54D19	直筒	直筒	直筒	21.0 (17.2)	74.1 (4.8)	灰	灰	14C前半 (復原品開口)	

KD1区上層 土器觀察表 (1)

編号 No.	出土位置 出土地点	種類 Category	形状 Shape	構造 Structure	法量 (cm) Dimensions (cm)	着付状況 Fixing condition	埴土 Clay	外因 Extrinsic factor	内因 Intrinsic factor	測量 Measurement	備考 Remarks
598	S3H14	37D10	直筒	直筒	口径：底径 6.2 (6.0)	口縁欠失	砂粒少或多	灰	にぶい黄色	ナゲ・ヘラナデ	
599	S3H6	38D7	直筒	直筒	口径：底径 6.2 (6.0)	口縁少	砂粒少或多	灰	にぶい黄色	ナゲ	
600	S3H6	38D6 - 7	直筒	直筒	口径：底径 6.2 (6.0)	底部少	角石少か無	灰	にぶい黄色	ナゲ	底部充満

KD1区上層 土器觀察表(2)

順番 No.	出土位置 遺物No.	アソシド 解説	種類	器形	法量(cm) 口径 深径 高さ	進歩状況	胎土	表面	色調	裏面	外観	内面	測量 参考
601	S0366	38036	1層 土器部	壺形	7.8 1.2cm	6.0	切質 微細なやや多	に近い黄褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	ナゲ	[外周系筋 隔壁孔径:0cm]
602	S0368	37C20	1層 土器部	壺形	11.7 4.6	-	1層底~4段 砂粒多	に近い褐色	糊状	口:ナゲ 体:ナゲ	体:ナゲ	体:ナゲ	無熱により表面風化
603	S0369	37C25	1~5層 土器部	壺形	11.7 6.0	-	1層~新規1/5段 砂粒多	に近い褐色	褐色	ナゲ	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化 隔壁調整口部と合
604	S0369	37C20	1層 土器部	壺形	14.5	-	1層底~新規1/5段 砂粒多	に近い褐色	糊状	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
605	S0369	37C15	1層 土器部	壺形	11.7 7.2	-	1層底~4段 砂粒少	褐色	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
606	S0369	38C12	1層 土器部	壺形	7.2	-	1層底~3段 砂粒やや多	褐色	に近い褐色	ナゲ	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
607	S0369	38C17	1層 土器部	壺形	11.8	-	1層~新規1/3段 砂粒多	褐色	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
608	S0369	38C22	1層 土器部	壺形	15.0	-	1層底~3段 砂粒多	に近い褐色	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
609	S0369	38C17	1層 土器部	壺形	17.4	-	1層~新規1/5段 砂粒やや多	に近い黄褐色	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
610	S0369	38C17	1層 土器部	壺形	4.4	-	新規1/2段 砂粒やや多	褐色	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
611	S0369	38C17	1層 土器部	壺形	5.2	-	底部のみ 壺形	褐色	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
612	S0369	38C17・22	1層 土器部	壺形	11.7	-	新規~新規1/3段 白色砂粒やや多	褐色	灰褐色	ナゲ →ホル	ナゲ →ホル	ナゲ	無熱により表面風化
613	S0369	38C12	1層 土器部	壺形	13.4	4.6	1.2cm 砂粒やや多	褐色	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
614	SX546	37C15・20	1層 土器部	壺形	16.0	-	1層~新規1/4段 砂粒少	に近い褐色	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
615	SX546	37C20	1層 土器部	壺形	7.0	-	新規1/3段 砂粒少	褐色	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
616	SX546	37C15・20	1層 土器部	壺形	4.0	-	底部1/2段 砂粒少	に近い褐色	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
617	SX546	37C15・20	1層 土器部	壺形	7.0	-	底部1/4段 砂粒少	に近い褐色	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
618	SX543	38E	1層 土器部	壺形	11.7	-	1層~新規1/3段 白色砂粒やや多	灰褐色	灰褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
619	SX543	38E	1層 土器部	壺形	11.7	-	1層~新規1/4段 白色砂粒少	灰褐色	灰褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
620	SX543	38E	1層 土器部	壺形	10.8	-	1層~新規1/6段 白色砂粒少	に近い褐色	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
621	P792	38D6	2層 土器部	壺形	11.6	-	1層底~2段 砂粒少	に近い褐色	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
622	SX543	38E	1層 土器部	壺形	11.6	-	1層底~2段 砂粒少	に近い褐色	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
623	SX543	38C21	1層 土器部	壺形	12.8	-	新規小片	白色砂粒少	灰褐色	ロクロナド	ロクロナド	ロクロナド	無熱により表面風化
624	P588	37C10	1層 土器部	壺形	4.0	-	底部のみ 壺形	白色砂粒やや多	褐色	ナゲ →ハテ(ミガサ)	ナゲ	ナゲ	無熱により表面風化
625	38E21	1層 土器部	壺形	7.3	-	新規1/4段	灰褐色	灰褐色	ロクロナド	ロクロナド	ロクロナド	ロクロナド	ロクロナド
626	38E16	1層 土器部	壺形	7.3	-	新規1/4段	灰褐色	灰褐色	ロクロナド	ロクロナド	ロクロナド	ロクロナド	ロクロナド

遺物観察表

KB1区上層 木製品観察表

報告 №	取上 №	出土位置			器種	法量(cm)			木取り	樹種	備考
		遺構№	アリット	層位		長さ	幅	厚さ			
595	杭439	流路399	54c23	上層	杭	63.4	9.4	7.4	ミカン削状	スギ	
596	杭440	流路399	54c23	上層	杭	52.2	7.6	5.0	ミカン削状	スギ	
597	杭438	流路399	54c23	上層	杭	36.3	6.1	3.8	ミカン削状	—	

KD1区上層 木製品観察表

報告 №	取上 №	出土位置			器種	法量(cm)			木取り	樹種	備考
		遺構№	アリット	層位		長さ	幅	厚さ			
667	—	P502	38F11	上層	柱板	51.8	20.2	9.8	ミカン削状	スギ	
668	—	P501	38F6	上層	柱板	46.8	15.2	11.2	ミカン削状	スギ	
669	杭639	SD591	38c22	上層	杭	56.2	2.6	2.8	芯持丸木	クリ	
670	杭638	SD591	38c22	上層	杭	64.6	2.0	2.2	芯持丸木	—	
671	杭637	SD591	38c22	上層	杭	70.0	2.5	2.0	芯持丸木	—	